

青森県埋蔵文化財調査報告書 第565集

川原平（1）遺跡Ⅲ

—津軽ダム建設事業に伴う発掘調査報告—

2016年3月

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書 第565集

川原平（1）遺跡Ⅲ

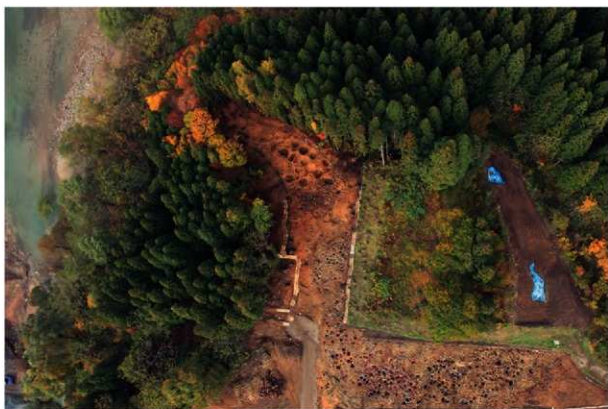
—津軽ダム建設事業に伴う発掘調査報告—

2016年3月

青森県教育委員会



遺跡遠景 南東上空から



平成 25 年度調査範囲全景 上空から

遺跡周辺の環境と調査区上空より（1）



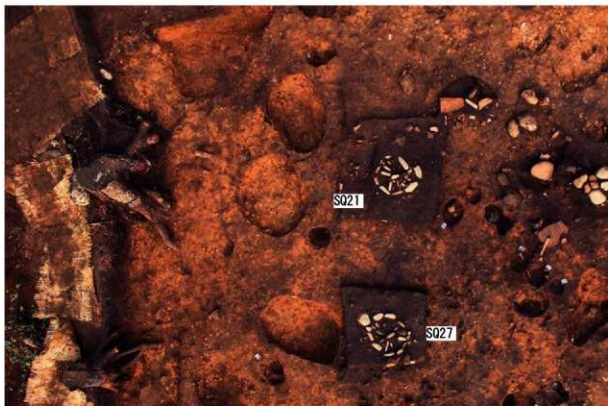
本報告の範囲全景 上空から



本報告の範囲全景 南東上空から

調査区上空より（2）

口絵2



S021・S027 上空から



S021・S027 西から



S027 土坑半截



S027 南から



S027 土坑プラン 北から

配石遺構 (1)



S021 南から



S021 西から



S021 土坑半截



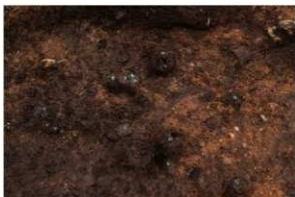
S021 立石の根固め



S021 玉の出土状況 坑底 南から



S021 数珠繋ぎ状態



S021 玉出土状況



S021 玉出土状況

配石遺構 (2)



第1号盛土遺構 EW-B1 南西から



第1号盛土遺構 SN-B 東壁 東から

第1号盛土遺構 (1)



第1号盛土遺構 SN-B 東壁 SN51 東から



第1号盛土遺構 SN-BとEW-B2の交点 西から

漆製品 (整理番号 J-2)



漆製品 (整理番号 J-2)

第1号盛土遺構 (2)



第1号盛土遺構 III a段階(第15層)遺物出土状況



第1号盛土遺構 III a段階(第15層)遺物出土状況



第1号盛土遺構 III b段階(第18層)遺物出土状況



漆製品(整理番号J-1)

第1号盛土遺構(3)



第1号盛土遺構 III a 段階（第15層）出土土器



第1号盛土遺構 皿形土器



第1号盛土遺構 中空動物形土製品
（亀形土製品）

出土遺物

口絵8

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、平成15年度から津軽ダム建設事業予定地内に所在する遺跡の発掘調査を実施しています。

川原平(1)遺跡については平成15・23・25～27年度に発掘調査を実施しました。

調査の結果、縄文時代中期～晩期にかけての堅穴住居跡・土坑・土器埋設遺構・配石遺構・盛土遺構・捨て場等が確認され、縄文時代の集落が営まれていたことがわかりました。遺物は土器・土製品、石器・石製品等が多量に出土しました。特に縄文時代晩期前半の所産と考えられる立石を伴う配石遺構は、配石下部に土坑を有し、その中からは多数の玉類が出土しており、この地域では稀少な出土例として注目されます。また、今回の調査で見つかった縄文時代晩期の遺構や遺物は、亀ヶ岡文化を考える上でも貴重な発見となりました。

この調査成果が、埋蔵文化財の保護と研究に広く活用され、また、地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護と活用に対してご理解をいただいている国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所に厚くお礼申し上げるとともに、発掘調査の実施と調査報告書の作成にあたり、ご指導、ご協力をいただきました関係各位に対し、心より感謝いたします。

平成28年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 三上 盛一

例 言

1 本書は、国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所による津軽ダム建設事業に伴い、平成15・23・25～27年度に青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施した西目屋村川原平（1）遺跡のうち、平成25年度に行った調査区の発掘調査報告書である。

2 川原平（1）遺跡の所在地は青森県中津軽郡西目屋村大字川原平字福岡地内、青森県遺跡番号は343009である。

3 川原平（1）遺跡の発掘調査報告書は、既に1冊（青森県埋蔵文化財調査報告書 第409集）刊行されている。また、本書と同時期に1冊（青森県埋蔵文化財調査報告書 第564集）の刊行が予定されており、本書はそれに次ぐ3冊目となる。

4 発掘調査及び整理作業・報告書作成の経費は、発掘調査を委託した国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所が負担した。

5 発掘調査から整理・報告書作成までの期間は、以下のとおりである。

発掘調査期間	平成25年5月7日～同年11月14日
整理・報告書作成期間	平成26年4月1日～平成27年3月31日
	平成27年4月1日～平成28年3月31日

6 本書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆と編集は青森県埋蔵文化財調査センター齋藤岳総括主幹、岩井美香子文化財保護主査、高橋哲文化財保護主事、中澤寛将文化財保護主事が担当し、執筆者名は文末に記した。

既刊の第409集、及び同時期刊行予定の第564集と本書の内容が異なる場合は、本書が優先する。また、発掘調査成果の一部は、現地見学会、発掘調査報告会等において公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合においても本書が優先する。

7 発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務については委託により実施した。

基準点・水準点測量	株式会社 キタコン
空中写真撮影	株式会社 シン技術コンサル
土器の図化作業の一部	株式会社 シン技術コンサル
石器の図化作業の一部	株式会社 ラング
漆製品の保存処理	株式会社 吉田生物研究所
遺物の写真撮影	シルバーフォト、フォトショップいなみ

- 8 石器の石質鑑定は調査員の松山力氏に依頼した。
- 9 地形図（遺跡位置図等）は、国土地理院発行の地図を合成・加工して使用した。
- 10 測量原点の座標値は、世界測地系（JGD2000）に基づく平面直角座標第X系による。挿図中の方位は、すべて世界測地系の座標北を示している。

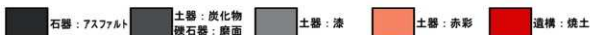
- 11 遺構については、その種類を示すアルファベットの略号と算用数字を組合わせた番号を付した。基本的な略号は、以下のとおりである。

S I - 竪穴住居跡、S N - 焼土遺構、P i t - 柱穴、S K - 土坑、S R - 土器埋設遺構

- 12 遺物については、取り上げ順に種別ごとの略号と番号を付した。略号は、以下のとおりである。
- P - 土器 S - 石器 C - 炭化材

- 13 土層の色調表記には、『新版土色帖 2006年度版』（小山正忠・竹原秀雄）を用い、遺跡の基本土層にはローマ数字、遺構内堆積土には算用数字を使用した。土層断面図には、水準点を基にした海拔標高を付した。

- 14 図版中で使用した網掛けの説明は以下の通りであるが、特殊なものは、一部は図に記したものである。



- 15 遺構実測図および遺物実測図の各図版には、スケールを付している。

- 16 遺物観察表における（ ）内計測値は現存値を示す。

- 17 遺物写真には、実測図の図番号を付した。実測図の掲載を省き、写真のみで報告した遺物もある。縮尺は、原則として土器は1/3、土製品は1/2、剥片石器・石製品は1/2、礫石器は1/3である。この原則からはずれるものは、個別に縮尺を示している。

- 18 発掘調査及び整理・報告書作成における出土品・実測図・写真等は現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。

- 19 発掘調査及び本報告書の作成に際して、下記の機関・諸氏からご指導・ご協力を得た（敬称略、順不同）。

西目屋村教育委員会、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、栗原市教育委員会、七飯町教育委員会、岡村道雄、関根達人、須藤 隆、飯島義雄

目次

口絵

序

例言

目次

口絵目次

図版目次

表目次

写真図版目次

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	1
1 発掘調査体制	1
2 整理・報告書作成体制	2
第3節 作業経過	2
1 発掘作業の経過	2
2 整理・報告書作成作業の経過	3

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境	11
第2節 歴史的環境	11
1 周辺の遺跡	11
2 周辺の遺跡と川原平（1）遺跡	11

第3章 調査概要

第1節 調査方法	16
1 発掘作業の方法	16
2 整理・報告書作成作業の方法	17
第2節 基本層序	18

第4章 検出遺構と出土遺物

第1節 遺構	23
1 建物跡	23
2 土坑	27

3	配石遺構	77
4	土器埋設遺構	85
5	焼土遺構	93
6	ピット	95
第2節	第1号盛土遺構(M1)	126
1	第1号盛土遺構の調査方法並びに堆積層について	126
2	第1号盛土遺構出土遺物について	143
第3節	遺構外出土遺物	270
1	第I層	270
2	第III層	270
第5章 総括		
第1節	遺構の変遷	277
1	各段階における遺構について	277
2	各遺構について	279
第2節	出土遺物	291
1	土器	291
2	石器・石製品	298
3	その他の遺物	301
4	接合関係とその分布	302
第3節	まとめ	304
引用・参考文献		306
写真図版		371
報告書抄録		

口絵目次

口絵1	遺跡周辺の環境と調査区上空より(1)
口絵2	調査区上空より(2)
口絵3	配石遺構(1)
口絵4	配石遺構(2)
口絵5	第1号盛土遺構(1)
口絵6	第1号盛土遺構(2)
口絵7	第1号盛土遺構(3)
口絵8	出土遺物

図版目次

図1	遺跡の範囲・各年度の調査範囲・本書の報告範囲	14	図39	土坑出土遺物(4)	72
図2	周辺の遺跡	15	図40	土坑出土遺物(5)	73
図3	第1号盛土遺構周辺の地形図	20	図41	土坑出土遺物(6)	74
図4	平成25年度川原平(1)遺跡 遺構配置図(SI、SK、SR、SN、SQ)	21	図42	土坑出土遺物(7)	75
図5	平成25年度川原平(1)遺跡 遺構配置図(Pit)	22	図43	土坑出土遺物(8)	76
図6	中期遺構の分布	42	図44	晩期遺構の分布	96
図7	第7号建物跡	43	図45	第20号配石遺構	97
図8	第7号建物跡出土遺物	43	図46	第20号配石遺構出土遺物	97
図9	第9号建物跡(1)	44	図47	第21号配石遺構(1)	98
図10	第9号建物跡(2)	45	図48	第21号配石遺構(2)	99
図11	第9号建物跡出土遺物	45	図49	第22号・第23号・第25号配石遺構	100
図12	第11号建物跡(1)	46	図50	第36号・第38号配石遺構・第69号土器埋設遺構	101
図13	第11号建物跡(2)	47	図51	第27号配石遺構	102
図14	第11号建物跡出土遺物(1)	48	図52	第29号・第30号・第31号・第32号・第44号配石遺構	103
図15	第11号建物跡出土遺物(2)	49	図53	第42号・第45号・第46号・第47号配石遺構・第47号土坑	104
図16	第12号建物跡	50	図54	配石遺構出土遺物(1)	105
図17	第12号建物跡出土遺物	50	図55	配石遺構出土遺物(2)	106
図18	第13号建物跡	51	図56	配石遺構出土遺物(3)	107
図19	第13号建物跡出土遺物(1)	52	図57	配石遺構出土遺物(4)	108
図20	第13号建物跡出土遺物(2)	53	図58	土器埋設遺構(1)	109
図21	第8号土坑	54	図59	土器埋設遺構(2)	110
図22	第9号土坑	55	図60	土器埋設遺構(3)	111
図23	第10号・第11号土坑	56	図61	土器埋設遺構(4)	112
図24	第13号・第14号・第15号土坑	57	図62	土器埋設遺構(5)	113
図25	第16号・第17号土坑	58	図63	土器埋設遺構(6)	114
図26	第18号・第20号土坑	59	図64	埋設土器(1)	115
図27	第21号土坑	60	図65	埋設土器(2)	116
図28	第22号・第23号土坑・第67号土器埋設遺構	61	図66	埋設土器(3)	117
図29	第24号・第25号土坑	62	図67	埋設土器(4)	118
図30	第26号・第27号土坑	63	図68	第51号焼土遺構出土遺物	119
図31	第28号土坑	64	図69	第52号・第54号焼土遺構出土遺物	120
図32	第29号・第30号土坑	65	図70	ビット(1)	121
図33	第36号・第37号土坑	66	図71	ビット(2)	122
図34	第38号・第39号・第40号・第42号土坑	67	図72	ビット出土遺物(1)	123
図35	第44号・第45号・第55号土坑	68	図73	ビット出土遺物(2)	124
図36	土坑出土遺物(1)	69	図74	ビット出土遺物(3)	125
図37	土坑出土遺物(2)	70	図75	第1号盛土遺構トレンチ・セクション・測量杭配置図	135
図38	土坑出土遺物(3)	71	図76	第1号盛土遺構 南北セクション	137

図77	第1号盛土遺構 東西セクション …… 139	図119	第1号盛土遺構 IIIa段階出土土器 (10) …… 194
図78	第1号盛土遺構の各層推定分布図 …… 142	図120	第1号盛土遺構 IIIa段階出土剥片石器 (1) …… 195
図79	第1号盛土遺構 IIa段階出土遺物の分布 …… 151	図121	第1号盛土遺構 IIIa段階出土剥片石器 (2) …… 196
図80	第1号盛土遺構 IIa段階出土土器 (1) …… 152	図122	第1号盛土遺構 IIIa段階出土剥片石器 (3) …… 197
図81	第1号盛土遺構 IIa段階出土土器 (2) …… 153	図123	第1号盛土遺構 IIIa段階出土礫石器・石製品 …… 198
図82	第1号盛土遺構 IIa段階出土土器 (3) …… 154	図124	第1号盛土遺構 IIIb段階 (18層) 出土遺物の分布 …… 201
図83	第1号盛土遺構 IIa段階出土土器 (4) …… 155	図125	第1号盛土遺構 IIIb段階出土土器 (1) …… 202
図84	第1号盛土遺構 IIa段階出土土器 (5) …… 156	図126	第1号盛土遺構 IIIb段階出土土器 (2) …… 203
図85	第1号盛土遺構 IIa段階出土土器 (6) …… 157	図127	第1号盛土遺構 IIIb段階出土土器 (3) …… 204
図86	第1号盛土遺構 IIa段階出土土器 (7) …… 158	図128	第1号盛土遺構 IIIb段階出土土器 (4) …… 205
図87	第1号盛土遺構 IIa段階出土土器 (8) …… 159	図129	第1号盛土遺構 IIIb段階出土土器 (5) …… 206
図88	第1号盛土遺構 IIa段階出土土器 (9) …… 160	図130	第1号盛土遺構 IIIb段階出土土器 (6) …… 207
図89	第1号盛土遺構 IIa段階出土土器 (10) …… 161	図131	第1号盛土遺構 IIIb段階出土剥片石器 (1) …… 208
図90	第1号盛土遺構 IIa段階出土土器 (11) …… 162	図132	第1号盛土遺構 IIIb段階出土剥片石器 (2) …… 209
図91	第1号盛土遺構 IIa段階出土土器 (12) …… 163	図133	第1号盛土遺構 IIIb段階出土剥片石器 (3) …… 210
図92	第1号盛土遺構 IIa段階出土土製品 (1) …… 164	図134	第1号盛土遺構 IIIb段階出土剥片石器 (4) …… 211
図93	第1号盛土遺構 IIa段階出土土製品 (2) …… 165	図135	第1号盛土遺構 IIIb段階出土剥片石器 (5) …… 212
図94	第1号盛土遺構 IIa段階出土剥片石器 (1) …… 166	図136	第1号盛土遺構 IIIb段階出土剥片石器 (6) …… 213
図95	第1号盛土遺構 IIa段階出土剥片石器 (2) …… 167	図137	第1号盛土遺構 IIIb段階出土礫石器・石製品 …… 214
図96	第1号盛土遺構 IIa段階出土剥片石器 (3) …… 168	図138	第1号盛土遺構 IIIc段階出土土器 (1) …… 218
図97	第1号盛土遺構 IIa段階出土剥片石器 (4) …… 169	図139	第1号盛土遺構 IIIc段階出土土器 (2) …… 219
図98	第1号盛土遺構 IIa段階出土剥片石器 (5) …… 170	図140	第1号盛土遺構 IIIc段階出土土器 (3) …… 220
図99	第1号盛土遺構 IIa段階出土剥片石器 (6) …… 171	図141	第1号盛土遺構 IIIc段階出土剥片石器 (1) …… 221
図100	第1号盛土遺構 IIa段階出土礫石器 (1) …… 172	図142	第1号盛土遺構 IIIc段階出土剥片石器 (2) …… 222
図101	第1号盛土遺構 IIa段階出土礫石器 (2) …… 173	図143	第1号盛土遺構 IIIc段階出土礫石器 …… 223
図102	第1号盛土遺構 IIa段階出土礫石器 (3) …… 174	図144	第1号盛土遺構 III d段階出土土器 …… 224
図103	第1号盛土遺構 IIa段階出土土製品 …… 175	図145	第1号盛土遺構 III d段階出土剥片石器 …… 225
図104	第1号盛土遺構 IIb段階出土土器 (1) …… 176	図146	第1号盛土遺構 III d段階出土礫石器 …… 226
図105	第1号盛土遺構 IIb段階出土土器 (2) …… 177	図147	第1号盛土遺構 III e段階出土土器 …… 227
図106	第1号盛土遺構 IIb段階出土土器 (3) …… 178	図148	第1号盛土遺構 III e段階出土剥片石器・礫石器 …… 228
図107	第1号盛土遺構 IIb段階出土剥片石器 …… 179	図149	第1号盛土遺構 III f段階出土土器 (1) …… 231
図108	第1号盛土遺構 IIb段階出土礫石器 …… 180	図150	第1号盛土遺構 III f段階出土土器 (2) …… 232
図109	第1号盛土遺構 IIIa段階 (15層) 出土遺物の分布 …… 184	図151	第1号盛土遺構 III f段階出土土器 (3) …… 233
図110	第1号盛土遺構 IIIa段階出土土器 (1) …… 185	図152	第1号盛土遺構 III f段階出土土器 (4) …… 234
図111	第1号盛土遺構 IIIa段階出土土器 (2) …… 186	図153	第1号盛土遺構 III f段階出土土器 (5) …… 235
図112	第1号盛土遺構 IIIa段階出土土器 (3) …… 187	図154	第1号盛土遺構 III f段階出土土器 (6) …… 236
図113	第1号盛土遺構 IIIa段階出土土器 (4) …… 188	図155	第1号盛土遺構 III f段階出土剥片石器 (1) …… 237
図114	第1号盛土遺構 IIIa段階出土土器 (5) …… 189	図156	第1号盛土遺構 III f段階出土剥片石器 (2) …… 238
図115	第1号盛土遺構 IIIa段階出土土器 (6) …… 190	図157	第1号盛土遺構 III f段階出土剥片石器 (3) …… 239
図116	第1号盛土遺構 IIIa段階出土土器 (7) …… 191	図158	第1号盛土遺構 III f段階出土礫石器・石製品 …… 240
図117	第1号盛土遺構 IIIa段階出土土器 (8) …… 192		
図118	第1号盛土遺構 IIIa段階出土土器 (9) …… 193		

図159	第1号盛土遺構 IVa段階出土土器(1) …… 244
図160	第1号盛土遺構 IVa段階出土土器(2)・土製品 …… 245
図161	第1号盛土遺構 IVa段階出土土器(3) …… 246
図162	第1号盛土遺構 IVa段階出土剥片石器(1) …… 247
図163	第1号盛土遺構 IVa段階出土剥片石器(2) …… 248
図164	第1号盛土遺構 IVa段階出土剥片石器(3) …… 249
図165	第1号盛土遺構 IVa段階出土礫石器(1) …… 250
図166	第1号盛土遺構 IVa段階出土礫石器(2) …… 251
図167	第1号盛土遺構 IVa段階出土礫石器(3)・土石製品 …… 252
図168	第1号盛土遺構 IVb段階出土土器(1) …… 253
図169	第1号盛土遺構 IVb段階出土土器(2) …… 254
図170	第1号盛土遺構 IVb段階出土土器(3) …… 255
図171	第1号盛土遺構 IVb段階出土剥片石器(1) …… 256
図172	第1号盛土遺構 IVb段階出土剥片石器(2) …… 257
図173	第1号盛土遺構 IVb段階出土剥片石器(3) …… 258
図174	第1号盛土遺構 IVb段階出土礫石器・石製品 …… 259
図175	第1号盛土遺構 V段階階出土土器 …… 262

図176	第1号盛土遺構 V段階出土剥片石器(1) …… 263
図177	第1号盛土遺構 V段階出土剥片石器(2) …… 264
図178	第1号盛土遺構 V段階出土礫石器・石製品 …… 265
図179	第1号盛土遺構 時期不明土器(1) …… 266
図180	第1号盛土遺構 時期不明土器(2) …… 267
図181	第1号盛土遺構 時期不明土器(3) …… 268
図182	時期不明石器・石製品 …… 269
図183	第I層出土土製品・剥片石器 …… 272
図184	第I層出土土器 …… 273
図185	第III層出土土器 …… 274
図186	第III層出土剥片石器 …… 275
図187	第III層出土礫石器・石製品 …… 276
図188	遺構の変遷 …… 278
図189	配石遺構 …… 285
図190	第1号盛土遺構形成模式図 …… 290
図191	中期後半の土器 …… 290
図192	第1号盛土遺構の各層から出土した土器 …… 296
図193	聖山式土器と文様展開図 …… 297
図194	遺物接合分布図 …… 303

表 目 次

表1	時期区分表 …… 6
表2	遺跡地名表 …… 12
表3	第27号配石遺構の配石石材 …… 81
表4	第21号配石遺構の配石石材 …… 99
表5	第1号盛土遺構の堆積層 …… 141
表6	出土遺物の重量 …… 143
表7	グリッド別土器出土重量(g) …… 144
表8	グリッド別剥片石器出土重量(g) …… 144
表9	Ⅱ段階・第Ⅲ層出土土器のグリッド別重量(g) …… 145
表10	V段階・第I層出土土器のグリッド別重量(g) …… 260

表11	石器組成表 …… 298
表12	礫石器の石材 …… 299
表13	石製品組成表 …… 300
表14	遺構計測表 …… 308
表15	ピット計測表 …… 311
表16	土器観察表 …… 317
表17	土製品観察表 …… 354
表18	漆製品観察表 …… 354
表19	石器・石製品観察表 …… 355
	石材凡例 …… 370

写真図版目次

写真1	建物跡(1) …… 371
写真2	建物跡(2) …… 372
写真3	建物跡(3) …… 373
写真4	建物跡(4) …… 374
写真5	土坑(1) …… 375
写真6	土坑(2) …… 376
写真7	土坑(3) …… 377
写真8	土坑(4) …… 378

写真9	土坑(5) …… 379
写真10	土坑(6) …… 380
写真11	土坑(7) …… 381
写真12	土坑(8) …… 382
写真13	土坑(9) …… 383
写真14	土坑(10) …… 384
写真15	土坑(11) …… 385
写真16	土坑(12) とピット …… 386

写真17	配石遺構 (1)	387	写真59	第1号盛土遺構出土遺物 (3)	429
写真18	配石遺構 (2)	388	写真60	第1号盛土遺構出土遺物 (4)	430
写真19	配石遺構 (3)	389	写真61	第1号盛土遺構出土遺物 (5)	431
写真20	配石遺構 (4)	390	写真62	第1号盛土遺構出土遺物 (6)	432
写真21	配石遺構 (5)	391	写真63	第1号盛土遺構出土遺物 (7)	433
写真22	配石遺構 (6)	392	写真64	第1号盛土遺構出土遺物 (8)	434
写真23	配石遺構 (7)	393	写真65	第1号盛土遺構出土遺物 (9)	435
写真24	土器埋設遺構 (1)	394	写真66	第1号盛土遺構出土遺物 (10)	436
写真25	土器埋設遺構 (2)	395	写真67	第1号盛土遺構出土遺物 (11)	437
写真26	土器埋設遺構 (3)	396	写真68	第1号盛土遺構出土遺物 (12)	438
写真27	土器埋設遺構 (4)	397	写真69	第1号盛土遺構出土遺物 (13)	439
写真28	土器埋設遺構 (5)	398	写真70	第1号盛土遺構出土遺物 (14)	440
写真29	土器埋設遺構 (6)	399	写真71	第1号盛土遺構出土遺物 (15)	441
写真30	土器埋設遺構 (7)	400	写真72	第1号盛土遺構出土遺物 (16)	442
写真31	土器埋設遺構 (8)	401	写真73	第1号盛土遺構出土遺物 (17)	443
写真32	土器埋設遺構 (9)	402	写真74	第1号盛土遺構出土遺物 (18)	444
写真33	焼土遺構 (1)	403	写真75	第1号盛土遺構出土遺物 (19)	445
写真34	焼土遺構 (2)	404	写真76	第1号盛土遺構出土遺物 (20)	446
写真35	第1号盛土遺構 遠景	405	写真77	第1号盛土遺構出土遺物 (21)	447
写真36	第1号盛土遺構 セクション (1)	406	写真78	第1号盛土遺構出土遺物 (22)	448
写真37	第1号盛土遺構 セクション (2)	407	写真79	第1号盛土遺構出土遺物 (23)	449
写真38	第1号盛土遺構 セクション (3)	408	写真80	第1号盛土遺構出土遺物 (24)	450
写真39	第1号盛土遺構 セクション (4)	409	写真81	第1号盛土遺構出土遺物 (25)	451
写真40	第1号盛土遺構 セクション (5)	410	写真82	第1号盛土遺構出土遺物 (26)	452
写真41	第1号盛土遺構 セクション (6)	411	写真83	第1号盛土遺構出土遺物 (27)	453
写真42	第1号盛土遺構 セクション (7)	412	写真84	第1号盛土遺構出土遺物 (28)	454
写真43	第1号盛土遺構 出土遺物 (1)	413	写真85	第1号盛土遺構出土遺物 (29)	455
写真44	第1号盛土遺構 出土遺物 (2)	414	写真86	第1号盛土遺構出土遺物 (30)	456
写真45	第1号盛土遺構 出土遺物 (3)	415	写真87	第1号盛土遺構出土遺物 (31)	457
写真46	第1号盛土遺構 出土遺物 (4)・土器 文様拡大写真	416	写真88	第1号盛土遺構出土遺物 (32)	458
写真47	遺構出土遺物 (1)	417	写真89	第1号盛土遺構出土遺物 (33)	459
写真48	遺構出土遺物 (2)	418	写真90	第1号盛土遺構出土遺物 (34)	460
写真49	遺構出土遺物 (3)	419	写真91	第1号盛土遺構出土遺物 (35)	461
写真50	遺構出土遺物 (4)	420	写真92	第1号盛土遺構出土遺物 (36)	462
写真51	遺構出土遺物 (5)	421	写真93	第1号盛土遺構出土遺物 (37)	463
写真52	遺構出土遺物 (6)	422	写真94	第1号盛土遺構出土遺物 (38)	464
写真53	遺構出土遺物 (7)	423	写真95	第1号盛土遺構出土遺物 (39)	465
写真54	遺構出土遺物 (8)	424	写真96	第1号盛土遺構出土遺物 (40)	466
写真55	遺構出土遺物 (9)	425	写真97	第1号盛土遺構出土遺物 (41)	467
写真56	遺構出土遺物 (10)	426	写真98	第1号盛土遺構出土遺物 (42)	468
写真57	第1号盛土遺構出土遺物 (1)	427	写真99	遺構外出土遺物 (1)	469
写真58	第1号盛土遺構出土遺物 (2)	428	写真100	遺構外出土遺物 (2)	470

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

津軽ダム建設に先立つ発掘調査は平成15年度に着手している。川原平(1)遺跡については平成15年度、同23年度、同25・26年度に発掘調査を実施し、同27年度も継続して行い同年8月28日で全ての調査を終了している。川原平(1)遺跡の調査報告書は、これまで平成15年度調査区域の1冊(青森県埋蔵文化財調査報告書 第409集)を刊行している。また、平成23・25年度調査区域の1冊(青森県埋蔵文化財調査報告書 第564集)の刊行を予定しており、調査に至る経緯も記載済みである。

今回の調査報告書は、これまでの調査のうち、平成25年度に行った発掘調査区域の一部を対象としたものである。

第2節 調査体制

1 発掘調査体制

平成25年度の発掘調査は、樹木の伐採作業が終了した調査区の北西部分と平成23年度調査区の北側部分の調査を行うこととした。縄文時代の遺構や遺物が多量に検出すると予想される地点でもあり、遺物包含層や検出遺構の層位的な調査に主眼をおいて発掘作業を進めることとした。

発掘調査体制は、以下のとおりである。

[平成25年度]

調査担当者	青森県埋蔵文化財調査センター	
所長	柿崎 隆司	(平成27年3月定年退職、現文化財保護課主幹専門員)
次長(総務GM)	高橋 雅人	(現中南教育事務所長)
調査第三GM	白鳥 文雄	(平成26年3月定年退職)
文化財保護主幹	齋藤 岳	(発掘調査担当者、現総括主幹)
文化財保護主幹	木村 高	(発掘調査担当者)
文化財保護主査	岡本 洋	(発掘調査担当者)
文化財保護主事	高橋 哲	(発掘調査担当者)

専門的事項に関する指導・助言

調査員	藤沼 邦彦	前国立大学法人弘前大学人文学部教授(考古学)
"	三浦 圭介	北里大学非常勤講師(考古学)
"	福田 友之	青森県考古学会会長(考古学)
"	上條 信彦	国立大学法人弘前大学人文学部准教授(考古学)
"	柴 正敏	国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科教授(地質学)
"	佐々木辰雄	日本地質学会会員・故人(地質学)
"	山口 義伸	日本第四紀学会会員(地質学)

2 整理・報告書作成体制

整理・報告書作成体制は、発掘調査に携わった職員と整理作業担当職員で構成する。
各年度の整理・報告書作成体制は以下のとおりである。

整理主体 青森県埋蔵文化財調査センター

[平成26年度]

文化財保護主幹 齋藤 岳（報告書作成担当者、現総括主幹）
文化財保護主幹 木村 高
文化財保護主幹 茅野 嘉雄
文化財保護主幹 畠山 昇
文化財保護主査 岡本 洋
文化財保護主査 岩井 美香子
文化財保護主事 高橋 哲（報告書作成担当者）

[平成27年度]

総括主幹 齋藤 岳（報告書作成担当者）
文化財保護主幹 木村 高
文化財保護主幹 畠山 昇
文化財保護主幹 成田 滋彦
文化財保護主査 岡本 洋
文化財保護主査 岩井 美香子（報告書作成担当者）
文化財保護主事 高橋 哲（報告書作成担当者）
文化財保護主事 中澤 寛将（報告書作成担当者）
文化財保護主事 久保 友香理

第3節 作業経過

1 発掘作業の経過

平成25年度の川原平(1)遺跡の発掘調査では、調査対象区の南側と北西部を調査区として設定した。その中で本報告書に関わる地点は北西部に位置するVFラインよりも北側、26から36ラインである。

平成23年度の調査を行っている間に、今回の調査区部分に植樹されている樹木の伐採が行われ、盛土遺構と推定される地形の高まりが確認できた。

発掘調査の作業経過は以下のとおりである。

[平成25年度]

5月7日 発掘器材等を現地へ搬入し、環境整備後、調査を開始した。調査測量基準点については、委託設置した基準点に基づいて4m単位のグリッドを設定した。水準点についても委託設置した水準点に基づき調査区内に適宜設置した。

5月中旬 表土層の除去及び遺物包含層の掘り下げを行った。

5月下旬	遺物包含層の掘り下げを行うとともに、遺構確認・遺構精査を行った。
6月上旬	竪穴住居跡、土坑、土器埋設遺構や焼土遺構が検出され、それらの精査を行った。
6月中旬	引き続き遺構精査を行うとともに、掘り下げを行った。
6月下旬	遺物包含層の掘り下げ、遺構確認及び遺構精査を行った。
7月上旬	引き続き、遺物包含層の掘り下げ、遺構確認及び遺構精査を行った。
7月中旬	遺構精査と掘り下げを継続した。また、盛土遺構の精査に着手した。
7月下旬	出土遺物の取り上げにも時間がかかるようになった。
8月上旬	遺物取り上げと遺構精査を継続した。
8月中旬	引き続き、遺物の取り上げと遺構精査を行った。
8月下旬	遺物の取り上げと遺構精査を継続した。
9月上旬	遺構精査と掘り下げを継続した。
9月中旬	遺構精査を継続した。
9月下旬	引き続き、遺構精査を行った。
10月上旬	遺構確認と盛土遺構を含む遺構精査を継続した。
10月中旬	引き続き、遺構確認と遺構精査を行った。
11月上旬	遺構精査を継続した。
11月14日	未精査の遺構を養生し、今年度の発掘作業を終了した。出土品等を搬出した後、現地から撤収した。

2 整理・報告書作成作業の経過

本報告書掲載分の刊行事業は平成26年度から実施することになったが、写真類の整理作業及び遺構図面の整理作業の一部は、調査終了後の平成25年11月中に終了している。この他の整理・報告書作成作業は、平成26年4月1日から平成28年3月31日までの期間で行った。平成25年度に調査を行った川原平(1)遺跡は縄文時代の集落跡の一部である。竪穴住居跡や土坑、配石遺構、盛土遺構を始めとして多数の遺構が検出され、遺物も遺物包含層、遺構堆積土や盛土遺構内から多量に出土した。このことから、これらに応じた整理作業の工程を計画した。報告書の総頁は500頁で、遺構や遺物の数に応じて各々の記載にあてることにした。

各年度の整理・報告書作成作業の経過は以下のとおりである。

[平成26年度]

4月～	出土遺物の重量計測を行った。
5～6月	石器の抽出作業を行った。
7月～	出土遺物の接合・復元作業を開始した。また、石器の抽出作業を継続した。
8月～	出土遺物の接合・復元作業及び石器の抽出作業を継続した。
9月～	石器の抽出作業及び、出土遺物の接合・復元作業を継続するとともに、遺物の図化作業を開始した。
10月～	報告書掲載遺物の写真撮影を行った。遺物の図化作業を継続した。

- 11月～ 土器類の接合・復元・図化作業、石器類の分類・図化作業を行った。トレースが終了した遺構実測図から図版への割り付け作業を開始した。また、遺物の検討・分類・整理作業を進め、報告書掲載遺物の観察表の作成を開始した。
- 12月～ 報告書掲載遺物の選別を行い、土器類の接合・復元・図化作業、石器類の分類・図化作業を継続した。土器片の抽出を行い、断面実測・拓本等の図化作業を進めた。
- 1月～ 図化作業が終了した遺物から順次トレースを行った。また、デジタル作業による図版作成を開始した。
- 2～3月 遺物図化作業、遺物トレース作業、図版作成作業を継続した。
〔平成27年度〕
- 4～5月 出土遺物の接合・復元・図化作業を行った。
- 6月～ 引き続き、出土遺物の接合・復元・図化作業を行うとともに、遺構や断面図の修正作業を行った。
- 7～8月 出土遺物の図化作業を行うとともに、トレース作業を開始した。また、図面のトレース作業を開始した。
- 9月～ 引き続き、出土遺物の図化・トレース作業や図面のトレース作業を行った。
- 10月～ 出土遺物の図化・トレース作業を行うとともに、図版作成作業を開始した。また、報告書掲載遺物観察表の作成を開始した。
- 11月～ 報告書掲載遺物の写真撮影を行うとともに、図版作成作業を継続した。また、原稿執筆作業を開始した。
- 12月～ 原稿・版下が揃ったので、報告書の割付・編集作業を行い、印刷業者を入札・選定した。
- 1月～ 印刷業者との契約事務が完了した後、原稿及び版下を入稿した。
- 3月25日 3回の校正を経て、報告書を刊行した。
- 3月下旬 記録類、出土遺物等を整理して収納した。

(笹森・高橋)

※ 土器の整理・分類

〔資料化した土器の基準について〕 口縁部から底部まで接合した土器は原則として実測した。また、接合・復元後、残存率が高いものは有文・無文に関わらずできるだけ実測した。出土数が少ない香炉形土器や注口形土器は本来の土器組成率が極端に低いと考えられるため、図化可能なものは実測した。器形・文様に特徴があるものは破片でも掲載したが、この選別は特に第1号盛土遺構の場合、各層に応じた選択を行ったので、この選択に関しては第4章第2節で説明する。このほか遺構等の時期決定に重要なものは小片であっても掲載することとした。

〔土器の帰属する層位について〕 原則として調査現場で取り上げた遺構種ごと、出土層位ごとに掲載した。しかし、土器については複数の遺構・層位をまたがって接合したものが少なくなく、これについては個々の遺物の破片を確認して、帰属する遺構・層位を適切に把握するように努めた。このことをふまえて、次の基準を原則として掲載することとした。

- ・遺構内と遺構外にまたがって接合している場合は、遺構内に優先的に掲載した。
- ・盛土遺構、遺物包含層の複数出土遺物が接合しているものは、より下位の土層に帰属することを原則とした。ただし、下位出土破片がわずかで、上位層出土破片が多数接合している資料の場合は、自然的攪乱や人為的攪乱などが想定できるため、上位層に掲載しているものもある。

〔他地点との接合について〕 本報告範囲で出土した遺物と、北捨て場、西捨て場で出土した破片同士が接合した例（土製品と石器）があるが、主体となる部分などが本報告範囲なので、各捨て場などから出土したものはまとめて実測などを行い資料化に努めた。なお、各捨て場の層位は、現時点での層名をそのまま掲載したので、本報告以降にその層の詳細な情報と、正式な名称を記載することにする。

〔土器の掲載順序について〕 1頁に収まるように掲載したため、遺構番号順に並んでいない部分がある。各遺構においては、特徴的な遺物、完形に近い遺物などから優先的に掲載した。一方、第1号盛土遺構、遺構外は原則として完形から土器片、器種毎に掲載することとした。器種は深鉢形土器、鉢形土器、浅鉢形土器、皿形土器、壺形土器、注口形土器とした。

〔時期区分について〕 青森県史で示された後期から晩期の時期区分（青森県史2013）を準用した。後期後葉から晩期前半に関しては『川原平（1）遺跡Ⅱ』を準拠した。本報告書は晩期後半段階が主体的となるので、土器の帰属時期については、県史以外に、青森県薬師遺跡（青森県2014）、弘前大学で刊行した青森県今津遺跡（藤沼他2005）、不備無遺跡（関根・上條2012）、それ以外には北海道七飯町聖山遺跡（芹沢編1979）などを参考とした。聖山式土器については、晩期4期から5期に位置づけた。

〔後晩期土器の分類〕

【器形】

深鉢形土器 深鉢形土器としたのは、口径に対する器高の比率が1以上である。この器種は裝飾・文様帯を持たず、口縁部から底部付近まで土器の外面に縄文が施される粗製土器が多い。また、口縁部に山形突起、刻目、B突起などが施され、口縁部外面に文様帯が設けられ、篋描きの平行線、入組三又文、羊歯状文などが展開したり、あるいは篋描きによる無文帯のめぐる精製深鉢形土器がみられる。

表1 時期区分表

				本報告	青森県史 (関根2013)	型式等		備考
後期		後葉 末葉	壺付土器	7-3期	7期3段階	十腰内V群		本文中で7-3期以前を壺付土器前半とした
				7-4期	7期4段階	(十腰内V群に欠落する時期)		
				8期	8期	(十腰内VI群)		壺付土器第Ⅳ段階 (小林2008)
晩期	前半	初葉 前葉	亀ヶ岡式土器	1期	1a期	1a期	大洞B	大洞B1
					1b期	1b期		大洞B2
		2期		2期	大洞BC			
		3期		3期	大洞C1			
	後半	中葉 後葉 末葉		4期	4期	大洞C2	聖山式	
				5期	5期	大洞A		
		6期		6期	大洞A'			

鉢形土器 鉢形土器としたのは、口径に対し、器高が0.5から1未満程度である。この報告書出土土器の中で、一番変異が大きい。

浅鉢形土器 浅鉢形土器としたのは、口径に対し、器高が0.3以上、0.5未満のものである。

皿形土器 浅鉢形土器としたのは、口径に対し、器高が0.3未満である。

壺形土器 壺形土器としたのは、体部に最大径をもち、口縁がすばまった器形である。口径に対し、体部最大径が近似の場合は、広口壺形土器と分類した。

注口形土器 筒状の注ぎ口がつけられた土器である。

香炉形土器 体部がそろばん形を呈し、口縁部にアーチ状の部分が形成されたものである。

なお、分類にあたり、口縁・口唇形状などの細分は行わなかった。文章中に口縁形状などは個別に記載している。

【残存率】

完形 全体の形状がわかり、多少の破損を持つもの。

略完形 部位欠損部は多くても全体の形状がわかる場合

破損資料 基本部位が残存する部分を記載した。例として口縁部、体部、台部、底部、頸部などである。

上半部 口縁がまわり、底部側が欠損している場合。口縁の巡りは推定復元できる程度であればこれに含めた。

下半部 底部がまわる場合である。壺形土器の中で頸部が欠損し、胴部から底部が残存している場合は、下半部にした。

他に部位が欠損しているだけなら、「部位」欠損とした。

【文様】

主文様 雲形文、三叉文、入組三叉文などに大まかに分類し、それ以上の細かな分類は行わなかった。

なお、鉢形土器・壺形土器などで口縁部が無文帯である場合は、口縁部無文とした。

横位沈線・平行沈線 後期後葉から晩期前半は、曲線的な文様が見られるので、破片の場合平行

か曲線かの判断がつかない場合があるので、横方向の沈線は横位沈線とした。横位沈線は、本数を記載したが、破損のため、本数が明確に捉えられない場合は、4条以上は多条沈線と記載した。

短沈線 短い連続しない平行沈線。連続する場合は、**短沈線列**と表記した。

隆帯 頸部と胸部の境の膨らみ。基本突起が2個一対伴うが、隆帯上に突起がない場合は個別に記載した。隆帯の中で、突起と突起の間がレンズ状になっている場合は眼鏡状隆帯とした。

突起 胸部に張り付いた瘤は、基本突起とした。形状には変異が多い。なお、明らかに縄文時代後期に属する土器の表面に貼り付けられている突起は貼瘤と表記した。

口縁装飾 突起 平縁、波状口縁、刻目とした。口縁部にみられる突起は、A突起、B突起などに区分した。なお、内面や口唇部に平行沈線がある場合は、観察表の口縁装飾にその本数を記した。

文様要素がない場合「-」と記した。

破損で存在が明確でない場合は、「?」とした。

本報告範囲で特徴的な点は、沈線多重手法（芹沢編1979、飯島1981）で文様が描かれた聖山式と思われる土器が存在することである。聖山式土器は、その文様によって分類された土器であるので、文様を把握することが重要である。聖山式土器の文様は、入組文と三ツ又文の組み合わせから大きく2つに大別される。以下2つの文様について簡単に触れる。

連続入組文 入組文と三ツ又文が規則性をもって配置されている。この入組文の横に伸ばされた凹部によって文様構成が大きく方向づけられているとともに、その凹部同士が連繋される場合が多い。入組文の横に伸びた凹部により分離された空間に、単位文様の三ツ又文が横位に連続して形成されている。この文様が主文様の場合、聖山Ⅰ式と分類される。

横位連続工字文 三ツ又文の中の工字形の凹部を横位に連続して三ツ又文の中の工字形の凹部を横位に連続して互い違いに施文している文様である。三ツ又文という性質上、工字文の反転部が斜めに入る。同じモチーフでも反転部の沈線が垂直に入るものは工字文とした。この文様が主文様の場合、聖山Ⅱ式と分類される。

【底部形状】 底部は平底、上げ底、高台、丸底とした。高台は概ね1cm以下、台部は概ね1cmからと区分した。底部付近にある沈線はその本数を記載した。台部を持つ場合は、台と記載した。台部に文様がある場合は、観察表では底部にその種類を記載した。

他に炭化物、漆、赤色顔料などは、トーンで表現している。

〔中期土器の分類〕

本報告書では、下記の基準で中期の土器を型式比定した。

円筒上層d式：地文縄文に細い粘土紐で横位の文様を展開するもの（図20-1、図91-6）。

口縁形状は波状口縁もしくは突起を伴う平縁で、口縁端部は貼付隆帯により外側に肥厚する。貼付隆帯上には横位の縄文が施文される（図91-6）か、刻目状の縄文押圧（図20-1）が認められる。地

文は横位施文である。全形が復元できる個体は出土していないものの、底部から体部は直線的にやや開いて立ち上がると思われ、口縁部はやや外反して開く。

円筒上層 e 式：地文縄文に沈線で胸骨文を施すもの。(図19-1・8など)

円筒上層 d 式と同じく、口縁形状は波状口縁もしくは突起を伴う平縁である。口縁の突起下には張り出し状の突起を伴う例(図19-1)が見受けられることから、同様の突起を持つ体部無文の例(図19-3・4など)も本型式に含めた。また、突起を伴わないものの類似する体部無文の例(図19-5・7など)も本型式に含めた。口縁端部は貼付隆帯により外側に肥厚する。貼付隆帯上には刻目状の縄文押圧(図19-7)のほか、横位の縄文押圧(図20-2)や無文(図19-4)がある。地文は横位施文が多いが、縦位施文も認められる(図19-4)。器形は体部がやや膨らみ、口縁部が弱く括れたのちに開く。

大木 8 a ~ 8 b 式：沈線を伴う細い粘土紐で渦巻き状の文様を施すもの(図19-2)。

1点のみ出土している。体部には縄文が縦位に施文される。器形は体部がやや膨らみ、口縁は内湾して立ち上がる。

板林式：外側に肥厚する口縁端部に沈線で渦巻き状の文様を施すもの(図37-1・11など)

体部は地文縄文のみの例(図37-1など)と沈線で弧線文などの文様を施す例(図37-10など)のほか、沈線に刺突列を伴う例(図36-9など)もある。口縁は低い山形の波状口縁が多く、3単位(図36-9)と4単位(図37-1)が見受けられる。器形は体部が膨らみ、口縁でやや括れ、短く開く。

最花式：沈線と刺突列で口縁部を区画し、口縁部が無文となるもの(図39-32)

1点のみ出土している。口縁部片のため全体の様相は明らかではないが、体部には沈線文が施される。

大木10式併行：沈線による区画文に磨消縄文が施されるもの(図17-1)。

1例のみ出土している。破片資料のため、全容は明らかではない。なお、口縁部は無文帯とし、体部に縄文を施す例(図14-1など)も本型式に含まれる可能性があるが、前型式である最花式の可能性も否定できないことから、最花式~大木10式併行として幅を持たせている。

(高橋・岩井)

※ 石器の整理・分類

剥片石器の分類は、弘前市薬師遺跡の報告（青森県2014）に準じた。薬師遺跡は、本遺跡から距離的に近い縄文時代晩期の集落遺跡であり、石器組成の違い等を対比できるためである。しかし、平成23年度から26年度まで、複数の職員によって石器の整理が行われてきた経緯があり、細分は行わないこととした。

ここでは、剥片石器及び関連する搬入された自然礫である原石について記述する。

【剥片石器】

剥片を素材とした石器で、掲載資料については器種ごとに分類し、観察表に記した。

石 鏃 石鏃としたものは、尖頭部を持ち、先端部が薄く扁平な石器である。鏃身部先端の平面形態は基本的に二等辺三角形をなしている。平面形態や茎部の有無から、尖基有茎鏃、平基有茎鏃、尖基鏃、平基鏃・凹基鏃・円基鏃・石鏃未完成品（加工から石鏃と思われるが、形状が整わないもの）に分類した。

石 槍 尖頭部を持つ石器の内、左右対称形であり、石鏃と比較し大形で厚手のある石器である。

石 錐 尖頭部を持つ、その断面形が三角形もしくは四角形の石器である。石鏃の先端部が比較的扁平であるのに対し、石錐は厚手である。握みを有する形態、棒状形態、剥片の一端に錐状の加工を有するもの、錐部断片などがある。

石 鏡 両面加工でほぼ左右対称の細長い形状で、長軸一端に直交する刃部が作出されている石器である。

両面調整石器 形状が整わず、器種の特定できない両面調整の石器を一括した。

石 匙 素材剥片の一端に一对の抉り加工をいれ、握み部を作出し、刃部と判断できる縁辺を持つ石器である。握み部の位置から縦方向に長い刃部を持つ縦形石匙、横あるいは斜め方向に刃部を持つ横形石匙とした。

掻 器 急角度の刃部を持つ石器である。刃部の平面形態は外湾もしくは直線状である。

削 器 刃部と判断できる縁辺を持つ石器である。

両極石器 対向する縁辺から、バルブが発達せず、リングの密な二次加工や階段状剥離の二次加工で形成されている石器である。

二次加工剥片 部分的に加工が見られるが、器種を特定できない場合を二次加工剥片とした。大半は貝殻状剥離が見られる。

異形石器 機能よりも、デザインを重視して加工がなされていると判断される石器である。

微細剥片 剥片の縁辺に微小剥離痕が見られる石器である。

石 核 目的剥片を剥離したと思われる石器である。そして敲石類のうち、石核転用敲石は、石核として機能していたと判断されるため、石核に続けて図示した。他の敲石と同様に、礫石器の中におき、縮尺率を3分の1にすると、小さな剥離の読み取りは難しい。また石器の変形を示す例となるため、石核としての履歴を考慮し、本報告書では剥片石器の中で記載することとした。

剥 片 二次加工や微細な剥離痕の認められない一群である。アスファルトが付着した資料も含まれる。特に微小なもの（断片）は、図示していない。

自然礫 加工・使用痕のない礫であり、黒曜石、珪質頁岩、鉄石英などの原石などの搬入礫が該当する。原石などは図化を行わないが、一部は、写真撮影を行った。

【石斧】

打製石斧と磨製石斧に分類した。

打製石斧 剥片や礫を素材とし、形状は細長い形態であり、石筥に類似する。打製石斧の刃部は剥離基部が大きく、深く抉れた剥離で構成され石筥の刃部加工と異なる。そして、より大形で厚みがある。

磨製石斧 研磨で最終的に整形し、長軸の一端に直交した刃部を持つ石器である。

【礫石器】

磨石 磨面を主体とするもの。

敲石 敲痕を主体とするもの 敲打痕と凹痕との区分は凹の深さによる。

凹石 凹痕を主体とするもの。

磨石、敲石、凹石の中には同一礫の中に、磨面、敲痕、凹みを複合して持つ場合があるので、その場合は器種名を併記した。

石皿 磨面が中心となる板状の大形礫石器

台石 敲打痕が中心となる板状大形礫石器 大形礫の場合、これを含めた。

砥石 筋状や湾曲のある平滑面を持つ板状もしくは不整形の石器

【石製品】

利器と認めたい製品を石製品とする。

石棒・石刀・石剣 棒状の製品である。断面形状から以下の通り分類した。

石刀 断面形状の片側が鋭く、片側が丸い。

石剣 断面形状の両側辺が鋭い。

石棒 断面形状が丸い場合。

岩版

石製門盤

垂飾品

石製品 上記のどれにも該当しない場合。

(高橋)

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

詳細は川原平(1)遺跡Ⅱ報告書に記載されているので、ここでは、本報告書に関わる部分について述べる。

川原平(1)遺跡の所在する西目屋村は、青森県の南西域に位置する。川原平(1)遺跡は北北東に岩木山、そして南西一帯には世界自然遺産「白神山地」がそびえている。本遺跡は岩木川とその支流である大沢川の合流地点(右岸)に立地している(図2)。

本遺跡の北側には大きく蛇行する岩木川、西側には大沢川が存在し、両河川の周囲には砂礫が堆積し、その一段上位の台地には、かつての氾濫原を利用した水田が認められる。遺跡はこの台地と斜面遺物包含層を含み、旧村道を境に、川原平(4)遺跡と接する。本報告書はこの台地の北西隅、舌状にせりだした段丘上で、水田の北側に位置する地点であり、現況での標高は203m程である。この地区は調査前は杉林であり、樹木伐採後は径1m程の切り株が密集する状態であった。

本報告地点から北西方向を望むと、岩木川・大沢川の対岸に大川添(1)・(2)・(3)・(4)遺跡が存在する。

第2節 歴史的環境

1 周辺の遺跡

平成27年8月末の時点で西目屋村内には35の遺跡が登録されており、図2に川原平(1)遺跡周辺の遺跡分布を示している。美山湖周辺で確認されている縄文時代の遺跡は中期や後期が多い。一方で後期後葉以降の遺跡が集中しているのは川原平(1)遺跡のある台地部と、その近辺である。

2 周辺の遺跡と川原平(1)遺跡

本報告で記載される特異な遺構として、配石遺構や第1号盛土遺構などがある。これらの文化的面を解明するため、また、津軽ダム関連遺跡を含む周辺遺跡や秋田県北部の遺跡群との比較検討が本遺跡を総合的に理解するためには肝要となることは言うまでもない。

配石遺構は青森県内では、青森市小牧野遺跡、黒石市一ノ渡遺跡、平川市(旧平賀町)大師森遺跡、弘前市大森勝山遺跡などがある。この中で大師森遺跡では、立石を持つ配石遺構(日時計状組石遺構)をはじめ、各種形態を持つ配石遺構が確認されている。この遺跡は縄文時代後期前葉の十腰内I式に相当するため、川原平(1)遺跡の事例よりは古い。秋田県側では、後期中葉に属する大湯環状列石などが確認され、やはり川原平(1)遺跡の事例よりは古い。縄文時代晩期では大森勝山遺跡において、環状に組んだ大規模な配石遺構が確認され、晩期まで配石遺構を組む風習が岩木山麓に残されていることが窺える。さらに秋田県では鹿角市玉内遺跡などで、立石を持つ配石遺構が確認されており、時期的に川原平(1)遺跡の配石遺構に非常に近い。また、北海道島においても、道南地域には、配石遺構が後期中葉以降に確認されており、東北・北海道にまたがり、広い地域に配石遺構が構築される文化が広がっていたことが窺える。

表2 遺跡地名表 (青森県教育委員会文化財保護課作成 平成27年8月現在)

遺跡番号	遺跡名	フリガナ	所在地(所在地(市町村大字))	時代	種別	文献 (3和数字は青森県版)
3430 04	村市	ムライチ	村市字稲葉	中世	散布地	
3430 05	稲葉(1)	イナバカッコイチ	村市字稲葉	縄文(後)	散布地	
3430 06	稲葉(2)	イナバカッコニ	村市字稲葉	平安	散布地	
3430 07	芦池	アシヤチ	藤川字瀬の上	縄文(後)	散布地	
3430 08	砂子瀬	スコソセ	砂子瀬字宮元	縄文(中・後・晩)	集落跡	466・482・513・543
3430 09	川原平(1)	カワラタイカッコイチ	川原平字福岡	縄文(後・晩)	散布地	409
3430 10	川原平(2)	カワラタイカッコニ	川原平字福岡	縄文(後)	散布地	
3430 11	焼山	ヤケヤマ	川原平字大川添	縄文	散布地	
3430 14	砂子瀬村元	スナコセムラモト	砂子瀬字村元	縄文(中)	散布地	福田1984
3430 15	寒沢	サムサワ	居森平字寒沢	縄文	散布地	
3430 16	川原平(3)	カワラタイカッコサン	川原平字福岡	縄文	散布地	
3430 17	水上(1)	ミズガミカッコイチ	砂子瀬字水上・宮元	縄文(中・後)	集落跡	409・452
3430 18	大川添(1)	オオカワヅエカッコイチ	川原平字大川添	縄文	散布地	500
3430 19	大川添(2)	オオカワヅエカッコニ	川原平字大川添	縄文	散布地	409・482・515
3430 20	芦沢(1)	アシザワカッコイチ	砂子瀬字芦沢	縄文	散布地	500
3430 21	芦沢(2)	アシザワカッコニ	砂子瀬字芦沢	縄文	散布地	540
3430 22	川原平(4)	カワラタイカッコヨシ	川原平字福岡	縄文(中・後)	散布地	409・527・539
3430 23	川原平(5)	カワラタイカッコゴ	川原平字宮元	縄文	散布地	
3430 24	瀬の上	セノウエ	藤川字瀬の上	縄文(後・晩)	散布地	
3430 25	水上(2)	ミズガミカッコニ	砂子瀬字水上	縄文(中)	集落跡	514・528
3430 26	水上(3)	ミズガミカッコサン	砂子瀬字水上	縄文(中)	散布地	466・528
3430 28	稲葉(3)	イナバカッコサン	村市字稲葉	平安	散布地	
3430 29	水上(4)	ミズガミカッコヨシ	砂子瀬字水上	縄文(後・晩)	散布地	466・500
3430 30	大川添(3)	オオカワヅエカッコヨシ	川原平字大川添	縄文	散布地	544
3430 31	大川添(4)	オオカワヅエカッコヨシ	川原平字大川添	縄文	散布地	542
3430 32	鬼川辺(1)	オニカワベカッコイチ	砂子瀬字鬼川辺	縄文	散布地	541
3430 33	鬼川辺(2)	オニカワベカッコニ	砂子瀬字鬼川辺	縄文	散布地	541
3430 34	鬼川辺(3)	オニカワベカッコサン	砂子瀬字鬼川辺	縄文	散布地	541
3430 35	川原平(6)	カワラタイカッコク	川原平字宮元	縄文(後)・平安	集落跡	

盛土遺構については、土を塚状に盛り上げることで構築された遺構であり、縄文時代の古くからみられる。県内では三内丸山遺跡の北盛土・南盛土・西盛土が著名である。晩期盛土遺構は東北北部、北海道でも確認されている。特に、青森県弘前市(旧岩木町)薬師遺跡、秋田県北秋田市向塚D遺跡、岩手県北上市大橋遺跡などで検出された盛土遺構は、出土土器などから川原平(1)遺跡に非常に近い時期に構築されている。

また、遺物の面でも、他地域との関係を示唆するものが確認されている。

川原平(1)遺跡の第1号盛土遺構からは聖山式と思われる渡島半島の縄文時代晩期中葉に特徴的な土器が出土している。この土器は下北半島の二枚橋(2)遺跡、津軽半島の字鉄遺跡、今津遺跡、観音林遺跡、亀ヶ岡遺跡などで確認されている。現時点で秋田県などではほとんど確認されていないので、青森県津軽地方や下北半島に分布していることが明らかになっている。北海道島の文化要素が少なくとも青森県の下北半島、津軽地域では秋田県境近くまで広がっていたことが窺える。

このように川原平(1)遺跡には他地域との広範囲の文化交流を示す要素が随所に見られ、当時の生活習慣を考察する上で、非常に貴重な資料である。

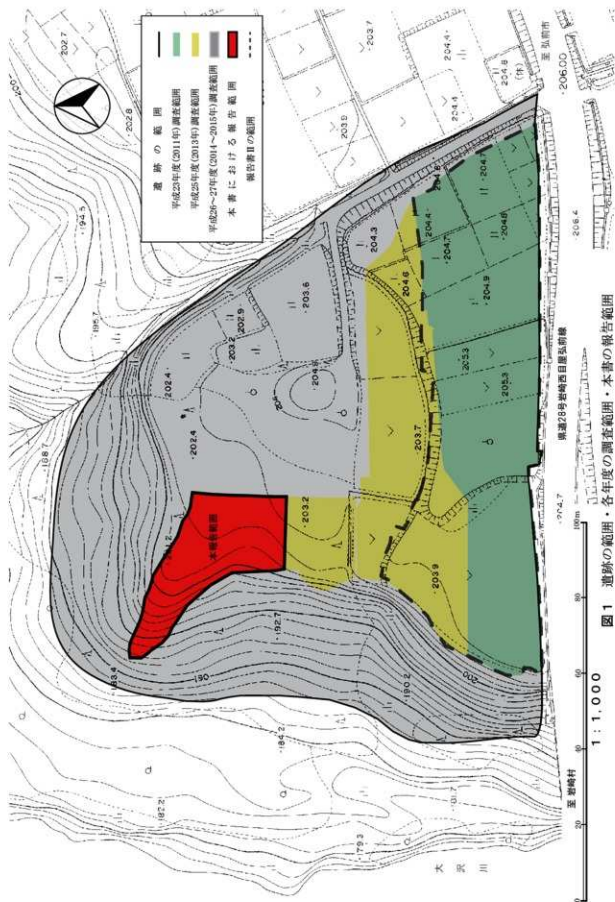
現時点でこの美山湖地域は、旧石器時代の遺跡は確認されていないが、縄文時代草創期と思われる遺物が鬼川辺(1)遺跡で、早期は川原平(4)遺跡E区で松原型石匙やトランシェ様石器など、この時期特有の遺物が確認されている。前・中期の円筒下・上層式は大川添(3)遺跡や水上(2)遺跡で、後期後葉から晩期には川原平(1)・(4)・(6)遺跡、大川添(1)・(3)・(4)遺跡、芦沢

(2) 遺跡で遺構・遺物が確認されている。そして晩期の大規模な遺構はこの川原平(1)遺跡とその周辺遺跡で確認されている。このように縄文時代全般を通して、この美山湖地域に根ざした文化が営まれていた。

しかし、大洞A式まで多量の遺物を包含する本遺跡は、大洞A'式以降の遺物はほとんど出土していない。岩木川の中流域では弘前市(旧相馬村)の五所遺跡、岩木山麓には栗師遺跡などで五所式が確認されており、少なくとも川原平(1)遺跡よりも低位の地域では弥生時代の遺構・遺物が見受けられる。現時点では美山湖周辺地域において、弥生時代の遺跡・遺物はほとんど確認されておらず、この地域で再び考古学的に生活の痕跡が見受けられるのは大川派(3)遺跡で検出された平安時代の竪穴住居跡である。こうした時代ごとに遺跡の粗密が見受けられることは、この地に根を下ろした文化が、周辺環境などに大きく影響を受けたことが窺え、当時の人々がどのようにしてこの地で生活を営んだかを明らかにする上で非常に重要である。

以上のように美山湖周辺地域は、縄文時代草創期から晩期まで遺跡が存続していた。さらに他地域と共通する文化要素が随所に見受けられ、奥山に近い立地であるが、孤立した地域ではなく、広範囲な他地域との関係があったと思われる。弥生時代以降は確認できる遺跡が減少し、平安時代に復活するなど、特色ある地域文化が成立したと考えられる。

(高橋)



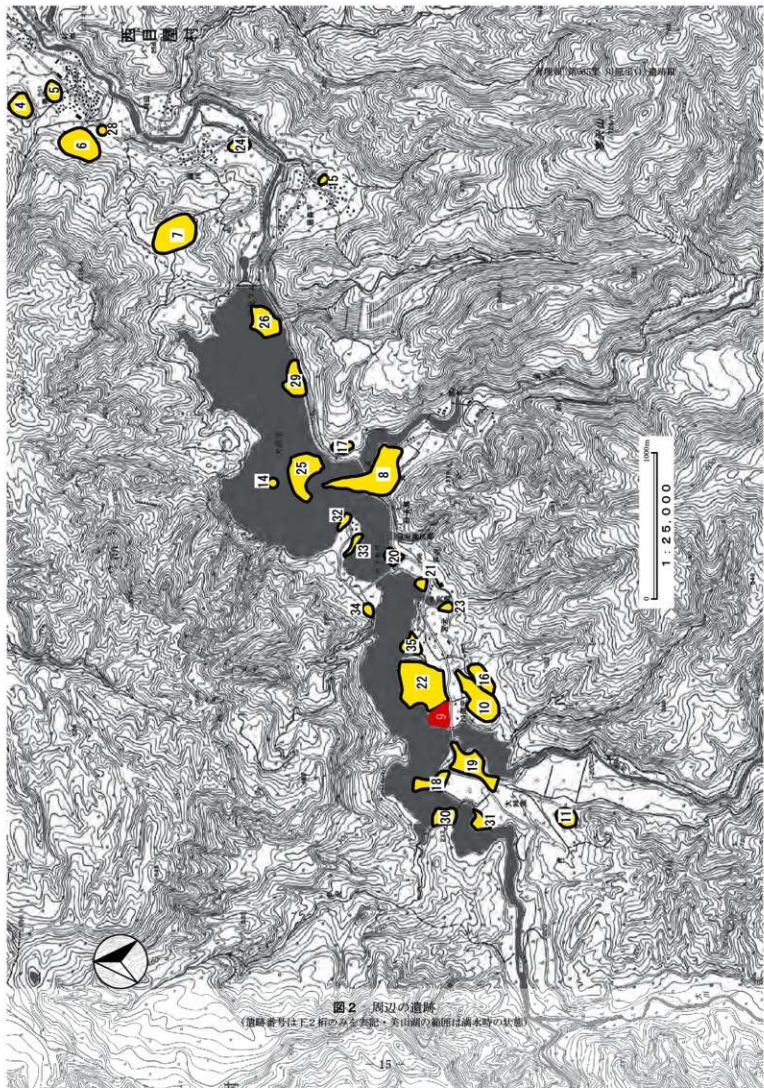


図2 周辺の遺跡

(遺跡番号は下2桁のみを表記・美山湖の範囲は満水時の状態)

第3章 調査概要

第1節 調査方法

1 発掘作業の方法

平成25年度に行った川原平(1)遺跡発掘調査のうち、本報告の調査範囲は、川原平(1)遺跡の北西隅に相当する(図1)。周辺地形よりも盛り上がった地形と、すでに行われた周辺地区の調査で縄文時代後期から晩期の包含層が確認されていることから、縄文時代晩期の盛土遺構が存在するのではないかと推定はあった。

【測量基準点・水準点の設置】各地区の測量及びレベル原点の設置にあたっては、1グリッドは4×4mとし、原点から北方向(南北ライン)にローマ数字(I~V)とアルファベット(A~Y)を組み合わせた名称を、原点から東方向(東西ライン)へは算用数字(1、2、3…)を付した。南北ラインでは4m北進する毎に「IA」、「IB」・・・とアルファベットが進み、IY(IAから100m)に達すると、ローマ数字が繰り上がり「IIA」が始まるようにした。東西ラインは4m東進する毎に算用数字が1ずつ増えるようにした。

グリッドの名称は、南北ライン(ローマ数字+アルファベット)と東西ライン(算用数字)を組み合わせ、IA-99のように表し、各グリッドの名称は、南西隅のライン交点杭を用いた。グリッド設置の基準原点(IA-0)の座標はX=58200.000、Y=-51700.000である。

※平成15年度(2003年)調査時のグリッド(青埋報第409集)名は、これとは異なる方法で付されている(『川原平(1)遺跡Ⅱ』参照)。

【グリッドの設置】遺構・基本土層の精査や遺構外出土遺物の取り上げにあたっては、調査区あるいは遺跡全体を網羅するような、公共座標を基準とした4mグリッドを設置して記録した。グリッド設定の詳細にあたっては、平成23年度調査の設定にしたがった。

【表土の調査】調査区全体に切り株が残されていることと、第1号盛土遺構があるため、重機をいれられないと判断し、人力で表土を除去した。また、北西隅地点も重機が入り込むことが不可能であったので、本報告範囲はすべて人力で表土を除去した。

【遺物包含層・盛土遺構等の調査】上層から層位毎に人力で掘削した。遺存状態が良好な遺物や、特徴的な遺物が出土した場合は、トータルステーションにて点取りを行った。原則としてはグリッド単位で層位毎に取り上げた。遺構内の堆積土層には、算用数字を付けて、ローマ数字を付けた基本土層と区別した。色調表記には、『新版標準土色帖2005年度版』(小山正忠・竹原秀雄)を用いた。

検出遺構には、種別毎のアルファベット略号と算用数字を組合せた番号を付した。

ほとんどの遺構平面図と、一部遺構堆積土断面図は、株式会社CUBIC製「遺構実測支援システム」を用いてトータルステーションによる測量で作成した。遺構の堆積土層断面図や堅穴住居跡に伴う炉等の平面図、配石遺構の配石平面図、出土遺物の形状実測等は簡易遺り方測量等で縮尺1/20・1/10の実測図を作成し、遺構の規模や性格に応じて変更した。遺構内の出土遺物は遺構単位・遺構内地区単位で層位毎に又は堆積土一括で取り上げたが、床面(底面)や炉などで密に出土した遺物については、トータルステーションや簡易遺り方測量により、必要に応じて縮尺1/20・1/10のドットマップ

図・形状実測図等を作成した。

セクションベルトは、遺構の形態・大きさに応じて2分割または4分割で設定したが、遺構の重複や付属施設の有無等により必要に応じて追加した。

【微細遺物の検出】第21号配石遺構の坑底近くから玉製品が出土したので、その時点で周辺並びに、掘りあげた土壌も含め、すべて回収し、持ち帰り、水洗洗浄をかけ、微細遺物の回収に努めた。

【自然科学分析データ採集】第27号配石遺構や土器埋設遺構の性格を考察するため、リン・カルシウム分析を行うことを想定して土壌などを回収した。第27号配石遺構は、覆土の上層・中層・下層・最下層・遺構外の堆積土を採取した。採取方法は、周囲を掘り下げ、10cm程度の立方体状に土の柱をつくり、底部を切り取り、立方体の固まりで取り上げ、アルミホイルでくるみ、天地・東西南北などを記載した。第65号土器埋設遺構は、土器内部の土層を上層・中層・下層・掘り方の土に分けて採取した。以下の処理は第27号配石遺構と同様である。

リン・カルシウム分析とは別に、第1号盛土遺構の堆積層の中から、土壌サンプルも採集した。試料は弘前大学にて植物遺存体などの分析が行われている。これらの成果は来年度刊行の報告書に掲載される予定である。

【写真撮影】写真撮影は、原則として35mmモノクローム・35mmカラーリバーサルの各フィルムカメラ及びデジタルカメラ（キヤノン製 EOS 7 D 5184×3456ピクセル 約1800万画素）を併用し、発掘作業状況、土層の堆積状況、遺物の出土状況・精査状況・完掘後の全景等について記録した。

ラジコンヘリによる遺跡及び調査区域全体の空中写真撮影は業者に委託した。

2 整理・報告書作成作業の方法

3ヶ年の調査と整理作業によって、川原平（1）遺跡Ⅲの報告範囲では、建物跡5棟、土坑32基、配石遺構17基、土器埋設遺構25基、焼土遺構4基、ビット224基が検出され、遺物は392箱（土器231箱、石器161箱）が出土した。

出土遺物の掲載方法並びに基準は以下の通りである。

【今回の報告範囲と各年度の調査範囲】（図1）

今回の報告範囲について、各年度の調査範囲との関係で具体的に示すと、平成23年度（2011年）調査区と平成25年度（2013年）調査区にまたがる点線で囲まれた薄緑部分が川原平（1）遺跡Ⅱの報告範囲であり、本書は、その北側における実線で囲んだ赤色部分が報告範囲となる。

【図面類の整理】遺構の平面図や堆積土層断面図等は、簡易遺り方で主に作成したため、遺構毎に図面修正を行った。また、遺構台帳・遺構一覧表等を作成して、発掘作業時の所見等を整理した。

【写真類の整理】35mmモノクロームフィルムは撮影順に整理してネガアルバムに収納し、35mmカラーリバーサルフィルムは発掘作業状況、遺構や遺物包含層からの遺物の出土状態、遺構の検出・精査状況等に整理してスライドファイルに収納した。また、デジタルカメラのデータは35mmカラーリバーサルフィルムと同様に整理してタイトルを付し、ハードディスク・DVD等に保存した。

【遺物の洗浄・注記と接合・復元】遺物の洗浄を早期に終え、接合・復元作業を進めるようにした。遺物の注記は、調査年度・遺跡名、遺構名・グリッド名、層位、取り上げ番号等を略記したが、直接注記できない剥片石器等については、収納したチェック付きポリ袋に注記した。また、接合・復元に

あたっては、出土地点・出土層等を点検しながら入念に行った。

【報告書掲載遺物の選別】遺物全体の分類を行った上で、所属時代（時期）・型式・器種等の分かる資料等を主として選別し、漆付着遺物・アスファルト付着遺物等の特殊な遺物はできるだけ多くを抽出し、可能な限り掲載した。

【遺物の観察・図化】充分観察した上で、遺物の特徴を適切に分かり易く表現するように図化した。また、観察表・計測表等を作成した。一部の遺物については、写真のみで報告した。なお、土器の文様構成がわかりやすいように、展開の拓本を数点の土器で作成した。この展開拓本は、調査員の藤沼邦彦氏よりご教授頂いた。

【遺物の写真撮影】業者に委託して行ったが、実測図等では表現しがたい質感・雰囲気・製作技法・文様表現等を伝えられるように留意した。

【トレース・版下作成】遺構・遺物の実測図やその他の挿図のトレースは、ペンによる手作業とアドビシステムズ㈱製「Adobe Illustrator CS4・6」を用いたデジタルトレースを併用し、実測図版・写真図版等の版下は「Adobe Illustrator CS4・6」と「Adobe InDesign CS4・6」で主に作成した。

【遺構の検討・分類・整理】遺構毎に種類・構造的特徴・出土遺物・他の遺構との新旧関係に関するデータを整理し、構築時期や同時性・性格等について検討を加えた。

【遺物の検討・分類・整理】遺物を時代・時期・種類毎に整理し、出土遺物全体の分類・品種構成・個体数等について検討した。

【調査成果の検討】遺構・遺物の検討結果を踏まえて、縄文時代の時期・構造・変遷等について検討・整理した。

【自然科学分析】平成15年度（2003）の調査以来、リン・カルシウム分析、放射性炭素年代測定や黒曜石原産地分析など多くの分析を外部に委託しているが、これらの成果については本報告以外の地区で得たものとあわせて、最終報告書に一括掲載する予定である。ただし、本報告における遺構・遺物の記載にあたり、それらの結果を部分的に引用している箇所がある。

（中澤・高橋）

第2節 基本層序

基本土層については、各地点における土層観察のために、適宜深掘りを行い、表土から下位にローマ数字を、細分層については小文字のアルファベットを付けて呼称した。土層の色調表記には、『新版標準土色帖2006年度版』（小山正忠・竹原寿雄）を用いた。

川原平（1）遺跡Ⅲ報告書の範囲は、調査区の北西隅にあたる。その一帯の詳細な地質については、次年度刊行の報告書に譲るとして、簡単に説明する。

台地の北西隅にあたり、不自然な地形の高まりがみられる。それ以外に3カ所で地形の高まりが見受けられており、晩期の盛土遺構の可能性が考えられる。

また、川原平（1）遺跡Ⅱ報告書の地山は大部分が礫層であるのに対し、本報告書の範囲は、シルト質の地山が形成されているなど、他地点の地山の様相と異なる。

ロングセクションを作成した第1号盛土遺構（図77）を用いて基本層序を説明する。

第Ⅰ層 10YR3/3 暗褐色土、他

表土の類である。縄文時代晩期の遺物が含まれているが、近現代の遺物を含んでいる。

第Ⅲ層 10YR4/4 褐色土、他

シルト質で、縄文時代晩期に形成された土層と考えられる。なお、第1号盛土遺構の下層（Ⅱ段階）と第Ⅲ層が同一層であると判断した。

第Ⅳ層 10YR5/4 にぶい黄褐色土、他

いわゆるローム層である。川原平（1）遺跡の地山は基本的には礫層であるが、本報告の範囲は、ローム層によって地山が形成されている。シルト質の地山にも礫が多く含まれている。

（高橋）

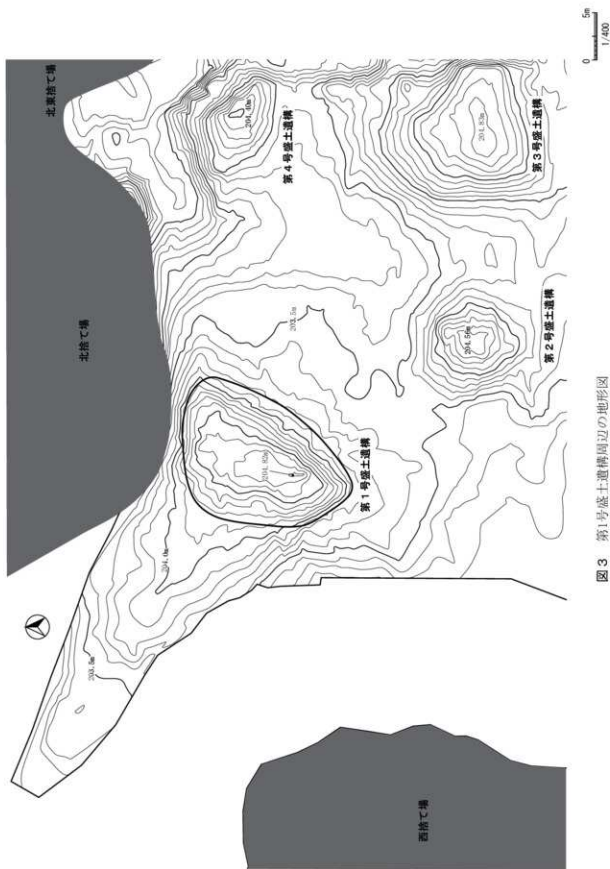


図3 第1号盛土遺構周辺の地形図

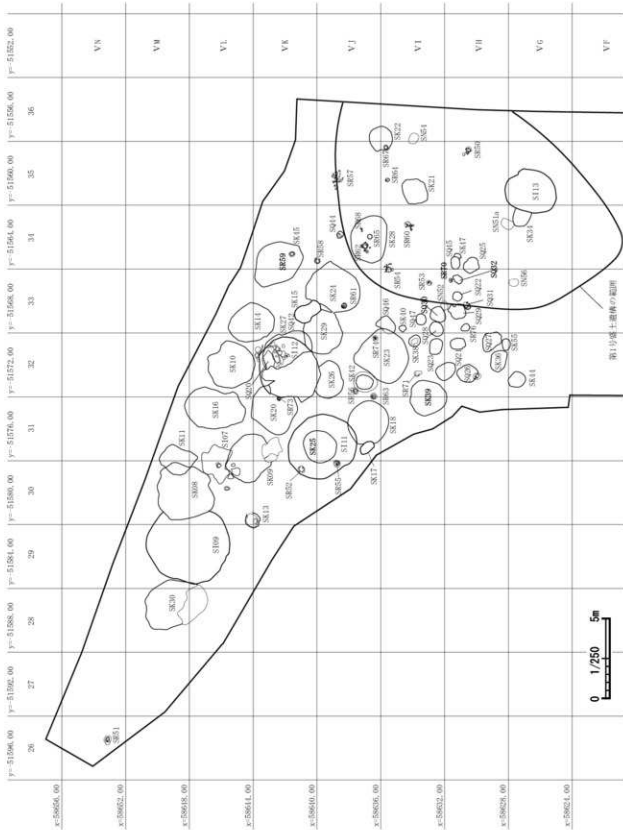


図 4 平成25年度川原平(1)遺跡 遺構配置図(SI、SK、SR、SN、SQ)

第4章 検出遺構と出土遺物

第1節 遺構

検出された遺構の地点や規模などは表14・15に記載してある。

1 建物跡

全部で5棟検出できた。すべて縄文時代中期に属する。竪穴住居跡は、第13号建物跡がV G-34・35と少し離れた地点での検出を除いて、調査区のV JからM-29から32に位置している(図6)。半島状に突き出た台地の北西突端部に住居群が集中する。これらの遺構の地点は岩木川と大沢川の合流する地点を見下ろせる位置にあり、対岸にある大川添(1)遺跡などが見渡せる。出土遺物や住居の構造から竪穴住居跡は縄文時代中期後葉の段階に属する。

また、整理の課程で、竪穴住居跡と最終的に判断できないものがあった。欠番の建物跡は、第8号建物跡である。第10号建物跡は第42号配石遺構に変更した。

第7号建物跡(略号:SI07 図7・8)

[位置・確認] VL-30・31グリッドに位置する。第Ⅲ層を掘り下げ中に、土器埋設炉及び炉周辺の貼床を確認した。

[重複] 第9号土坑より新しい。

[規模・形状] 炉と床面の一部が残存するだけで、規模・形状については不明である。

[堆積土] 確認できなかった。

[壁・床面] 壁は確認できず、床は炉の周辺の貼床のみ確認した。

[柱穴・施設] 床の確認面と同じ標高で、貼床周辺に1基の柱穴を確認した。

[炉] 土器埋設炉である。土器内には明確な火床面は形成されていないが、炭化物の多い1層の上面に焼土が多く火床面に相当すると判断した。また、炉体土器の北東に接する床面に焼土が認められる。

[出土遺物] 土器は656.5g出土している。炉の覆土から無文の土器底部が出土している(図8-1)。炉体土器の底部であるが、胴部は脆かったので、組み上がらなかった。時期は特定しがたいが、中期後葉の可能性が考えられる。

[小結] 明確な時期のわかる遺物は出土していない。

(齋藤)

第9号建物跡(略号:SI09 図9~11)

[位置・確認] VL・M-29・30グリッドに位置する。第Ⅲ層を掘り下げ中に確認した。

[重複] 第8号土坑より古い。

[規模・形状] 5.24×4.81mの円形で、確認面から床面までの深さは、残りの良い西壁で51cmである。

[堆積土] 4層に区分した。自然堆積と考えられる。

[壁・床面] 壁は南側で攪乱のために一部欠失する。東側は第8号土坑との重複により欠失するが、重複部分が少ないので下端は残存する。床は炉の周辺を中心に貼床がひろがり、他は地山を床面とす

る。炉の南側から西側にかけて、やや硬化した部分があるが、面的なひろがり是不明確である。

[柱穴・施設] 6基の柱穴を確認した。また、付帯施設として石囲炉前底部の北西側に出入口部を構成すると考えられる5点の礎がある。壁側の扁平な礎(S-5)を中心にして左右に扁平礎(S-1・2)がほぼ水平に置かれ、より建物の内側には扁平礎(S-3・4)を垂直に立てた状態で据えられている。[炉] 北寄りに、石囲炉が位置する。石囲炉は形状から前底部と石組部からなる2部構成の複式炉系の炉と考えられる。本来は開口部がやや開き気味に「コ」の字状に礎が配置されていたと考えられ、北東側に礎の抜けた痕跡が確認できる。前底部と石組部は3個の扁平な楕円礎を垂直に置き、区画している。石組部に土器が埋設、若しくは抜き取られた様子は認められない。石組部の長軸は103cm、短軸は82cmである。前底部と組部の底面の高低差は約10cmであり、前者が後者より低い。石組部の礎は被熱の影響で割れているものがある。炉内から採取した炭化材の内、1点(C-5)は炭素年代の測定試料とした。

[出土遺物] 土器は908.6g、剥片石器類は176.9gほど出土している。なお、礫石器、石製品の重量は含まれていない。

床面直上から粗製深鉢形土器の口縁から体部片が出土した(P-1 図11-1)。器形から縄文時代中期後葉と考えられる。他に横位沈線が1条巡る無文の口縁部片(図11-2)が覆土から出土した。文様や器形から上述した粗製深鉢と同時期と考えられる。石器は微細剥片(図11-3)や大形の礫(写真47)などが出土している。

[小結] 床面直上の土器から縄文時代中期後葉の住居跡と考えられる。また、炭素年代の測定結果は、平成28年度刊行の報告書で掲載する予定である。

(齋藤)

第11号建物跡(略号: SI11 図12~15)

[位置・確認] VJ・K-30・31グリッドに位置する。第III層を掘り下げ中に、確認した。

[重複] 第25号土坑より新しい。

[規模・形状] 4.40×3.83mの楕円形で、確認面から床面までの深さは北壁及び西壁で60cmである。

[堆積土] 7層に区分した。最下層の第3層は、自然堆積の可能性があるが、その上の1・2層は晩期の土器を多量に含み、人為堆積と考えられる。

[壁・床面] 壁はおおむね直線的に立ち上がる。床は全面に貼床(第8層)がひろがる。

[柱穴・施設] 15基の柱穴を確認した。Pit 8は最も規模が大きく、直径44cm、深さ70cmで柱痕跡が残る。それに次ぐのがPit 3・4で、長径が40cm前後、深さ44cm前後でPit 4には柱痕跡が残る。他にPit 13・14が深さ55cmである。残りの柱穴は深さ15~30cmである。建物跡の南東側では柱穴は確認できなかった。付帯施設として石囲炉の西側に出入口部を構成すると考えられる3点の礎がある。壁側の2点の礎は縦長であり、地山からの礎に接して配置している。炉に近い礎は、やや扁平な楕円礎である。

[炉] 南東の壁に近い場所に、四角形の石囲炉が位置する。石囲炉の北西側に接して地床炉の火床面が広がっている。その火床面の標高は石囲炉のものよりも低い。石囲炉の炉石の表面は被熱し表面が剥落しているものがある。石囲炉は長軸75cm、短軸70cmの四角形である。地床炉の火床面は長径60cm、

短径50cmの不整楕円形である。

【出土遺物】土器は2093.7g、剥片石器類は716.7gほど出土している。なお、礫石器、石製品の重量は含まれていない。

縄文時代中期末の土器が床面直上から出土した。上部の層からは、晩期の土器が多量に出土した。図14-1は口縁部が無文の粗製深鉢である。文様と器形から最花式〜大木10式併行と考えられる。図14-2は晩期の壺形土器である。口縁部が無文で、内面の口縁部に沈線が1条巡っている。RL縄文が施文されている。他に晩期と思われる深鉢形土器もしくは鉢形土器の口縁部片(図14-3)、後期末から晩期前葉と思われる高台をもつ底部(図14-4)なども出土している。

石器は凹基磯(図14-5)、平基有茎磯(図14-6)、削器(図14-7)、礫面を残す両極剥片(図14-8)、粗製石材の石器(図14-9)、凹石(図14-10)が出土している。図14-8の両極剥片は玉髓製である。図14-9は流紋岩製石器であり、自然面を残し、その反対面に加工をいれている。これ以外に大形の台石(写真47)が出土している。

石製品は、石棒断片(図15-1)、石製円盤(図15-2〜8)がある。石製円盤は、素材周縁を剥離で整形している。中には、側面加工は対向する方向からも剥離が見られることから、両極打撃で剥離されたと考えられる資料もある。図15-4は表面が研磨されている。

【小結】床面直上の土器から縄文時代中期末の住居跡と考えられる。住居の中央部の貼床下に、中期の第25号土坑が位置する。第25号土坑は人為堆積であり、その廃絶後に周囲の土を掘り広げ、第25号土坑を埋める形で本建物の貼床面を構築したと考えられる。堆積土下部からは、中期末の土器が出土したが、堆積土の中部から上部にかけて多量の晩期土器が出土した。そのため晩期まで埋まりきらずに窪地として残っていたものと考えられる。また、石囲炉に接して南東側に礫が1点あり、さらに南東には礫の抜けた跡あるいは柱穴がある。そのことから第9号建物跡のような前庭部と石組部からなる2部構成の複式炉系の炉の形状を意識した可能性があるが、前庭部は構築されていない。また、炉内出土炭化材の炭素年代の測定結果は、平成28年度刊行の報告書で掲載する予定である。

(齋藤)

第12号建物跡(略号:SI12 図16・17)

【位置・確認】VK-32グリッドに位置する。第III層を掘り下げ中に、風倒木と重複する黒褐色土の落ち込みとして確認した。

【重複】第20・27号土坑より新しい。

【規模・形状】風倒木により西側を欠失するため、全体の形状は不明である。南北のセクションラインでは推定で3.72mである。確認面から床面までの深さは最も残りの良い北東壁で36cmである。

【堆積土】4層に区分した。自然堆積か人為堆積かは不明である。

【壁・床面】壁はやや直線的に立ち上がるが不明な部分が多い。床面はおよそ平坦である。

【柱穴・施設】柱穴は確認できなかった。付帯施設として石囲炉前庭部の南東側に出入口部を構成すると考えられる2点の礫がある。

【炉】東寄りに、石囲炉が位置する。石囲炉は形状から前庭部と石組部からなる2部構成の複式炉系の炉と考えられる。前庭部と石組部の間には3個の扁平な礫を置き、区画している。石組部に土器が埋

設、若しくは抜き取られた様子は認められない。石囲炉は四角形で長軸は南北75cm、東西65cmである。組石部と前庭部との底面は高低差があり、後者が前者より若干高い。石組部の礫は割れているものもあり、被熱の影響が考えられる。

[出土遺物] 土器は2024g、剥片石器類は529.6gほど出土している。なお、礫石器、石製品の重量は含まれていない。

縄文時代中期末の土器が覆土から出土した。図17-1は覆土から出土した深鉢形土器の体部片である。文様や器形から大木10式併行と思われる。図17-2は小形の鉢形土器である。内部には赤い漆液が厚く付着し、外面にも薄く液だれ状に付着が認められる。口縁部には貫通孔が1か所あり、本来の直径は7mmであるが、孔の内側にも漆液が付着するため、現状では孔の直径は3mm程度に狭くなっている。孔付近の漆膜は孔周囲が土器内側面に盛り上ることから、漆液が付着したのちに、外側から何らかの工具で突き刺し、孔を再度開け直した可能性が想定できる。この漆液容器は、器形から縄文時代中期末と考えられる。なお、本資料は風倒木により住居跡が攪乱を受けた部分から出土した。しかし、風倒木が建物範囲内に概ね位置することや、出土状況の観察から、当初から住居内の覆土内に存在したものと判断されるため、住居内遺物として記載する。ほかに覆土から晩期の前葉から中葉の土器片が出土しており、そのうち3点(17図-3～5)を図化した。

石器は凹基織(図17-6)、ブーメラン形の異形石器(図17-7)が出土している。

[小結] 出土した土器から縄文時代中期末の住居跡と考えられる。

(齋藤)

第13号建物跡(略号:SI13 図18～20)

[位置・確認] VG-34・35グリッドに位置する。第1号盛土遺構を掘り下げ中に確認した。

[重複] 第34号土坑より新しい。

[規模・形状] 3.27×2.66mの楕円形で、確認面から床面までの深さは北西壁で41cmである。

[堆積土] 5層に区分した。自然堆積か人為堆積かは不明である。

[壁・床面] 壁は、ゆるやかに立ち上がる。床面は、炉跡周辺に貼床が見られる。全体に平坦である。

[柱穴・施設] 柱穴を3基確認した。

[炉] 南寄りに、土器埋設炉が位置する。炉体の土器(図20-6)は、口縁部と底部が欠失している深鉢形土器で、その大きさに見合った掘り込みの中に設置されている。床面に近い部分では黒褐色土を貼床のように重ねて整えているが南側につれ不明確になる。土器の内側には火床面が形成されている。

[出土遺物] 土器は5872.9g、剥片石器類は379gほど出土している。なお、礫石器、石製品の重量は含まれていない。

覆土上層(第1号盛土遺構の第3層)から円筒上層e式(図19-1)が出土している。他にも円筒上層d～e式の土器が覆土から出土している(図19-3から8、図20-1・2)。図20-6は炉体土器であり、地文縄文に胸骨文が施されることから、円筒上層e式に比定される。ほかに後期後葉から晩期の注口部片(図20-3)や底部(図20-4)も出土した。

図19-2は大木8a～8b式の影響を強く受けた深鉢形土器であり、覆土から出土している。

石器は大形の石鏃(図20-7)と、磨石(図20-8)が出土している。

[小結] 土器埋設炉の炉体の土器から縄文時代中期円筒上層 e 式期の住居跡と考えられる。

(齋藤)

2 土坑

全部で32基確認できた。縄文時代中期と晩期の土坑が確認されている。中期は大形の土坑、晩期は比較的小形の土坑が主体である。検出地点からおおよそ時期が特定でき、中期の土坑は主にグリット V I ラインよりも北側に集中し(図6)、晩期土坑の多くは同ラインよりも南側に分布する(図44)。出土遺物がないものや、位置関係からどちらとも判断できない土坑(第13号・第15号・第17号土坑など)もあった。

また、整理の過程で、土坑と最終的に判断できないものもあるので、それらは欠番扱いとした。なお、欠番の土坑は、第7号・第12号・第19号・第31号・第35号・第41号・第43号・第46号・第48から54号土坑である。その内第19号土坑は第44号配石遺構、第51号土坑は第46号配石遺構へ変更した。

第8号土坑(略号: SK08 図21)

[位置・確認] VI・M-30グリッドに位置する。第III層を掘り下げ中に確認した。

[重複] 第9号建物跡及び第11号土坑より新しい。遺構確認時に重複はないと判断したため、第9号建物跡の精査を並行した。そのため、両者の重複する部分では断面図の一部を欠失し、第9号建物跡の断面図には本土坑の堆積土が現れている。

[規模・形状] 3.65×3.68mの不整な隅丸四角形で、確認面から底面までの深さは25cmである。西側の底面には炭化物層に覆われた1.58×0.84mで深さ20cmの楕円形の穴が形成されている。

[壁・底面] 壁はゆるやかに立ち上がり、底面はおおむね平坦である。

[堆積土] 4層に区分した。暗褐色土ブロックや礫を含み、人為堆積と考えられる。西側では堆積土の下部に焼土があり、その最下層は炭化物層となっている。

[出土遺物] 出土していない。

[小結] 時期及び性格は不明である。炭化物層と焼土層の間に土を挟む堆積状況は土屋根の焼失建物跡にも見られるが、構造物材として形をとどめるものはみられない。炭素年代の測定結果は、平成28年度刊行の報告書で掲載する予定である。

(齋藤)

第9号土坑(略号: SK09 図22・36)

[位置・確認] VK・L-30・31グリッドに位置する。第III層を掘り下げ中に、中央部に黒褐色土の入る落ち込みとして確認した。

[重複] 第7号建物跡より古い。

[規模・形状] 3.07×2.65mの楕円形で、西側に張り出しを持つ。確認面から底面までの深さは約228cmである。底面中央には62×54cmで深さ24cmの楕円形の穴があり、石が2点置かれていた。

[壁・底面] 壁は直線的に立ち上がり、底面は平坦である。

[堆積土] 19層に区分した。なお、当初は南北に設定したAラインで半截したが南側が木の根と絡み合う大形礫の下に広がるのがわかり、土坑底面まで深さがあることが予想されたことから安全上の理由で東西方向のBラインに変更した。堆積土の把握が難しく、断面図作成時点では壁面及び底面まで達していない。確認面や堆積土の中位に大形の礫を含み、堆積土中位には炭化物の多い層もある。堆積土下位には緩やかなまとまりをもって10点の礫が出土している(写真6 上段)。以上から人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器は341g、剥片石器類は379.2gほど出土している。なお、礫石器、石製品の重量は含まれていない。

堆積土中位から深鉢形土器の口縁部片(図36-1)が出土している。口縁端部は外側に肥厚し、肥厚部には沈線が巡ることから、椀林式に比定される。大形の礫(写真49)が出土している。

[小結] 出土土器から、縄文時代中期後半のものと考えられる。最上部の1・2層は第Ⅲ層由来の自然堆積層であるが、覆土3層以下では周辺での遺構構築の際に土が流れ込んだ(あるいは投げ込まれた)可能性がある。これは周辺土坑の堆積においても同様である。なお、本土坑から縄文時代中期後半の大形土坑の精査が始まり、堆積土が地山の土を起源としていることから壁面及び底面の把握が困難であった。そのため土層断面図は壁面及び底面まで達していない。

本土坑の完掘写真には安全上の理由から壁出しを行わなかった確認面の大形礫の下部を除き、壁面に灰色の土をはさむ自然地層が露出している。

本土坑と同様に、地山の自然地層を把握するまでに精査した周辺土坑の土層断面図についても掘り不足が生じている。

(齋藤)

第10号土坑(略号: SK10 図23・36)

[位置・確認] VI-32グリッドに位置し、第Ⅲ層掘り下げ中に確認した。

[重複] なし。

[規模・形状] 2.97×2.96mの円形で、確認面から底面までの深さは南側で126cm、北側で92cmである。本土坑は新旧2段階に分けることができる。旧段階は、掘削当初の時期で、壁面及び底面に灰色の層や礫層など水成堆積層が現われている。新段階は底面及び壁面に土が堆積し、中段で南北の壁際に各1個の柱穴が構築された時期である。新段階では、傾斜の上方である南側の上部に張り出し部分を持つ。柱穴は南側のビット1の掘り方は48×45cm、深さ32cmで、南側に裏込めの石を伴う。北側のビット2は裏込めの石が2点あり、掘り方は長軸となる東西方向で40cm、深さ52cmである。

[壁・底面] 壁は旧段階では直線的に立ち上がり、新段階では緩やかに立ち上がる。底面は旧段階では平坦である。

[堆積土] 14層に区分した。中位の5層は炭化物が多く、旧段階の底面付近にも炭化物が分布している。新・旧いずれの段階も人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器は754.3g、剥片石器類は270.8gほど出土している。なお、礫石器、石製品の重量は含まれていない。

図36-2は深鉢形土器の口縁から体部片である。口縁端部には隆帯が貼付られている。劣化のため、

隆帯上の縄文の有無は不明である。円筒上層 e 式と思われる。図36-3・4は共に深鉢形土器の口縁部片で、口縁端部に隆帯が貼り付けられる。図36-3は隆帯上に鋸歯状の剥離痕が認められ、図36-4は隆帯上に鋸歯状の粘土紐の貼付が施されることから、どちらも円筒上層 d～e 式と思われる。図36-6は内傾する深鉢形土器の口縁部である。詳細な時期は特定しがたいが、器形から縄文時代中期後葉の所産と考えられる。図36-7は平底の底部である。縄文時代中期後葉の可能性が高い。ほかに晩期の粗製の深鉢形土器の口縁部片(図36-5)も出土した。

図36-8は自然面を残す石核である。

[小結]出土土器から、新段階は縄文時代中期後葉と推定される。旧段階との時間差については不明である。また、新段階では中段の2個の柱穴の存在から上部に覆屋が存在した可能性がある。旧段階底面から出土した炭化材の炭素年代の測定結果は、平成28年度刊行の報告書で掲載する予定である。

(齋藤)

第11号土坑(略号: SK11 図23)

[位置・確認] VL・M-30・31グリッドに位置し、第Ⅲ層掘り下げ中に長さ30cm程度の礫とその周囲の土色の変化を確認した。傾斜面にあり、精査中には自然の落ち込みの可能性も考えたが、扁平な大形礫が計3点出土しており土坑と認定した。

[重複] 第8号土坑より古い。

[規模・形状] 2.40×1.93mの楕円形で、傾斜の上方である南側には、中段に張り出し部分を持つ。

[壁・底面] 壁はゆるやかに立ち上がる。

[堆積土] 4層に区分した。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 土器は20.6g、剥片石器類は6.6gほど出土している。なお、礫石器、石製品の重量は含まれていない。

扁平な大形礫2点が段差を持ちながら近接して出土した。取り上げた後、中段の張り出し部分の底面ですらに1点の大形礫(S-3写真49)が出土した。時期が明瞭な土器は出土しなかった。

[小結] 時期の明確な遺物が出土しなかったが、土坑の位置や堆積土などから中期後半と推定される。

(齋藤)

第13号土坑(略号: SK13 図24)

[位置・確認] VK・L-29・30グリッドに位置し、第Ⅲ層掘り下げ中に確認した。確認面から底面までの深さは北側で30cmである。

[重複] なし。

[規模・形状] 0.94×0.95mの不整な円形である。

[壁・底面] 壁はやや直線的に立ち上がる。底面は概ね平坦であるが、南西側が窪む。

[堆積土] 3層に区分した。大形礫1点(写真図版49)が確認面出土した。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 大形礫のみが出土している。

[小結] 時期は不明である。

(齋藤)

第14号土坑 (略号: SK14 図24)

[位置・確認] VK・L-32・33グリッドに位置し、Ⅲ層掘り下げ中に確認した。確認面から底面までの深さは南側で135cmである。

[重複]なし。

[規模・形状] 2.90×2.45mの不整な楕円形である。北西側の上部に張り出しを持つ。

[壁・底面] 壁は直線的に立ち上がる。底面は概ね平坦であるが、北側の壁面に接して42×32cm、深さ14cmのピットを伴う。

[堆積土]13層に区分した。堆積土に礫を含み、人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器は223g、剥片石器類は77.7gほど出土している。なお、礫石器、石製品の重量は含まれていない。堆積土の下層の壁際から中期後半の土器小片が出土した。

[小結] 出土土器から、中期後半の土坑と推定される。

(齋藤)

第15号土坑 (略号: SK15 図24)

[位置・確認] VK-33グリッドに位置し、第Ⅲ層掘り下げ中に確認した。確認面から底面までの深さは31cmである。

[重複]なし。

[規模・形状] 直径1.15mの円形土坑の南東側に張り出しを持ち、全体としては1.74×1.12mの不整な楕円形である。

[壁・底面] 壁はゆるやかに立ち上がる。

[堆積土]4層に区分した。人為堆積か自然堆積かは不明である。

[出土遺物] 土器は99.5g、剥片石器類は72.1gほど出土している。なお、礫石器、石製品の重量は含まれていない。

[小結] 時期の分かる出土土器がなく、時期は不明である。また、張り出し部分は重複する土坑の可能性は否定できないが、堆積土の観察からは積極的に支持する要素はみられなかった。

(齋藤)

第16号土坑 (略号: SK16 図25)

[位置・確認] VL・M-31・32グリッドに位置し、第Ⅲ層掘り下げ中に確認した。確認面から底面までの深さは北壁で221cmである。

[重複]なし。

[規模・形状] 3.86×2.50mの楕円形である。傾斜の上方である南側に張り出しがある。

[壁・底面] 壁はゆるやかに立ち上がる。底面には76×64cm、深さ20cmのピットを伴う。

[堆積土]22層に区分した。炭化物を多く含む黒褐色土層が上位(第6層)と下位(第17層)に各1層ある。第18層は焼土層である。第4層下部では礫がまとまって出土した(写真図版8上から3段目左

側)。本層は下に向かって湾曲する堆積層であり配石とする積極的な要素がないため、廃棄されたものと考えられる。他は黄褐色土層である。以上から人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

〔小結〕時期の分かる出土土器がなく、詳細な時期は不明である。形状と堆積土から中期後半の可能性がある。

(齋藤)

第17号土坑 (略号: SK17 図25)

〔位置・確認〕VJ-31グリッドに位置し、第Ⅲ層掘り下げ中に確認した。確認面から底面までの深さは17cmである。

〔重複〕第18号土坑より新しい。

〔規模・形状〕1.01×0.62mの楕円形である。

〔壁・底面〕壁は直線的に立ち上がる。底面は概ね平坦である。

〔堆積土〕2層に区分した。人為堆積か自然堆積かは不明である。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

〔小結〕時期は不明である。中期遺構とくらべ小形であり、晩期土坑の可能性がある。

(齋藤)

第18号土坑 (略号: SK18 図26・37・38)

〔位置・確認〕VI・J-31グリッドに位置し、第Ⅲ層掘り下げ中に確認した。確認面から底面までの深さは163cmである。

〔重複〕第17号土坑より古い。

〔規模・形状〕2.82×2.48mの楕円形である。

〔壁・底面〕壁は上に向かって、やや直線的に立ち上がる。底面は概ね平坦である。

〔堆積土〕28層に区分した。特に3～6層にかけて土器や焼土、炭化物層があり、廃棄されたものと考えられる。人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕土器は7518.6g、剥片石器類は829.1gほど出土している。なお、礫石器、石製品の重量は含まれていない。

図37-1は椀林式の深鉢形土器である。覆土6層から出土した。4単位の波状口縁で、体部にはLR細文が横位に施文される。底部には、磨り消されて不明瞭であるものの、すだれ状の圧痕の痕跡が確認できる。図37-2～4・9～11は深鉢形土器の口縁部片である。いずれも口縁部外側が肥厚し、肥厚部には端部が渦巻く横位沈線が施されることから、椀林式に比定される。図37-9には円形の透かしを持つ二山状の台形突起が伴う。図37-6・9～11では体部文様が確認でき、いずれも椀林式に特徴的な2～3本一組の沈線で地紋調文に弧線文などの文様が施される。図37-5・7・8は口縁部外側の肥厚が弱い、もしくは認められない口縁部片である。詳細な時期は特定しがたいが中期後葉と思われる。ほかに晩期の壺形土器の口縁部片(図37-12)が出土している。

石器は石核(図38-2)が1点出土している。

[小結] 出土土器から、榎林式期の土坑と推定される。

(齋藤)

第20号土坑 (略号: SK20 図26・36)

[位置・確認] VK-31・32グリッドに位置し、第Ⅲ層掘り下げ中に確認した。確認面から底面までの深さは198cmである。

[重複] 第12号建物跡より古い。

[規模・形状] 3.28×2.91mの不整形である。

[壁・底面] 壁は直線的に立ち上がる。底面は概ね平坦である。中央部では土層断面図に見られるように底面から22cm上に60×32cmの扁平な礫が1点出土した(写真10上から2段目左側)。東側の底面直上には72×30cmの礫が1点あり、壁際にも94×78cmの礫が出土した。

[堆積土] 18層に区分した。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器は1453.1g、剥片石器類は5.5gほど出土している。なお、礫石器、石製品の重量は含まれていない。

図36-9は底部を欠いた深鉢形土器である。口縁形状は3単位の波状である。口縁部が外側に肥厚し、肥厚部に端部が渦巻く横沈線が施されることから榎林式に比定される。括れ部分には刺突列を伴う横沈線が巡り、胴部には地文縄文に2～3本一組の沈線文が施される。

[小結] 出土土器から、縄文時代中期後葉の土坑と推定される。

(齋藤)

第21号土坑 (略号: SK21 図27・39・40)

[位置・確認] VI-35グリッドに位置し、地山面にて確認した。確認面から底面までの深さは0.97mである。

[重複] なし。

[規模・形状] 1.84×1.59mの不整形形で、底径は0.79×0.71mである。

[壁・底面] 壁はゆるやかに立ち上がる。底面は概ね平坦である。

[堆積土] 5層に区分した。基本的に礫を多量に含む黒褐色層であり、間に黄褐色層が入り込む。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器は12,487.9g、剥片石器類は3,148.7gほど出土している。なお、礫石器、石製品の重量は含まれていない。

この土坑から、雲形文、工字文、入組文などを持つ鉢形土器など、縄文時代晩期の土器片や後期後葉の土器が出土している。図39-1は雲形文を持つ鉢形土器であり、口縁部に突起を持つ。大洞C2式に相当する。図39-2や3は、雲形文を持つ土器片であり、それぞれ補修孔を持つ。出土地点は、VI-34の第18層・第28層であり、土坑確認面から上層の出土であった。しかし、図39-2・3は、胎土共に図39-1と同一個体と考えられるので、土坑出土土器として扱った。

他に工字文や平行沈線を持つ晩期後半の土器片(図39-4～15)、口縁に3条沈線が巡る深鉢形土器(図39-16～18)、晩期中葉の土器片(図39-19)、後期後葉～晩期初頭の土器片(図39-20～26)、晩期

前半の土器片(図39-31)、晩期の土器(図39-27~30)が出土している。図39-32は縄文時代中期最花式の土器片と思われる。

図39-4の工字文を持つ土器片は土坑の中層、図39-9から11や13は土坑の下層から出土しているなど、この地区で確認できた他の土坑と比較して新しい段階の土器片を多く含んでいる。

石器は、有茎鏃(図40-1~4)、削器(図40-5)、石核(図40-7・8)、剥片(図40-6)、凹石(図40-9)、石皿(図40-10)などが出土している。図40-6は大形の剥片であり、こうした大形剥片は盛土遺構地区においても数点散見できる。図40-10の石皿は砂岩製の大型礫を素材とし、扁平な面に平滑な磨り面が形成されている。土坑の下層から出土している。

[小結]この土坑の掘り込み面であるが、この土坑の上部は第1号盛土遺構の第7・9・15・18層といった遺物を大量に含む包含層であった(図27の下図)。しかしこの土坑上面にあたる地点では遺物が極端に少ない層(第1号盛土遺構第31層と認識)であった。また近隣の堆積層から図39-2や3といった土坑出土遺物と同一個体が出土している他に、晩期後半の遺物が出土している。第21号土坑の覆土に大量の礫が含まれているが、他の晩期土坑は配石遺構下部の土坑上面を除き、覆土に礫を多量に含むことはない。そして、第1号盛土遺構の上部包含層は礫層が主体であるといった特徴がある。

これらの点を考慮すると、この土坑は第1号盛土遺構の上面から掘り込み、人為的に埋め戻した際に、図39-1、2や3といった第7・9・15・18層などの遺物や礫を巻きこんだと考えられる。そのため、本来の土坑の掘り込み面は少なくとも、第31層もしくはその上面と考えられる(図76)。

以上から推定される掘り込み面と出土土器から、晩期後半の土坑と推定される。

(高橋)

第22号土坑(略号:SK22 図28・38)

[位置・確認] VI・J-35・36グリッドに位置し、地山面にて確認した。北捨て場の始まる平場先端、斜面の落ち際に位置する。確認面から底面までの深さは0.53mである。

[重複]第67号埋設土器遺構よりも古い。

[規模・形状] 1.55×1.44mの不整形円形で、底径は1.18×1.16mである。

[壁・底面] 壁はゆるやかに立ち上がる。底面は概ね平坦である。

[堆積土] 4層に区分した。暗褐色のシルト層が主体である。

[出土遺物] 土器は3,887.3g、剥片石器類は562.6gほど出土している。なお、礫石器、石製品の重量は含まれていない。

覆土上面から、2個体の注口形土器の口縁部(図38-3・4)が隣接して出土した。三叉文を基調とした文様であり、器面をミガキ整形している。他に深鉢形土器の口縁部片(図38-5)、後期後葉~晩期前葉の土器片(図38-6~8)、高台を持つ底部(図38-9)などが出土している。

石器は、有茎鏃(図38-10・11)、石篋(図38-12)、石核(図38-14)が出土している。図38-13は縦長剥片の両側辺の中央部を剥離で抉りをいれている。形態的には糸巻き形の異形石器に類似している。

図38-15は土玉である。

[小結]出土土器から、晩期前葉の土坑と推定される。

(高橋)

第23号土坑 (略号: SK23 図28・41)

[位置・確認] VI・J-32グリッドに位置し、第III層掘り下げ中に確認した。確認面から底面までの深さは北壁で153cmである。

[重複] 第46号配石遺構よりも古い。

[規模・形状] 3.45×3.37mの不整形形である。

[壁・底面] 壁は一部オーバーハングしながら上に開く形である。底面は概ね平坦である。

[堆積土] 重複する柱穴の堆積土を除き、21層に区分した。

[出土遺物] 土器は821.6g、剥片石器類は450.8gほど出土している。なお、礫石器、石製品の重量は含まれていない。

堆積土上部に扁平な礫があり、その下から土器(写真11上から2段目右側)が出土した。胴部片で時期は不明である。図41-1は横位沈線間に刻目列を伴う胴部片である。文様の特徴から後期7-4期に比定される。確認面からは水晶が1点、削器(図41-2)が出土している。

[小結] 検出状況や規格などから、中期後半の土坑と推定される。

(齋藤)

第24号土坑 (略号: SK24 図29・41)

[位置・確認] VJ・K-33グリッドに位置している。第1号盛土遺構下部の地山面で黒色土の落ち込みとして確認した。確認面から底面までの深さは1.47mである。

[重複] 第61号埋設土器遺構よりも古い。第29号土坑とわずかに重複するが、新旧関係は不明である。

[規模・形状] 3.43×3.25mの楕円形で、底径が、2.28×1.86mである。

[壁・底面] 底面付近は壁が垂直に近い状態で立ち上がるが、中段から段を形成し、開口部が緩やかに外反しながら立ち上がる。底面はおおむね平らである。

[堆積土] 8枚の覆土を確認し、土坑上面には黒色土が堆積していた。土坑覆土の中層から下層にかけては地山起源の褐色・黄褐色土によって構成されている。

[出土遺物] 土器は585.1g、剥片石器類は154.4gほど出土している。なお、礫石器、石製品の重量は含まれていない。

土器は土器片が覆土上層から多く出土している。覆土上層で、赤彩された土製玉(図41-4)が出土している。沈線によって螺旋状の文様を表現している。この土玉は調査区南側(報告書Ⅱの範囲)でも数点出土しているので、晩期のもと考えられる。図41-3は有茎織である。

[小結] 出土遺物の大半は、覆土上層の黒色土からの出土であるので晩期に帰属する。中期の土器片などは確認されていないが、規格などから、中期の大形土坑と思われる。

(高橋)

第25号土坑 (略号: SK23 図29)

[位置・確認] VJ・K-30・31グリッドに位置し、第11号建物跡の貼床を除去して確認した。上部は第

11号建物跡によって削られている。

[重複] 第11号建物跡より古い。

[規模・形状] 2.16×1.98mの円形である。

[壁・底面] 壁は直線的に立ち上がり、底面は概ね平坦である。

[堆積土] 4層に区分した。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 遺物は出土していない。

[小結] 中期末葉の第11号建物跡の構築時に埋められたと考えられ、第11号建物跡より古いと考えられる。

(齋藤)

第26号土坑 (略号: SK26 図30)

[位置・確認] VJ-32グリッドに位置し、第Ⅲ層掘り下げ中に確認した。確認面から底面までの深さは南壁で90cmである。

[重複] なし。

[規模・形状] 2.35×1.86mの不整楕円形である。

[壁・底面] 壁は一部オーバーハングして立ち上がる。底面は概ね平坦である。

[堆積土] 7層に区分した。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器は121.6g、剥片石器類は49.1gほど出土している。なお、礫石器、石製品の重量は含まれていない。

時期の分かる遺物は出土していない。

[小結] 土坑の規格などから、中期後半の土坑と推定される。

(齋藤)

第27号土坑 (略号: SK27 図30)

[位置・確認] VK-32グリッドに位置し、第12号建物跡の床面で確認した。確認面から底面までの深さは東南で131cmである。

[重複] 第12号建物跡より古い。

[規模・形状] 4.06×2.88mの不整楕円形である。直径2.2m程度の円形のフラスコ状土坑の北西・南東側に張り出しを持つ形態である。

[壁・底面] 壁は下半部では、オーバーハングしながら立ち上がり、上半部でやや緩やかに立ち上がる。底面は自然土層の変換点の堅緻な砂質土を底面としているため、平坦である。

[堆積土] 15層に区分した。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器は7.1g出土している。時期の分かる遺物は出土していない。

[小結] 第12号建物跡とほぼ重なる配置であり、同建物跡の構築に伴って壁面の上部が削られ埋められた可能性がある。

(齋藤)

第28号土坑 (略号: SK28 図31・41)

[位置・確認] VI・J-34グリッドに位置し、第1号盛土遺構下部の地山面で黒色土の落ち込みとして確認した。確認面から底面までの深さは1.77mである。

[重複] 第62・65・68号土器埋設遺構に切られている。

[規模・形状] 2.98×2.54mの楕円形で、底径が1.93×1.70mである。

[壁・底面] 壁はゆるやかに立ち上がり、開口部が緩やかに外反しながら立ち上がる。底面は概ね平坦である。

[堆積土] 16層に区分した。土坑上面には黒褐色土が堆積し、中層から下層にかけては、黄褐色や褐色の覆土が堆積している。

[伴出遺物] 土器は1,990.3g、剥片石器類は752.4gほど出土している。なお、礫石器、石製品の重量は含まれていない。

覆土上層を中心に、縄文時代中期後葉の土器片(図41-5)、後期末から晩期前半の土器片(図41-6~10)や凹石(図41-11)が出土している。中層より下は、遺物はほとんど出土しなかった。なお土坑並びに周辺から遮光器土偶(図92・93)の眼部・左胸などが分散して出土している。

[小結] 出土遺物は縄文時代晩期のものがほとんどであるが、これらは土坑の上層の黒色土から出土している。この土坑が完全に埋まりきる前に、土坑上面に晩期の黒色土が入り込んだと思われ、この土坑の構築時期はさらに古いと想定される。そのため、土坑の規格などから中期の大形土坑と思われる。

(高橋)

第29号土坑 (略号: SK29 図32・41)

[位置・確認] VJ・K-32・33グリッドに位置し、第Ⅲ層掘り下げ中に確認した。確認面から底面までの深さは89cmである。底面は概ね平坦である。

[重複] 第15号土坑より古い。第24号土坑とわずかに重複するが、新旧関係は不明である。

[規模・形状] 3.17×2.47mの不整楕円形である。

[壁・底面] 壁は上に開く形である。底面は概ね平坦である。

[堆積土] 8層に区分した。土層の中位の5層に黒褐色土層があり、長径20cm程度の礫が出土した。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器は350.4g、剥片石器類は125.3gほど出土している。なお、礫石器、石製品の重量は含まれていない。

図41-12は深鉢形土器の口縁部片で、口縁部が外側に肥厚する。肥厚部には横位沈線が施され、胴部には2条の横位沈線が確認できる。図41-13は深鉢形土器の胴部片で、横位の沈線3条と弧線状の沈線が確認できる。どちらも文様の特徴から榎林式に比定される。

[小結] 出土土器から、縄文時代中期後葉の土坑と推定される。

(齋藤)

第30号土坑 (略号: SK30 図32)

[位置・確認] VL・M-28・29グリッドに位置し、第Ⅲ層掘り下げ中に確認した。確認面から底面までの深さは66cmである。

[重複] なし。

[規模・形状] 南西部分は風倒木による攪乱のため欠失している。短軸は2.81cmである。

[壁・底面] 壁はやや緩やかに立ち上がる。底面には若干の凹凸がある。

[堆積土] 2層に区分した。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 時期の明瞭な出土遺物はない。

[小結] 時期不明であるが土坑の規模及び堆積土は周辺の中期後半の土抗と共通しており、その時期に帰属する可能性がある。

(齋藤)

第34号土坑 (略号: SK34 図18・41)

[位置・確認] VG-34グリッドに位置する。第Ⅲ層を掘り下げ中に、確認した。確認面から底面までの深さは東端で32cmである。

[重複] 第13号建物跡より古い。

[規模・形状] 楕円形であるが東側を第13号建物跡との重複により欠失している。短軸は1.06mである。

[壁・底面] 壁は緩やかに立ち上がる。底面の平坦である。

[堆積土] 2層に区分した。

[出土遺物] 土器は76.8g、剥片石器類は158.9gほど出土している。なお、礫石器、石製品の重量は含まれていない。

素材剥片のほぼ全周縁を加工した石器(図41-14)が出土した。

[小結] 縄文時代中期中葉の第13号建物跡より古いこと及び、出土土器から、縄文時代中期中葉以前の土抗と考えられる。

(齋藤)

第36号土坑 (略号: SK36 図33・41)

[位置・確認] VH-32グリッドに位置する。地山面にて確認した。確認面から底面までの深さは0.58mである。

[重複] なし。

[規模・形状] 1.39×1.10mの楕円形で、底径0.35×0.25mである。

[壁・底面] 壁はやや急に立ち上がる。底面の径は小さい。

[堆積土] 5層に区分した。

[出土遺物] 土器は292.3g、剥片石器類は56.3gほど出土している。なお、礫石器、石製品の重量は含まれていない。

細い沈線によるC字文を主体とする壺形土器の胴部片(図41-15)が出土した。同一個体の底部は

第1号盛土遺構の第24層からも出土している。

[小結]出土土器から、縄文時代晩期中葉以前の土抗と考えられる。

(高橋)

第37号土坑(略号:SK37 図33・41)

[位置・確認] VH・I-32グリッドに位置する。地山面にて確認した。確認面から底面までの深さは0.57mである。

[重複]なし。

[規模・形状] 1.29×0.99mの楕円形で、底径1.07×0.6mである。

[壁・底面] 壁はやや急に立ち上がる。底面は概ね平坦である。

[堆積土] 6層に区分した。暗褐色、褐色土の覆土である。

[出土遺物] 土器は223.6g、剥片石器類は105.5gほど出土している。なお、礫石器、石製品の重量は含まれていない。

土器片が出土している。体部片であり、羊歯状文が見られる(図41-16)。

[小結]出土土器から、縄文時代晩期前半の土抗と考えられる。

(高橋)

第38号土坑(略号:SK38 図34)

[位置・確認] VI-32グリッドに位置し、第Ⅲ層掘り下げ中に確認した。確認面から底面までの深さは30cmである。底面は概ね平坦である。

[重複]なし。

[規模・形状] 0.77×0.64mの楕円形である。

[壁・底面] 壁はやや緩やかに立ち上がる。底面は概ね平坦である。

[堆積土] 2層に区分した。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 確認面から長径37cmの礫が1点出土した(写真14下から2段目左側)。

[小結] 形状などから晩期前半の土坑と考えられる。

(齋藤)

第39号土坑(略号:SK39 図34・42)

[位置・確認] VI-31・32グリッドに位置し、第Ⅲ層掘り下げ中に確認した。確認面から底面までの深さは94cmである。底面は概ね平坦である。

[重複]なし。

[規模・形状] 直径2.35mの不整形である。

[壁・底面] 壁は直線的に立ち上がる。底面は概ね平坦である。

[堆積土] 8層に区分した。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器は531.7g、剥片石器類は1,433.7gほど出土している。なお、礫石器、石製品の重量は含まれていない。

縄文時代晩期の壺形土器口縁部(図42-1)が出土した。図42-2・4は珪質頁岩の石核である。図42-3は扁平な珪質頁岩の原石である。図面の右上に剥離痕跡が残されている。

[小結]土坑の規格から縄文時代中期後半の土坑と推定される。

(齋藤)

第40号土坑(略号:SK40 図34)

[位置・確認]V1-33グリッドに位置し、地山面で確認した。確認面から底面までの深さは0.42mである。

[重複]なし。

[規模・形状]開口部で0.47×0.41mの円形である。

[壁・底面]壁は緩やかに立ち上がるすり鉢状であり、底面は径が小さい。

[堆積土]3層に区分した。人為堆積と考えられる。

[出土遺物]土器は161.1g出土している。土坑北壁沿いに台付鉢形土器(P-1)が出土した(遺物整理作業中紛失)。出土状況から半分は残存している。現場での所見では、波状口縁を持ち、口縁部に平行沈線が巡り、口縁部は軽く外反する。内面側に口縁に沿って平行沈線が1条巡る。晩期中葉ごろの土器と推定される。

[小結]出土土器から、晩期中葉と推定される。

(高橋)

第42号土坑(略号:SK42 図34)

[位置・確認]VJ-32グリッドに位置し、第IV層上部で確認した。確認面から底面までの深さは北壁で86cmである。

[重複]なし。

[規模・形状]開口部で1.09×0.91mの不整楕円形である。

[壁・底面]壁はオーバーハングして立ち上がる。底面には概ね平坦であるが、地山からの礫が残る。

[堆積土]6層に区分した。人為堆積と考えられる。

[出土遺物]時期が明確な遺物は出土していない。

[小結]遺構確認面や、規格などから、縄文時代中期のフラスコ状土坑と推定される。

(齋藤)

第44号土坑(略号:SK44 図35・43)

[位置・確認]VG-32グリッドに位置し、第III層掘り下げ中に確認した。確認面から底面までの深さは30cmである。

[重複]なし。

[規模・形状]1.10×0.90mの楕円形である。

[壁・底面]壁は緩やかに立ち上がる。底面は概ね平坦である。

[堆積土]2層に区分した。人為堆積か自然堆積かは判然としない。

[出土遺物] 土器は816.9g、剥片石器類は29.4gほど出土している。なお、礫石器、石製品の重量は含まれていない。

図43-1は口縁部に羊歯状文をもつ鉢形土器の口縁から胴部である。内外面に炭化物が厚く付着している。口縁部にはB突起が連続して展開している。他に鉢形土器の胴部片、後期後葉の土器片(図43-2~4)などが出土している。図43-5は凹石である。

[小結] 出土土器から、縄文時代晩期前半の土坑と推定される。

(齋藤)

第45号土坑(略号:SK45 図35・43)

[位置・確認] VK-33・34グリッドに位置し、第IV層上面で確認した。確認面から底面までの深さは1.51mである。

[重複] なし。

[規模・形状] 3.44×2.61mの不整楕円形である。

[壁・底面] 壁は直線的に立ち上がる。底面は平坦である。

[堆積土] 9層に区分した。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器は375.1g、剥片石器類は1,738.1gほど出土している。なお、礫石器、石製品の重量は含まれていない。

図43-6は深鉢形土器の口縁から胴部片で、口縁形状は波状である。波頂部は二山状になっており、粘土紐が貼り付けられる。胴部にはLR縄文が横位に施文される。文様の特徴から円筒上層e式と考えられる。石器は微細剥片(図43-9)、削器(図43-10・11)、石核(図43-12)が出土している。図43-7・8は石製円盤であり、図43-7は擦痕をもつ石製円盤である。

[小結] 出土土器から、縄文時代中期の土坑と推定される。

(齋藤)

第47号土坑(略号:SK47 図53)

[位置・確認] VH-34グリッドに位置する。確認面から底面までの深さは0.22mである。

[重複] 第45号配石遺構より古い。

[規模・形状] 0.65×0.51mの不整楕円形である。

[壁・底面] 壁は直線的に立ち上がる。底面は平坦である。

[堆積土] 人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 底面に緑色凝灰岩の礫がまとまって出土している。

[小結] 確認地点と規格などから、晩期前半の土坑と推定される。

(高橋)

第55号土坑(略号:SK55 図35)

[位置・確認] VH-32グリッドに位置し、地山面で確認した。確認面から底面までの深さは0.39mである。

[重複]なし。

[規模・形状] 1.03×0.71mの不整楕円形である。

[壁・底面] 壁は直線的に立ち上がる。底面は平坦である。

[堆積土] 4層に区分した。人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 土器は44.6g、剥片石器類は55.8gほど出土している。なお、礫石器、石製品の重量は含まれていない。時期の明瞭な遺物はない。

[小結] 時期は不明であるが、検出位置から縄文時代晩期前半と推定される。

(高橋)

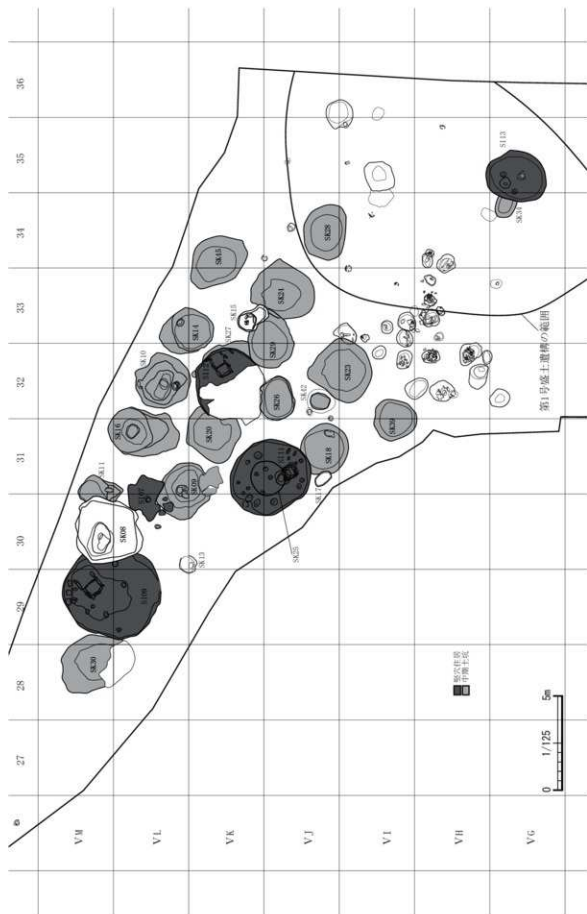


図6 中期遺構の分布

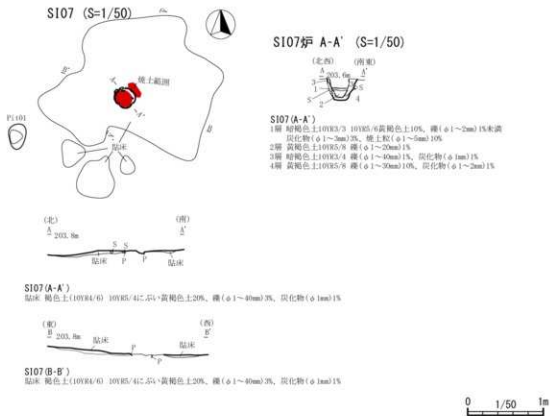


図7 第7号建物跡

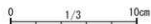


図8 第7号建物跡出土遺物

S109 貼床と炉 微細図 (S=1/50)

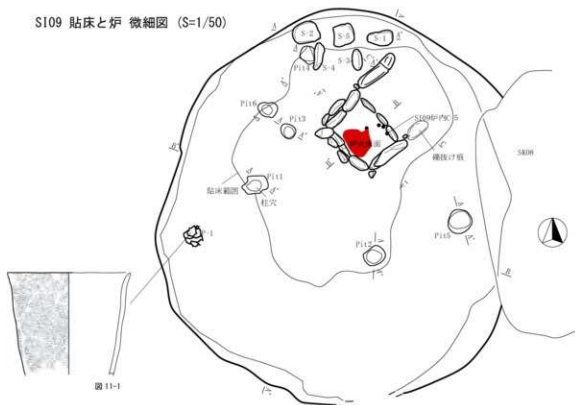
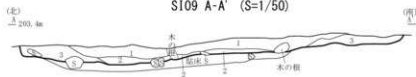


図 11-1

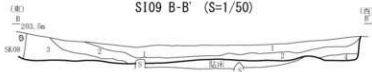
S109 A-A' (S=1/50)



S109 (A-A')

- | | |
|--------------------|------------------------------|
| 1層 黒褐色土(10YR2/2) | 礫(φ2~20mm)1%, 炭化物(φ1~3mm)1% |
| 2層 暗褐色土(10YR3/4) | 礫(φ2~300mm)3%, 炭化物(φ1~2mm)1% |
| 3層 土と赤褐色土(10YR5/4) | 礫(φ1~200mm)3%, 炭化物(φ1~2mm)1% |
| 貼床 黄褐色土(10YR5/6) | 礫(φ10~50mm)1% |

S109 B-B' (S=1/50)



S109 (B-B')

- | | |
|--------------------|------------------------------|
| 1層 黒褐色土(10YR2/2) | 礫(φ2~20mm)1%, 炭化物(φ1~3mm)1% |
| 2層 暗褐色土(10YR3/4) | 礫(φ2~300mm)3%, 炭化物(φ1~2mm)1% |
| 3層 土と赤褐色土(10YR5/4) | 礫(φ3~300mm)3%, 炭化物(φ1~2mm)1% |
| 4層 褐色土(10YR4/6) | 礫(φ1~20mm)2%, 炭化物(φ1~5mm)1% |

Pit01 A-A' (S=1/50)



S109 Pit1 (A-A')

- | | |
|------------------|-----------------------------|
| 1層 暗褐色土(10YR3/4) | 礫(φ1~20mm)5%, 炭化物(φ1~5mm)2% |
| 2層 褐色土(10YR4/6) | 礫(φ1~5mm)3%, 炭化物(φ1~2mm)1% |
| 3層 黄褐色土(10YR5/6) | 礫(φ1~5mm)2%, 炭化物(φ1mm)1%以下 |

Pit02 A-A' (S=1/50)



S109 Pit2 (A-A')

- | | |
|------------------|-----------------------------|
| 1層 黒褐色土(10YR2/2) | 礫(φ1~30mm)5%, 炭化物(φ1mm)1%以下 |
| 2層 黄褐色土(10YR5/6) | 礫(φ2~20mm)3% |



図9 第9号建物跡(1)

Pit03 A-A' (S=1/50)



S109 Pit3(A-A')

- 1層 埋褐色土(10YR3/4) 礫(φ1~5mm)2%
- 2層 褐色土(10YR4/6) 礫(φ1~10mm)2%, 炭化物(φ1mm)13.1%
- 3層 黄褐色土(10YR5/6) 礫(φ1~30mm)5%, 炭化物(φ1mm)13.1%

Pit04 A-A' (S=1/50)



S109 Pit4(A-A')

- 1層 黄褐色土(10YR5/6) 7.5YR4/6褐色土5%, 10YR3/4埋褐色土20%, 礫(φ1~3mm)1%, 炭化物(φ1~3mm)1%
- 2層 埋褐色土(10YR3/4) 礫(φ1~3mm)1%
- 3層 黄褐色土(10YR5/6) 10YR4/6褐色土10%, 礫(φ1~25mm), 炭化物(φ1~10mm)1%

Pit05 A-A' (S=1/50)



S109 Pit5(A-A')

- 1層 黄褐色土(10YR5/6) 礫(φ2~40mm)2%, 炭化物(φ1mm)1%
- 2層 褐色土(10YR4/6) 礫(φ1~30mm)5%, 炭化物(φ1~5mm)1%

Pit06 A-A' (S=1/50)



S109 Pit6(A-A')

- 1層 褐色土(10YR4/6) 炭化物(φ1mm)1%
- 2層 埋褐色土(10YR3/4) 礫(φ10~30mm)2%, 炭化物(φ1~2mm)1%
- 3層 黄褐色土(10YR5/6) 礫(φ10~30mm)1%

入口付近配石 A-A' (S=1/50)



炉 C-C' (S=1/50)



炉 A-A' (S=1/50)



S109 炉(C-C')

- 1層 黄褐色土(10YR5/6) 礫(φ1~140mm)5%, 炭化物(φ1~3mm)1%
- 2層 褐色土(10YR4/6) 礫(φ1~40mm), 炭化物(φ1~5mm)1%

S109 炉(A-A')

- 1層 褐色土(10YR4/6) 10YR4/3C, 5Y, 黄褐色土30, 10YR5/6黄褐色土5%, 礫(φ1~30mm)3%, 炭化物(φ1~2mm)1%
- 2層 黄褐色土(10YR5/6) 礫(φ1~60mm)10%, 炭化物(φ1~2mm)1%
- 3層 褐色土(7.5YR4/6) 10YR4/6褐色土20%, 礫(φ1~50mm)10%, 炭化物(φ1mm)1%
- 4層 黄褐色土(10YR5/6) 礫(φ1~100mm)20%, 炭化物(φ1mm)1%
- 5層 褐色土(10YR4/6) 礫(φ3~5mm)2%, 炭化物(φ1~3mm)1%

炉 B-B' (S=1/50)



S109 炉(B-B')

- 1層 褐色土(10YR4/6) 10YR5/6黄褐色土30%, 礫(φ1~60mm)10%, 炭化物(φ1mm)1%
- 2層 褐色土(7.5YR4/6) 礫(φ2~50mm)7%
- 3層 黄褐色土(10YR5/6) 礫(φ1~40mm)10%
- 4層 褐色土(10YR4/6) 礫(φ3~5mm)2%, 炭化物(φ1~3mm)1%



図10 第9号建物跡(2)

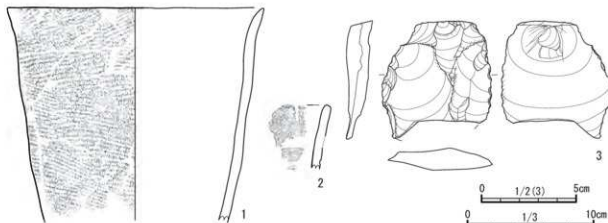


図11 第9号建物跡出土遺物

S111 (S=1/50)

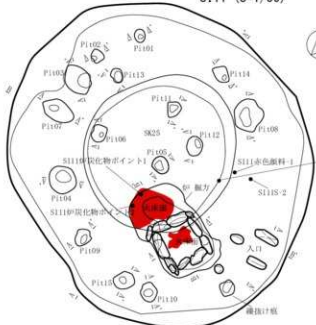


図 14-1

図 14-2



図 14-6

S111 炉 (S=1/50)



- SK25 (A-A')
- 1層 黄褐色土(10YR5/6) 礫(φ1~30mm)1%, 炭化物(φ1mm)1%
 - 2層 明黄褐色土(10YR3/6) 礫(φ1~60mm)1%, 炭化物(φ1~20mm)1%
 - 3層 黄褐色土(10YR5/6) 10YR6/8明黄褐色土20%
 - 4層 黄褐色土(10YR5/6) 10YR4/6褐色土20%, 礫(φ1~50mm)3%, 炭化物(φ1~2mm)1%
 - 5層 黄褐色土(10YR5/6) 10YR4/6褐色土20%, 礫(φ1~150mm)13% 炭化物(φ1mm)1%未満

炉 A-A' (S=1/50)



- S111 炉 (A-A')
- 1層 褐色土(10YR4/6) 礫(1~10mm)1%
 - 2層 黄褐色土(10YR5/6) 礫(1~3mm)1%

炉 B-B' (S=1/50)



- S111 炉 (B-B')
- 1層 暗褐色土(10YR3/4) 礫(φ1~10mm)2%, 炭化物(φ1~2mm)1%
 - 2層 赤褐色土(10YR4/8) 礫(φ1~35mm)2%, 炭化物(φ1~5mm)2%
 - 3層 褐色土(10YR4/6) 礫(φ1~20mm)1%
 - 4層 褐色土(10YR4/6) 礫(φ1~3mm)1%, 炭化物(φ1mm)1%以下
 - 5層 黄褐色土(10YR5/6) 礫(φ1~5mm)2%, 炭化物(φ1~3mm)1%

入口 A-A' (S=1/50)

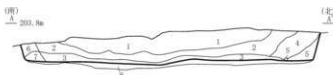


- S111 入口石(A-A')
- 1層 黄褐色土(10YR5/6) 礫(φ1~5mm)1%, 炭化物(φ1mm)1%以下
 - 2層 褐色土(10YR4/6) 礫(φ1~20mm)2%, 炭化物(φ5mm)1%以下

Pit03 A-A' (S=1/50)



- S111 Pit03(A-A')
- 1層 黄褐色土(10YR5/6) 礫(φ1~20mm)3%, 炭化物(φ1~5mm)2%
 - 2層 褐色土(10YR4/6) 礫(φ1~10mm)3%, 炭化物(φ1~50mm)2%



- S111 (A-A')
- 1層 暗褐色土(10YR3/4) 10YR2/3暗褐色土20%, 礫(φ5~60mm)5%, 炭化物(φ1~3mm)3%
 - 2層 褐色土(10YR4/4) 10YR3/3暗褐色土10%, 礫(φ100mm)2%, 炭化物(φ1~15mm)5%
 - 3層 褐色土(10YR4/6) 礫(φ1~60mm)3%, 炭化物(φ1~10mm)2%
 - 4層 暗褐色土(10YR3/4) 10YR5/6黄褐色土10%, 礫(φ1~45mm)1%, 炭化物(φ1~15mm)5%
 - 5層 明黄褐色土(10YR6/6) 礫(φ1~15mm)2%, 炭化物(φ1~5mm)1%
 - 6層 暗褐色土(10YR3/4) 礫(φ1~20mm)1%, 炭化物(φ1~5mm)1%以下
 - 7層 黄褐色土(10YR5/6) 礫(φ1~15mm)1%, 炭化物(φ1~3mm)1%以下
 - 8層 黄褐色土(10YR5/6) 10YR3/4暗褐色土20%, 礫(φ1~20mm)5%, 炭化物(φ1~5mm)3%



- S111 (B-B')
- 1層 暗褐色土(10YR3/4) 10YR2/3暗褐色土20%, 礫(φ5~60mm)5%, 炭化物(φ1~3mm)3%
 - 2層 褐色土(10YR4/4) 10YR3/3暗褐色土10%, 礫(φ100mm)2%, 炭化物(φ1~15mm)5%
 - 3層 褐色土(10YR4/6) 礫(φ1~50mm)3%, 炭化物(φ1~10mm)2%
 - 4層 黄褐色土(10YR5/6) 10YR3/4暗褐色土20%, 礫(φ1~20mm)5%, 炭化物(φ1~5mm)3%

Pit01 A-A' (S=1/50)



- S111 Pit01(A-A')
- 1層 黄褐色土(10YR5/6) 礫(φ1~3mm)2%, 炭化物(φ1mm)1%以下

Pit02 A-A' (S=1/50)



- S111 Pit02(A-A')
- 1層 褐色土(10YR4/6) 礫(φ1~50mm)1%, 炭化物(φ2mm)1%以下
 - 2層 黄褐色土(10YR5/6) 礫(φ1~10mm)1%, 炭化物(φ1mm)1%以下

図12 第11号建物跡(1)

Pit04 A-A' (S=1/50)



S11 Pit04(A-A')

- 1層 黄褐色土(10YR5/6) 7.5YR5/8明褐色土5%
 礫(φ1~20mm)1%, 炭化物(φ1~20mm)2%
 瓶口方 黄褐色土(10YR5/6) 礫(φ1~60mm)3%, 炭化物(φ1~10mm)1%

Pit06 A-A' (S=1/50)



S11 Pit06(A-A')

- 1層 褐色土(10YR4/4) 礫(φ1~20mm)3%, 炭化物(φ1~20mm)1%
 2層 黄褐色土(10YR5/6) 礫(φ1~30mm)1%, 炭化物(φ1mm)1%

Pit08 A-A' (S=1/50)



S11 Pit08(A-A')

- 1層 黄褐色土(10YR5/6) 礫(φ1~100mm)5%, 炭化物(φ1~40mm)1%
 2層 明黄褐色土(10YR6/8) 礫(φ1~20mm)1%, 炭化物(φ5~20mm)1%

Pit10 A-A' (S=1/50)



S11 Pit10(A-A')

- 1層 暗褐色土(10YR3/4) 10YR5/8黄褐色土20%, 礫(1~40mm)2%
 炭化物(φ1~5mm)2%

Pit12 A-A' (S=1/50)



S11 Pit12(A-A')

- 1層 暗褐色土(10YR3/4) 礫(φ1~5mm)2%, 炭化物(φ1~10mm)1%
 2層 红-赤黄褐色土(10YR5/4) 礫(φ1~60mm)1%, 炭化物(φ1mm)1%
 3層 黄褐色土(10YR5/6) 7.5YR5/8明褐色土5%, 礫(φ1~70mm)3%
 炭化物(φ1mm)1%

Pit14 A-A' (S=1/50)



S11 Pit14(A-A')

- 1層 黄褐色土(10YR5/6) 礫(φ1~50mm)5%, 炭化物(φ1~10mm)1%
 2層 黄褐色土(10YR5/6) 礫(φ1~30mm)3%, 炭化物(φ1~15mm)1%
 3層 黄褐色土(10YR5/6) 礫(φ1~30mm)5%, 炭化物(φ1~20mm)1%

Pit05 A-A' (S=1/50)



S11 Pit05(A-A')

- 1層 黄褐色土(10YR4/4) 礫(φ1~15mm)1%, 炭化物(φ1~20mm)1%
 2層 褐色土(10YR4/4) 礫(φ1~30mm)3%, 炭化物(φ1mm)1%

Pit07 A-A' (S=1/50)



S11 Pit07(A-A')

- 1層 褐色土(10YR4/6) 礫(φ1~20mm)5%, 炭化物(φ1~30mm)1%
 2層 黄褐色土(10YR5/6) 10YR3/4暗褐色土全5%, 礫(φ1~50mm)3%
 炭化物(φ1~10mm)1%

Pit09 A-A' (S=1/50)



S11 Pit09(A-A')

- 1層 褐色土(10YR4/6) 10YR4/8褐色土10%, 礫(φ1~100mm)7%
 炭化物(φ1~20mm)3%
 2層 黄褐色土(10YR5/6) 礫(φ1~20mm)1%, 炭化物(φ1mm)1%
 3層 黄褐色土(10YR5/6) 10YR4/8褐色土全20%, 礫(φ1~50mm)1%
 炭化物(φ1~20mm)1%

Pit11 A-A' (S=1/50)



S11 Pit11(A-A')

- 1層 褐色土(10YR4/6) 10YR6/8明黄褐色土5%, 礫(φ1~40mm)5%
 炭化物(φ1mm)1%

Pit13 A-A' (S=1/50)



S11 Pit13(A-A')

- 1層 褐色土(10YR4/6) 10YR5/8黄褐色土10%, 7.5YR5/8明褐色土5%
 礫(φ1~70mm)3%, 炭化物(φ1~10mm)2%

Pit15 A-A' (S=1/50)



S11 Pit15(A-A')

- 1層 黄褐色土(10YR5/6) 礫(φ1~15mm)2%, 炭化物(φ1~15mm)2%
 2層 褐色土(10YR4/4) 礫(φ1~50mm)1%, 炭化物(φ1~20mm)2%



図13 第11号建物跡(2)

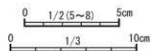
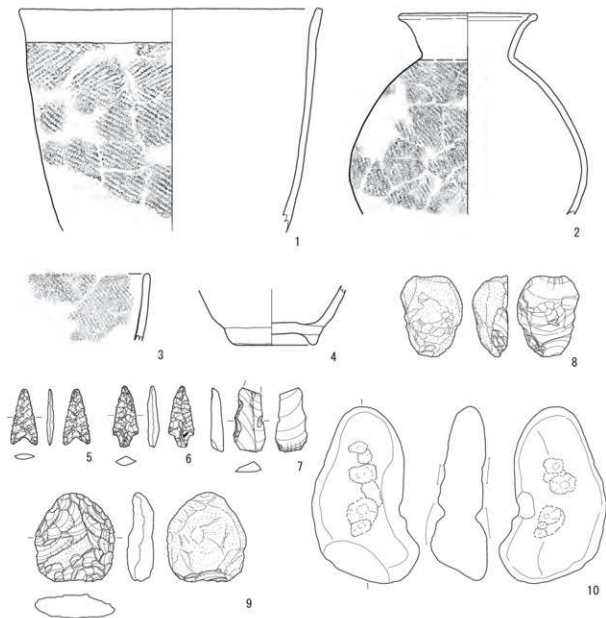


図14 第11号建物跡出土遺物(1)

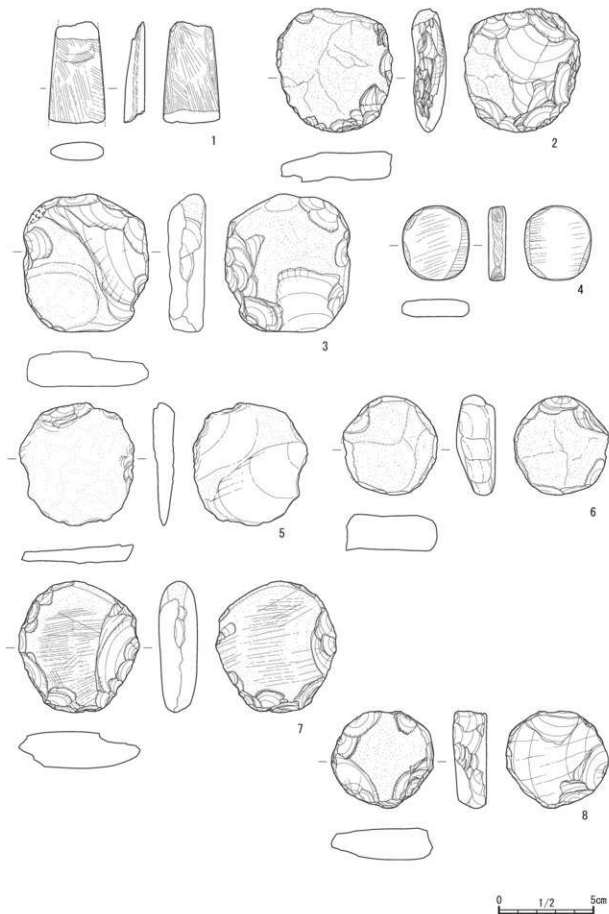
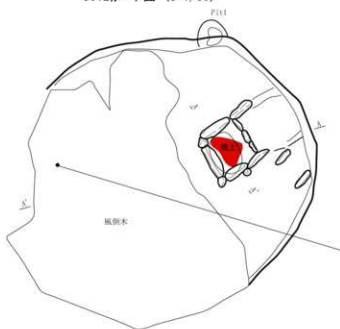


图15 第11号建物跡出土遺物(2)

SI12炉 平面 (S=1/50)



SI12 炉 A-A' (S=1/20)



SI12炉(A-A')

- 1層 赤褐色土(10YR3/4) 礫(φ1~20mm)1%, 炭化物(φ1~3mm)1%, 焼土
- 2層 褐色土(10YR4/4) 礫(φ1~60mm)2%, 炭化物(φ1~10mm)1%
- 3層 褐色土(10YR4/6) 礫(φ1~30mm)5%

(北東)
A
204.0m



(南西)
A'

SI12(A-A')

- 1層 褐色土(10YR4/6) 10YR5/6黄褐色土10%, 10YR3/4暗褐色土5%, 礫(φ1~10mm)1%
- 2層 赤褐色土(10YR3/3) 10YR3/4暗褐色土40%, 礫(φ1~30mm)2%, 炭化物(φ1~5mm)1%
- 3層 褐色土(10YR4/6) 10YR4/4褐色土30%礫(φ5~60mm)1%, (φ1~3mm)1%未満
- 4層 土の色違い、若干風割木の影を受け
- 5層 褐色土(10YR4/4) 10YR5/4紅褐色土20%, 礫(φ1~40mm)2%, 炭化物(φ1~20mm)2%
- 6層 暗褐色土(10YR3/4) 礫(φ1~20mm)2%, 炭化物(φ1~10mm)1%



図16 第12号建物跡

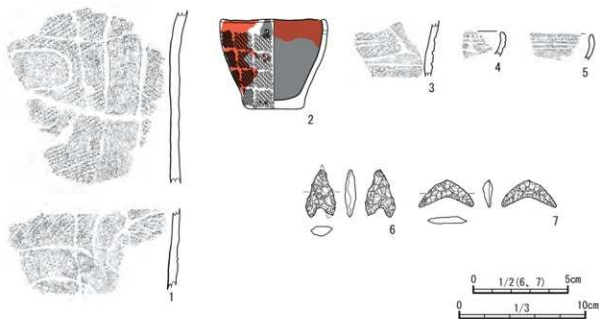
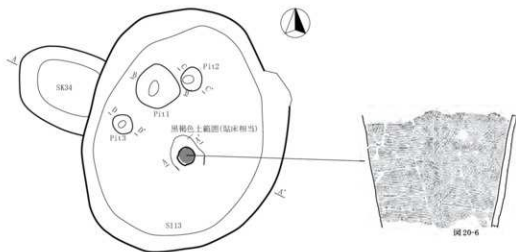


図17 第12号建物跡出土遺物

S113 (S=1/50) 検出状況



S113・SK34 A-A' (S=1/50)



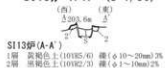
S113・SK34(A-A') (S113)

- 1層 暗褐色土(101K3/4) 101K4/4褐色土2%, 礫(φ10~350mm)10%, 炭化物(φ1~10mm)2%
- 2層 暗褐色土(101K3/3) 101K3/4暗褐色土20%, 礫(φ10~80mm)5%, 炭化物(φ1~10mm)2%
- 3層 褐色土(101K4/6) 炭化物(φ1~20mm)3%, 101K5/6ロームブロック10%
- 4層 明黄褐色土(101K6/6) 101K4/4褐色土20%
- 5層 褐色土(101K4/6) 礫(φ10~50mm)3%, 炭化物(φ1~5mm)1%

S113・SK34(A-A') (SK34)

- 1層 暗褐色土(101K3/4) 101K4/4褐色土30%, 礫(φ10~30mm)2%, 炭化物(φ1~2mm)1%
- 2層 褐色土(101K5/6) 礫(φ10~50mm)5%, 炭化物(φ1~2mm)1%未読

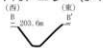
S113P A-A' (S=1/50)



S113P(A-A')

- 1層 黄褐色土(101K5/6) 礫(φ10~20mm)2%
- 2層 黄褐色土(101K2/3) 礫(φ1~10mm)2%

S113 Pit1 エレベ(S=1/50)



S113 Pit2 エレベ(S=1/50)



S113 Pit3 エレベ(S=1/50)



図18 第13号建物跡



圖19 第13号建物跡出土遺物(1)

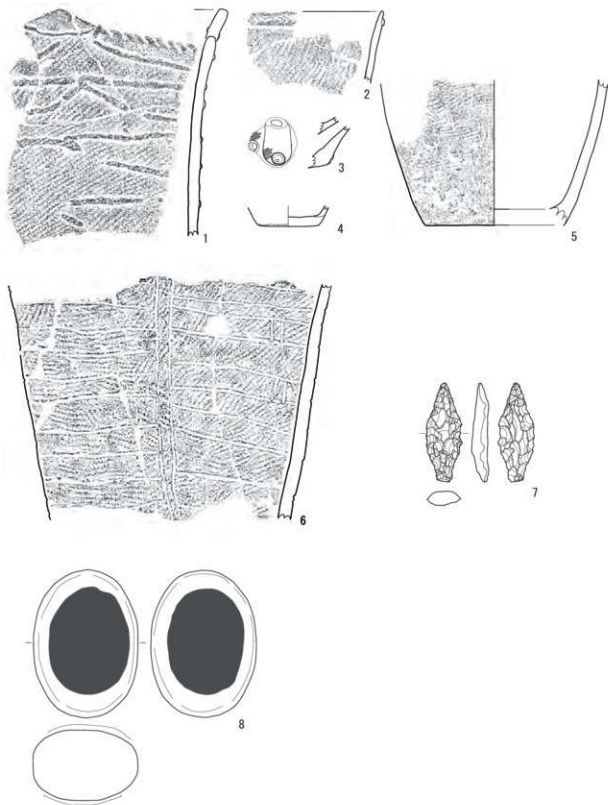
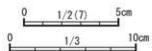


図20 第13号建物跡出土遺物(2)



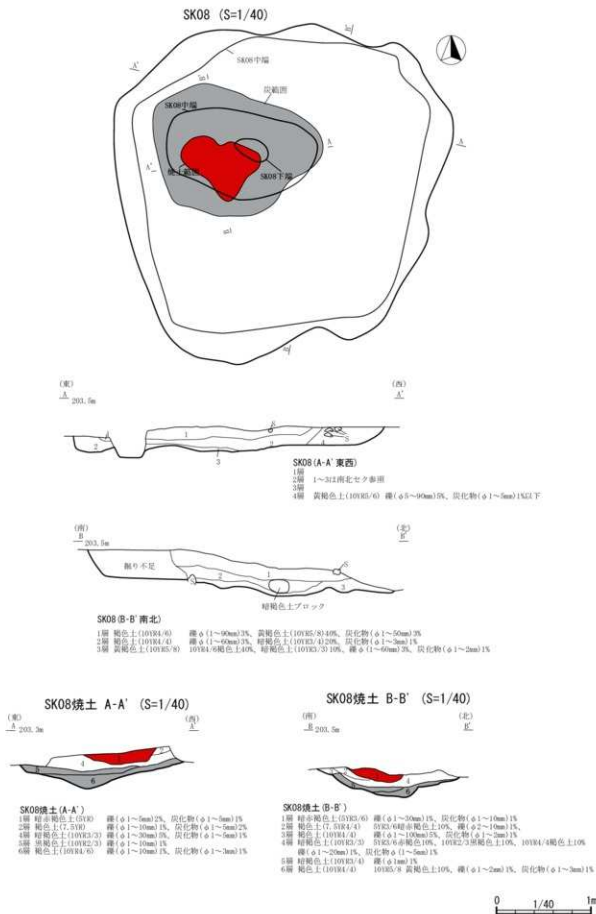
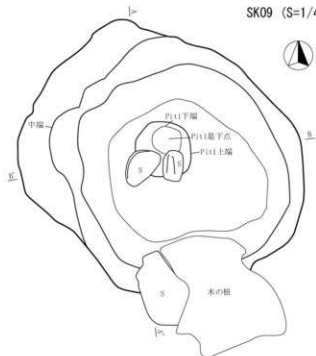
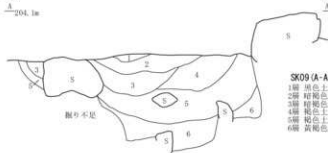


図21 第8号土坑

SK09 (S=1/40)



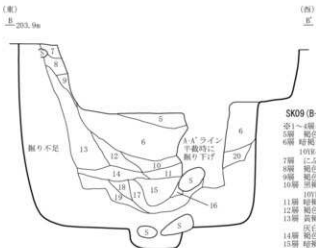
(北)
1/204.1m



SK09 (A-A')

- 1層 褐色土(10YR2/1) 10YR2/3黄褐色土20%, 礫(φ1~40mm)3%, 炭化物(φ2~10mm)7%
- 2層 黄褐色土(10YR3/3) 10YR2/3黄褐色土40%, 礫(φ1~20mm)3%, 炭化物(φ1~10mm)1%
- 3層 黄褐色土(10YR3/4) 礫(φ1~90mm)10%, 炭化物(φ1~10mm)1%
- 4層 褐色土(10YR4/1) 礫(φ1~40mm)3%, 炭化物(φ1~10mm)1%
- 5層 褐色土(10YR4/4) 10YR4/4黄褐色土10%, 礫(φ1~20mm)10%, 炭化物(φ1~5mm)1%
- 6層 黄褐色土(10YR5/3) 礫(φ1~30mm)1%, 炭化物(φ1~2mm)1%

(東)
1/203.9m



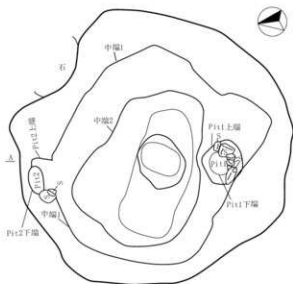
SK09 (B-B')

- ※1~4層はA-A'ラインで注記済み
- 5層 褐色土(10YR4/1) 炭化物(φ1~40mm)3%, 10YR8/2灰白色粒(φ2~10mm)5%
- 6層 黄褐色土(10YR5/4) 7.5YR4/4褐色土2%, 炭化物(φ1~5mm)3%
- 10YR4/4褐色粒(φ2~8mm)2%
- 7層 赤い黄褐色土(10YR4/3) 10YR4/4褐色粒(φ1~3mm)2%
- 8層 褐色土(10YR4/3) 10YR4/4褐色粒(φ1~5mm)1%
- 9層 褐色土(10YR4/3) 炭化物(φ2~8mm)3%, 10YR8/2灰白色粒(φ2~30mm)2%
- 10層 黄褐色土(10YR2/3) 礫(φ10~40mm)3%, 炭化物(φ2~3mm)1%
- 10YR4/4褐色粒(φ3~5mm)2%
- 11層 黄褐色土(10YR3/3) 礫(φ3~10mm)1%
- 12層 褐色土(10YR4/3) 10YR4/4褐色土2%
- 13層 黄褐色土(10YR5/3) 礫(φ3~5mm)1%, 炭化物(φ3~6mm)2%
- 灰白色層(φ30~50mm)5%
- 14層 褐色土(10YR4/3) 灰白色層(φ1~10mm)1%
- 15層 黄褐色土(10YR3/4) 礫(φ5~20mm)1%, 炭化物(φ1~3mm)1%, 褐色粒(φ1~3mm)2%
- 16層 褐色土(10YR4/3) 褐色土(φ1~2mm)1%
- 17層 褐色土(10YR4/3) 礫(φ5~10mm)1%, 炭化物(φ1~2mm)1%
- 18層 黄褐色土(10YR5/3) 礫(φ5~10mm)1%
- 19層 灰褐色土(10YR6/3) 礫(φ3~20mm)1%, 炭化物(φ1~2mm)1%
- 20層 褐色土(10YR4/3) 礫(φ100~120mm)5%

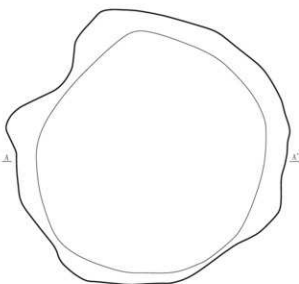


図22 第9号土坑

SK10 (S=1/40)
新段階 (Pit1・2を伴う)



SK10 (S=1/40)
旧段階 (地山まで壁出し)



SK10 A-A' (S=1/40)



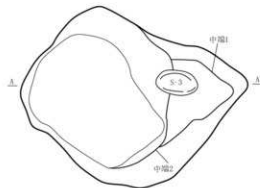
SK10 (A-A')

1層 褐色土(10YR4/6)	礫(φ1~80mm)10%, 炭化物(φ1~10mm)0%
2層 褐色土(10YR4/4)	礫(φ1~220mm)50%, 炭化物(φ1~3mm)1%
3層 黄褐色土(10YR5/6)	礫(φ1~90mm)7%
4層 黄褐色土(10YR5/4)	礫(φ1~220mm)10%, 炭化物(φ1~10mm)3%
5層 褐色土(10YR2/1)	礫(φ1~130mm)15%, 炭化物(φ1~3mm)1%
6層 褐色土(10YR4/6)	礫(φ1~200mm)20%, 炭化物(φ1~10mm)3%
7層 褐色土(10YR4/6)	礫(φ1~10mm)3%, 炭化物(φ1mm)1&1/2以下
8層 黄褐色土(10YR5/6)	礫(φ1~50mm)2%, 炭化物(φ1~5mm)1%
9層 黄褐色土(10YR5/4)	礫(φ1~20mm)1%, 炭化物(φ1~5mm)2%
10層 黄褐色土(10YR5/6)	礫(φ1~15mm)2%
11層 黄褐色土(10YR5/6)	礫(φ1~50mm)2%, 炭化物(φ1~10mm)2%
12層 黄褐色土(10YR5/6)	礫(φ1~150mm)10%, 炭化物(φ1~10mm)3%
13層 褐色土(10YR4/6)	礫(φ1~20mm)2%, 炭化物(φ1~5mm)1%
14層 黄褐色土(10YR5/6)	礫(φ1~70mm)1%, 炭化物(φ1~3mm)1&1/2以下

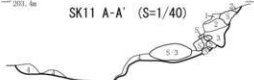
SK11 (S=1/40)
S-1・2検出時



SK11 (S=1/40)
完掘時



SK11 A-A' (S=1/40)



SK11 (A-A')

1層 黄褐色土(10YR5/6)	礫(φ1~200mm)20%
2層 黄褐色土(10YR5/6)	礫(φ1~20mm)5%, 炭化物(φ1~2mm)1%
3層 黄褐色土(10YR5/6)	礫(φ1~100mm)50%, 炭化物(φ1~20mm)3%
4層 黄褐色土(10YR5/6)	礫(φ1~40mm)10%, 炭化物(φ1~3mm)1%

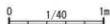


図23 第10号・第11号土坑

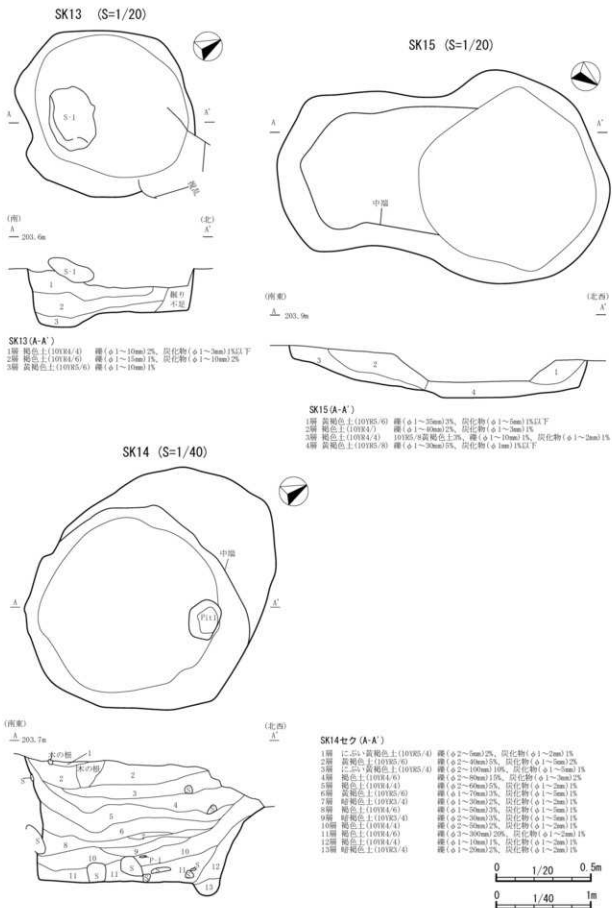
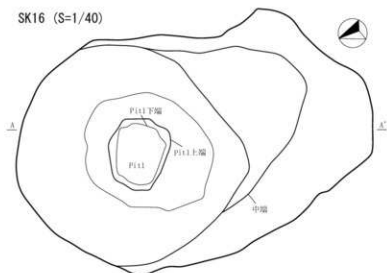


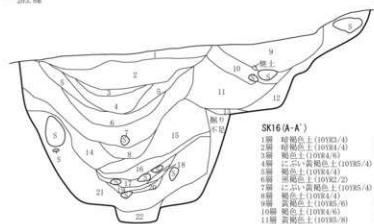
図24 第13号・第14号・第15号土坑

SK16 (S=1/40)



(北)
▲ 203.8m

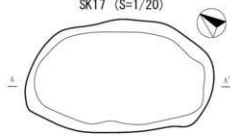
(南)
▲



SK16 (A-A')

- | | |
|--------------------|---|
| 1層 暗褐色土(10YR2/4) | 礫(φ1~3mm) 炭化物1% |
| 2層 暗褐色土(10YR1/4) | 礫(φ2mm) 炭化物1%未達 |
| 3層 褐色土(10YR4/6) | 礫(φ1~15mm) 炭化物1%ローム状 |
| 4層 二色黄褐色土(10YR5/4) | 10YR4/6褐色土のブロック、炭化物1%未達 |
| 5層 褐色土(10YR4/4) | |
| 6層 黄褐色土(10YR2/2) | 炭化物(φ2~10mm)1% |
| 7層 二色黄褐色土(10YR5/4) | 炭化物(φ2~10mm)1%未達 |
| 8層 褐色土(10YR4/4) | 炭化物(φ2~10mm)1% |
| 9層 黄褐色土(10YR5/6) | 炭化物(φ2~10mm)1% |
| 10層 褐色土(10YR4/6) | 炭化物(φ2~10mm)1% |
| 11層 黄褐色土(10YR5/6) | 10YR4/6褐色土10%, 礫(φ1~20mm)1%, 炭化物(φ1~10mm)1% |
| 12層 黄褐色土(10YR5/6) | 礫(φ2~12mm)1%, 炭化物(φ2~20mm)1% |
| 13層 褐色土(10YR4/6) | 10YR5/6黄褐色土30%, 礫(φ1~100mm)10%, 炭化物(φ1~20mm)2% |
| 14層 黄褐色土(10YR5/6) | 10YR4/6褐色土20%, 礫(φ1~50mm)10%, 炭化物(φ1~15mm)1% |
| 15層 黄褐色土(10YR5/6) | 10YR2/4暗褐色土3%, 7.5YR4/6褐色土1%, 礫(φ1~70mm)5% |
| 16層 黄褐色土(10YR5/6) | 炭化物(φ1~3mm)1% |
| 17層 黄褐色土(10YR2/3) | 7.5YR2/4暗褐色土5%, 10YR5/6黄褐色土20%, 礫(φ1~110mm)40%, 炭化物(φ1mm)1% |
| 18層 明褐色土17.5YR5/8) | 10YR2/4暗褐色土30%, 礫(φ3~21mm)1%未達 |
| 19層 明褐色土(10YR5/8) | 10YR4/6褐色土20%, 礫(φ1~5mm)1% |
| 20層 黄褐色土(10YR5/6) | 10YR4/6褐色土20%, 礫(φ1~30mm)5% |
| 21層 黄褐色土(10YR5/6) | 礫(φ1~350mm)10%, 炭化物(φ1~2mm)1%未達 |
| 22層 黄褐色土(10YR5/6) | 礫(φ2~200mm)10% |

SK17 (S=1/20)



(北)
▲ 203.6m

(南)
▲



SK17 (A-A')

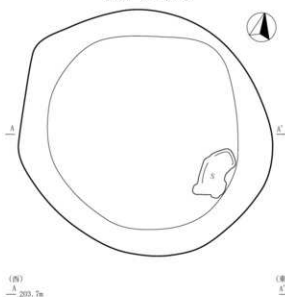
- | | |
|------------------|------------------------------|
| 1層 暗褐色土(10YR2/4) | 礫(φ1~20mm)2%, 炭化物(φ1~5mm)2% |
| 2層 黄褐色土(10YR5/6) | 礫(φ1~150mm)3%, 炭化物(φ1~3mm)1% |

0 1/20 0.5m

0 1/40 1m

図25 第16号・第17号土坑

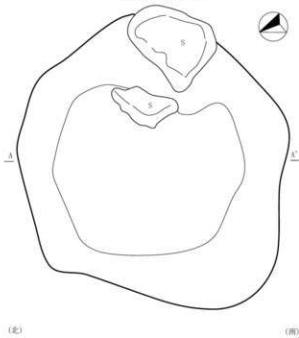
SK18 (S=1/40)



SK18(A-A')

- | | | |
|------------------------|-----------------|----------------|
| 1層 褐色土(10YR4/6) | 礫(φ1~40mm)5% | 炭化物(φ1~20mm)1% |
| 2層 黄褐色土(10YR5/6) | 礫(φ1~30mm)10% | 炭化物(φ1~2mm)1% |
| 3層 暗褐色土(10YR3/4) | 10YR5/6黄褐色土10% | 礫(φ1~40mm)10% |
| 炭化物(φ1~20mm)3% | | |
| 4層 暗褐色土(10YR3/4) | 礫(φ1~200mm)20% | 炭化物(φ1~10mm)2% |
| 5層 暗褐色土(10YR3/4) | 10YR3/3 暗褐色土40% | 10YR4/6 褐色土5% |
| 6層 赤褐色土(10YR2/3) | 礫(φ1~40mm)3% | 炭化物(φ1~20mm)1% |
| 7層 褐色土(10YR4/4) | 礫(φ1~50mm)3% | 炭化物(φ1~2mm)1% |
| 炭化物(φ1~2mm)1% | | |
| 8層 黄褐色土(10YR5/6) | 礫(φ1~30mm)1% | 炭化物(φ1mm)1% |
| 9層 褐色土(10YR4/6) | 礫(φ1~40mm)20% | 炭化物(φ1~15mm)1% |
| 10層 褐色土(10YR4/6) | 礫(φ1~30mm)3% | 炭化物(φ1mm)1% |
| 11層 2.5~5黄褐色土(10YR4/3) | 10YR5/6黄褐色土40% | 礫(φ1~30mm)2% |
| 炭化物(φ1mm)1% | | |
| 12層 黄褐色土(10YR5/6) | 礫(φ1~20mm)2% | 炭化物(φ1~30mm)1% |
| 13層 黄褐色土(10YR5/6) | 礫(φ1~50mm)5% | 炭化物(φ1~5mm)1% |
| 14層 暗黄褐色土(10YR6/6) | 礫(φ1~30mm)1% | 炭化物(φ1~2mm)1% |
| 15層 暗黄褐色土(10YR6/6) | 10YR4/6 褐色土20% | 礫(φ1~230mm)20% |
| 炭化物(φ1~2mm)1% | | |
| 16層 褐色土(10YR4/6) | 礫(φ1~30mm)2% | 炭化物(φ1~2mm)1% |
| 17層 黄褐色土(10YR5/6) | 礫(φ1~20mm)1% | 炭化物(φ1mm)1% |
| 18層 黄褐色土(10YR5/6) | 礫(φ1~100mm)10% | 炭化物(φ1~2mm)1% |
| 19層 黄褐色土(10YR5/6) | 礫(φ1~8mm)5% | 炭化物(φ1mm)1% |
| 20層 黄褐色土(10YR5/6) | 礫(φ1~8mm)5% | 炭化物(φ1mm)1% |
| 21層 褐色土(10YR4/6) | 礫(φ1~100mm)3% | 炭化物(φ1~80mm)1% |
| 22層 暗黄褐色土(10YR6/6) | 礫(φ1~50mm)3% | 炭化物(φ1~2mm)1% |
| 23層 暗黄褐色土(10YR6/6) | 礫(φ1~20mm)3% | |
| 24層 2.5~5黄褐色土(10YR4/3) | 礫(φ1~50mm)7% | |
| 25層 暗黄褐色土(10YR6/6) | 礫(φ1~100mm)5% | |
| 26層 黄褐色土(10YR5/6) | 礫(φ1~20mm)1% | |
| 27層 黄褐色土(10YR5/6) | 礫(φ1~40mm)7% | |
| 28層 褐色土(10YR4/4) | 礫(φ1~20mm)2% | |

SK20 (S=1/40)



SK20(A-A')

- | | | |
|-------------------|----------------|----------------|
| 1層 褐色土(10YR4/6) | 礫(φ1~50mm)3% | 炭化物(φ1~3mm)3% |
| 2層 黄褐色土(10YR5/6) | 礫(φ1~60mm)12% | 炭化物(φ1~10mm)2% |
| 3層 褐色土(10YR4/6) | 礫(φ1~40mm)7% | 炭化物(φ1~10mm)5% |
| 4層 黄褐色土(10YR5/6) | 礫(φ1~100mm)2% | 炭化物(φ1~5mm)5% |
| 5層 暗褐色土(10YR3/4) | 礫(φ1~40mm)3% | 炭化物(φ1~10mm)2% |
| 6層 褐色土(10YR4/6) | 礫(φ1~10mm)5% | 炭化物(φ1~10mm)5% |
| 7層 暗褐色土(10YR3/4) | 礫(φ1~20mm)3% | 炭化物(φ1~5mm)3% |
| 8層 黄褐色土(10YR5/6) | 10YR2/4暗褐色土10% | 礫(φ1~25mm)2% |
| 炭化物(φ1~3mm)2% | | |
| 9層 褐色土(10YR4/6) | 礫(φ1~40mm)5% | 炭化物(φ1~5mm)3% |
| 10層 黄褐色土(10YR5/6) | 礫(φ1~200mm)20% | 炭化物(φ1~3mm)3% |
| 11層 黄褐色土(10YR5/6) | 礫(φ1~25mm)10% | 炭化物(φ1~15mm)3% |
| 12層 褐色土(10YR4/6) | 礫(φ1~20mm)3% | 炭化物(φ1~3mm)2% |
| 13層 褐色土(10YR4/6) | 礫(φ1~40mm)3% | 炭化物(φ1~10mm)3% |
| 14層 褐色土(10YR4/6) | 礫(φ1~45mm)3% | 炭化物(φ1~10mm)2% |
| 15層 褐色土(10YR4/6) | 礫(φ1~30mm)2% | 炭化物(φ1~5mm)2% |
| 16層 暗褐色土(10YR3/4) | 礫(φ1~30mm)2% | 炭化物(φ1~5mm)1% |
| 17層 褐色土(10YR4/6) | 礫(φ1~50mm)10% | 炭化物(φ1~3mm)2% |
| 18層 暗褐色土(10YR3/4) | 礫(φ1~40mm)5% | 炭化物(φ1~3mm)3% |

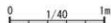


图26 第18号・第20号土坑

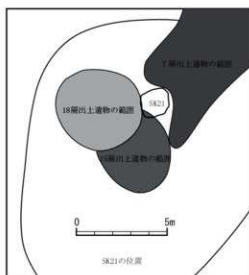
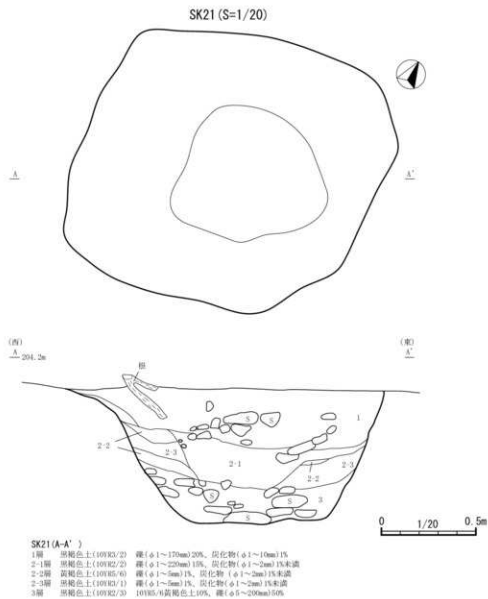


図27 第21号土坑

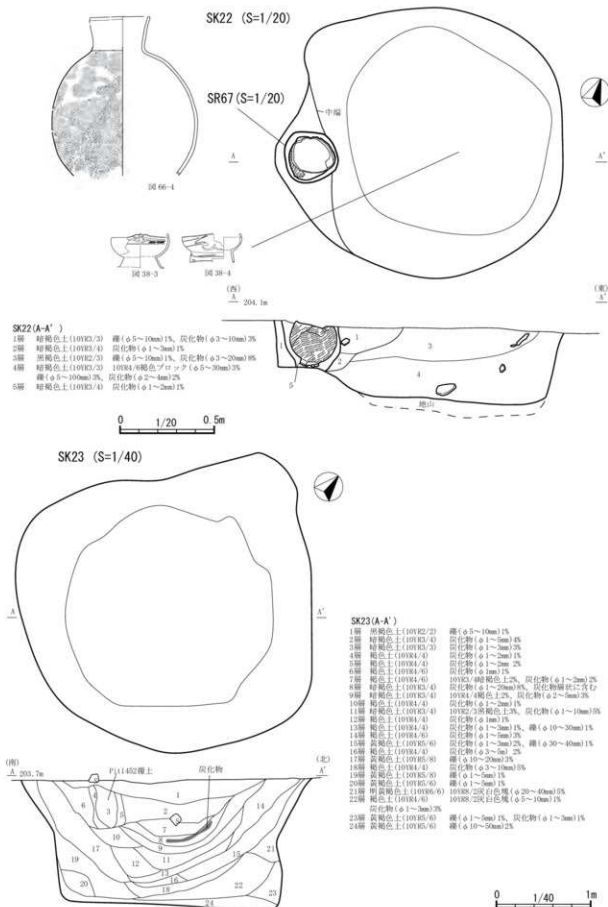
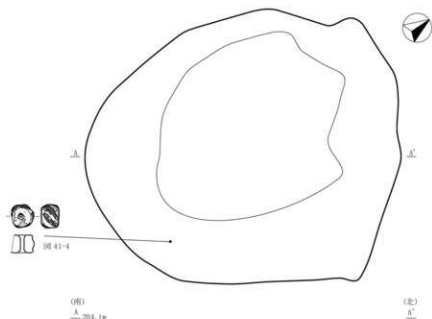


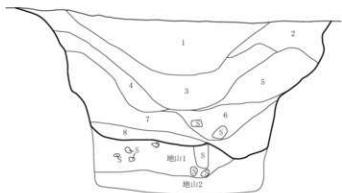
図28 第22号・第23号土坑・第67号土器埋設遺構

SK24 (S=1/40)



(南)
A
20.4m

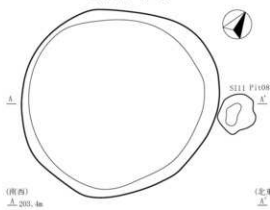
(北)
A'



SK24 (A-A')

- | | | |
|-----|-------------------|-------------------------------------|
| 1層 | 褐色土 (101R2/1) | 礫 (φ 1~60mm) 2%, 炭化物 (φ 1~10mm) 2% |
| 2層 | 暗褐色土 (101R3/3) | 礫 (φ 1~50mm) 7%, 炭化物 (φ 1~15mm) 1% |
| 3層 | 紅土・黄褐色土 (101R4/3) | 礫 (φ 1~20mm) 2%, 炭化物 (φ 1~5mm) 2% |
| 4層 | 褐色土 (101R4/4) | 礫 (φ 1~20mm) 2%, 炭化物 (φ 1~5mm) 1% |
| 5層 | 黄褐色土 (101R5/6) | 礫 (φ 1~50mm) 2% |
| 6層 | 紅土・黄褐色土 (101R5/4) | 礫 (φ 1~150mm) 5%, 炭化物 (φ 1~3mm) 1% |
| 7層 | 褐色土 (101R4/6) | 礫 (φ 1~20mm) 2%, 炭化物 (φ 1~2mm) 1% |
| 8層 | 褐色土 (101R4/4) | 礫 (φ 1~20mm) 2%, 炭化物 (φ 1~2mm) 1% |
| 地山1 | 紅土・黄褐色土 (101R5/4) | 礫 (φ 1~300mm) 60%, 炭化物 (φ 1~2mm) 1% |
| 地山2 | 紅土・黄褐色土 (101R5/3) | 礫 (φ 1~10mm) 1% |

SK25 (S=1/40)



(南西)
A
20.4m

(北東)
A'



SK25 (A-A')

- | | | |
|----|-----------------|---|
| 1層 | 黄褐色土 (101R5/6) | 礫 (φ 1~30mm) 1%, 炭化物 (φ 1mm) 1% |
| 2層 | 明黄褐色土 (101R6/6) | 礫 (φ 1~60mm) 5%, 炭化物 (φ 1~2mm) 1% |
| 3層 | 黄褐色土 (101R5/6) | 10YR6-8明黄褐色土 20%, 礫 (φ 1~50mm) 3%, 炭化物 (φ 1~2mm) 1% |
| 4層 | 黄褐色土 (101R5/6) | 10YR4-6褐色土 20%, 礫 (φ 1~150mm) 15%, 炭化物 (φ 1mm) 1%未満 |

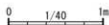
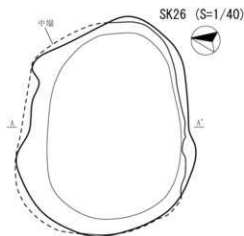


図29 第24号・第25号土坑

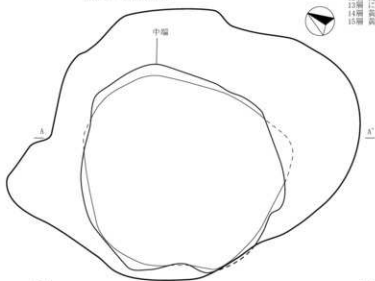


SK26 (A-A')

- | | |
|------------------|------------------------------------|
| 1層 褐色土 (10V8/4) | 礫 (φ1~150mm) 30%, 炭化物 (φ1~10mm) 2% |
| 2層 暗褐色土 (10V8/4) | 礫 (φ1~50mm) 10%, 炭化物 (φ1~15mm) 1% |
| 3層 黄褐色土 (10V8/6) | 礫 (φ2~20mm) 1%, 炭化物 (φ1~2mm) 1% |
| 4層 褐色土 (10V8/6) | 礫 (φ1~50mm) 5%, 炭化物 (φ1~3mm) 1% |
| 5層 黄褐色土 (10V8/6) | 礫 (φ5~50mm) 20%, 炭化物 (φ1~3mm) 1% |
| 6層 褐色土 (10V8/6) | 礫 (φ1~10mm) 2%, 炭化物 (φ1~2mm) 1% |
| 7層 黄褐色土 (10V8/6) | 礫 (φ1~500mm) 50% |



SK27 (S=1/40)



SK27 (A-A')

- | | |
|---------------------|----------------------------------|
| 1層 褐色土 (10V8/4) | 礫 (φ1~20mm) 5%, 炭化物 (φ1~2mm) 1% |
| 2層 褐色土 (10V8/6) | 礫 (φ1~50mm) 5%, 炭化物 (φ1~2mm) 1% |
| 3層 黄褐色土 (10V8/6) | 礫 (φ1~300mm) 50% |
| 4層 黄褐色土 (10V8/8) | 礫 (φ1~20mm) 2% |
| 5層 黄褐色土 (10V8/8) | 礫 (φ1~200mm) 20% |
| 6層 褐色土 (10V8/4) | 礫 (φ1~20mm) 1%, 炭化物 (φ1~2mm) 1% |
| 7層 黄褐色土 (10V8/6) | 礫 (φ1~50mm) 10%, 炭化物 (φ1~3mm) 1% |
| 8層 褐色土 (10V8/6) | 礫 (φ1~20mm) 2% |
| 9層 黄褐色土 (10V8/8) | 礫 (φ1~50mm) 30% |
| 10層 暗褐色土 (10V8/4) | 礫 (φ1~60mm) 2%, 炭化物 (φ1~3mm) 2% |
| 11層 褐色土 (10V8/6) | 礫 (φ1~30mm) 20% |
| 12層 褐色土 (10V8/4) | 礫 (φ1~50mm) 2% |
| 13層 灰土・褐色土 (10V8/4) | 礫 (φ1~100mm) 30% |
| 14層 黄褐色土 (10V8/6) | 礫 (φ1~30mm) 3% |
| 15層 黄褐色土 (10V8/6) | 礫 (φ1~150mm) 5% |

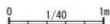
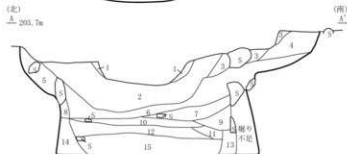


图30 第26号・第27号土坑

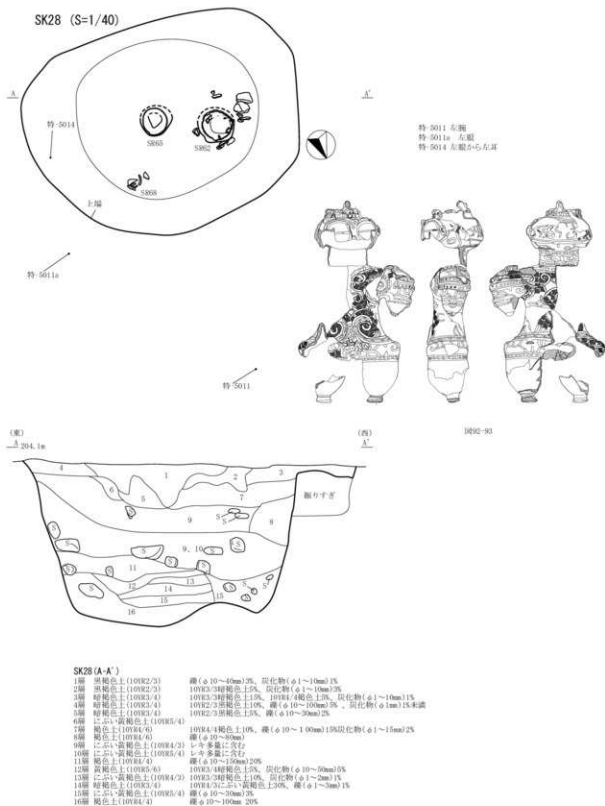


図31 第28号土坑

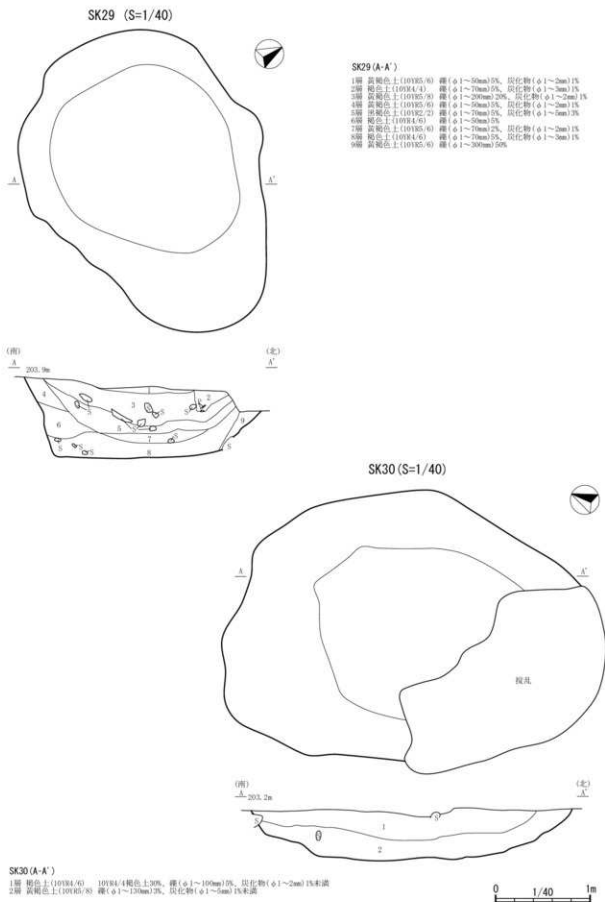
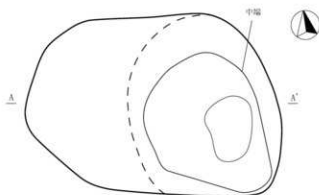
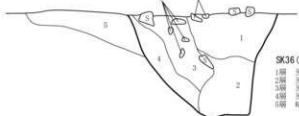


図32 第29号・第30号土坑

SK36 (S=1/20)



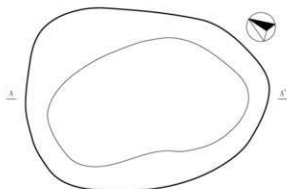
(西) $\frac{A}{A}$ 200.5m (東) $\frac{A}{A}$



SK36 (A-A')

- 1層 赤褐色土(10YR2/2) 礫($\phi 5\sim 30\text{mm}$)2%, 炭化物($\phi 1\sim 2\text{mm}$)1%
- 2層 赤褐色土(10YR2/2) 10YR5/6黄褐色土2%, 礫($\phi 10\sim 25\text{mm}$)2%, 炭化物($\phi 1\text{mm}$)1%以下
- 3層 赤褐色土(10YR2/3) 礫($\phi 20\sim 70\text{mm}$)3%
- 4層 赤褐色土(10YR2/3) 10YR2/2赤褐色土2%, 炭化物($\phi 1\text{mm}$)1%
- 5層 暗褐色土(10YR3/3) 10YR5/6黄褐色土2%, 炭化物($\phi 1\text{mm}$)1%以下

SK37 (S=1/20)



(北) $\frac{A}{A}$ 200.7m (南) $\frac{A}{A}$



SK37 (A-A')

- 1層 暗褐色土(10YR3/4) 炭化物($\phi 2\sim 10\text{mm}$)2%
- 2層 暗褐色土(10YR3/3) 礫($\phi 20\sim 50\text{mm}$)3%, 炭化物($\phi 1\sim 5\text{mm}$)2%
- 3層 暗褐色土(10YR3/4) 炭化物($\phi 1\sim 2\text{mm}$)1%
- 4層 暗褐色土(10YR3/4) 礫($\phi 5\sim 10\text{mm}$)1%
- 5層 暗褐色土(10YR3/4) 10YR5/6黄褐色土2%と珪石
- 6層 黄褐色土(10YR5/6) 10YR3/4暗褐色土2%と珪石

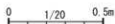


図33 第36号・第37号土坑

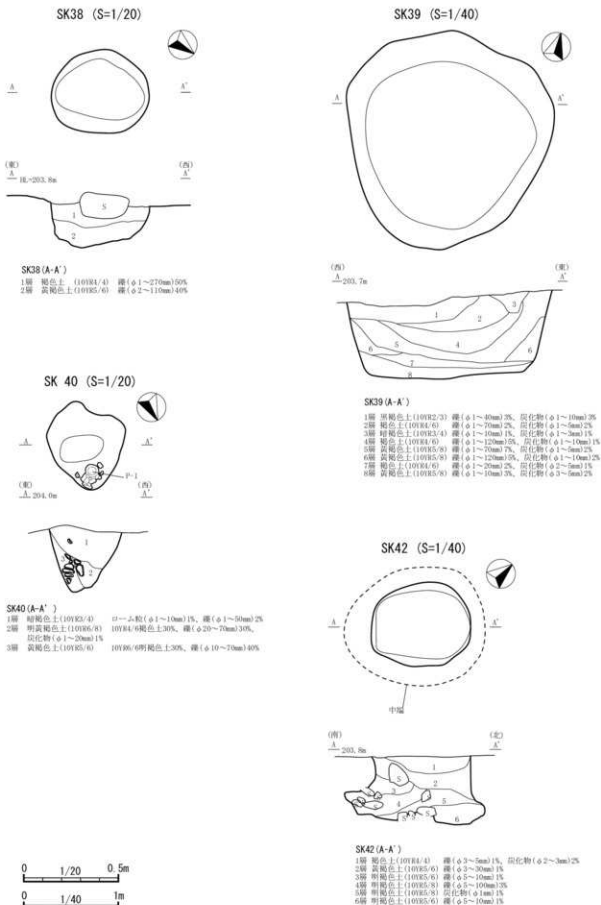


図34 第38号・第39号・第40号・第42号土坑

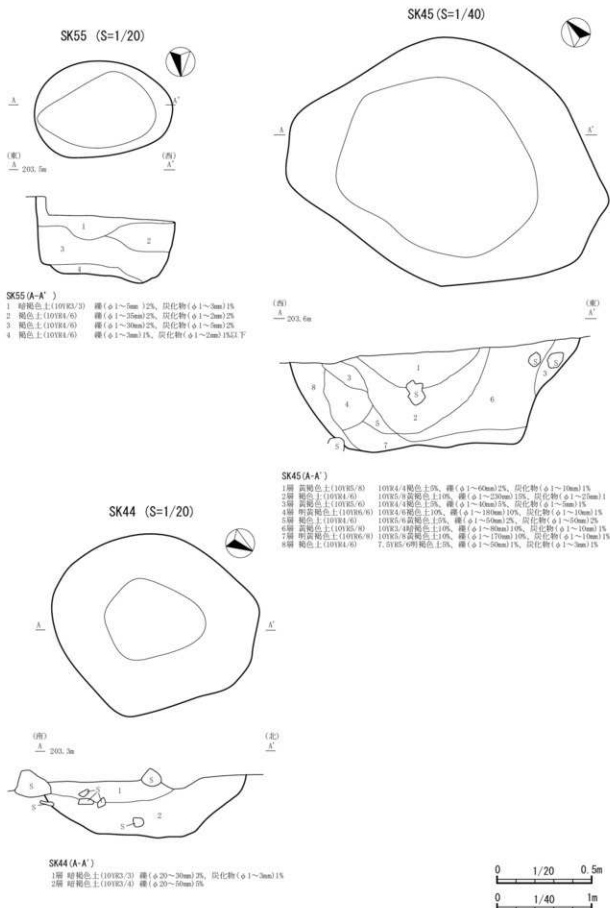


図35 第44号・第45号・第55号土坑

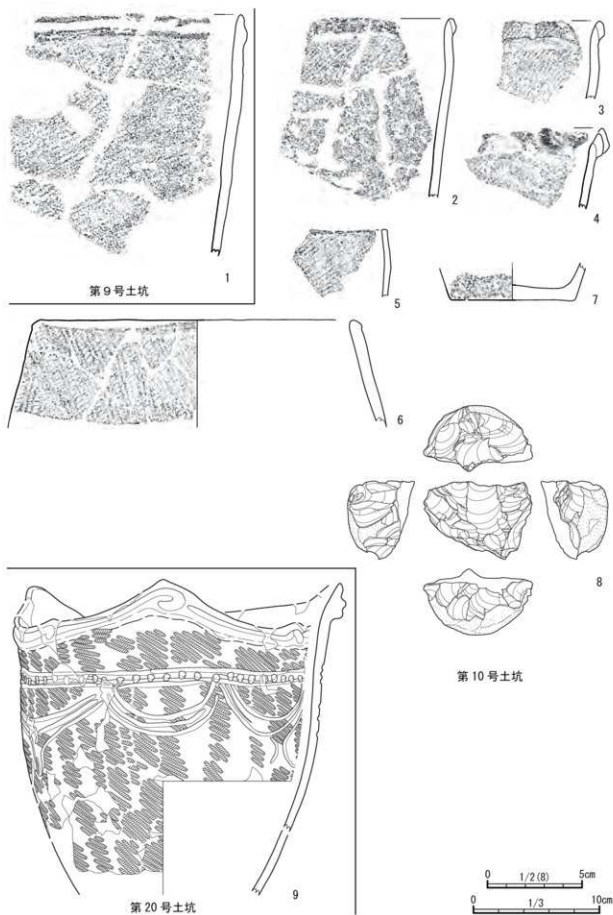
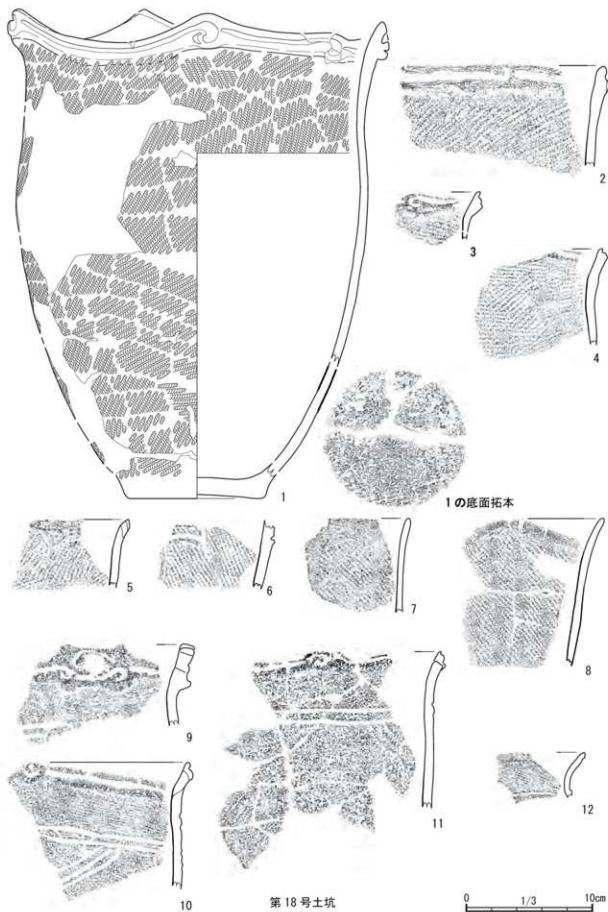


图36 土坑出土遺物(1)



第 18 号土坑

图37 土坑出土遺物(2)

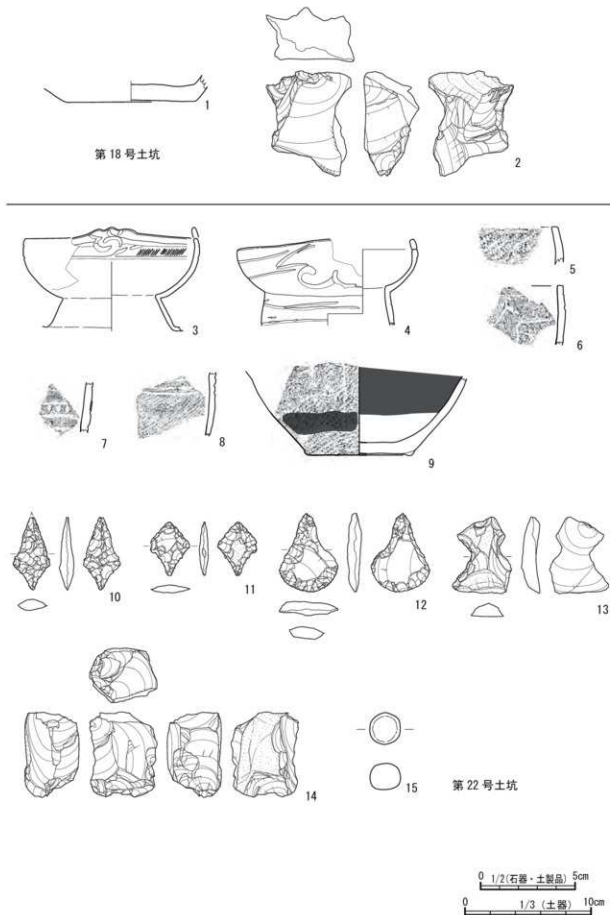
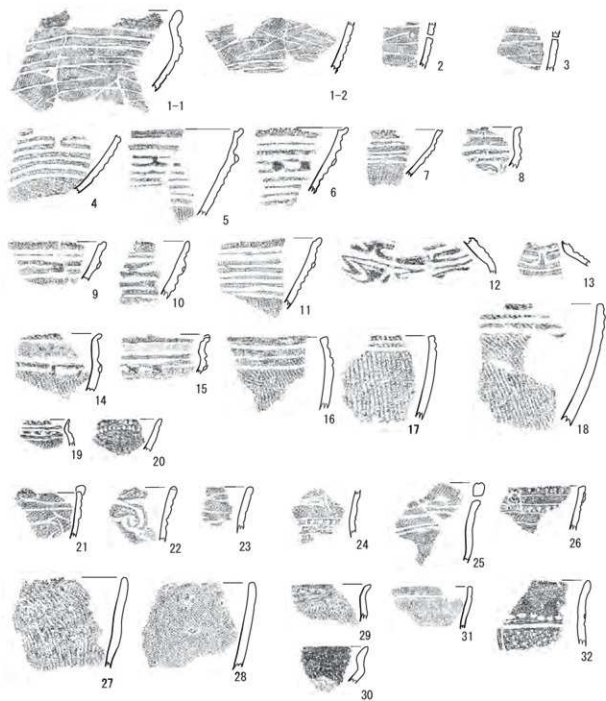


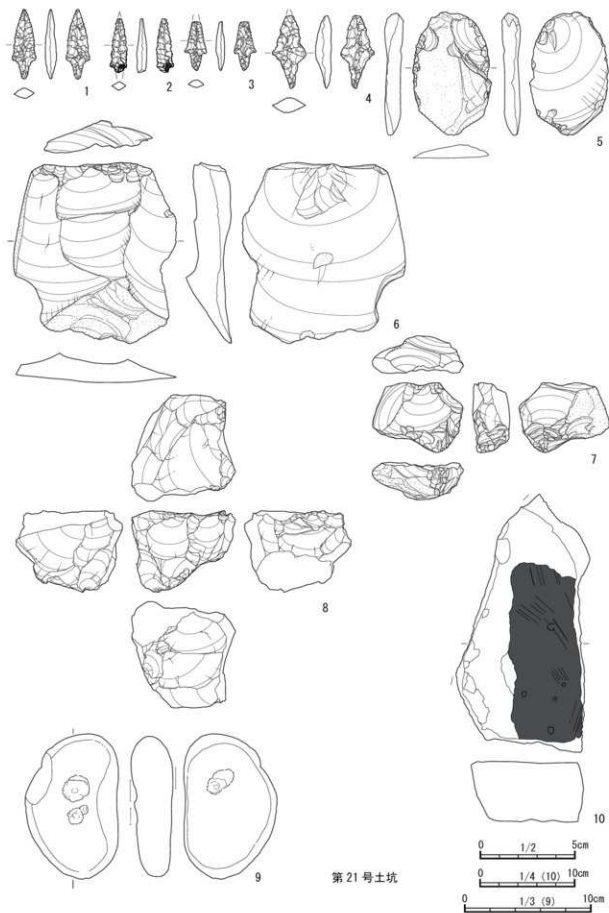
图38 土坑出土遺物(3)



第21号土坑



図39 土坑出土遺物(4)



第21号土坑

图40 土坑出土遺物(5)



図41 土坑出土遺物(6)

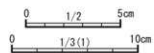
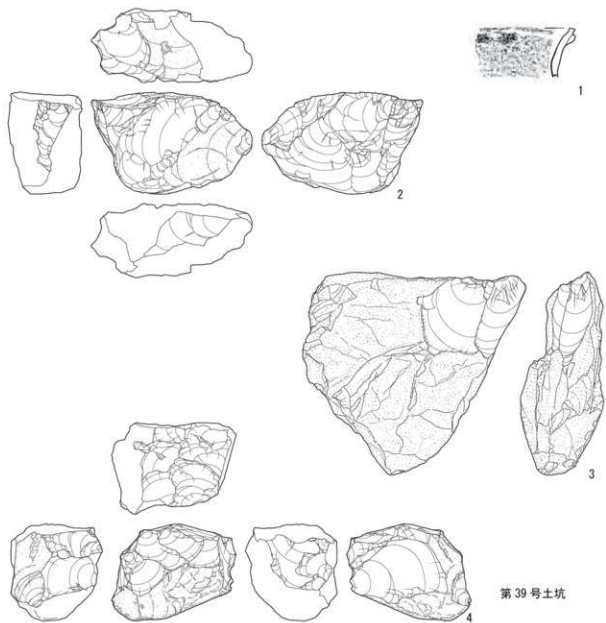


图42 土坑出土遺物(7)

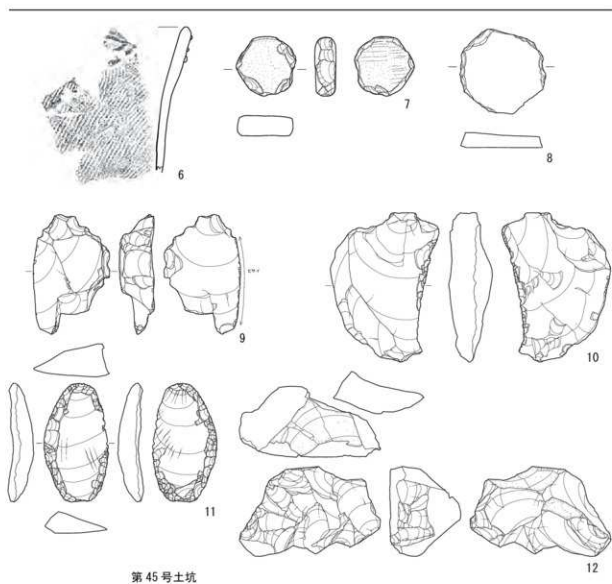
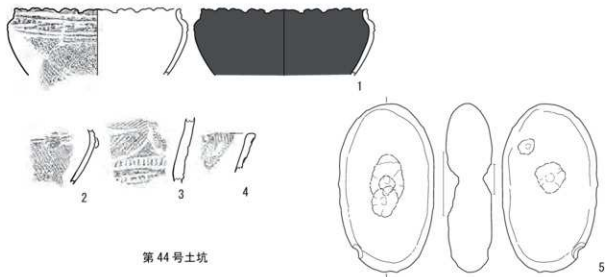
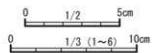


図43 土坑出土遺物(8)



3 配石遺構

配石遺構群は、調査区のVH・I-32から34の範囲に集中する(図44)。集中から外れるのは第20号・第42号・第44号配石遺構であり、第20・42号配石遺構は集中範囲の配石遺構と構造が異なる。第44号配石遺構も配石遺構の集中範囲の土坑と比較し小形であることなど、分布から外れる配石遺構は、集中範囲とは性格が異なる可能性がある。

これらの遺構は、第1号盛土遺構の掘り下げ中、トレンチ1を中心に地山直上の黒色土層面の上面で円形に組んだ配石など不自然な礫の分布が確認できた。そのため第1号盛土遺構によって盛土形成以前の遺構面が覆われていると判断し、礫の集中地帯は手をつけず、盛土遺構がおおよそ平らになった後に調査を開始した。

調査方法としては、黒色土面では土坑プランが確定できなかつたので、礫の平面図を作成した後、礫の範囲の中央で半載ラインを設定し、まず、地山面まで掘り下げ、地山面でプランの確認を行い、その後あらためて半載を行った。このため、図面の土坑上場ラインは断りがないかぎり地山面で確認したプランである。

次に配石遺構の記述に先立ち、用語について整理する。

川原平(1)遺跡では2基の立石を持つ配石遺構(SQ21・SQ27、いわゆる日時計状組石遺構)が検出されている。立石を持つ配石遺構は、その石の配列に特徴があり、林謙作(1995)は大湯環状列石の資料を用いながら、中心を「立石」、円形に配置した「縁石」、放射状に配置した「置石」と配置などに応じて分類している。縁石・置石は、直方体の形状の礫を用いており、短軸を垂直に立てて埋め込んでいる。

それ以外の配石遺構は、立石を持つ配石遺構のような決まった配置がないので、特に専門的な用語は用いず、配石という表現にとどめる。

第20号配石遺構(略号:SQ20、図45・46)

[位置・確認]VK-32グリッドに位置し、第III層掘り下げ中に確認した。

[重複]第12号建物跡上面にて検出した。

[規模・形状]南北に2.22m、東西に2.16mの範囲で礫が置かれている。10～50cm大の礫が、弧を描いて配置されるが、北西側には無い。また、中央部には長径5cm～10cm大の小形の礫がまとまっている。中央部分の土が黒褐色であり、土坑の可能性を示すものとして精査した。しかし、土坑としての立ち上がりがなく、本配石に伴う遺構はないと判断される。

[出土遺物]土器は244.7g出土している。縄文時代晩期の土器(図46-1)が伴う。また、構成礫に石皿(図46-2)が含まれており、S-1として取り上げた。他に剥片石器類が0.2gほど出土している。焼けた動物骨の小片が出土している。

[小結]伴出土器などから、縄文時代晩期前半に構築されたと考えられる。

(齋藤)

第21号配石遺構(略号:SQ21、図47・48・54)

[位置・確認]VH-32に位置し、第1号盛土遺構の第24層で確認した。

[重複]なし。

[規模・形状・下部構造]中心の立石は扁平な河原礫を用いている。平らな面を南北に面するように埋めている。立石の根元には、根固めと思われる小礫(写真18下段)が多数敷き詰められ、立石を固定している。周辺の緑石は円形になるように並べており、その間の置石は放射状に配置しているが、隙間なく詰めて配置していない。全体に石の配置は乱れているが、配石遺構の構築時から、後日何らかの影響で乱れたのかは判断できなかった。緑石と置石は小口立ての状態で設置している。

配石の礫は、松山調査員に石質鑑定を依頼したところ、中心の立石は花崗閃緑岩であり、置石は安山岩・ホルンフェルス・緑色凝灰岩、緑石は砂岩・ホルンフェルス・安山岩・花崗閃緑岩などで構成されていることが判明した。礫石の素材などと大きく逸脱するような石材(図48・表4)でないため、遺跡近隣から運び込んだ礫を素材として用いていたと考えられる。なお、拳よりも小さな礫については石材鑑定を行わなかった。

配石の下部には土坑が掘られている。径0.92×0.75mの小判形を呈し、底径は0.7×0.46mである。土坑の深さは0.6mである。土坑認定は他の配石遺構と異なる。平面図を作成した後、立石を中心に半截ラインを決定した。そして地山面まで下げ、土坑プランを確認した後、半截は止めた。その段階で一旦セクション図(セクション①)を作成した。次に配石を構成する礫を取り除き、その面で清掃したところ、配石遺構の下は、他の堆積層と比較し、黒色土の中に黄褐色土粒を含む部分が認められ、この部分が土坑の掘り方と判断し、改めて半截を行い、セクション図(セクション②)を作成した。

[堆積土]覆土は下部にいくほど褐色の強い堆積層に変容していく。第24層直下の覆土4・5層は、土坑覆土ではなく、第24層の一部もしくは別の堆積層である。

[出土遺物]土器は646.8g、剥片石器類は78.4gほど出土している。

配石遺構の北東の緑石上に土器片がまとまって出土した。復元したところ、深鉢形土器と、浅鉢形土器であった。深鉢形土器(図54-1)は、二山状突起を一単位持つ。口縁が内傾し、口唇形状は平坦である。LR縄文が施文されている。補修孔をもち、内面底部付近に炭化物が付着している。底部は高台である。図54-6の浅鉢形土器は、口縁部に羊歯状文が展開し、R無節縄文が施文されている。底部は上げ底状であり、内外面にミガキが見られる。覆土中層から下層にかけて、縄文時代中期円筒上層e式と思われる土器片(図54-2～5)が出土している。胎土の様相などから、同一個体と思われる。

土坑底面から、緑色凝灰岩製の玉が34点出土し、内21点図化した(図54-7～27)。図化しなかった資料は、破損が著しいものである。玉を検出した段階で、すでに掘りあげた土壌、並びに底面の土壌も回収し、水洗洗浄を行った。しかし、緑色凝灰岩の断片が回収される程度であったので、それ以上はなかったと思われる。

玉はちらばったような状態で検出できた。その中で2箇所まとまった範囲が確認されている。ひとつは、盛り上がったように遺物が確認されている(図47、玉26・27)。もうひとつは、数珠繋ぎのような状態で検出されている(口絵4・図47、玉18～24)。数珠繋ぎの玉の検出は青森市(旧浪岡町)平野遺跡で確認され、こちらは赤い糸が確認されている。

玉は2点の片面穿孔(図54-14・15)を除き、両面穿孔である。小口面は幾分丸みを帯びている。

図54-27は勾玉風の形状である。両面穿孔である。

[小結]配石遺構脇で検出された土器が晩期2期に相当することから、縄文時代晩期前半の遺構と考えられる。

(高橋)

第22号配石遺構 (略号: SQ22、図49・55)

[位置・確認] VH-33グリッドに位置し、第1号盛土遺構の第19層で確認した。

[重複]第31号配石遺構と隣接している。

[規模・形状・下部構造]小礫を不規則に覆土上層に配置している。その下部には大形の礫が配置されている。礫下部には土坑が掘り込まれている。径1.07×0.74m、深さ0.45mの楕円形を呈し、底径は0.69×0.46mの袋状である。配石の石材は現場所見で堆積岩系である。

[堆積土]覆土は7枚確認できた。黒褐色・暗褐色のシルト層である。セクションでは、覆土3と5が柱痕状にみえる。その部分から多くの遺物が出土している。

[出土遺物]土器は5,356.6g、剥片石器類は238.6gほど出している。

図55-1・2は粗製深鉢形土器の口縁部片である。図55-3は鉢形土器の口縁部片である。図55-4・6は入組三又文が施される鉢形土器の体部片で、同一個体である。図55-5・7・8は鉢形土器の同一個体片で、図55-8は口縁部片、図55-5・7は体部片である。第1号盛土遺構第24層出土の図90-10も同一個体である。端部が渦巻く三又文や弧線文が施されており、文様帯の下端を区切る横位沈線は部分的に「ノ」の字状に垂下する。図55-9・10は無文土器、図55-11は沈線と縄文施文と無文部を持つ体部片である。図55-12から15は注口形土器の口縁部片や頸部片であり、13から15は同一個体片である。図55-12は横位沈線間に「C」字状の刻目列が施文され、器面は丁寧なミガキ調整が施されている。図55-13から15は口縁に突起をもち、横位沈線間の刻目列や入組文が施される。器面は図55-12と同様に丁寧にミガキ調整が行われている。図55-16は注口形土器の注口部である。図55-12もしくは図55-13から15と同一個体の可能性があるが、判然としない。図55-17・18は同一個体と思われる体部片で、条痕が施されている。図55-19・20は底部片である。図55-22は口縁部と体部下半それぞれ出土した同一個体と思われる深鉢形土器である。器面には横方向の条痕が施文されている。体部上半の内面に炭化物が見られる。図55-23は鉢形土器であり、体部上半が内傾し、口縁部が外反する。内外面にナデやケズリが見られる。また内外面に炭化物が付着している。図55-21は縄文時代中期後半の深鉢形土器体部片である。

[小結]出土遺物から、縄文時代晩期前半の遺構と考えられる。

(高橋)

第23号配石遺構 (略号: SQ23、図49)

[位置・確認] VI-32グリッドに位置し、第1号盛土遺構の第19層で確認した。

[重複]なし。

[規模・形状・下部構造]上面で小礫を確認し、掘り進めると大形の礫が1点確認できた。礫下部には浅い土坑が掘り込まれている。径が1.04×0.85m、底径0.62×0.56m、深さ0.24mである。配石の石

材は現場所見で堆積岩系である。

[堆積土] 暗褐色土の覆土が3枚確認できた。

[出土遺物] 遺物は出土していない。

[小結] 出土遺物と検出状況から、縄文時代晩期前半の遺構と考えられる。

(高橋)

第25号配石遺構 (略号: SQ25、図49・56)

[位置・確認] VH-33・34グリッドに位置し、第1号盛土遺構の第24層で確認した。

[重複] なし。

[規模・形状・下部構造] 上面で小口立ちをしている大形礫を確認した。当初覆土5層が黄褐色土のため、2つの土坑が切り合っていると考えたが、覆土5層が純粋な地山ではなく、にごった土であることと、プランなどから2つの土坑に区分は難しいので、一つの土坑として扱った。径が1.03×1.02m、底径0.78×0.49m、深さ0.40mである。配石の石材は現場所見で堆積岩や花崗閃緑岩あるいは花崗岩である。

[堆積土] 黒褐色から暗褐色土の層を主体的に確認した。

[出土遺物] 土器は431.5g、剥片石器類は147.4gほど出土している。

図85-9と同一個体と思われる広口壺形土器の体部片(図56-1)や、注口形土器の口縁部片(図56-2)、深鉢形土器片(図56-3)が出土している。

[小結] 出土遺物から、縄文時代晩期前半の遺構と考えられる。

(高橋)

第26号配石遺構 (略号: SQ26、図50・56)

[位置・確認] VH-32グリッドに位置し、第1号盛土遺構の第24層で確認した。

[重複] 第69号土器埋設遺構との重複が認められる。

[規模・形状・下部構造] 1.34×1.11m楕円形の平面形態を呈し、底径は1.20×1.02mである。深さは0.42mである。覆土上層で大形の礫を中心とした配石が確認され、覆土上層にも若干入り込む。配石の石材は現場所見で堆積岩系である。

[堆積土] 暗褐色から褐色土の覆土が3枚確認できた。覆土1層では大小礫が多数含まれ、下層は礫がほとんど含まれなかった。

[出土遺物] 土器は547.3g、剥片石器類は15gほど出土している。

壺形土器の口縁部片が出土している(図56-4)。内面口唇部近くに沈線が2条巡っている。石器は有茎鏃(図56-5)と、石製円盤(図56-6)が出土している。石製円盤の側面が研磨整形されている。

[小結] 出土遺物から、縄文時代晩期前半の遺構と考えられる。

(高橋)

第27号配石遺構 (略号: SQ27、図51・56)

[位置・確認] VH-32に位置し、第1号盛土遺構の第24層で確認した。第21号配石遺構の南側に位置する。

[重複]なし。

[規模・形状・下部構造] 中心の立石は扁平な河原礫を用いている。平らな面を南北に面するように埋めている。周辺の緑石は円形になるように並べており、その間の置石は放射状に配置しているが、隙間なく詰めて配置していない。全体に石の配置は乱れているが、配石遺構の構築時から、後日何らかの影響で乱れたのかは判断できなかった。立石の根元には、第21号配石遺構のような根固めと思われる小礫は確認できなかった(口絵3)。

配石の下部には土坑が掘られている。径1.43×1.12mの楕円形であり、底径は1.07×0.65mである。深さは地山面から0.3mである。土坑認定は第21号配石遺構同様に平面図を作成した後、立石を中心に半截ラインを決定した。そして地山面まで下げ、そのまま土坑プラン内も底面まで半截した。セクション図を作成した後、セクション部分をベルト状に残し、配石を取り除き、その面で清掃したところ、配石遺構の下は、他の堆積層と比較し、黒色土の中に黄褐色土粒を含む部分が認められ、この部分が土坑の掘り方と判断した。

配石の礫は、松山調査員に石質鑑定を依頼したところ、中心の立石は安山岩であり、置石は凝灰岩・砂岩・粗粒玄武岩・閃緑岩、緑石は緑色凝灰岩・閃緑岩・砂岩・安山岩・デイサイトなどで構成されていることが判明した(表3)。礫石器の素材などと大きく逸脱するような石材でないため、遺跡近隣から運び込んだ礫を素材として用いていたと考えられる。なお、拳よりも小さな礫については石材鑑定を行わなかった。

表3 第27号配石遺構の配石石材

番号	石材	石の配置
1	緑色凝灰岩	緑石
2	安山岩	緑石
3	安山岩	
4	—	緑石
5	閃緑岩	緑石
6	砂岩	緑石
7	凝灰岩	緑石
8	砂岩	緑石
9	凝灰岩	緑石
10	閃緑岩	
11	安山岩	緑石
12	デイサイト	緑石
13	—	
14	凝灰岩	置石
15	安山岩	
16	凝灰岩	置石

番号	石材	石の配置
17	砂岩	置石
18	粗粒玄武岩	置石
19	安山岩	立石
20	砂岩	置石
21	凝灰岩	置石
22	閃緑岩	置石
23	緑色角礫凝灰岩	置石
24	砂岩	置石
25	安山岩	置石
26	砂岩	置石
27	—	置石
28	—	
29	砂岩	
30	—	
31	安山岩	
32	—	

番号	石材	石の配置
33	凝灰岩	
34	—	
35	—	
36	凝灰岩	
37	緑色凝灰岩	
38	安山岩	
39	凝灰岩	
40	花崗閃緑岩	
41	緑色凝灰岩	
42	凝灰岩	

[堆積土] 覆土は6枚確認した。黒褐色・暗褐色のシルト質であり、褐色粒を含んでいる。土坑覆土1層と第1号盛土遺構の第24層の境界は平面では褐色土により境界がみられたが、セクションでは不明確で境界線から推定の土坑立ち上りを破線ラインで表現している。

土坑覆土のリン・カルシウム分析を行った。試料の採集は、覆土の上層(覆土1層)・中層(覆土3層)・下層(覆土5上層)・最下層(覆土5下層)の4箇所採取し、さらに掘り方外の第24層から

も採取した。その結果、覆土の下部にリン・カルシウムの高い値が確認され、第24層からは低い値が確認できた。分析結果から遺体が埋葬されていた可能性が高い報告を受けている。分析成果の詳細は平成28年度に刊行予定の報告書に掲載される予定である。

[出土遺物]土器は197.9g、剥片石器類は196.2gほど出土している。

高い高台を持つ、無文の底部片が出土している(図56-7)。セクションベルトの覆土最下層の坑底近くから横形石匙が1点出土している(図56-8)。

[小結]出土遺物から、縄文時代晩期前半の遺構と考えられる。

(高橋)

第28号配石遺構(略号:SQ28、図50)

[位置・確認・重複]V1-32・33グリッドに位置し、第1号盛土遺構の第19層で確認した。

[重複]なし。

[規模・形状・下部構造]土坑は0.96×0.83mの円形に近く、底径は0.57×0.55mであり、底面は比較的平坦である。深さは0.35mである。覆土上面に大形の礫が一直線に配置され、その周囲に小規模の礫が配置されている。配石の石材は現場所見で堆積岩系である。

[堆積土]黒褐色、暗褐色、黄褐色土の覆土が9枚確認されている。人為堆積である。

[出土遺物]土器は125.4g出土しているが、時期など明瞭な遺物はない。

[小結]検出位置と規格などから、縄文時代晩期前半の遺構と考えられる。

(高橋)

第29号配石遺構(略号:SQ29、図52・56)

[位置・確認・重複]VH-33グリッドに位置し、第1号盛土遺構の第24層で確認した。

[重複]なし。

[規模・形状・下部構造]大形の礫が不揃いに配置されている。径1.16×0.99m、底径0.70×0.58mであり、深さ0.39mである。

[堆積土]黒褐色土である。土坑中心部分の底が窪んでいる。その窪みを避けるように上面で礫が検出されており、来年度刊行の報告書で詳述するような柱穴の構造に類似している。ただ柱穴遺構の多くは地山が履層部分で検出されているが、この配石遺構は地山シルト質層に構築されており、構築する立地が異なる上、近隣に組み合わせるような遺構が検出されていないので、配石遺構の一つと判断した。配石の石材は現場所見で堆積岩系である。

[出土遺物]土器は1,146.3g、剥片石器類は87.4gほど出土している。中期の土器片(図56-9)が1点、有茎籬(図56-10・11)、磨石(図56-12)が出土している。

[小結]晩期の遺物は出土していないが、遺構の検出地点と規格などから、縄文時代晩期前半の遺構と考えられる。

(高橋)

第30号配石遺構 (略号: SQ30、図52)

[位置・確認・重複] VI-33グリッドに位置し、第1号盛土遺構の第24層で確認した。

[重複]なし。

[規模・形状・下部構造] 大形の礫が不揃いに配置されている。径1.04×0.95mの円形で、底径は0.90×0.81m、深さ0.22mである。覆土上面で大形礫が一直線に並んで検出できた。配石の石材は現場所見で堆積岩や花崗閃緑岩あるいは花崗岩である。

[堆積土] 褐色土が主体の覆土が5枚確認されている。

[出土遺物] 時期など明瞭な遺物は出土しなかった。

[小結] 検出位置と規格などから、縄文時代晩期前半の遺構と考えられる。

(高橋)

第31号配石遺構 (略号: SQ31、図52)

[位置・確認・重複] VII-33グリッドに位置し、第1号盛土遺構の第24層で確認した。

[重複]なし。第22号配石遺構と隣接している。

[規模・形状・下部構造] 大形の扁平な礫が1枚土坑上部を覆っている。0.47×0.37mの径であり、深さは0.24mと浅い。単なる浅い落ち込みもとれるが、上面に大形の扁平礫が土坑を覆うように検出できたので、配石遺構として扱った。配石の石材は現場所見で堆積岩系である。

[堆積土] 黄褐色土が主体的である。

[出土遺物] 土器は27g、剥片石器類は9.1gほど出土している。時期など明瞭な遺物は出土しなかった。

[小結] 検出位置と規格などから、縄文時代晩期前半の遺構と考えられる。

(高橋)

第32号配石遺構 (略号: SQ32、図52・56)

[位置・確認・重複] VII-33グリッドに位置し、第1号盛土遺構の第24層で確認した。

[重複]なし。

[規模・形状・下部構造] 大形の礫が1点小口立ちしているので、半截をかけたところ、土坑が確認でき、配石遺構と認定した。径0.64×0.44m、底径0.52×0.34m、深さ0.32mである。配石の石材は現場所見で堆積岩系である。

[堆積土] 暗褐色、黄褐色土の覆土である。

[出土遺物] 土器は181.4g、剥片石器は54.8g出土している。粗製深鉢形土器(図56-13)が出土している。外面に炭化物が付着している。

[小結] 出土遺物から、縄文時代晩期前半の遺構と考えられる。

(高橋)

第42号配石 (略号: SQ42、図53・57) (旧第10号建物跡)

[位置・確認] VK-33に位置し、第III層掘り下げ中に確認した。

[重複] 第15号土坑上面で検出したので、同遺構より新しい。

[規模・形状] 南北に58cm、東西に72cmの範囲でコの字状に置かれた8点の礎から構成される。その周囲は若干、硬化した面となっていたが、建物跡の床面とは判断できない。

[出土遺物] 土器は15.6g、剥片石器類は59gほど出土している。縄文時代晩期前葉の注口形土器(図57-3)が出土した。図57-4は石製円盤であり、アスファルトが付着している。

[小結] 伴出土器から、縄文時代晩期前葉に構築されたと考えられる。形状は石囲炉に類似するが、焼土が無く、周辺に柱穴が確認できないことから配石遺構と判断した。

(齋藤)

第44号配石遺構(旧第19号土坑)(略号:SQ44、図52・57)

[位置・確認・重複] VJ-34グリッドに位置し、第1号盛土遺構の第23層で確認した。他の配石遺構から少し離れた地点での検出である。

[重複] なし。

[規模・形状・下部構造] 扁平な大形礎が立った状態で確認できた(写真53)。配石の石材は緑色凝灰岩である。この礎には使用した痕跡も、製作痕も残されていないので、自然礎と判断した。土坑径は0.44×0.38m、底径0.21×0.18m、深さ0.25mで、袋状を呈する。

[堆積土] 褐色や暗褐色土の覆土が確認できた。

[出土遺物] 同一個体と思われる珪質頁岩製の剥片が出土した。重量は693.8gである。接合を試みたところ、亜角礫の原石(図57-1)であった。何箇所か抜けている部分があるので、表皮を取り除き、芯となる良質な部分を取り出したと考えられる。

[小結] 土器が出土していないので、明確な時期は不明であるが、遺構の性格から晩期前半と考えられる。なお秋田県北秋田市向塚田D遺跡の2次調査において、類似した遺構が検出され、こちらは立石遺構と称されている(秋田県2010)。

(高橋)

第45号配石遺構(略号:SQ45、図53・56)

[位置・確認・重複] VH-34グリッドに位置し、第1号盛土遺構の第20層で確認した。

[重複] 第47号土坑よりも新しい。

[規模・形状・下部構造] 径0.77×0.54m、底径0.71×0.4mの楕円形であり、深さ0.35mである。土坑上面でひとつの大形礎が土坑中心に配置されている。配石の石材は現場所見で堆積岩系である。

[堆積土] 5枚の覆土を確認した。

[出土遺物] 土器は121g、剥片石器は30g出土した。壺形土器の頸部(図56-14)が出土している。

[小結] 検出位置と規格などから、縄文時代晩期前半の遺構と考えられる。

(高橋)

第46号配石遺構(旧第51号土坑)(略号:SQ46、図53・57)

[位置・確認・重複] VI-33グリッドに位置し、第Ⅲ層で確認した。

[重複] 中期の第23号土坑に切られた状態で検出されているが、この遺跡で配石遺構がほぼ晩期に属す

るので、本来はこちらの遺構が新しいと思われる。

[規模・形状・下部構造] 径1.22×0.97m、底径1.12×0.72m、深さ0.17mである。土坑中心に小口立ちをしている大形の扁平礫が確認されている。配石の石材は現場所見で堆積岩や花崗閃緑岩あるいは花崗岩である。

[堆積土] 4枚の覆土が確認できた。褐色・黄褐色土の覆土である。

[出土遺物] 土器は36.1g、凹石(図57-2)が1点出土している。

[小結] 明確な時期は不明であるが、検出状況から、晩期前半と考えられる。

(高橋)

第47号配石遺構(旧第1365号ピット)(略号:SQ47、図53)

[位置・確認・重複] VI-33グリッドに位置し、第1号盛土遺構の第24層で確認した。

[重複] なし。

[規模・形状・下部構造] 径0.69×0.61mの円形であり、底径0.54×0.40m、深さ0.38mである。覆土上面で2点の礫が寄り添うように配置されている。配石の石材は現場所見で堆積岩系である。

[堆積土] 4枚の覆土が検出され、暗褐色・黒褐色・黄褐色土である。

[出土遺物] 遺物は出土していない。

[小結] 検出位置と規格などから、縄文時代晩期前半の遺構と考えられる。

(高橋)

4 土器埋設遺構

土器埋設遺構は25基検出され、VH・K-30から35グリッドに多くが分布する(図44)。第51号土器埋設遺構のみVN-26という岬状の先端部に確認できた。分布は比較的散漫であるが、おおむね配石遺構群の北側に分布する。第1号埋設土器遺構の範囲外の土器埋設遺構は、堆積層の一部が削平されているのか、土器の欠損が著しい。

また、整理の過程で、土器埋設遺構と判断できないものもあるので、それらは欠番扱いとした。欠番の土器埋設遺構は、第72号土器埋設遺構である。

第50号土器埋設遺構(略号:SR50、図58・64)

[位置・確認] VH-35グリッドに位置し、第1号盛土遺構の第2層で確認した。

[重複] 他遺構との重複は認められなかった。

[瓶方・土器埋設状況] 土器は正位状態で埋設されていた。埋設土器の口縁部を覆うように礫が回っている。

[埋設された土器](図64-1)口縁部の一部が破損している。口縁は内傾し、口唇形状は丸みを帯び、底部は平底である。RL斜行縄文が施文され、内外面に炭化物が付着している。縄文晩期の粗製土器と考えられる。

[堆積土] 土器内部には黒色土が堆積していた。

[伴出遺物] 土器内の覆土から剥片石器類が59.3gほど出土している。製品類はない。意図的に埋納

したかは判断できなかった。

[小結]埋設された土器の特徴から縄文時代晩期の遺構である。第1号盛土遺構の第2層は晩期前葉の土器がまとまって出土しており、上に第1号盛土遺構の晩期後半期の堆積土が乗っているの、掘り込み面を考慮すれば晩期前半と考えられる。

第51号土器埋設遺構 (略号: SR51、図58・64)

[位置・確認] VN-26グリッドに位置し、第Ⅲ層で確認した。台地の北西隅突端部に単独1基と、他の土器埋設遺構の分布から離れて立地している。

[重複]他遺構との重複は認められなかった。

[掘方・土器埋設状況]土器は正位状態で埋設されていた。掘り方に扁平な鏝が置かれていた。木の根による破損が著しい。

[埋設された土器] (図64-8) 底部と体部片のみであり、口縁部が欠損している。そのため、全体を復元できなかった。接合しなかった破片もかなり出土している。底部は推定で平底である。LR斜行縄文が施文されている。縄文晩期の粗製土器と考えられる。

[堆積土]土器内部には黒色土が堆積していた。

[伴出遺物]埋納物なし。

[小結]埋設された土器の特徴から、縄文時代晩期の遺構である。

第52号土器埋設遺構 (略号: SR52、図58・64)

[位置・確認] VK-30グリッドに位置している。

[重複]第11号建物跡内にて確認したので第11号建物跡との重複が認められ、埋設土器のほうが新しい。

[掘方・土器埋設状況]土器は正位状態で埋設されていた。

[埋設された土器] (図64-2) 底部と胴部が接合しなかった。内傾する口縁であり、口唇部は平坦口縁である。縦走するRL縄文が施文され、底部は平底である。内外面に炭化物が付着している。縄文晩期の粗製土器と考えられる。

[堆積土]土器内部には褐色土が3枚に分かれて堆積していた。

[伴出遺物]埋納物なし。

[小結]埋設された土器の特徴から、縄文時代晩期の遺構である。

第53号土器埋設遺構 (略号: SR53、図58・64)

[位置・確認] VI-33グリッドに位置し、第1号盛土遺構の第19層で確認した。

[重複]他遺構との重複は認められなかった。

[掘方・土器埋設状況]土器はやや南に傾いた斜位状態で埋設されていた。

[埋設された土器] (図64-3) 器種は壺形土器であり、全体の破損が著しく、全体を復元できなかった。頸部と体部の境に沈線が1条巡る。LR縄文が施文され、底部は平底である。口縁部は欠損していた。縄文晩期の粗製壺形土器と考えられる。

[堆積土]黒褐色の土層が確認できた。

[伴出遺物]埋納物なし。

[小結]埋設された土器の特徴から、縄文時代晩期の遺構である。

第54号土器埋設遺構（略号：SR54、図59・64）

[位置・確認]VJ-33・34グリッドに位置し、第1号盛土遺構の第19層で確認した。木の根による破損が著しい。

[重複]他遺構との重複は認められなかった。

[掘方・土器埋設状況]土器は、正位状態で埋設されていたと思われる。

[埋設された土器]（図64-10）全体の破損が著しく、土器片は多量に出土したが、復元はほとんどできなかつたので、口縁部のみ資料化した。LR縄文が施文された、外反する口縁を持ち、縄文晩期の粗製土器と考えられる。

[堆積土]黒褐色土の土層が確認されている。

[伴出遺物]埋納物なし。

[小結]埋設された土器の特徴から、縄文時代晩期の遺構である。

第55号土器埋設遺構（略号：SR55、図59・64）

[位置・確認]VJ-30グリッドに位置している。

[重複]第11号建物跡にて確認し、埋設土器のほうが新しい。

[掘方・土器埋設状況]土器は正位状態で埋設されていた。検出状況から、口縁部は削平されたと思われる、底部のみ確認できた。

[埋設された土器]（図64-7）破損が著しく、全体を復元できなかつた。底部のみが復元でき、平底であった。縄文晩期の粗製土器と考えられる。

[堆積土]暗褐色土の土層が確認されている。

[伴出遺物]埋納物なし。

[小結]埋設された土器の特徴から、縄文時代晩期の遺構である。

第56号土器埋設遺構（略号：SR56、図59・64）

[位置・確認]VJ-32グリッドに位置し、地山で確認した。木の根による破損が著しい。

[重複]他遺構との重複は認められなかった。

[掘方・土器埋設状況]土器は正位状態で埋設されていた。

[埋設された土器]（図64-9）全体の破損が著しく、土器片は多量に出土したが、復元はほとんどできなかつた。その中で比較的大形の土器片のみ図化した。LR縄文が施文されている。縄文晩期の粗製土器と考えられる。

[堆積土]暗褐色土、黒褐色土、黄褐色土が確認されている。

[伴出遺物]埋納物なし。

[小結]埋設された土器の特徴から、縄文時代晩期の遺構である。

第57号土器埋設遺構 (略号: SR57、図59・64)

[位置・確認] VJ-35グリッドに位置し、地山で確認した。台地の縁の傾斜面にあり、ほぼ北捨て場内で確認されたことになる。

[重複]他遺構との重複は認められなかった。

[掘方・土器埋設状況]土器は正位状態で埋設されていた。

[埋設された土器] (図64-5) 口縁部が欠損しており、全体を復元できなかった。LR斜行縄文が施文され、底部は高台が見られる。縄文晩期の粗製壺形土器と考えられる。

[堆積土] 暗褐色土や黒褐色土の土層が確認されている。検出面の周辺には大小の礫が埋設土器を取り囲むように確認できた。

[伴出遺物]埋納物なし。

[小結]埋設された土器の特徴から、縄文時代晩期の遺構である。

第58号土器埋設遺構 (略号: SR58、図60・64)

[位置・確認] VJ・K-34グリッドに位置し、第1号盛土遺構の第23層で確認した。

[重複]他遺構との重複は認められなかった。

[掘方・土器埋設状況]土器は正位状態で埋設されていた。

[埋設された土器] (図64-4) 口縁部が破損しており、全体を復元できなかった。RL縦走縄文が施文されている。底部は平底であり、内外面に炭化物が付着している。縄文晩期の粗製土器と考えられる。

[堆積土] 褐色土や暗褐色土の土層が確認できた。

[伴出遺物]剥片石器類が0.5gほど土器内から出土している。

[小結]埋設された土器の特徴から、縄文時代晩期の遺構である。

第59号土器埋設遺構 (略号: SR59、図60・64)

[位置・確認] VK-34グリッドに位置し、第1号盛土遺構の第23層で確認した。

[重複]他遺構との重複は認められなかった。

[掘方・土器埋設状況]土器はやや北に傾いた正位状態で埋設されていた。

[埋設された土器] (図64-6) 口縁部の破損があり、全体を復元できなかった。RL縄文が施文され、底部は平底である。内面に炭化物が付着している。縄文晩期の粗製土器と考えられる。

[堆積土] 褐色土や暗褐色土の土層が確認できた。

[伴出遺物]埋納物なし。

[小結]埋設された土器の特徴から、縄文時代晩期の遺構である。

第60号土器埋設遺構 (略号: SR60、図60・65)

[位置・確認] VI-34グリッドに位置し、第1号盛土遺構の第19層で確認した。

[重複]他遺構との重複は認められなかった。

[掘方・土器埋設状況]土器は正位状態で埋設されていた。

[埋設された土器] (図65-1) 破損が著しく、全体を復元できなかった。内傾する平坦口縁を持ち、

B突起を持つ。LR斜行縄文が施文され、内外面に炭化物が付着している。縄文晩期の粗製土器と考えられる。

[堆積土] 掘り方、土器内部に黒・暗褐色土が見られる。

[伴出遺物]埋納物なし。

[小結]埋設された土器の特徴から、縄文時代晩期の遺構である。

第61号土器埋設遺構 (略号: SR61、図60・65)

[位置・確認] VJ-33グリッドに位置し、第1号盛土遺構の第23・30層で確認した。

[重複]他遺構との重複は認められなかった。

[掘方・土器埋設状況]土器は正位状態で埋設されていた。

[埋設された土器] (図65-2) 体部が出土し、器面に条痕文が見られる。口縁は欠損しているが、体部の傾きから内傾口縁と思われる。底部は欠損している。縄文晩期の粗製土器と考えられる。

[堆積土] 掘り方、土器内部に暗褐色土が見られる。

[伴出遺物] 埋設土器内部から石製円盤(図65-3)が出土している。剥離による整形後、側面に研磨整形がなされている。正面に黒色の付着物が見られる。

[小結]埋設された土器の特徴から、縄文時代晩期の遺構である。

第62号土器埋設遺構 (略号: SR62、図61・65)

[位置・確認] VJ-34グリッドに位置している。

[重複]第28号土坑(中期遺構)で確認した。第28号土坑より新しい。

[掘方・土器埋設状況]土器は正位状態で埋設されていた。

[埋設された土器] (図65-6) 内傾する平坦口縁を持つ深鉢形土器である。底部は上げ底である。ほぼ完形の状態であった。縄文晩期の粗製土器と考えられる。

[堆積土] 掘り方、土器内部に暗褐色土が見られる。

[伴出遺物]埋納物なし。

[小結]埋設された土器の特徴から、縄文時代晩期の遺構である。

第63号土器埋設遺構 (略号: SR63、図61・65)

[位置・確認] VJ-31・32グリッドに位置し、地山で確認した。巨木の下から検出され、全体の破損などは著しい。

[重複]他遺構との重複は認められなかった。

[掘方・土器埋設状況]土器は正位状態で埋設されていた。

[埋設された土器] (図65-4) 口縁から底部まで半分の状態を確認できた。口縁は内傾する平坦口縁であり、RL縦走縄文が施文され、底部は上げ底状である。縄文晩期の粗製土器と考えられる。

[堆積土] 掘り方に褐色・黄褐色土が見られる。

[伴出遺物]埋納物なし。

[小結]埋設された土器の特徴から、縄文時代晩期の遺構である。

第64号土器埋設遺構 (略号: SR64、図61・65)

[位置・確認] VI-35グリッドに位置し、第1号盛土遺構の第30層で確認した。

[重複]他遺構との重複は認められなかった。

[掘方・土器埋設状況]土器は正位状態で埋設されていた。

[埋設された土器] (図65-5) ほぼ完全な状態である。内傾する波状口縁である。縦走するLR縄文が施文され、底部は平底である。内外面に炭化物が付着している。縄文晩期の粗製土器と考えられる。

[堆積土] 掘り方、土器内部に暗褐色土が見られる。

[伴出遺物]埋納物なし。

[小結]埋設された土器の特徴から、縄文時代晩期の遺構である。

第65号土器埋設遺構 (略号: SR65、図62・66)

[位置・確認] VJ-34グリッドに位置している。

[重複]第28号土坑(中期遺構)で確認した。第28号土坑より新しい。

[掘方・土器埋設状況]土器は正位状態で埋設されていた。

[埋設された土器] (図66-1) ほぼ完全な状態である。口唇部にB突起が貼り付けてある。内傾する平坦口縁であり、RL縄文が施文されている。底部は平底である。内外面に炭化物が付着している。縄文晩期の粗製土器と考えられる。

[堆積土]掘り方、土器内部に暗褐色土が見られる。覆土を上層(覆土1層)・中層(覆土2層)・下層(覆土3層)の3カ所でリン・カルシウム分析を行ったところ、リンと共にカルシウムも多く含む箇所が検出された。骨・歯が存在した可能性がある。分析成果は平成28年度に刊行予定の報告書に掲載される予定である。

[伴出遺物]埋納物なし。

[小結]埋設された土器の特徴から、縄文時代晩期の遺構である。

第66号土器埋設遺構 (略号: SR66・図66)

[位置・確認・重複] VI-35グリッドで検出できた。横倒しの状態であり、はじめ埋設土器と認定したが、掘り方などが明瞭にみとめられず、最終的にグリッド上げた。ただこの一帯で、完形に近い深鉢形土器が出土した事例はないので、埋設土器の可能性を含め、この部分で掲載した。

[土器] (図66-2) ほぼ完全な状態である。直立する平坦口縁であり、LR斜行縄文が施文されている。底部は高台が付く。内外面に炭化物が付着している。縄文晩期の粗製土器と考えられる。

[伴出遺物]剥片石器類が51.9gほど土器内から出土している。

第67号土器埋設遺構 (略号: SR67、図28・66)

[位置・確認] VI-35グリッドに位置した。

[重複]第22号土坑(晩期遺構)で確認し、第22号土坑よりも新しい。

[掘方・土器埋設状況]土器は倒立状態で埋設されていた。

[埋設された土器] (図66-4) 底部が欠損している以外はほぼ完全な状態である。口縁部は無文であ

り、軽く外反する。体部にはLR斜行縄文が施文されている。縄文晩期の粗製壺形土器と考えられる。

[堆積土] 掘り方、土器内部に暗褐色土が見られる。

[伴出遺物] 埋納物なし。

[小結] 埋設された土器の特徴から、縄文時代晩期の遺構である。

第68号土器埋設遺構 (略号: SR68、図62・66)

[位置・確認] VJ-34グリッドに位置している。

[重複] 第28号土坑(中期遺構)で確認した。第28号土坑より新しい。

[掘方・土器埋設状況] 土器は正位状態で埋設されていた。掘り方が認められなかった。

[埋設された土器] (図66-3) 深鉢形土器の平底形状の底部である。外面に炭化物が付着している。縄文晩期の粗製土器と考えられる。図化しなかったが、この土器と混在して壺形土器の体部片が出土している。

[伴出遺物] 埋納物なし。

[小結] 埋設された土器の特徴から、縄文時代晩期の遺構である。土器埋設遺構でない可能性もある。

第69号土器埋設遺構 (略号: SR69、図50・66)

[位置・確認] VH-32グリッドに位置した。

[重複] 第26号配石遺構(晩期遺構)で確認し、第26号配石遺構よりも新しい。

[掘方・土器埋設状況] 土器は正位状態で埋設されていた。

[埋設された土器] (図66-6) 深鉢形土器であり、口縁部は欠損している。底部は上げ底であり、RL縦走縄文が施文されている。内外面に炭化物が付着している。縄文晩期の粗製深鉢形土器と考えられる。

[堆積土] 掘り方、土器内部に暗褐色土が見られる。

[伴出遺物] 剥片石器類が11.9gほど出土している。

[小結] 埋設された土器の特徴から、縄文時代晩期の遺構である。

第70号土器埋設遺構 (略号: SR70、図62・66)

[位置・確認] VH-33グリッドに位置し、第1号盛土遺構の第24層で確認した。

[重複] 他遺構との重複は認められなかった。

[掘方・土器埋設状況] 土器は正位状態で埋設されていた。

[埋設された土器] (図66-5) 木の根による破損が著しいが、ほぼ完全な状態である。ほぼ直立する口縁を持ち、口唇形状は幾分丸みを持つ。口唇部にB突起が2つ並んで貼り付けられている。体部には縦走する条痕文がみられ、底部には高台が付着している。縄文晩期の条痕文の深鉢形土器と考えられる。

[堆積土] 掘り方、土器内部に暗褐色土が見られる。

[伴出遺物] 埋納物なし。

[小結] 埋設された土器の特徴から、縄文時代晩期の遺構である。

第71号土器埋設遺構（略号：SR71、図63・67）

[位置・確認] VI-32グリッドに位置し地山で確認した。

[重複]他遺構との重複は認められなかった。

[掘方・土器埋設状況]土器は正位状態で埋設されていた。

[埋設された土器]（図67-1）口縁部は欠損しているが、形状から内傾する口縁を持つ。RL縄文が施文され、底部は上げ底である。縄文晩期の粗製深鉢形土器と考えられる。

[堆積土]掘り方、土器内部に暗褐色土が見られる。

[伴出遺物]剥片石器類が3.3gほど出土している。

[小結]埋設された土器の特徴から、縄文時代晩期の遺構である。

第73号土器埋設遺構（略号：SR73、図63・67）

[位置・確認] VK-31グリッドに位置し地山で確認した。

[重複]他遺構との重複は認められなかった。

[掘方・土器埋設状況]土器は正位状態で埋設されていた。

[埋設された土器]（図67-2）縄文晩期の粗製土器と考えられる底部であり、平底である。表面の摩滅が著しく地文などは不明である。

[堆積土]掘り方、土器内部に褐色土、黄褐色土が見られる。

[伴出遺物]剥片石器類が43.8gほど出土している。

[小結]埋設された土器の特徴から、縄文時代晩期の遺構である。

第74号土器埋設遺構（略号：SR74、図63・67）

[位置・確認] VJ-32グリッドに位置し地山で確認した。

[重複]他遺構との重複は認められなかった。

[掘方・土器埋設状況]土器は横位状態で埋設されていた。

[埋設された土器]（図67-3）括れを持つ鉢形土器であり、底部は高台もしくは台が付着すると思われる。波状口縁を呈し、波状の頂部が平坦と丸みを持つものが並ぶ。LR斜行縄文が施文されており、外面の括れ部に炭化物が付着している。この土器の上部から深鉢形土器（図67-4）が出土している。口縁部と底部が出土し、接合しなかったが多くの土器片が確認されている。内傾口縁で平坦な口唇形状である。底部には高台が付されている。

[堆積土]掘り方、土器内部に褐色土、黄褐色土が見られる。

[伴出遺物]埋納物なし。

[小結]埋設された土器の特徴から、縄文時代晩期の遺構である。

第76号土器埋設遺構（旧Pit1529）（略号：SR76、図63・67）

[位置・確認] VII-33グリッドに位置し地山で確認した。

[重複]他遺構との重複は認められなかった。

[掘方・土器埋設状況]土器は横位状態で埋設されていた。

[埋設された土器] (図67-5) 波状口縁を持つ鉢形土器であり、口縁が外反する。口縁部に塗切れる平行沈線が並んでいる。胴部にはLR斜行縄文が施文され、底部は高台が付されている。内外面に炭化物が付着している。

[堆積土] 掘り方、土器内部に暗褐色土が見られる。

[伴出遺物] 剥片石器類が2.1g出土している。

[小結] 埋設された土器の特徴から、縄文時代晩期の遺構である。

(高橋)

5 焼土遺構

焼土遺構は、赤化した土や炭化物層などが見えた場合に認定したが、硬化面などもみられないことと、検出後、すぐに消失したことなどから焼土ではなかった可能性がある。特に焼土遺構の集中地点なども見受けられない。第1号盛土遺構の下部から検出される事例が多かった(図44)。

また整理の過程で、焼土遺構と判断できないものもあるので、それらは欠番扱いとした。欠番の焼土遺構は、第53号・第55号・第57号焼土遺構である。

第51号焼土遺構(略号: SN51、図44・68・76)

[位置・確認] 第1号盛土遺構のトレンチ7にて検出する。第1-1・1-3層と第2-3層の境(図76南北ベルト東壁)から検出された。第1号盛土遺構の構築に伴う、焼土の廃棄層の可能性もあるが、ここでは遺構として取り扱った。

[重複] 他遺構との重複は認められなかった。

[規模・形状] 分厚い焼土が確認されている(口絵6)。そのまま盛土遺構と共に掘り進めると、北西側に偏った部分に最下面が確認でき、その部分をSN51aとした。しかし、焼けによる硬化面など、その場で焼成した痕跡は確認できなかった。

[堆積土] 20cm近くの厚みがある焼土層であり、掘り込みなどは確認できなかった。

[出土遺物] 土器は1026.5g、剥片石器類は1008.9gほど出土している。なお、礫石器、石製品の重量は含まれていない。

晩期中葉、聖山Ⅱ式に相当する台付鉢が2点、鉢形土器の他に、土器片が出土している。

図68-1の台付鉢形土器は、口縁部に把手と突起を有する。胴部文様には、工字文が4単位展開している。工字文の反転部が、垂直に近い斜め線にて形成されている。胴部と頸部の境には突起が見られる。縄文は縦走に近い、LR斜行縄文である。裾部が広がる背の低い上部が付いている。図68-2は1と類似した器形である。こちらは外面に炭化物が付着している。なお、別の層で取り上げたが、類似器形の土器が第2層から出土している(図88-2)。図68-3は小形の鉢形土器であり、口縁部の括れは無文であり、他はRL縄文が縦走して施文されている。

土器片には、図68-1・2と類似した器形の把手を持ち、工字文が展開する土器(図68-4)、連繫入組文を持つ鉢形土器(図68-5)が出土している。これ以外に雲形文(図68-6)、平行沈線を持つ鉢・深鉢形土器(図68-7~14)、土器底部(図68-15)などが出土している。図68-14は羽状縄文を施文した鉢形土器・もしくは深鉢形土器である。

石器は有茎畿（図68-16）、石錐（図68-17）、縦形石匙（図68-18）が出土している。縦形石匙は摘み部以外に加工はなく、微小剥離痕が見られる。

[小結]出土土器から、晩期中葉以降に推定される。この第51号焼土遺構は、出土遺物が聖山Ⅱ式と思われる横位連続工字文を持つ台付鉢が出土している。

第52号焼土遺構（略号：SN52、図44・69）

[位置・確認]第1号盛土遺構のVH・I-33トレンチ1にて検出した。

[重複]他遺構との重複は認められなかった。

[規模・形状]径0.46×0.53mほどの炭化物層を確認した。

[壁・底面]掘り込み面などはなく、炭化物が薄いレンズ状に堆積しているのみであった。

[堆積土]炭化物層である。

[出土遺物]土器は109.2g、剥片石器類は61.4gほど出土している。なお、礫石器、石製品の重量は含まれていない。

高台を持つ大形深鉢形土器（図69-1）が、遺構検出面の脇から出土している。口縁部は欠損しているが、形状は内傾する口縁部を持つ。

[小結]出土土器から、晩期前半の遺構と考えられる。

第54号焼土遺構（略号：SN54、図44・69）

[位置・確認]第1号盛土遺構の下、トレンチ6、VI-35・36の地山面にて検出した。

[規模・形状]小さな土坑であり、地山面が少し赤色化していた。

[壁・底面]浅い皿状の落ち込みであり、セクション図などは作成しなかった。

[堆積土]幾分赤化した堆積層が薄く確認できた。

[出土遺物]土器は179.9g、剥片石器類は56.9gほど出土している。なお、礫石器、石製品の重量は含まれていない。

壺形土器の口縁部（図69-2）、深鉢形土器の口縁（図69-3）が出土している。

[小結]出土土器から、晩期前半の遺構と考えられる。ただし、焼土遺構でなく、浅い落ち込みの可能性が高い。

第56号焼土遺構（略号：SN56、図71・72）

[位置・確認]第1号盛土遺構のトレンチ4にて検出する。遺構の下にはビットI376がある。2つの遺構を厳密に区分することは難しいので、遺物はビットの方に掲載している。

[規模・形状]遺構の中心に口縁が内傾する深鉢形土器が出土している（図72-5）。

[壁・底面]皿状の堆積土である。

[堆積土]土器内部に焼土粒や炭化物を含む土層が確認できた。

[出土遺物]深鉢形土器（図72-5）は、口縁部が内傾し、口唇形状が平坦であり、高台を持つ形態である。LR斜行縄文が施文され、内外面に炭化物が付着している。

[小結]出土土器などから、晩期前半の遺構と考えられる。

(高橋)

6 ビット (図70~74)

ビットは224基確認されている。第1号盛土遺構下部から検出され、中期遺構群が密集する地域ではほとんど検出できなかった(図5)。中期遺構と重複している場合、検出は困難であるが、地山面にはビットは確認できなかったため、中期遺構群が密集する部分にはビットは掘り込まれていなかったと推定される。各ビットの詳細は表15の方を参照してもらおうとして、ここでは、特記事項のみを記載する。

確認できた多くのビットは図70の上部3基のビット1328・1333・1331のような1枚の覆土を持つビットである。その例外にはビット1353・1395・1369・1376・1434・1437のような柱痕らしき堆積層が見られるビットである。これらのビットは組み合わせるような柱穴の分布はしていないため、この一帯に建物が存在したかは判断できなかった。

ビットの時期について、2基のビット(Pit1376・1379)は、第1号盛土遺構の第20層や第24層(Ⅱ段階、第4章第2節で詳述)の黒色土を掘り込んでいることが確認できた。また、ビットの多くは、配石遺構などの周辺に分布している。

遺物(図72・73)が多量に出土したビットはない。ビット1376から、鉢形土器が出土している。内傾する口縁を持ち、口唇形状は平坦である。底部は高台が付されている。LR斜行縄文が施文され、内外面に炭化物が付着している。ビット1400では、覆土から頂部と台部を欠いた香炉形土器(図73-1)が出土している。これ以外に羊歯状文を持つ鉢形土器(図72-1)、C字文を基調とする文様を持つ壺形土器(図72-8)、渦巻文を持つ壺形土器の胴部片(図72-9)、羊歯状文を持つ注口形土器の断片(図73-2)、短沈線列を持つ深鉢形土器の口縁部片(図73-3)、三叉文を持つ深鉢形土器(図73-10)、横位沈線間刺突列を持つ深鉢形土器の口縁部片(図74-1)など後期後葉から晩期前半期に属する遺物が出土している。

石器は石核、石鏃、石錐、凹石などが出土している。ビット1421出土の両面加工の剥片石器(図73-9)は、縦長剥片の両辺に非常に薄い平坦剝離で整形しているため、石鏃の未成品と思われる。

これらのビットの構築時期であるが、配石遺構など晩期遺構の周辺に集中していること、確認できただけで掘り込み面が晩期前半期の層であること、出土遺物の大半が晩期前半であることなどから、晩期前半と推定され、晩期後半に属するのは晩期後半の土器が出土したビット1559のみである。

しかし、明確な時期のわかるビットは少なく、大半は後期後葉から晩期にかけて構築されたと考えられる。

(高橋)

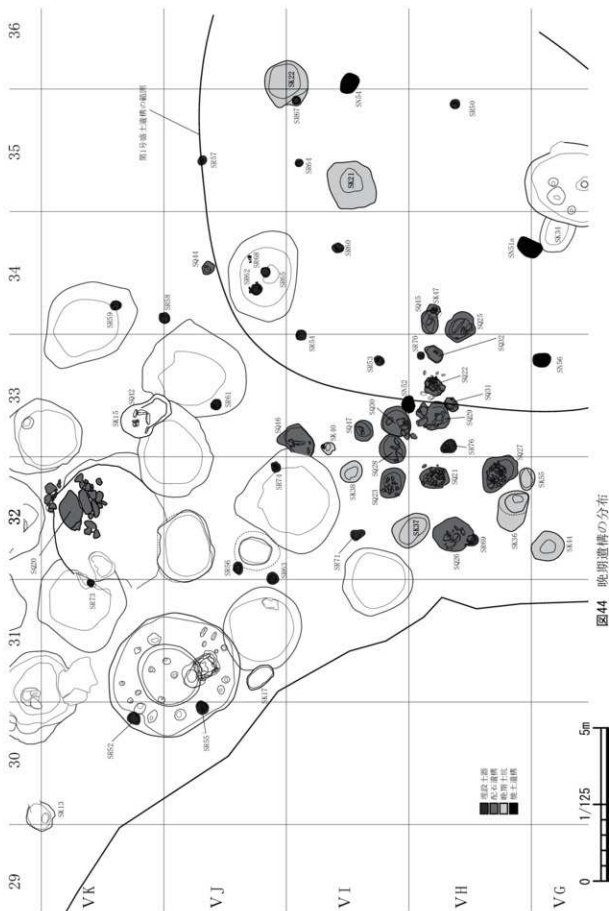


図44 晩期遺構の分布

SQ20 (S=1/20)

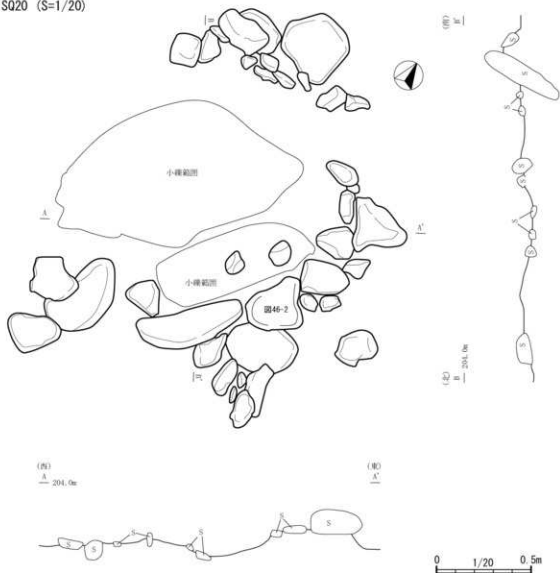


圖45 第20号配石遺構

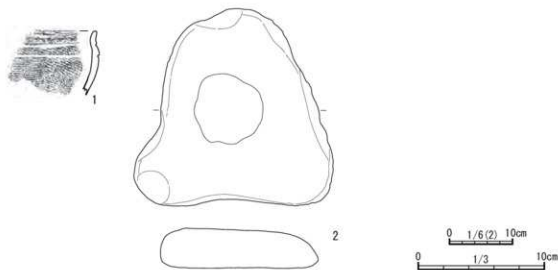


圖46 第20号配石遺構出土遺物

SQ21 (S=1/20)

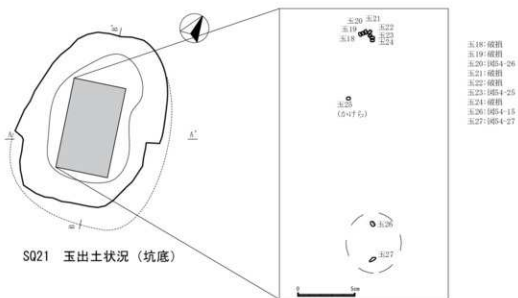
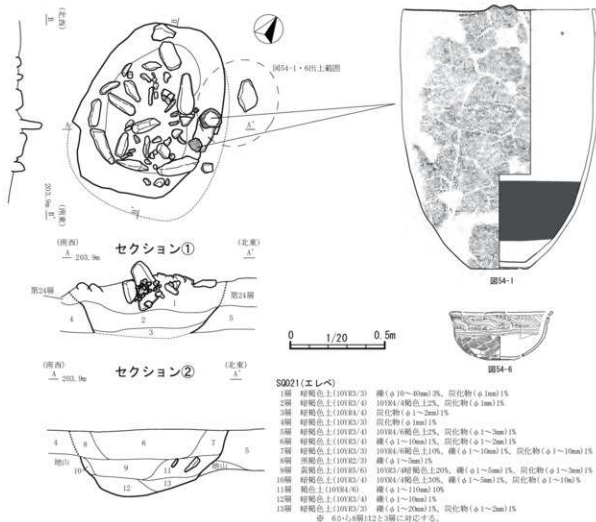


図47 第21号配石遺構(1)

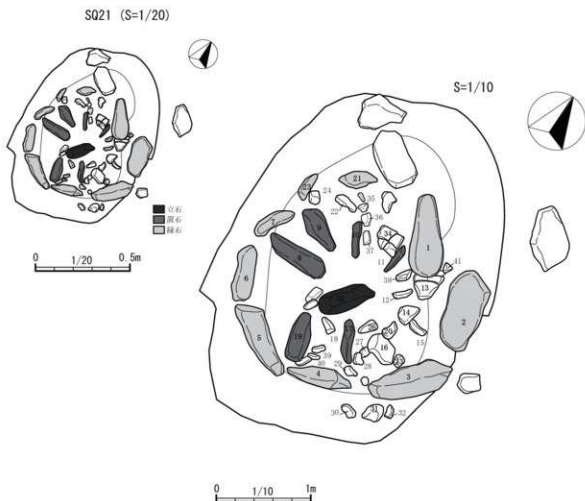
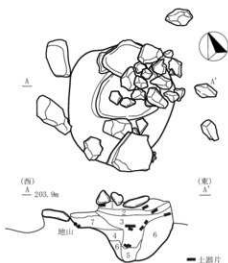


表4 第21号配石遺構の配石石材

番号	石材	石の配置	番号	石材	石の配置	番号	石材	石の配置
1	砂岩	緑石	15	緑色凝灰岩	置石	29	—	—
2	ホルンフェルス	緑石	16	ホルンフェルス	—	30	—	—
3	安山岩	緑石	17	緑色凝灰岩	置石	31	—	—
4	ホルンフェルス	緑石	18	—	—	32	—	—
5	安山岩	緑石	19	安山岩	置石	33	—	—
6	ホルンフェルス	緑石	20	—	—	34	—	—
7	花園四緑岩	緑石	21	安山岩	緑石	35	—	—
8	安山岩	置石	22	緑色凝灰岩	—	36	ホルンフェルス	緑石
9	安山岩	置石	23	粗粒玄武岩	緑石	37	—	—
10	ホルンフェルス	置石	24	—	—	38	—	—
11	安山岩	置石	25	花園四緑岩	立石	39	—	—
12	—	—	26	—	—	40	—	—
13	ホルンフェルス	—	27	—	—	41	—	—
14	—	—	28	—	—			

図48 第21号配石遺構(2)

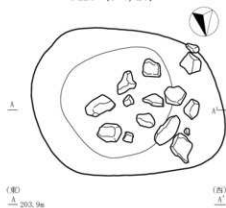
SQ22 (S=1/20)



SQ22

- 1層 黒褐色土(10YR2/3) 礫(φ1~250mm)50%
- 2層 暗褐色土(10YR3/3) 黄褐色ブロック(φ2~3cm)1%, 礫(φ1~20mm)1%
- 3層 暗褐色土(10YR2/3) 礫(φ1~2cm)1%
- 4層 褐色土(10YR4/6)
- 5層 暗褐色土(10YR3/3) 黄褐色ブロック(φ3~8cm)2%
- 6層 黒褐色土(10YR5/6) 暗褐色ブロック(φ3~10cm)10%
- 7層 黒褐色土(10YR3/2)

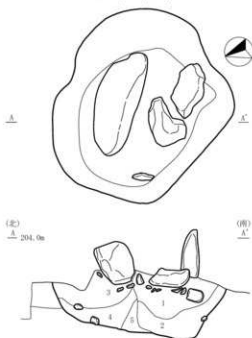
SQ23 (S=1/20)



SQ23

- 1層 暗褐色土(10YR3/4) 10YR5/9暗褐色土のブロック土(10YR5/9黄褐色土)10%
- 2層 暗褐色土(10YR3/4) 礫(φ1~170mm)7%, 炭化物(φ1~2cm)1%
- 3層 暗褐色土(10YR3/4) 礫(φ1~120mm)5%, 炭化物(φ1~3cm)1%
- 4層 暗褐色土(10YR3/4) 礫(φ1~50mm)2%, 炭化物(φ1~5mm)1%

SQ25 (S=1/20)



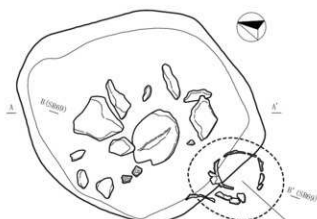
SQ25

- 1層 黒褐色土(10YR2/3) 礫(φ10~20mm)3%, 炭化物(φ1~2cm)1%
- 2層 暗褐色土(10YR3/3) 礫(φ5~15cm)1%, 炭化物(φ1cm)1%
- 3層 暗褐色土(10YR3/3) 礫(φ5~15cm)1%, 炭化物(φ1~3cm)1%
- 4層 暗褐色土(10YR3/4) 炭化物(φ1~3cm)1%
- 5層 褐色土(10YR4/6) 10YR3/4暗褐色土3%

0 1/20 0.5m

図49 第22号・第23号・第25号配石遺構

SQ26・SR69 (S=1/20)



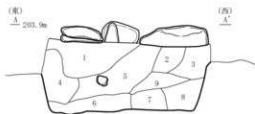
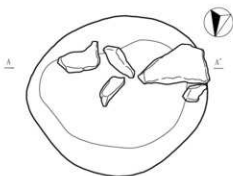
SQ26

- 1層 暗褐色土(10YR3/4) 礫(φ5~300mm)8%, 炭化物(1~2mm)2%
- 2層 褐色土(10YR4/4) 礫(φ5~10mm)1%, 炭化物(1~2mm)1%
- 3層 褐色土(10YR4/6) 礫(φ5~10mm)1%

SR69

- 1層 褐色土(10YR4/6) 礫(φ1~5mm)1%
- 2層 暗褐色土(10YR3/4) 礫(φ1~10mm)3%, 炭化物(φ1~10mm)1%
- 3層 暗褐色土(10YR3/2) 礫(φ1~30mm)1%, 炭化物(φ10mm)1%

SQ28 (S=1/20)



SQ28

- 1層 暗褐色土(10YR3/2) 礫(φ1~60mm)2%, 炭化物(φ1~10mm)1%
- 2層 暗褐色土(10YR3/4) 礫(φ1~20mm)3%, 炭化物(φ1~10mm)1%
- 3層 暗褐色土(10YR2/2) 礫(φ1~30mm)2%, 炭化物(φ1mm)1%
- 4層 暗褐色土(10YR3/4) 10YR5/6黄褐色土5%, 礫(φ1~20mm)2%, 炭化物(φ1~5mm)1%
- 5層 褐色土(10YR4/6) 10YR3/4暗褐色土4%, 礫(φ1~70mm)3%, 炭化物(φ1~5mm)1%
- 6層 黄褐色土(10YR5/8) 10YR4/6褐色土10%, 礫(φ1~50mm)3%, 炭化物(φ1mm)1%
- 7層 黄褐色土(10YR5/6) 10YR4/6褐色土10%, 7.5YR4/6褐色土5%, 10YR3/4暗褐色土3%, 礫(φ1~10mm)1%, 炭化物(φ1mm)1%
- 8層 暗褐色土(10YR3/4) 礫(φ1~30mm)1%
- 9層 暗褐色土(10YR3/4) 10YR5/6黄褐色土3%

0 1/20 0.5m

図50 第26号・第28号配石遺構・第69号土器埋設遺構

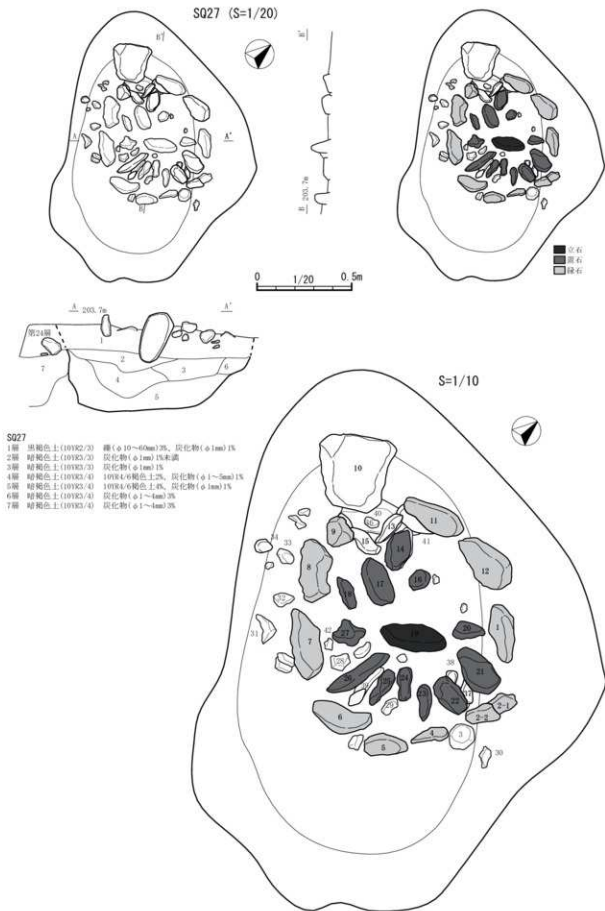


図51 第27号配石遺構

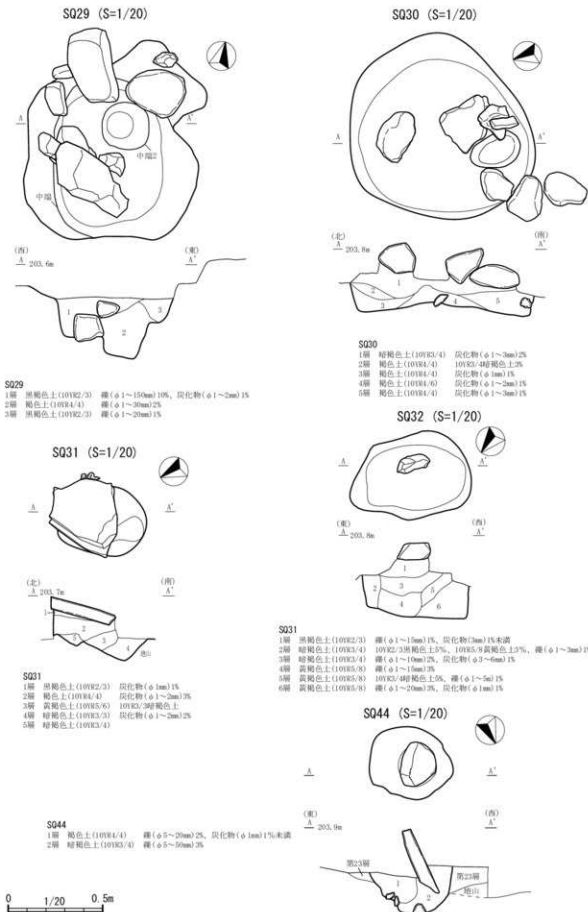


図52 第29号・第30号・第31号・第32号・第44号配石遺構

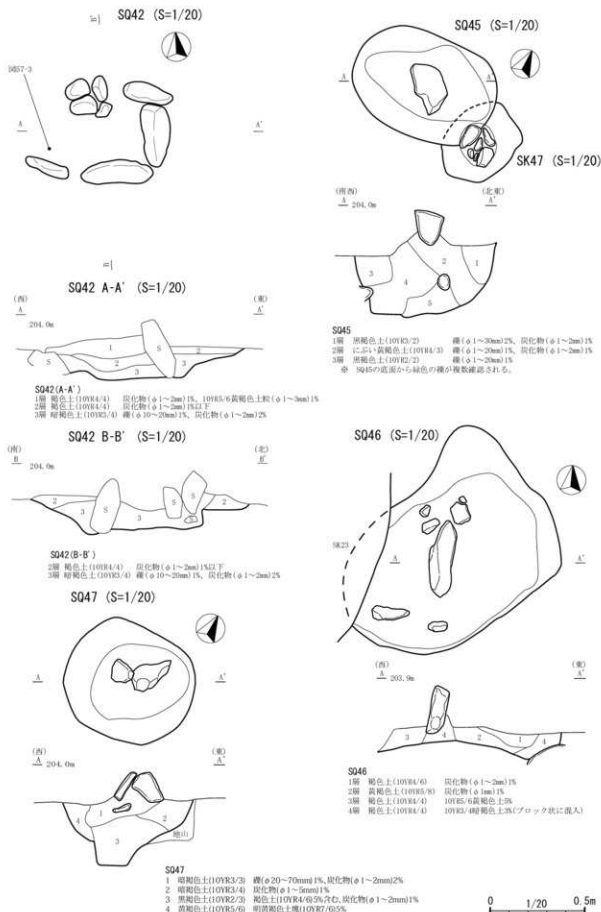


図53 第42号・第45号・第46号・第47号配石遺構・第47号土坑

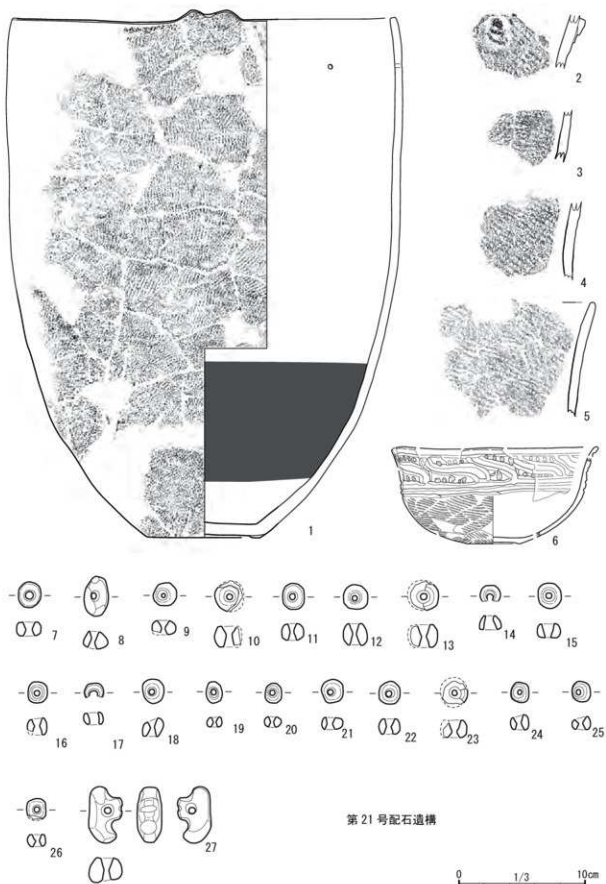


図54 配石遺構出土遺物(1)

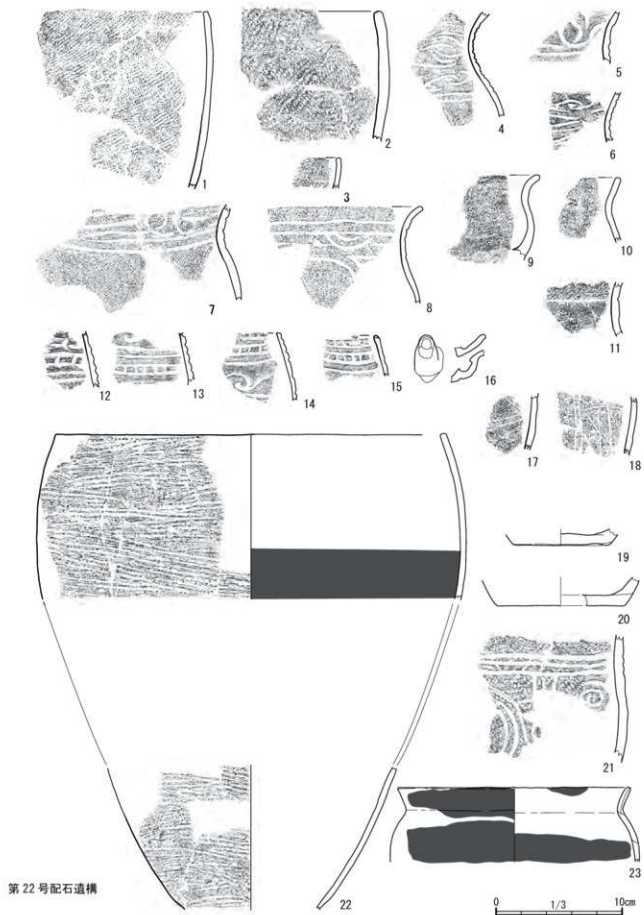


図55 配石遺構出土遺物(2)

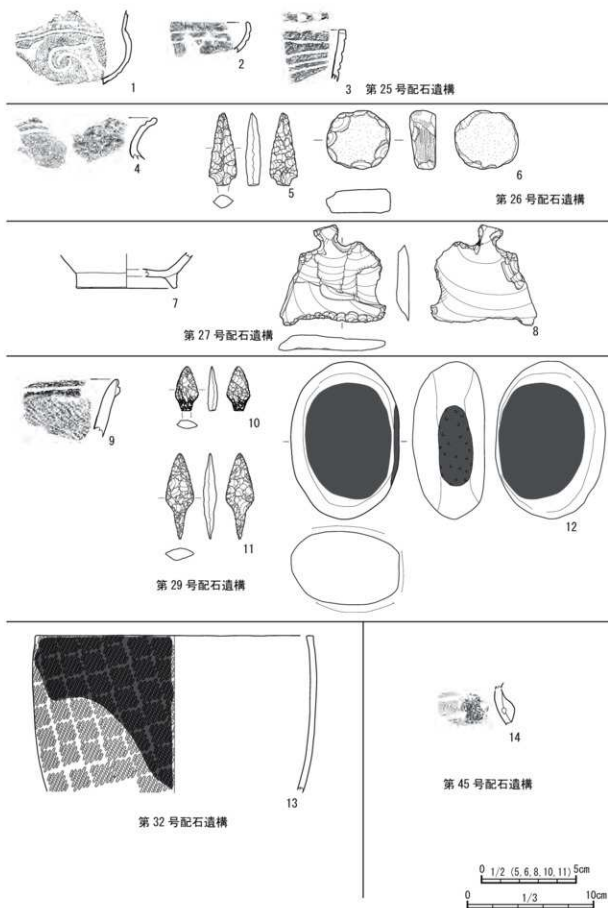


図56 配石遺構出土遺物(3)

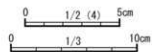
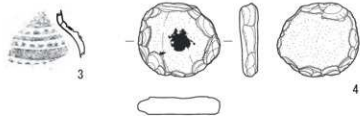
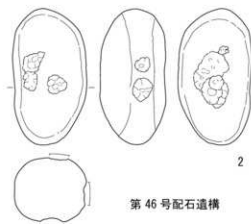
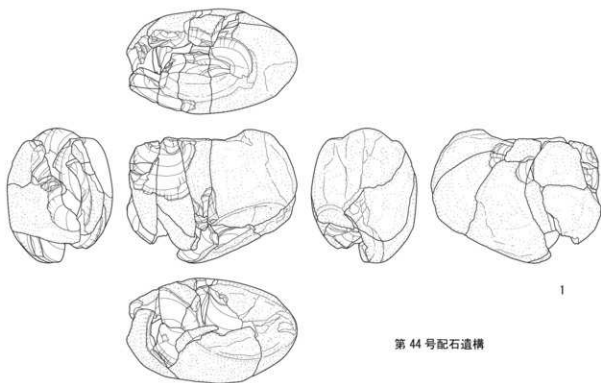


図57 配石遺構出土遺物(4)

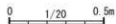
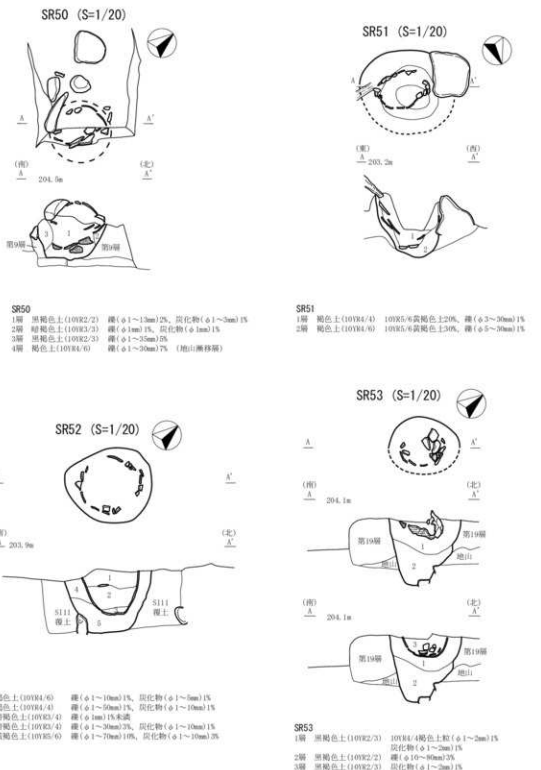
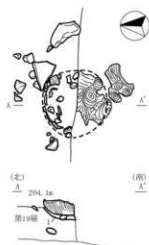


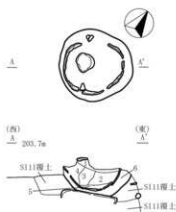
図58 土器埋設遺構(1)

SR54 (S=1/20)



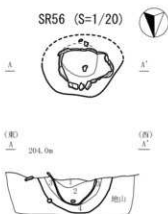
- SR54
 1層 黒褐色土(10YR2/3) 礫(φ1mm)1%
 SR54(土器内覆土)
 黒褐色土(10YR2/2) 10YR7/灰白色粘土7%混入
 炭化物(φ1~2mm)1%未満

SR55 (S=1/20)



- SR55
 1層 暗褐色土(10YR3/4) 礫(φ1~50mm)20%, 炭化物(φ1~5mm)1%
 2層 暗褐色土(10YR3/3) 礫(φ1~20mm)2%, 炭化物(φ1~2mm)1%
 3層 暗褐色土(10YR3/4) 礫(φ1~3mm)1%, 炭化物(φ1~2mm)1%
 4層 暗褐色土(10YR3/3) 礫(φ1~20mm)20%, 炭化物(φ1~2mm)1%
 5層 暗褐色土(10YR3/4) 礫(φ1~20mm)2%
 6層 暗褐色土(10YR3/4) 礫(φ1~10mm)2%, 炭化物(φ1~10mm)1%

SR56 (S=1/20)



- SR56
 1層 暗褐色土(10YR3/4) 炭化物(φ1~2mm)1%
 2層 暗褐色土(10YR3/3) 礫(φ2~30mm)2%, 炭化物(φ1~2mm)1%
 3層 褐色土(10YR4/6) 炭化物(φ1~2mm)1%
 4層 2.5~黄褐色土(10YR5/4) 礫(φ3~40mm)15%, 炭化物(φ1~2mm)1%

SR57 (S=1/20)



- SR57
 1層 暗褐色土(10YR3/4) 礫(φ10~60mm)2%, 炭化物(φ1~3mm)1%
 SR57(土器内覆土)
 黒褐色土(10YR2/3) 礫(φ6~10mm)2%, 炭化物(φ1~2mm)1%

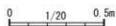


図59 土器埋設遺構(2)

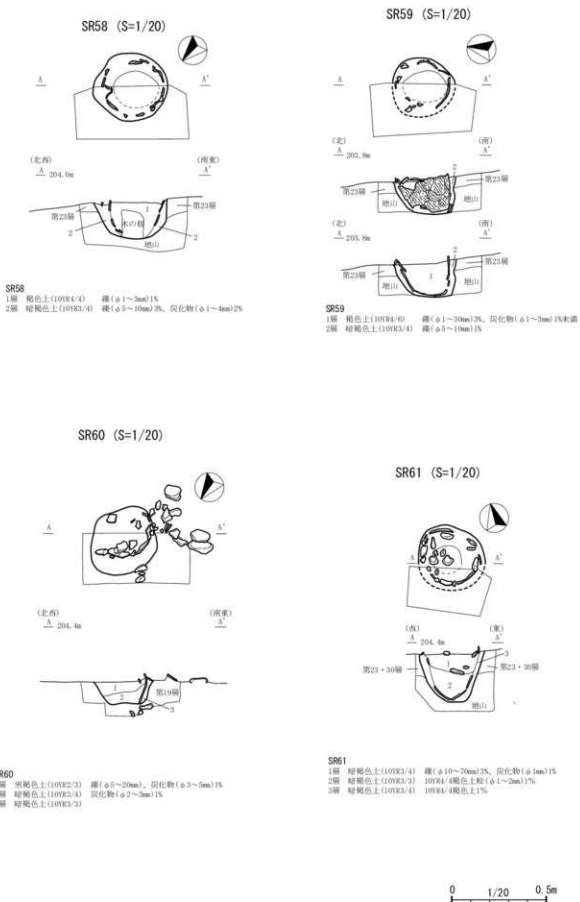
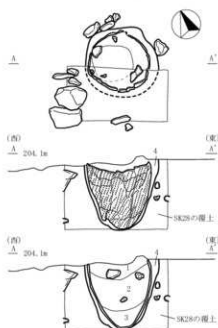


図60 土器埋設遺構(3)

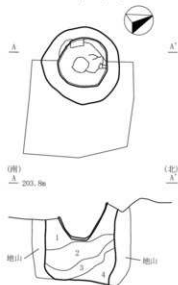
SR62 (S=1/20)



SR62

- 1層 暗褐色土(10YR3/3) 礫(φ10~50mm)2%, 炭化物(φ1~2mm)1%
 2層 暗褐色土(10YR2/3) 10YR3/6明黄褐色土粒(φ1~30mm)2%, 礫(φ10~30mm)1%
 3層 暗褐色土(10YR2/3) 礫(φ10~20mm)1%
 4層 暗褐色土(10YR3/3) 礫(φ1mm)1%

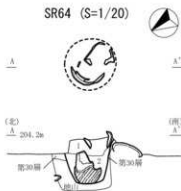
SR63 (S=1/20)



SR63

- 1層 褐色土(10YR4/4) 10YR3/6黄褐色土30%, 礫(φ1~30mm)3%, 炭化物(φ1~5mm)1%未満
 2層 黄褐色土(10YR5/3) 10YR1/6褐色土30%, 礫(φ1~1.0mm)20%
 3層 棕色~黄褐色土(10YR5/4) 10YR3/6黄褐色土40%, 礫(φ1~20mm)1%, 炭化物(φ1~30mm)1%
 4層 明黄褐色土(10YR5/6) 礫(φ1~5mm)1%, 炭化物(φ1~10mm)1%

SR64 (S=1/20)



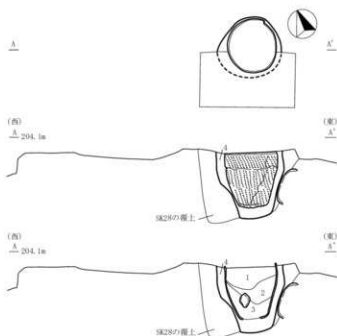
SR64

- 1層 暗褐色土(10YR3/3) 礫(φ1~2mm)1%, 炭化物(φ2~3mm)1%
 2層 暗褐色土(10YR4/6) 礫(φ1~5mm)2%, 炭化物(φ1~2mm)1%未満

0 1/20 0.5m

図61 土器埋設遺構(4)

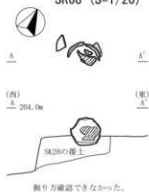
SR65 (S=1/20)



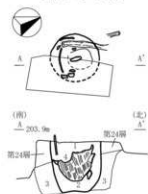
SR68 (土器断面)

- | | | |
|----|---------------|------------------------------|
| 1層 | 暗褐色土(10YR5/4) | 礫(φ1~5mm)2% |
| 2層 | 暗褐色土(10YR3/3) | 礫(φ10mm)1% |
| 3層 | 黒褐色土(10YR2/3) | 礫(φ2~6mm)10% |
| 4層 | 黒褐色土(10YR2/3) | 礫(φ1~5mm)1%未満、炭化物(1~2mm)1%未満 |

SR68 (S=1/20)



SR70 (S=1/20)



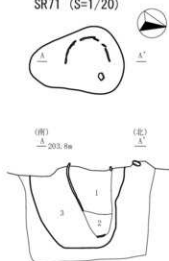
SR70

- | | | |
|---------|---------------|----------------------------|
| 1層 | 暗褐色土(10YR2/3) | 礫(φ1~20mm)10%、炭化物(φ2mm)1% |
| 2層 | 暗褐色土(10YR3/4) | 10YR5/8黄褐色土30%、礫(φ1~3mm)1% |
| 3層 | 暗褐色土(10YR3/3) | 10YR5/8黄褐色土40% |
| 4層(土器内) | 黒褐色土(10YR2/3) | |

0 1/20 0.5m

図62 土器埋設遺構(5)

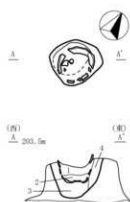
SR71 (S=1/20)



SR71

- 1層 暗褐色土(10YR3/3) 礫(φ1~20mm)2%, 炭化物(φ1~2mm)1%
 2層 暗褐色土(10YR3/3) 礫(φ1~5mm)1%, 炭化物(φ1~2mm)1%
 3層(側9方) 暗褐色土(10YR3/4) 礫(φ1~20mm)3%, 炭化物(φ1~2mm)1%

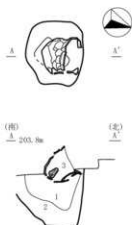
SR73 (S=1/20)



SR73

- 1層 暗褐色土(10YR4/6) 礫(φ1~5mm)2%, 炭化物(φ1mm)1%未満
 2層 暗褐色土(10YR4/6) 礫(φ1~5mm)1%
 3層 黄褐色土(10YR5/6) 礫(φ1~7mm)2%, 炭化物(φ1~5mm)1%未満
 4層 黄褐色土(10YR5/6) 礫(φ1~10mm)2%, 炭化物(φ1~5mm)1%

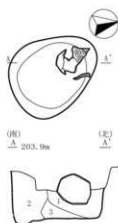
SR74 (S=1/20)



SR74

- 1層 暗褐色土(10YR3/3) 炭化物(φ1mm)1%未満
 2層 黄褐色土(10YR5/6) 10YR3/3暗褐色土3%
 3層 暗褐色土(10YR3/4) 炭化物(φ1~2mm)2%

SR76 (S=1/20)



Pit1529

- 1層 暗褐色土(10YR2/3) 礫(φ1~5mm)1%, 炭化物(φ1~2mm)15%以下
 2層 暗褐色土(10YR3/4) 礫(φ1~25mm)1%
 3層 黄褐色土(10YR5/6) 礫(φ1~5mm)1%, 炭化物(φ3mm)1%以下
 4層 暗褐色土(10YR4/6) 礫(φ1~3mm)1%

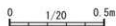


図63 土器埋設遺構(6)

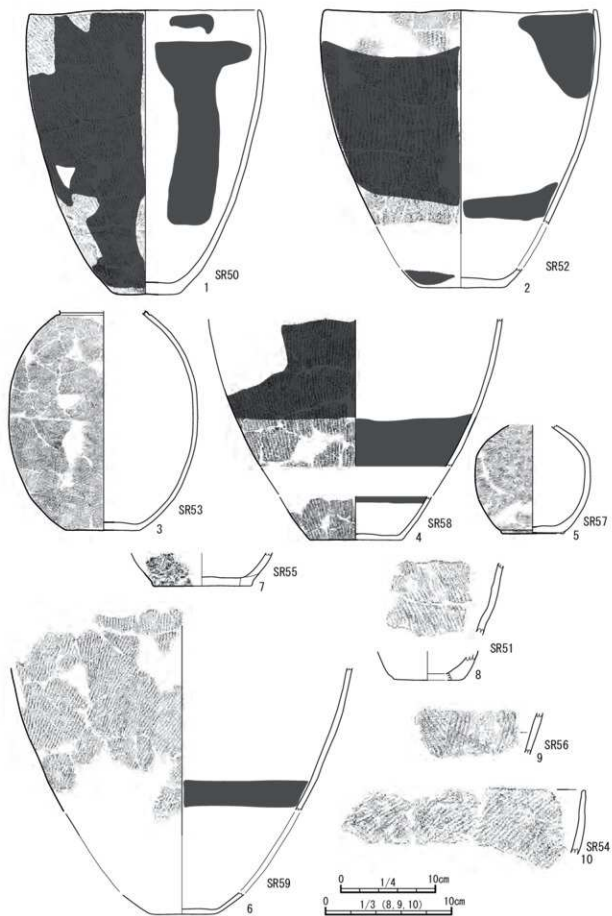


圖64 埋設土器(1)

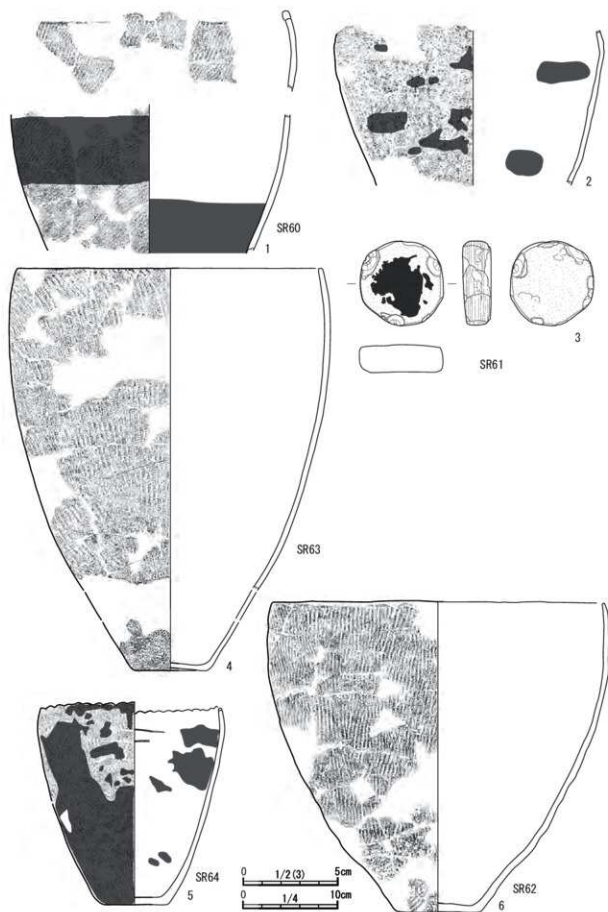


圖65 埋設土器(2)

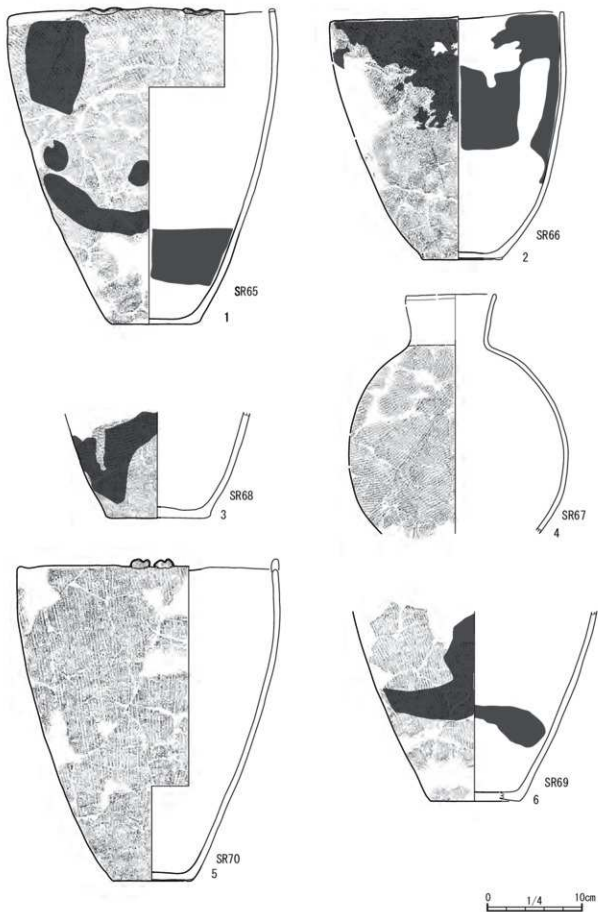


圖66 埋設土器(3)

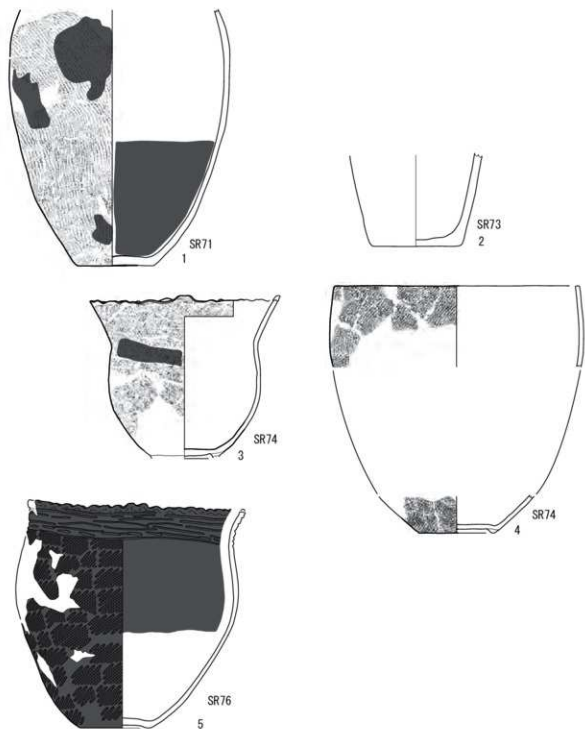


図67 埋設土器(4)

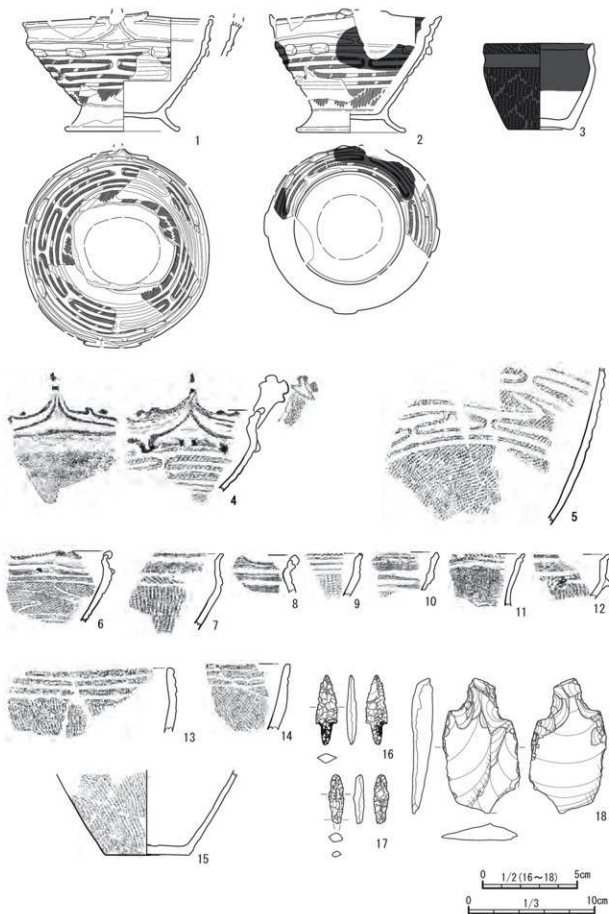


圖68 第51号焼土遺構出土遺物



第 54 号烧土遺構

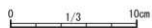
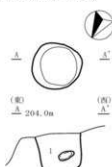


図69 第52号・第54号烧土遺構出土遺物

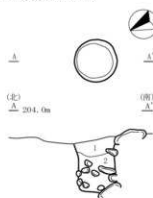
Pit1328 (S=1/20)



Pit1328

1 暗褐色土(10YR3/4) 礫(φ5~50mm)1%, 炭化物(φ1~4mm)2%

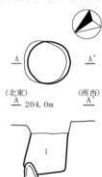
Pit1333 (S=1/20)



Pit1333

1 暗褐色土(10YR3/4) 礫(φ5~10mm)1%, 炭化物(φ1~4mm)2%
2 褐色土(10YR4/6) 礫(φ5~50mm)10%

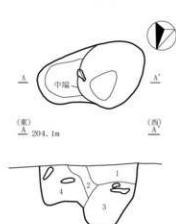
Pit1331 (S=1/20)



Pit1331

1 暗褐色土(10YR3/4) 礫(φ5~10mm)1%

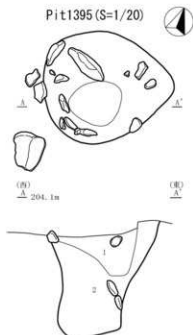
Pit1353 (S=1/20)



Pit1353

1 暗褐色土(10YR3/4) 礫(φ5~10mm)1%, 炭化物(φ1mm)2%
2 褐色土(10YR4/6) 暗褐色土(10YR3/4)2%夾行、礫(φ5mm)1%
3 褐色土(10YR4/4) 礫(φ5~50mm)2%, 炭化物(φ1~5mm)1%
4 暗褐色土(10YR3/3) 礫(φ10~50mm)2%, 炭化物(φ1mm)1%以下

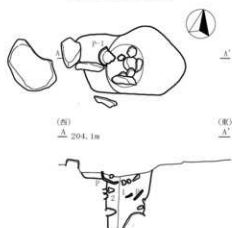
Pit1395 (S=1/20)



Pit1395

1 暗褐色土(10YR3/3) 礫(φ10~30mm)2%, 炭化物(φ1mm)1%
2 褐色土(10YR4/4) 礫(φ10~20mm)2%, 炭化物(φ1~3mm)1%

Pit1369 (S=1/20)



Pit1369

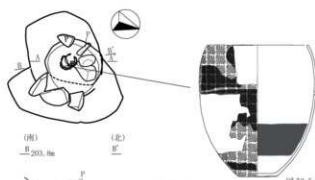
1 灰褐色土(10YR2/3) 礫(φ10~30mm)2%, 炭化物(φ1mm)1%以下
2 暗褐色土(10YR3/4) 礫(φ10~20mm)2%

0 1/20 0.5m

図70 ビット(1)

SN56 (S=1/20)

Pit1376 (S=1/20)

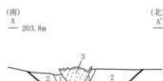


Pit1376セク

- 1 黒褐色土(10YR2/3) 礫(φ10~40mm 1%) 炭化物(φ1mm 1%)
- 2 暗褐色土(10YR3/4) 礫(φ20mm 3%) 炭化物(φ1mm 1%) 含有物(10YR3/6黄褐色土1%)
- 3 黄褐色土(10YR5/6) 礫(φ10~30mm 3%)
- 4 暗褐色土(10YR3/2) 礫(φ140mm 30%) 炭化物(φ1mm 1%) 含有物(10YR3/6黄褐色土1%)

図72-5

SN56 A-A' (S=1/10)



SN56セク

- 1 暗褐色土(10YR3/4) 礫(φ10~40mm 1%)
- 2 にごり-黄褐色土(10YR3/4) 礫(φ3~30mm 1%) 炭化物(φ1~5mm 1%) 含有物(10YR4/4褐色土4%) Pit1376の礫土の可能性がある。
- 3 黒褐色土(10YR3/2) 炭化物(φ1~20mm 3%)

Pit1400 (S=1/20)

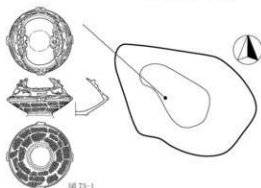
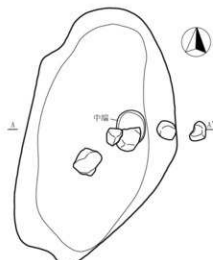


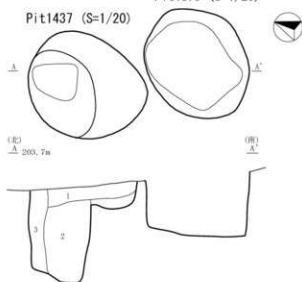
図73-1

Pit1434 (S=1/20)



Pit1379 (S=1/20)

Pit1437 (S=1/20)



Pit1437

- 1 黒褐色土(10YR2/3) 礫(φ3~10mm)1%、炭化物(φ1~3mm)1%
- 2 暗褐色土(10YR3/3) 黄褐色土(10YR5/6)1%含む、炭化物(φ1mm)1%
- 3 暗褐色土(10YR3/4) 黄褐色土(10YR5/6)3%含む

Pit1434セク

- 1 黒褐色土(10YR2/2) 炭化物(φ1~4mm 1%) 含有物(10YR4/6褐色土1%)
- 2 黒褐色土(10YR2/3) 炭化物(φ1~2mm 1%) 含有物(10YR4/6褐色土3%)
- 3 黄褐色土(10YR5/8) 礫(φ10~40mm 1%) 含有物(10YR2/2黒褐色土1%)
- 4 黄褐色土(10YR5/6) 礫(φ10~40mm 1%) 含有物(10YR2/3黒褐色土1%)

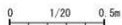


図71 ビット(2)

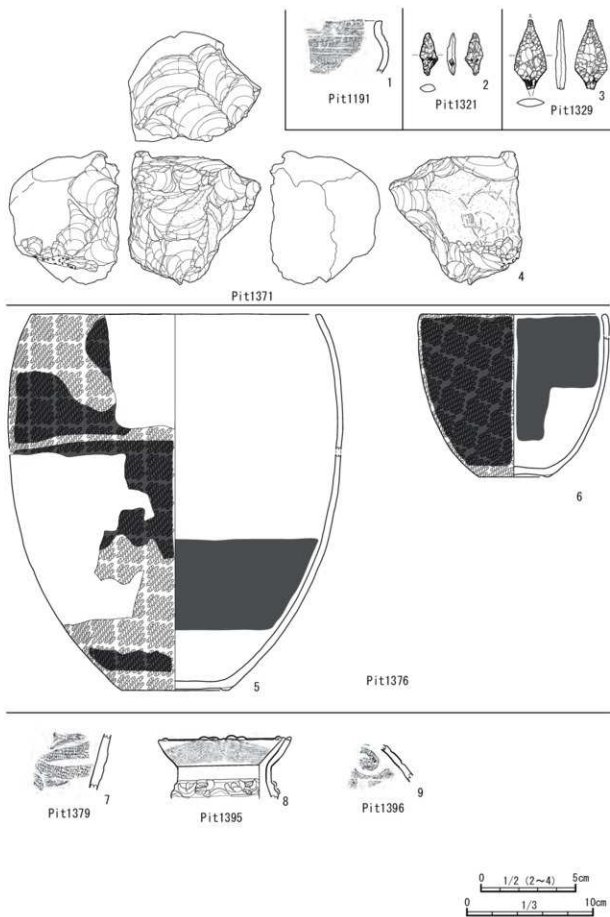


図72 ビット出土遺物(1)

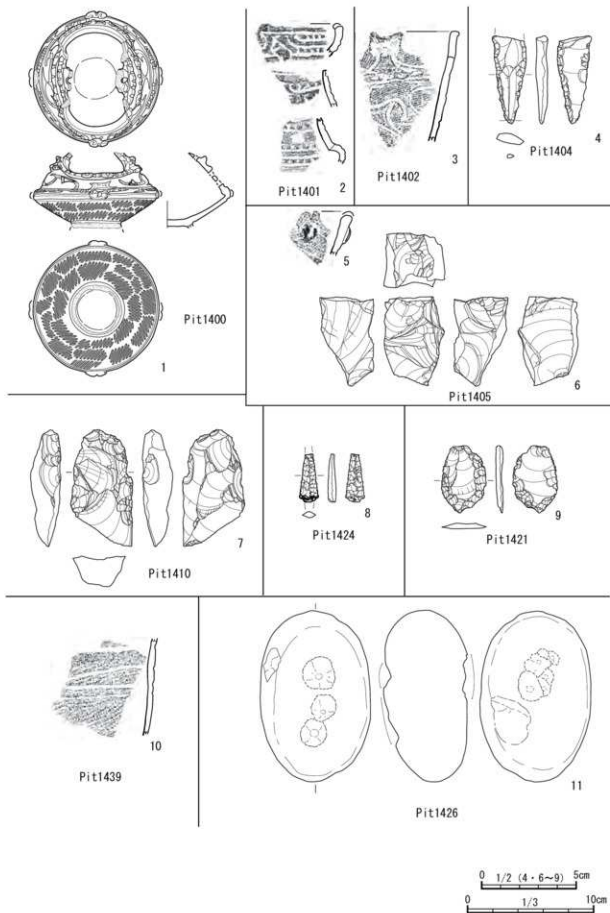
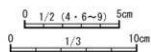


図73 ビット出土遺物(2)



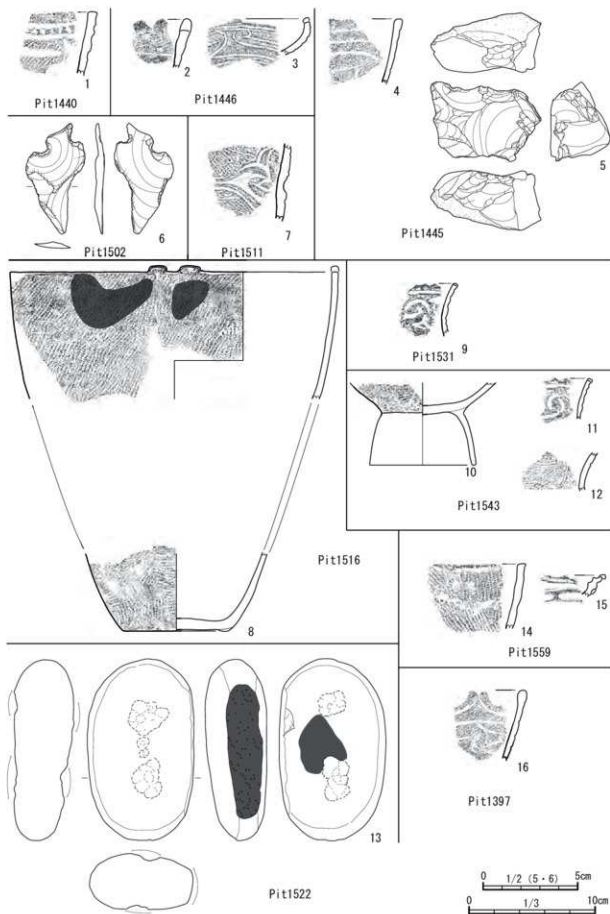


図74 ビット出土遺物(3)

第2節 第1号盛土遺構 (M1)

1 第1号盛土遺構の調査方法並びに堆積層について

(1) 調査前の第1号盛土遺構とその周辺の現況

第1号盛土遺構は、調査区の北西、VF～VJ-33～36の範囲に存在する(図75)。東側の一部は平成26年度の調査区にかかっている。調査前に周辺の地形測量を行い、第1号盛土遺構の規模の把握に努めた。10cm単位の等高線の間隔を元に盛土遺構の範囲を確認したところ、南北20m、東西18mほどの楕円形であることが確認できた(図3)。高さは1m弱である。なお、第1号盛土遺構の最高点は、標高204.82mである。

(2) トレンチとベルト

第1号盛土遺構に1から10のトレンチを設定した(図75)。トレンチ1から3と6、7は第1号盛土遺構の中央部に、トレンチ5は、北側の急斜面が始まる部分に設定した。トレンチ10は第1号盛土遺構の北側平坦部に、トレンチ4、8と9は第1号盛土遺構南端に設定した。トレンチ2と3、8と9は当初別個に設定したが、一つのトレンチとして同時に掘り進めた。

各トレンチ間にベルトが残されるが、以下のような名称とした。

第1号盛土遺構の中心を南北に走る部分を

南北ベルト (以下SN-Bとする)

東西に走るベルトを南から

東西ベルト1 (以下EW-B1とする)

東西ベルト2 (以下EW-B2とする)

東西ベルト3 (以下EW-B3とする)

各トレンチは、調査区に残された切り株を除去するため、切り株周辺を一気に掘り下げ、切り株を除去した後、その部分を地山面まで掘り下げ、先行トレンチとした。この先行トレンチを足がかりに下の堆積層の状況を確認し、各トレンチの全体を掘り進めた。

掘り進めた際に、層名はつけず、堆積層の特徴や、トータルステーションによる点取り遺物の番号などをカードに記載し遺物を取り上げた。そして、岩手県一関市清水遺跡(岩手県2002)や北上市大橋遺跡(岩手県2006)で採用したような方法を参考とし、点取り遺物は遺物番号がふられたラベルを出土地点から近くのベルトにまで水平に移動させ、各ベルトの壁に刺して置いた。ラベルに補足として堆積層の特徴などを書き添えた。

トレンチ毎に地山面までおおよそ掘り下げた後に、残されたベルトにトレンチ毎に層名をつけた。そして、ベルトに刺した遺物カードのラベルに層名を与え、各グリッド一括取り上げ遺物に層名を振った。この時点で、各トレンチの堆積層の関係は不明である。

そして、ベルトのセクション図面と写真撮影を行った後、SN-Bの一番南側を取り除き、EW-B1の全体の通しの図面を作成し、トレンチ4とトレンチ8・9の層の関係を押さえた。そして、EW-B1の両袖を掘り、SN-Bの東側と西側の関係、トレンチ1とトレンチ7の関係を捉えた。

次いで、SN-Bの北端部分のセクション図を作成し、写真撮影をした後に、その部分を掘り進め、トレンチ5と10の関係を把握した。

また、EW-B3は、それぞれトレンチ2・3のある西側と、トレンチ6のある東側ごとに図面と撮影を行い、堆積層ごとに分層して掘り下げた。

この段階で、EW-B2の部分と、そこから伸びるSN-Bが残った状態である。EW-B2は切り株のため、東側と西側が一直線にならず、クランク状になっているので、南側はSN-Bを取り除き、クランク状ではあるが、EW-B2が一直線になるようにした。

一方、SN-B北側は、EW-B3の交点部分を残し、EW-B2とEW-B3の間の層を除去した。このEW-B2とEW-B3・SN-Bの交点の2箇所堆積層から、トレンチ2・3とトレンチ6の関係を押さえた。

そして、クランク状に残されたEW-B2をSN-Bの交点を除き掘り下げた。最後に、EW-B2とSN-Bの交点部(口絵6)を取り除き、第1号盛土遺構を完備した。

(3) 堆積層について

次に、第1号盛土遺構の各堆積層についてその特徴を述べる(図76・77、表5)。

【第1層】 本層は調査区全体を覆う基本層序の一つである。第1号盛土遺構部分の本層は、層厚が5から20cmほどである。土質は暗褐色のシルトを主体とし、締まりはない。遺物を多量に含んだ堆積層である。

【第1層】 本層は第1号盛土遺構の中央部、トレンチ7のVG・H・I-34・35にかけて位置する。東側から西側にかけて傾斜堆積している。土層の西側は先細りしているため、東から西の方にむけて形成されていると思われる。土質は黒褐色のシルトを主体とし、礫を多量に含む層である。SN-BやEW-B2にて確認したところ、この層は第51号焼土遺構を境に分層されることが判明したので、ベルトを掘り下げる際は、第1-2層、第1-3層に細分した。ベルト出土で取り上げの際に第1層としたものは、整理作業で第1-1層に振り直した。トレンチ出土はすべて第1層にした。細分した段階での層厚は各層とも25cmほどである。

トレンチ8・9も同層名で掘り下げた。

【第2層】 本層は第1号盛土遺構の中央部、トレンチ7のVG・H・I-34・35にかけて位置する。第1層と第51号焼土遺構の下層に位置することが確認できた。褐色の礫が少ない堆積層である。SN-BやEW-B2にて確認したところ、この層は第51号焼土遺構を境に分層されることが判明したので、ベルトを掘り下げる際は、第2-2層、第2-3層に細分した。ベルト出土で取り上げの際に第2層としたものは、整理作業で第2-1層に振り直した。トレンチ出土はすべて第2層にした。細分した段階での層厚は各層とも25cmほどである。第50号土器埋設遺構は、この堆積層を掘り込んで構築されている。

トレンチ8・9も同層名で掘り下げた。

【第3層】 トレンチ7で確認した、明褐色層である。円筒上層式の土器(図19-1)が出土した。後に第13号建物跡の覆土と判明する。

【第4層】 本層は第1号盛土遺構の中央部、トレンチ1の第1層直下の礫層に相当する。暗褐色のシルト質の礫を多く含む堆積層である。ベルトにて、第1層と第4層の間に礫の少ない層が部分的に見えたので、この部分は第4-2層と細分し、従来の礫の多い層は第4-1層として、ベルトは掘り進めた(現場時点では第4層として掘り下げ、整理作業中に第4-1層とした)。トレンチ出土はすべて第4層にした。層は平均で20cmほどだが、部分的に40cm近くの厚みを持つ部分がある。

【第5層】 本層は第1号盛土遺構の中央部、トレンチ1の第6層と第15層の中間に位置する堆積層である。暗褐色のシルト質であり、礫が幾分多く含まれる堆積層である。東側から西側にかけて傾斜堆積している。20cm程度の層厚である。

【第6層】 本層は第1号盛土遺構の中央部、トレンチ1の第4層の直下の層である。褐色土のシルト質層で、礫が第4層に比べ幾分少ない層である。東側から西側にかけて傾斜堆積している。

【第7層】 本層は第1号盛土遺構の中央部、トレンチ6の第1層直下の堆積層である。暗褐色から黒褐色のシルト質層であり、礫を多量に含む層である。ベルトにて、第1層と第7層の間に礫の少ない層が部分的に見えたので、この部分は第7-2層と細分し、従来の礫の多い層は第7-1層として、ベルトは掘り進めた（現場時点では第7層として掘り下げ、整理作業中に第7-1層とした）。トレンチ出土はすべて第7層にした。第7-1層の平均的な層厚は20cm程度である。第7-2層は20cmから厚いところで40cm近くある。

【第8層】 本層は第1号盛土遺構の中央部、トレンチ6にて設定した層である。先行トレンチで下記の第9層と当初区分したが、その後、両者の差がみえないので、最終的に第9層と同一の層と捉えた。なお第8層はトレンチを拡張していく過程で不明瞭になったので、セクション図には反映されていない。

【第9層】 本層は第1号盛土遺構の中央部、トレンチ6の最下層で、地山直上に堆積する。黒褐色のシルト質であり、礫が少ない層である。EW-B3にて細分したが、従来の第9層は第9-1層とした（現場時点では第9層として掘り下げ、整理作業中に第9-1層とした）。トレンチ出土はすべて第9層にした。

【第10層】 本層は第1号盛土遺構の北側、トレンチ5にて設定した堆積層である。第1層直下の礫層である。調査当時は、この北側に北捨場が広がる認識はなかった。セクション図にかからなかったので土層観察表に注記記載はないが、現場当時の所見では、下記の第22層と同一層と考えられる。

【第11層】 本層は第1号盛土遺構の北側、トレンチ5にて設定した堆積層である。調査当時はこの北側に北捨場が広がる認識はなかった。第10層直下であり、礫の少ない層である。セクション図にかからなかったので土層観察表に注記記載はないが、現場当時の所見では、下記の第23層と同一層と考えられる。遺物が多量に出土する層であり、平成23年度調査の際は、すべて第11層として掘り下げた。

本報告ではトレンチ5（第10と11層）は便宜的にグリッドVJ35・36までとし、その先のVK35・36は北捨場として来年度報告書に持ち越した。

【第12層】 本層は第1号盛土遺構の南側、第I層直下のトレンチ4にて設定した層である。黒褐色のシルト質層であり、礫を多く含む層である。ベルトにて、第1層と第12層の間に礫の少ない層が部分的に見えたので、この部分を第12-2・12-3・12-4層と細分し、従来の礫の多い層は、第12-1層としてベルトは掘り進めた（現場時点では第12層として掘り下げ、整理作業中に第12-1層とした）。トレンチ出土はすべて第12層にした。層は30cm近くの厚みを持ち、第1号盛土遺構の裾側にいくにつれ薄くなっていく。

【第13層】 本層は第1号盛土遺構のEW-B1にて設定した堆積層であり、第1層と第12層の間に挟まる層である。炭化物を多く含む層である。

【第14層】本層は第1号盛土遺構の南側、トレンチ4にて設定した層である。第12層よりも幾分明るい層であり、礫があまり入り込まない層であった。ベルトにて第14層と第20層を設定した後、その間にさらにもう一枚堆積層(第21層)を確認したので、その上下で第14-1層、第14-2層と区分した。トレンチ出土はすべて第14層にした。第14-2層は幾分礫が多く含まれる層である。暗褐色のシルト質の堆積層であり、層厚は20cmほどである。

【第15層】本層は第1号盛土遺構の中央部、トレンチ1にて確認した。分布はVI・J-34・35にまで広がり、トレンチ6ではほとんど確認できなかった。炭化物を多く含む層であり、他の堆積層の中でも黒色が強いので明瞭に区分できる。黒褐色のシルト質であり、礫も多く含む。東側から西側にかけて傾斜堆積している。多量の遺物を包含する層であり、かつ完形に近い個体が多く出土した。層厚は20cm程度である。

【第16層】本層は第1号盛土遺構のトレンチ1の第15層直下にある暗褐色土の層であり、黒褐色の土粒を含んでいる。下層に第19層がある。第19層との境は、EW-B2のセクションで波打つようになっており、晩期前半の遺構を掘り込んだ面と重なっていると思われたが、明瞭な掘り込み面は認められなかった。礫を多く含む堆積層である。

【第17層】本層は第1号盛土遺構の中央部、EW-B2にて確認した。黒褐色のシルト層であり、第4層の上面に乗る。礫が少ない層である。

【第18層】本層は第1号盛土遺構の中央部、グリッドVI・J-33・34を中心に分布した堆積層である。土質は黒褐色のシルトを主体とし、礫が少ない層である。層厚は20から30cmである。第15層と同様に遺物を多量に含む層であるが、第15層は炭化物を多く含む層である点が、両層の区分の目安である。土器はその場で押しつぶされたように水平堆積している。東側から西側にかけて傾斜堆積している。EW-B2の所見から、第1号盛土遺構の西裾に向かうにつれ薄くなり、また、土質が変化している、遺物の出土量も減るので、その部分は第18-2層とした。

【第19層】本層は第1号盛土遺構の中央部、トレンチ1・2・3にて確認した黒褐色のシルト質層であり、礫が少ない層である。この堆積層を掘り込み面として、晩期遺構が構築されている。EW-B2の所見から、第1号盛土遺構の西裾に向かうにつれ薄くなり、また、土質が変化していったので、その部分は第19-2層とした。そのまま遺構外の第Ⅲ層に連続すると推定される。

【第20層】本層は第1号盛土遺構の南部、トレンチ4で設定した層であり、黒褐色のシルト質層である。礫が多い層である。この堆積層を掘り込み面として、晩期遺構が構築されている。EW-B1のセクション図ではビット1376(調査時はビットとしての認識がなかった)がこの層を掘り込んでいる。

【第21層】本層は第1号盛土遺構の南側、EW-B1にて確認した。当初黄色のローム層が堆積したとの認識であったが、礫が水平でなく垂直に入り込んでいるものがあり、周囲の堆積層を分断しているなどの特徴から、風倒木と判断した。下記のアルファベット層も含むが、当初風倒木の認識がなく、層名をふった。

【第22層】本層は第1号盛土遺構の北側、トレンチ10で設定した層であり、第1層直下の礫を多く含む層である。層厚は20から40cmほどである。

【第23層】本層は第1号盛土遺構の北側、トレンチ10で設定した層であり、礫が少ない層である。この堆積層を掘り込み面として、晩期遺構が構築されている。層厚は20から30cmほどである。

【第24層】 本層は第1号盛土遺構の南側、トレンチ4にて設定した層である。ビット1379で分断され（調査時はビットとしての認識がなかった）、別層として第24層としたが、本来は第20層と同一層と思われる。礫が多い層である。この堆積層を掘り込み面として、配石遺構など晩期遺構が構築されている。層厚は15から20cmほどである。

【第25層】 本層は第1号盛土遺構の南側、SN-Bにて設定した堆積層である。礫の少ない層であり、第1号盛土遺構の南側の裾部を形成する層である。このあたりはトレンチ4を掘り下げるときは第20層で遺物を取り上げている。層厚は15から20cmほどである。

【第26層】 本層は第1号盛土遺構の南側、SN-Bにて設定した堆積層である。礫の少ない層であり、第1号盛土遺構の第20層と第25層に接している。南側の裾部を形成する層である。このあたりはトレンチ4を掘り下げるときは第20層で遺物を取り上げている。層厚は15から20cmほどである。

【第27層】 本層は第1号盛土遺構の中央部、トレンチ1・2・3あたりで確認した層である。にぶい黄褐色土の堆積層であり、他の層と土色が明確に異なるので容易に判断がついた。20cm弱の薄い堆積層である。

【第28層】 本層は第1号盛土遺構の中央部、トレンチ2・3にて設定した第1層直下の堆積層である。礫を多く含む層である。黒褐色のシルト質で、礫を多く含む堆積層である。第28層とした一部はSN-BとEW-B3にて入り組んでおり、一部は第7-2層や後述する第31層も含む可能性がある層である。完全な関係を捉えることができなくなったため、推定で第28層は第7層と第22層と同一層であると思われる。

【第29層】 EW-B3にて確認した第28層と第30層の中間の層である。

【第30層】 トレンチ2・3にて設定した堆積層である。地山直上の層である。暗褐色のシルト質の層であり、礫は少ない。第19層と同一層である。

【第31層】 本層は第1号盛土遺構の中央部、トレンチ2・3、SN-Bにて設定した層である。まわりが第15層など遺物を多量に包含する堆積層であったが、この部分は遺物があまり含まれなかった。第4章第1節の第21号土坑で詳述した通り、第31層の一部は第21号は土坑の覆土の可能性が高い。

アルファベットの層は、ベルト部分の概ね小さな堆積層につけた。

【第a層】 本層は第1号盛土遺構の南部分、EW-B1で確認した。シルト質の、礫が少ない層である。第1号盛土遺構の南西隅の裾部分を形成する堆積層である。トレンチ調査ではこの層は第24層で掘り下げている。

【第b層】 本層は第1号盛土遺構の南部分、EW-B1で確認した。シルト質の、礫が少ない層である。第1号盛土遺構の南西隅の裾部分を形成する堆積層である。トレンチ調査ではこの層は第24層で掘り下げている。

【第c層】 EW-B1の第14層から西側に延びる層である。黒褐色の強いシルト質の堆積層である。

【第d層】 EW-B1の第14層と第20層に囲まれた小さな堆積層である。

【第e層】 EW-B2の第s層の上層である。

【第f層】 欠番

【第g層】 EW-B1のビット1376の覆土である。

- 【第h層】 EW-B1の第20層と地山の間の暗褐色のシルト質堆積層である。
- 【第i層】 EW-B1のピット1379の覆土である。
- 【第j層】 第21層の上部、第12-1層下層の小さな層である。
- 【第k層】 第21層同様に、風倒木を形成する層である。
- 【第l層】 第21層同様に、風倒木を形成する層である。
- 【第m層】 第21層同様に、風倒木を形成する層である。
- 【第n層】 第21層同様に、風倒木を形成する層である。
- 【第o層】 第21層同様に、風倒木を形成する層である。
- 【第p層】 EW-B1の東側、第1-1層上面にて確認した。第21層（風倒木）に切られている。
- 【第q層】 SN-B東壁、第s層の下層である。
- 【第r層】 EW-B1の東側、第1-1層と地山の間で確認した。
- 【第s層】 SN-B東壁、第6層と同一層である。
- 【第t層】 SN-B西壁、第14-1層・第21層の下層である。
- 【第u層】 SN-B西壁、第16層と第26層の間の層である。
- 【第v層】 SN-B西壁、第16層と同一である。
- 【第w層】 SN-B東壁、第q層の下層である。
- 【第x層】 SN-B東壁、第1-3層の下層である。
- 【第z層】 地山への漸移層である。

(4) 堆積層の関係について

上述の堆積層の記述を元に、第1号盛土遺構の大まかな堆積層の状況を把握する。

トレンチ5から9のある第1号盛土遺構の東側は、第1層である表土の下に礫を多く含む層が広がっている（第1層や第7層）。この礫を多く含む層の下には、礫が少ない層（第2層、第8・9層など）が広がり、そして地山面に至る（口絵5下）。当初はこの表土、礫層、礫の少ない層、地山というおおまかな堆積状況を認識した。

第1号盛土遺構の西側は、基本的に西側と同じ状況であるが、礫層と礫の少ない層の間に、第15層や第18層といった遺物を多量に包含する層がはいる点で異なる。

トレンチを掘り下げた段階で、各ベルトに層名をつけたので、本来は同一層である層もある。逆に、各ベルトを除去していく過程で、第1層と第7層のように同一層と捉えていた堆積層が異なることも確認できた。

これらの関係を表したのが表5である。その中で鍵となる層の関係を列記する。

第4層と第12層は同一層である。

第6層、第s層、第7-2層は同一層である。

第10層、第22層は同一層である。

第11層、第23層は同一層である。

第28層は第7-1層、第7-2層と同一である。

第9層、第19層、第20層、第23層などは第1号盛土遺構の最下層を形成する。おそらくは同

一層の範疇で捉えられる堆積層である。

(5) 段階の設定

川原平(1)遺跡の第1号盛土遺構は、上述の堆積層の特徴から、シルト質層、礫層、炭層の互層の重複によって形成され、堆積層の廃棄方向が異なっている。その異なりはある程度の規則性を持っており、堆積層の形成過程とも関連すると考えられる。この第1号盛土遺構と同じような特徴を持つ遺構に、弘前市葉師遺跡で検出された盛土遺構がある。同遺構の堆積層は、黒色土・黄褐色土・炭の互層で構成され、堆積層の傾斜角度や廃棄方向などから包2-AからII層の8つに大分類され、廃棄単位が異なるものと捉えられている。

また、川原平(1)遺跡の盛土遺構の堆積層は、トレンチごとに層名を振ったため、本来は同一である堆積層がある。

このような一括できる堆積層があるので、堆積層の一つにまとめる上位概念として、段階を設定した。そして、礫の混入度合い、黄褐色や炭層、さらに堆積層の方向などを目安として、IからV段階に区分した。以下I段階からその内容をみていく(図78、表5)。

【地山】

この盛土の形成並びに堆積層の廃棄方向、傾斜は旧地形に影響を受けていると思われるので、地山について説明をする。トレンチ1から4のあたりは西側に向かって、トレンチ8・9は南側に向かって地山が緩やかに傾斜している。トレンチ6・7・10一帯の地山は平坦である(図78)。

【I段階】

縄文時代中期後半をI段階とする。第1号盛土遺構との重複関係にあり、川原平(1)遺跡の時期変遷を捉える上で重要なので設定した。遺構は地山面から掘り込んでいる。

【II段階】

II a段階とII b段階に区分した。

〔II a段階〕第1号盛土遺構の最下層は、第2・8・9・16・19・20・24・25・26・23・29・30層に相当し、盛土遺構外の第III層も、出土土器からこの段階と思われる。これらの堆積層は黒褐色土を基調とする。配石遺構が確認できた一帯は礫が堆積層内に多く含まれているが、全体的に礫の含有は少ない。

第4章第1節で詳述した配石遺構、土器埋設遺構、土坑など縄文時代後期後葉から晩期前半期の遺構は、この段階に属する堆積層に構築されている。

堆積層は、第16・19層、第20・26層のように重複関係の場合もあり、層の形成に時間差はあったと考えられる。しかし、一部を除き(第16層など)、上記遺構の掘り込み面などで時期差は認められないので、大きくは同一堆積層の範疇で捉えられる。

〔II b段階〕II b段階はII段階の中で北捨場に連続する部分で、地山が急激に落ち込む一帯がこの範囲である。II a段階とII b段階の境界は漸移的であるので、ここでは便宜的にトレンチ5と、トレンチ5と10の間にあるSN-BはII b段階にした。第11層などが相当する。この地点では遺構は確認できなかった。

【Ⅲ段階】

第1号盛土遺構はVH・I-34・35あたりの遺構中央部から形成され始める。これをⅢ段階とする。このⅢ段階は、第1・5・6・7・15・18・27・28・31層に相当する。堆積層は、VH・I-34・35を中心に、その周辺部まで広がり、堆積方向も地山の微地形によって東から西へ、地山の低い方向に向かって堆積している。暗褐色土を基調とした層で、第1・7層を除き、礫があまり入り込まない堆積層である。

Ⅲ段階はさらに細分した。

【Ⅲ a 段階】Ⅲ a 段階は第15層に相当する。炭化物の層である。大洞C2式からA式の土器が出土している。第15層は発掘時に完形の土器が多数出土している。堆積層は比較的水平的な堆積状況である。

【Ⅲ b 段階】Ⅲ b 段階は第18層に相当し、Ⅲ a 段階の第15層の上に形成されている。黒褐色土を基調とした堆積層であり、土器は堆積層の傾斜に沿って水平堆積していた。発掘時には完形土器はあまり目につかなかつたが、接合作業によって、ある程度形が復元できる土器が多数確認できた。概ね大洞C2式からA式の土器が出土している。堆積は東側から西側に傾斜している。

【Ⅲ c 段階】Ⅲ c 段階は第7層（第7-1層）を主体とした礫を多く含む層である。当初後述するⅢ d 段階の第1層と同一であり、盛土遺構の第Ⅳ段階を形成する礫層の一部と考えていたが、EW-B2のセクション図で、第1層と分離し、第15層の下にもぐりこむことが確認できた。第1号盛土遺構のⅢ段階の中では最下層に相当する層である。

【Ⅲ d 段階】Ⅲ d 段階は第27層の黄褐色のシルト層と第1層（第1-1層）・第5層を主体とした層である。第27層を除き礫が入り込む層であり、第15・18層とは第27層の黄褐色層で明瞭に区分できる。第27層が検出された段階で、岩手県大橋遺跡で報告されているような、盛土遺構中の居住痕跡の可能性を疑いながら調査を進めたが、炉跡などの痕跡が認められなかったため、堆積層として扱った。第27層は、Ⅲ a・b 段階と区分する境界線としてⅢ d 段階に含めた。

【Ⅲ e 段階】Ⅲ e 段階は、Ⅲ段階の最上層にあたり、礫の少ない層である。第6層・第7-2層に相当する。

【Ⅲ f 段階】発掘時に第1と第7層は礫の多い層であり、当初は同一層との認識であった。ただ、土層観察ベルトから上下に分かれてしまい、トレンチ出土はⅢ c・d・e 段階のどれに帰属するかは不明になった。また、第28層は、EW-B3とSN-Bの交点で2つの層に分離してしまった。こちらもトレンチ出土はⅢ c・d・e 段階のどれに帰属するかは不明になった。このように、Ⅲ段階に属するが、それ以上の詳細な出土地点は不明である場合、Ⅲ f 段階とした。

【Ⅳ段階】

Ⅳ a 段階とⅣ b 段階に区分した。

【Ⅳ a 段階】第1号盛土遺構の最上層（第1層を除く）である。この層は礫層を主体としている。分布はVF・G-33・34を中心に広がり（図78IVab段階）、堆積層はⅢ段階と異なり、北西から南東側に向かって形成されている。

堆積層としては第4・12・13・14層を主体としている。途中風倒木（第21層）が形成されている。第13層は第12層上の炭化物が多く入る層である。第14-1層は礫の少ない層であるが、ここではⅣ a 段階に含めた。

第17層は礫層でないが、第4層の上層に相当するので、この段階に便宜的に含めた。

第21号土坑(第31層)は、この段階に構築されたと思われる。

【IV b 段階】EW-B3を境に北側は北捨て場へとつながる部分である。この部分は第10・第22層に相当する礫層である。ベルトからこれらの層はⅢ段階に属するが、出土遺物は、Ⅲ段階では水平堆積したような押し潰れた状態であるのに対し、こちらはそうした堆積状態ではなかった。また、間に第21号土坑がはいりこみ、厳密にはⅢ段階と同一と捉えられるかの判断が難しい部分でもあった。礫を多く含むという点、遺物の出土状況、北捨て場との絡みから、この部分は独立してIV b 段階とした。

【V 段階】

第1号盛土遺構の第I層である表土をV段階とした。第1号盛土遺構と遺構外の境界は不明瞭である。遺物出土量は、第1号盛土遺構一帯が多く、盛土遺構から離れるにつれ、少なくなる。

【時期不明】

第1号盛土遺構内で、各段階のどの部分に帰属するか不明な場合は、時期不明として扱った。

最後にもう一度各段階についてまとめる。

I 段階は中期遺構である。II 段階は、後期後葉から晩期前半の遺構が確認できた層である。III 段階は盛土遺構の上層になる礫層下を中心とした堆積層である。礫の少ない堆積層と多い堆積層の互層で形成されている。主に第1号盛土遺構の中央部に分布する堆積層であり、堆積層も東側から西側の緩斜面に向かって形成されている。IV 段階は第I層直下の礫が多く入り込む堆積層であり、堆積は南西方向に向かって形成されている。III 段階とIV 段階は、第1号盛土遺構内で、堆積層の分布範囲、堆積方向で大きく異なる。V 段階は表土である第I層が相当する。

なお、基本層序として、第I層、第III層が記載されている。第III層とIII 段階が混同されやすいと思われる。この「段階」は、重複する第1号盛土遺構の堆積層を内容ごとに区分する単位であり、基本層序や、川原平(1)遺跡全体の時期区分単位ではない。

(高橋)



図75 第1号盛土遺構トレンチ・セクション・測量杭配置図

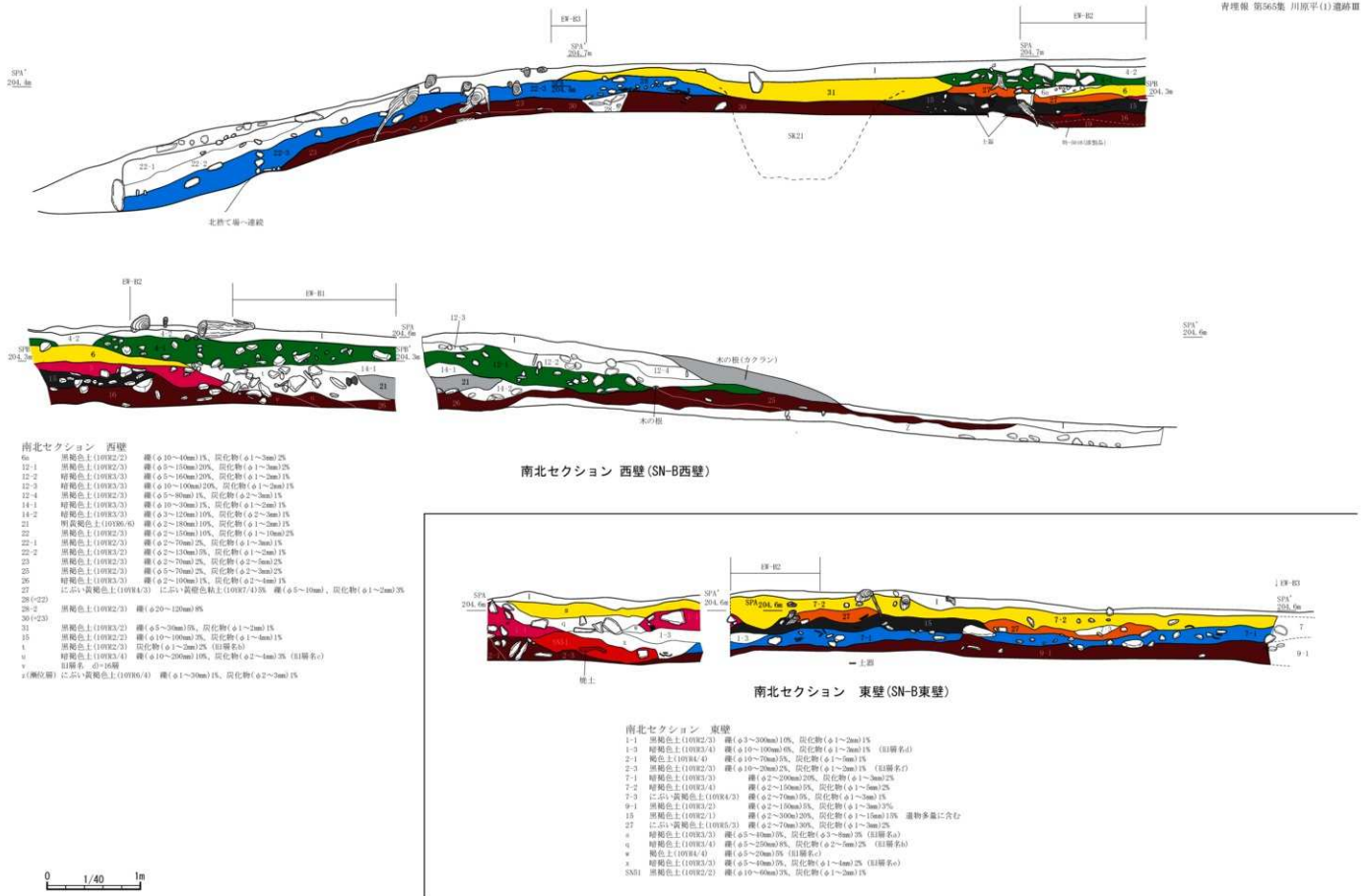
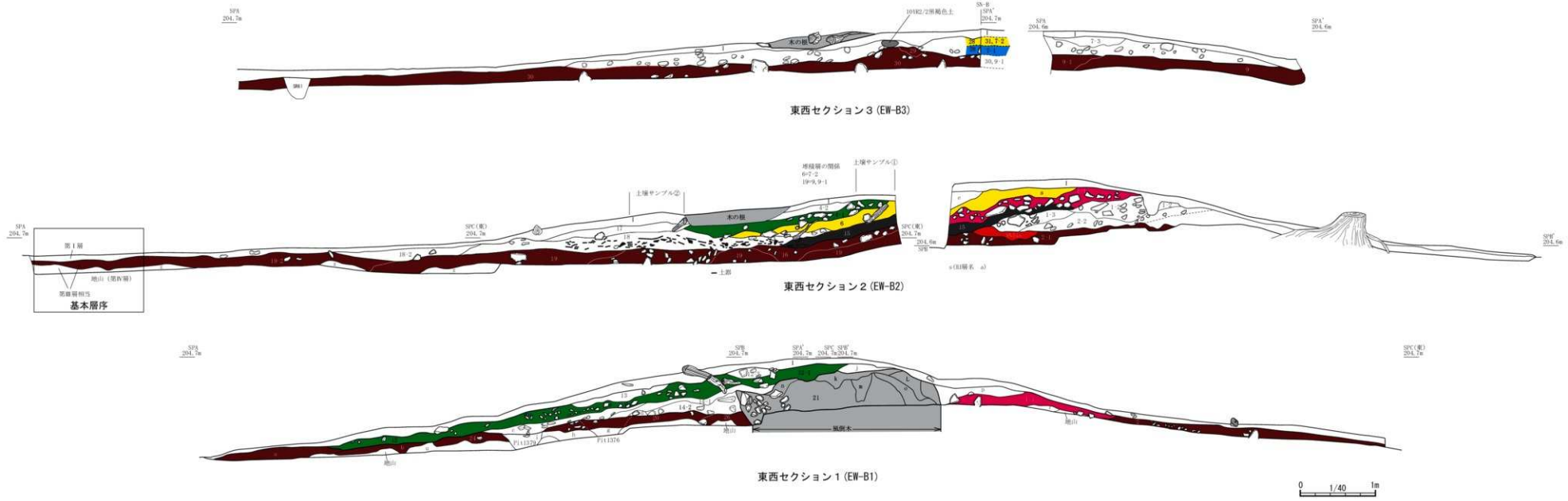


図6 第1号盛土遺構 南北セクション



東西セクション1 (EW-B1)

1-1	埋藏土(109K2/3)	礫(φ10~50mm)2%
2-2	埋藏土(109K3/4)	109K2埋藏土高含む、礫(φ1~10mm)10%、炭化物(φ1~2mm)3%
12-1	埋藏土(109K3/4)	礫(φ1~120mm)20%、炭化物(φ1~5mm)2%
12-2	埋藏土(109K3/4)	礫(φ5~150mm)2%、炭化物(φ5~10mm)2%
13	埋藏土(109K2/3)	礫(φ5~50mm)2%、炭化物(φ1~1mm)10%
14-1	埋藏土(109K2/3)	礫(φ1~60mm)1%、炭化物(φ1~3mm)1%
14-2	埋藏土(109K2/3)	礫(φ5~30mm)2%、炭化物(φ1~3mm)1% (柱頭石c)
20	埋藏土(109K2/3)	礫(φ50~80mm)2%、炭化物(φ1~5mm)1%
21	埋藏土(109K4/4)	礫(φ10~100mm)2%、炭化物(φ1~3mm)1%
24	埋藏土(109K2/3)	礫(φ1~60mm)1%、炭化物(φ1~8mm)
26	埋藏土(109K2/3)	礫(φ5~10mm)1% (柱頭石有)
a	埋藏土(109K2/3)	礫(φ1~2mm)2%
b	埋藏土(109K2/3)	炭化物(φ1mm)以下
c	埋藏土(109K2/3)	礫(φ10~100mm)8%、炭化物(φ1~8mm)1%
d	埋藏土(109K2/3)	礫(φ50mm)1%、炭化物(φ1~2mm)1%
e	埋藏土(109K2/3)	砂(111370)
h	埋藏土(109K3/4)	礫(φ5~10mm)1%
i	埋藏土(109K2/3)	礫(φ1~10mm)1%、砂(111370)
k	埋藏土(109K3/4)	炭化物(φ1~2mm)1%、トレンチの順に埋定対応
l	埋藏土(109K3/4)	炭化物(φ1~3mm)1%
m	埋藏土(109K3/4)	礫(φ5~10mm)1%、炭化物(φ1~3mm)4%
n	埋藏土(109K3/3)	炭化物(φ1~2mm)1%
o	埋藏土(109K3/3)	礫(φ10~50mm)2%、炭化物(φ1~2mm)1%
p	埋藏土(109K4/4)	炭化物(φ1~2mm)1%
r	埋藏土(109K3/4)	礫(φ5~20mm)1%

東西セクション2 (EW-B2)

1-2	埋藏土(109K4/4)	礫(φ10~150mm)2%、炭化物(φ1~2mm)1%以下
1-3	埋藏土(109K4/4)	礫(φ10~100mm)10%、炭化物(φ1~3mm)1%
4-1	埋藏土(109K3/4)	礫(φ10~120mm)10%、炭化物(φ1~2mm)2%
4-2	埋藏土(109K3/3)	礫(φ10~60mm)1%、炭化物(φ1mm)1%
5	埋藏土(109K3/3)	礫(φ50~60mm)1%
6	埋藏土(109K4/4)	礫(φ2~150mm)1%、炭化物(φ1~5mm)2%
15	埋藏土(109K2/2)	礫(φ20~90mm)2%、炭化物(φ5~20mm)1%土跡多い
16	埋藏土(109K2/2)	埋藏土(109K2/2)土跡有り
17	埋藏土(109K2/3)	礫(φ10~80mm)2%、炭化物(φ1~5mm)2%
18	埋藏土(109K2/2)	礫(φ10~80mm)1%、炭化物(φ1~3mm)2%
18-2	埋藏土(109K2/2)	礫(φ10~20mm)2%、炭化物(φ1~2mm)1%
19	埋藏土(109K4/4)	礫(φ3~50mm)2%、炭化物(φ1~3mm)2%
19-2	埋藏土(109K4/4)	礫(φ20~30mm)2%、炭化物(φ1~3mm)2%
e	埋藏土(109K3/3)	礫(φ5~10mm)1%
f	埋藏土(109K3/4)	礫(φ5~30mm)2%、炭化物(φ1~2mm)2%
35b	埋藏土(109K2/2)	礫(φ10~30mm)2%、炭化物(φ2~5mm)10%

東西セクション3 (EW-B3)

7-1	埋藏土(109K3/2)	礫(φ2~120mm)10%、炭化物(φ1~30mm)5%
7-3	埋藏土(109K3/2)	礫(φ5~50mm)2%、炭化物(φ1~2mm)1%
8	埋藏土(109K2/2)	礫(φ5~50mm)1%、炭化物(φ1~3mm)2%
9-1	埋藏土(109K2/2)	礫(φ3~50mm)2%、炭化物(φ1~3mm)2%
28	埋藏土(109K2/2)	埋藏土(109K2/2)土跡有り、礫(φ10~80mm)1%、炭化物(φ1~10mm)1%
29	埋藏土(109K4/4)	礫(φ30~40mm)1%
30	埋藏土(109K3/3)	礫(φ10~70mm)2%、炭化物(φ1~5mm)2%

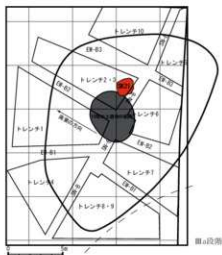
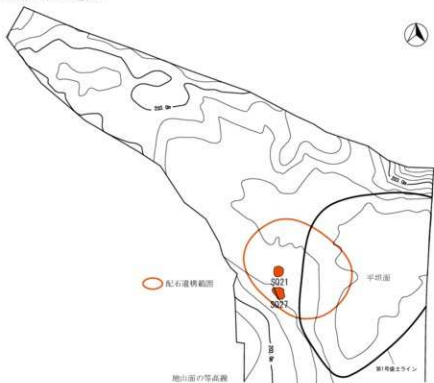
その他
Z 埋藏層

図77 第1号盛土遺構 東西セクション

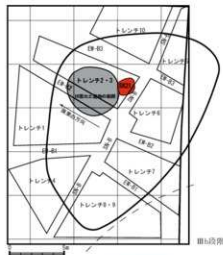
表5 第1号盛土遺構の堆積層

SN-B東壁	EW-B3	EW-B2	EW-B1	SN-B西壁	段階
I	I	I	I	I	V
		17	13	4-2	IVa
		1-1	12-1	4-1	
			14-1	14-1	
			21(風倒木)	(SK21)	
7-2 s	7-2, 28, 31	6 s	14-2	14-2 t	IIIe
7-3 q			p	28 6	III d
1-1		1-1	1-1	5	
27				27	
w					IIIb
		18			IIIa
		15		15	III c
1-3		1-2			
x		1-3			遺構
7-1	7-1, 28	2-2		22-34(-10), 28	
SN51		SN51			IIa
8・9 2, 2・3	9, 29, 30	16, 19	2, 20, 24, 26	16, 19, 1, 23(-1), 25, 26, 30	第10層はIIb

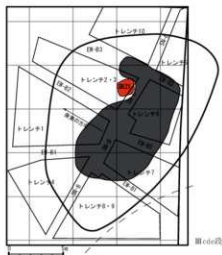
※ 第10層とII層はトレンチ5で確認した層であり、セクショングラフには現れない。それぞれ、第22層と第23層に対応し、北捨て場と連続する。各段階の主体となる層にトーンを貼った。第76・77図の堆積層の色はこの表と対応している。



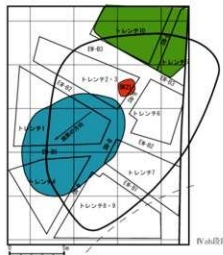
Ⅱa段階



Ⅲb段階



Ⅳc段階



Ⅴa段階

図78 第1号盛土遺構の各層推定分布図

2 第1号盛土遺構出土遺物について

(1) 全体の様相

以下、第1号盛土遺構の第21層（風倒木）を除き、出土遺物を報告する。

第1号盛土遺構から多量の遺物（表6）が出土している。土器は遺構出土も含めると、1,138,915.1g出土し、遺構を除くと、1,048,115.4g出土している。（剥片）石器は、遺構も含めると425,719.1g、遺構を除くと、408,335.3g出土している。

遺構出土を除く土器の出土状況（表7）を見ると、グリッドVI-34を頂点として土器の出土が集中している。この部分は第1号盛土遺構の西側中心部、第15層や第18層が堆積している部分であるためと考えられる。遺物はグリッド36ラインを境に急激に少なくなる。平成27年度に第1号盛土遺構の東側裾部分を調査した際に、遺物はほとんど出土しなかったため、遺物の廃棄はおおよそ35ラインから西側に向けて開始されたと考えられる。西側もグリッド32ラインを境に西側は出土重量が1桁少なくなる。そして、グリッド29ラインよりも西側はさらに出土重量は少なくなる。南北ではVFラインから出土重量は減少する。また、北はVKラインから減少する。このように全体的に第1号盛土遺構の範囲に出土遺物が集中する。

剥片石器も同様にグリッドVI-34を頂点として剥片石器の出土が集中している（表8）。第1号盛土遺構の範囲から外れると、徐々に遺物出土重量は減少する。

なお、礫石器は、調査中の段階で、使用痕が残されていないものは、形状的に礫石器の素材であっても廃棄しており、剥片石器のように可能な限り回収したわけではないので、重量分布は割愛した。

以上のように、第1号盛土遺構のグリッドVI-34一帯に遺物が集中して包含されていると推定される。

出土土器は、後期後葉から晩期の土器が出土し、若干中期の土器が出土する。後期後葉から晩期の土器は全体からまんべんなく出土するのではなく、地点や層位から時期ごとに隔たりなどがあり、第1号盛土遺構がどのように形成されていったかを堆積層の内容と土器から復元できると思われる。

以下、各段階にて出土した遺物の内容を記載する。

表6 出土遺物の重量（遺構出土を除く）

	土器重量 (g)	石器重量 (g)
Ⅱ段階・第Ⅲ層	250,684.1	75,276.7
Ⅲa段階	102,900.9	19,586.5
Ⅲb段階	202,033.2	37,342.1
Ⅲc段階	33,921.8	24,095.4
Ⅲd段階	19,715.9	5,901.6
Ⅲe段階	18,418.0	7,152.9
Ⅲf段階	91,718.4	33,559.6
Ⅳa段階	74,669.2	35,215.3
Ⅳb段階	48,413.9	10,433.0
V段階・第Ⅰ層	133,699.2	135,426.5
時期不明	71,940.8	24,345.7
合計	1,048,115.4	408,335.3
出土総重量	1,138,915.1	425,719.1

表7 グリッド別土器出土重量 (g)

グリッド	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	総計
VO	424.5											424.5
VN	1,922.5	13.9	173.3	63.2								2,172.9
VM	9.2	449.4	990.1	819.3	198.0	1,266.0	68.8					3,800.8
VL		7.4	74.7	670.1	2,813.1	2,442.4	1,923.8	1,910.5				9,842.0
VK				759.3	3,227.0	2,306.3	2,511.4	2,031.5	1,494.6			12,330.1
VJ					657.7	249.2	3,867.8	12,495.4	47,382.7	77,785.6	54,055.4	196,493.8
VI						3,539.9	3,946.3	58,985.2	341,856.8	83,382.9	21,614.0	513,325.1
VH						237.2	7,199.6	31,929.7	99,282.4	67,906.4	2,573.0	209,128.3
VG						399.9	5,610.7	28,693.1	35,483.0	11,948.4	175.1	82,310.2
VF							767.6	2,294.4	5,119.4	156.5	222.3	8,560.2
総計	2,356.2	470.7	1,238.1	2,311.9	6,895.8	10,440.9	25,896.0	138,339.8	530,618.9	241,179.8	78,639.8	1,038,387.9

遺構出土並びに複数のグリッドにまたがるものも省く。

表8 グリッド別剥片石器出土重量 (g)

グリッド	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	総計
VN	1,621.7	761.8	403.2	136.1								2,922.8
VM	155.8	567.4	1,188.5	1,352.4	922.7	1,653.3	377.9					6,218.0
VL			81.3	858.8	2,494.4	1,319.9	3,338.3	1,367.0				9,459.7
VK				498.7	2,153.1	4,612.0	2,743.3	3,218.0	3,697.1			16,922.2
VJ					958.0	502.8	2,657.6	4,582.1	28,303.8	43,933.4	22,475.3	103,413.0
VI					52.0	1,337.3	2,770.8	18,457.4	96,084.5	23,099.6	5,692.3	147,493.9
VH						910.5	2,735.9	13,901.1	32,597.3	22,450.0	1,265.9	73,860.7
VG						897.9	2,841.2	7,974.5	15,521.6	4,557.1	594.5	31,786.8
VF							1,341.5	1,355.2	4,021.8	2,513.6	542.4	9,774.5
総計	1,777.5	1,329.2	1,673.0	2,846.0	6,580.2	10,933.7	18,506.5	50,855.3	180,226.1	96,553.7	30,570.4	401,851.6

遺構出土並びに複数のグリッドにまたがるものも省く。

(2) IIa段階 晩期前半

IIa段階は、第1号盛土遺構の最下部に形成されている堆積層である。堆積層は、北側から南側、第23・8・9・16・19・2・20・24・25・26層の順番で記述する。

縄文時代後期後葉から晩期前半に形成された面であり、晩期遺構の多くは、この面を掘り込んでいる。トレンチ4で調査した第20層や第24層は配石遺構が密集して確認できた地点であり、本来は配石遺構の覆土出土資料も含まれていると思われる。縄文時代後期後葉から晩期にかけての遺物が多いが、晩期後半の土器は意図的に抜き出し資料化した。後述する第Ⅲ層と同一層であるので、表9にIIa段階並びに、第Ⅲ層出土の土器のグリッド別重量を掲載した。なお、土器は250,684.1g、剥片石器は75,276.7g出土している(表6)。

表9 IIa段階・第Ⅲ層出土土器のグリッド別重量(g)

グリッド	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	総計
VN	1,053.4			63.2								1,116.6
VM		211.3	217.8	31.3	170.3	254.7						885.4
VL				8.1	1,033.2	1,694.2	105.6	74.3				2,915.4
VK					1,562.5	297.9	1,706.6	1,059.0	192.9			4,818.9
VJ					327.6	237.7	882.3	6,019.2	4,924.9	19,256.5	28,526.5	60,174.7
VI					625.8	2,631.3	18,802.4	35,965.6	20,413.0	11,528.9	89,967.0	148,832.9
VH					237.2	5,593.1	14,761.7	21,869.1	16,305.8	1,526.7	60,293.6	103,286.1
VG					90.9	3,303.9	9,445.6	9,515.2	2,233.6	108.4	24,697.6	47,395.7
VF							644.0	468.5	324.7	28.3	162.7	1,628.2
総計	1,053.4	211.3	217.8	102.6	3,093.6	3,438.4	14,866.8	50,630.7	72,792.4	58,237.2	41,853.2	246,497.4

複数のグリッドにまたがるものも有る。

【土器】

[第23層]

第1号盛土遺構の北側の平坦部から出土した土器であり、トレンチ10一帯の出土資料である。

B突起(図80-1)、3個一組の突起(図80-2)、刻目列を持つ口縁(図80-4)の粗製深鉢形土器がそれぞれ出土している。図80-3・5、図81-1は雲形文を持つ皿形土器である。図81-2は大形の壺形土器である。頸部に隆帯と短沈線を持つ。底部は平底である。図82-1は注口形土器である。頸部は欠損し、胴部上側に隆帯や縄文が施文されている。

土器片としては、粗製深鉢形土器(図82-2~4)、精製深鉢形土器(図82-5)、縄文時代中期円筒上層e式(図82-6)が出土している。鉢形土器などは後期後葉から晩期前半(図82-7、10~22)、晩期後半(図82-8・9)などが出土している

[第8・9層]

トレンチ6を中心に広がる。深鉢形土器、鉢形土器、壺形土器、浅鉢形土器などが出土している。

図83-1は上げ底の粗製深鉢形土器である。図83-2は平縁の入組文を持つ台付鉢形土器である。台部は欠損している。大形の鉢形土器(図83-3)は、山形突起の頂部に4つの刻みを持つ。体部には入組文が展開している。図83-5は晩期中葉ごろの台付鉢形土器である。把手と口唇部に刻みを持ち、口縁には3条沈線が巡る。図83-4は口縁部を欠いた下半部の資料である。

皿形土器(図83-6)は全面赤彩が施され、胴部に矢羽状文のもう一本追加された、横倒しのN字状の綾杉文が展開している。突起のはがれた痕跡が認められ、四脚を持つ。

土器片(図83-7・9~16)としては、粗製深鉢形土器、精製深鉢形土器、矢羽状沈線文を持つ壺

形土器などが出土している。図83-8は香炉形土器の頂部と思われる。4つの突起をもち、中心に孔がある。

〔第16層〕

トレンチ1を中心に確認した堆積層であり、出土遺物は晩期後半期が多い。

台付鉢形土器(図84-1)は、工字文と突起をもち、内外面ともに炭化物が厚く付着している。縄文は縦走のRL縄文である。晩期5期の土器と思われる。

他に粗製の鉢形土器(図84-4)、口縁部が無文(図84-3)、3条沈線と突起(図84-2)を持つ鉢形土器が見受けられる。台付浅鉢形土器(図84-5)は、把手を持ち、口縁に4条沈線が巡る。台部(図84-6)は、沈線と突起を持つ。浅鉢形土器(図84-7)は、2段の矢羽状沈線文をもち、内外面が赤彩されている。

晩期前半の土器片(図84-9・10)が出土している。

〔第19層〕

トレンチ1を中心に広がる堆積層である。この堆積層を掘りこんだ土器埋設遺構が多数確認できた。

図85-1は、後期後葉の波状口縁を持つ台付鉢形土器であり、横に連続する1段の入組文が展開し、文線帯下端に突起を持つ。台部は欠損している。他の鉢形土器(図85-2)は、B突起の口縁を持ち、口縁部は無文である。内外面に炭化物が付着している。図85-3から6は晩期前半の土器である。図85-8は無文の鉢形土器であり、同一個体(図130-30)が、第18層で出土している。

広口壺形土器(図85-9)は、充填文としての三叉文が展開している。底部は欠損している。

晩期5期に帰属する台付鉢形土器(図85-7)がある。内面に漆の付着した小形の壺形土器(図85-10)が出土している。

大形壺形土器(図85-11)は、胴部に渦巻く菱形文、頸部に三叉文が展開し、赤彩が施されている。上げ底である。図85-12は、モチーフは類似しているが、頸部と体部の境の2本の横位沈線間に刻みを持つ点で異なる個体である。また、晩期前葉の渦巻き文を持つ壺形土器の胴部断片(図85-13)も出土している。

土器片としては、粗製深鉢形土器(図86-1～5)、口縁に平行沈線が巡る深鉢形・鉢形土器(図86-7～12)、条痕文を持つ深鉢形土器(図86-6)や、後期後葉から晩期前半の深鉢形・鉢形・注口形土器(図86-14～31)なども出土している。図86-32は雲形文を持つ皿形土器である。

また、晩期後半に属する工字文や平行沈線を持つ鉢形土器の土器片が確認されている(図87-1～11)。図87-12は注口形土器の胴部片であろうか。

〔第30層〕

3条沈線と突起を持つ深鉢形土器(図87-13)、入組文を持つ鉢形土器(図87-14)、注口形土器(図87-15)が出土している。

〔第2層〕

トレンチ7を中心に広がる。この下部で、第13号堅穴住居跡が確認されている。

鉢形土器、台付鉢形土器、入組文を持つ深鉢形土器などが出土している。

大形の鉢形土器(図88-1)は大形突起の連続で口縁部が形成されている。口縁部に3条沈線が巡り、口縁と胴部の境は、明確に屈曲している。縦走するRL縄文が施文され、内面の胴部に炭化物が付

着している。底部は重みで粘土がはみ出た、もしくは潰れたようになっている。

台付鉢形土器(図88-2)はこの近辺で確認された第51号焼土遺構出土の台付鉢形土器2点と非常に類似しており、形式的に聖山Ⅱ式に帰属する土器である。把手を持つ形態で、口縁部にB突起を持ち、口縁部は無文である。頸部と胴部の境に突起を持ち、体部に工字文を持つ。反転部は斜めに切られている。外面に炭化物が付着している。内面はミガキ整形である。台付鉢形土器(図88-3)は無文であり、口縁部には、大小交互に突起が貼り付けられている。

土器片は入組文を持つ深鉢形土器(図88-4)、二山状突起を持つ深鉢形土器片(図88-6)、隆帯とそこに刻みを持つ深鉢形土器片(図88-5)、弧状の沈線文を持つ土器(図88-8)などが出土している。

〔第20層〕

トレンチ4を中心に確認できた堆積層である。

大形突起を持つ精製深鉢形土器(図89-1)が出土している。体部下半は無文である。全面が赤彩された皿形土器(図89-2)がある。羊歯状文や渦巻文が展開している。装飾的な突起は1箇所だけに貼り付けられている。

他に後期後葉から晩期前半期の深鉢・鉢形土器片(図89-3~7)、円筒上層e式の口縁部片(図89-8)、同一個体と思われる注口形土器の口縁突起部(図89-9~13)、体部片(図89-14)が出土している。同一個体と思われる注口部(図89-15)はIV段階の第1号盛土遺構の第14-2層から出土しているが、便宜的にこの層に掲載した。

〔第24層〕

トレンチ4を中心に確認できた堆積層である。配石遺構などはこの堆積層を中心に構築されている。

図90-1は条痕文と二山状突起を持つ大形粗製深鉢形土器は、第22号配石遺構や第29号配石遺構が検出できた一帯から出土している。実際に第29号配石遺構内での点取り遺物の中に、この土器の部品が少なからず確認されており、本来は配石遺構に関する遺物であった可能性もある。ただ、土器片の多くは第24層取り上げなので、この層とした。

内外面が炭化物で覆われた、口縁部に3条沈線を持つ深鉢形土器がある(図90-2)。図90-3は短沈線と刺突文を持つ鉢形土器であり、底部は丸底である。

他に粗製深鉢形土器(図90-4・5)や文様を持つ深鉢形・鉢形土器(図90-6~13)などの土器片が出土している。図90-10は第22号配石遺構出土の土器(図55-5・7・8)と同一個体と思われる。他に後期後葉から晩期前半の壺形・注口形土器などが出土している(図91-1~5)。

縄文時代中期後葉の土器片3個体(図91-6~8)も出土しているが、いずれも完形にはならなかった。

〔第25・26層〕

トレンチ4を中心に確認できた堆積層である。

粗製深鉢形土器(図91-9)、後期後葉から晩期前半期の土器片(図91-10~18)が出土している。図91-14は大形の山形突起を持ち、口縁に沿って刺突文が見られる資料である。他に榎林式の口縁部片が出土している(図91-19)。

Ⅱ a 段階出土土器の全体的な傾向として、後期後葉から晩期中葉以前の土器が多く出土している。しかし、第16層のように晩期後半期の土器が中心に出土している層もあるが、上層に完形土器の出土率の高い第15層が乗っている。その紛れ込みの可能性も否定できない。あるいは、第19層との境に凹凸が多いので、Ⅱ段階の旧地表面の窪みに第16層が形成された可能性もある。第2層に晩期後半の土器が多く含まれるのも同じ原因が考えられる。また、トレンチ6、7や10などの旧地形が平坦な一帯は晩期後半の土器が確認できた。

トレンチ1や4の一帯は、後期後葉から晩期前葉の土器が多く確認されている。晩期後半の土器は破片資料が多く、個体復元できるものはなかった。この辺りは、配石遺構や土器埋設遺構が集中して確認できた地点である。

【土製品】

無孔の土製円盤（図87-16）が第8・9層で出土している。

粘土塊（整理番号 土-212）が1点出土している（写真68）。

大形遮光器土偶（図92・93）がトレンチ10一帯で出土している。第28号土坑の覆土上層並びに、周辺から出土しているが、股間部・右腰・右脚部分は北捨て場から出土している。

髪飾りに当たる頂部が一部破損しているが、脚先から頭部まで接合するので、現状で器高が329mm程である。完形の場合、高さ35cm弱程になり、川原平（1）遺跡出土の遮光器土偶の中でも大形の部類に属する。

王冠をいただく形状の土偶で、王冠部には破損しているが香炉形土偶のようなブリッジが形成されている。後頭部には羊歯状文が退化したようなS字状の沈線文が見られる。胸部は沈線が円形に巡り、刻みが施されている。剣菱状入組三叉文が体部に展開し、腹部には隆帯を取り囲むように羊角文が巡る。入組三叉文の空隙を充填するようにC字文が展開する。頭部と左肩部に赤色顔料が残されている。

左肩部は、土偶の製作痕がよく残されている。左肩部は粘土の継ぎ面で破損している（図93写真1）。その部分を外すと（写真2）、中空の芯となる左腕部があり、その周りを覆うように粘土紐・板が、背中、肩の隆帯として貼り付けられている（写真2・3）。また、腹部のくびれ部の内側（写真6）、腰部の突出部の内側（写真4・5）に、接合の断続部分と部品を貼り合わせ、粘土がはみ出た部分が見られる。

【石器】

Ⅱ a 段階では、石鏃、石錐、石筥、石匙、削器、石核、剥片、礫石器などが出土している。

石鏃の大半は尖基・平基有茎鏃（図94-1～18）であり、特に尖基有茎鏃が多い。図94-19は茎部が不明瞭なので、尖基鏃とした。凹基鏃（図94-23）は1点出土し、平面形態が五角形であり、基部にアスファルトが付着している。石鏃の未製品と思われる小型の両面調整石器（図94-24）や、加工途上と思われる尖頭状に加工した剥片（図94-25）、形態が整わない石鏃（図94-21・22・26）が出土している。

石筥（図94-27）は、刃部側が基部に対して幅広に広がるバチ形を呈する。縦長剥片を素材とし、素材打面側に刃部を作出されている。

石匙は、両面加工の縦形石匙の断片(図94-28)以外は、横形石匙である。握み部にアスファルトが付着した事例もある。素材は縦長・横長剥片を用い、握み位置も剥片の側面側、打面側とさまざまであり、剥片形状に応じて形態を整えたと思われる。刃部は片面加工(図94-29から31)と両面加工(図95-1から3)が半々である。

図95-5は搔器であり、素材剥片の末端側に刃部を作出している。基部は両面加工であり、裏面側は平坦剥離、正面側は急角度の階段状剥離で構成されている。削器類は、片面加工、両面加工が辺ごとに変化がある。鋸歯縁加工もある。図96-2のような反方向加工もある。図96-3の右辺は両面加工であり、反方向の方が新しい。

アスファルト付着の剥片が出土している(図95-15)。

微細剥片を持つ剥片(図95-10)などがある。図96-4は大形の縦長剥片を素材とし、両辺に微細剥離が顕著に見受けられる。

石核(図96~99)は、打面転位を持った資料が多い。小形のを除き、表皮を残すものが多いので、石核の素材は小さなものが多かったと思われる。また、黒曜石の円礫素材の石核(図98-2)がある。

珪質頁岩製の敲石(図99-5~7)が出土している。素材形状は棒状、卵形、扁平と様々である。

磨製石斧(図100-1)は、安山岩を素材とし、基部が欠損している。擦痕は不明瞭である。側面の稜は比較的明瞭であり、側面は幾分丸みを持っている。刃部に刃こぼれが見られる。

礫石器は、凹石(図100-2~9・図101-1~4)が出土している。楕円形の円礫を素材とし、素材の平らな面の両面・片面に2つ・1つの凹みを持つ。石材は安山岩・砂岩・凝灰岩などを用いている。

磨石は、図101-6・8は礫の平坦面の片面に平滑な磨り面が形成されている。図101-5は擦痕が明瞭で、平らな面が表裏に形成されている。また、図101-9は扁平礫の側面に幾分ザラザラした面が形成されている。

敲石は、凹石と混合しているものや、単独で敲打痕を残すものがある(図102-1~4)。礫の幅狭い面的一端に叩き痕が形成されていることが多い。

石皿は、大形の扁平礫の一面に機能面が形成されている(図102-6・7)。縁ありの石皿は断片資料であり、敲打整形の痕跡が残されている(図102-5)。図102-8は扁平礫の一面に磨り面が形成されている。擦痕が素材礫の長軸に沿った方向に見られる。大形礫が1点出土している(写真66、整理番号レ-41)。

【石製品】

図103-1は粘板岩製の石剣断片である。図103-2から9は石製円盤である。側面を急角度に整形し、両極打撃のような剥離が見られるので、素材を台石に置き、垂直にハンマーを打ち下ろすことで側面を整形したと思われる。図103-5のような側面に研磨整形痕とアスファルトが付着している例もある。図103-10は粗粒玄武岩製であり、平面形態が円形で、図正面側が膨らみ、裏面側がくぼみ、全面研磨整形された石製品である。

(3) II b 段階 晩期前半

北捨て場への連続する部分であり、本報告はVJ-35・36までとし、VK-35・36は来年度報告にまわ

した。

【土器】

二山状突起を持つ大形の深鉢形土器(図104-1)は縄文が施文され、内外面に炭化物が付着している。また平縁で、口唇部が平坦な粗製大形深鉢形土器の底部欠損資料(図104-2)がある。共に口縁部は内傾している。また、補修孔を持つ粗製深鉢形土器(図105-1・3)がある。底部を欠いた深鉢形土器があり、R縄文が施文され、内外面に炭化物が付着している(図105-2)。入組文を持つ台付鉢形土器(図105-4)がある。内外面炭化物が付着している。山形突起を持つ、鉢形土器(図105-5)は体部上半に把手を持ち、その両端に突起が見られる。口縁部に羊歯状文の退化した刺突が、上下交互に施文されている。小形の台部断片資料(図105-6)、入組三叉文を持つ鉢形土器(図105-7)であり、内面に漆が付着している。口縁に突起を持ち、口縁部に入組三叉文、胴部にLR斜行縄文を持つ鉢形土器(図105-8)がある。

口縁部の横位沈線間に刻目列を持つ鉢形土器(図106-1)、同じモチーフを胴部を持つ赤彩の壺形土器(図106-3)、浅鉢形土器(図106-2)、小形壺形土器(図106-4)がある。また、断片資料であるが、透かし窓を持つ台部片(図106-5)が出土している。三叉文モチーフを持つ注口形土器(図106-7)がある。

他に土器片資料として、大形の条痕文を持つ深鉢形土器(図106-8)、入組文と突起を持つ深鉢形土器(図106-9)、粗製深鉢形土器(図106-10)、工字文(図106-11)、羊歯状文(図106-20)、入組三叉文、入組文を持つ鉢形土器がある。図106-22は横に展開する入組文を持つ浅鉢形土器であり、図106-23は刺突を持つ鉢形土器である。

【石器】

図107-1は両面調整石器である。破損資料であり、素材加工も粗い。図107-4は末端がヒンジフレクチャーの横長剥片の素材一辺に肉眼でも光沢が見られる微細剥片がある。図107-2・3・5は削器である。両面・片面加工の他に、5のような反方向の片面鋸歯状加工の石器がある。

図107-6は縦長の扁平礫素材を用い、長軸の一辺に片面加工が見られる石器である。図107-7は石核である。裏面に自然面を残す。

凹石は、表裏に凹が見られる。磨石は、両面・片面に磨り面が見られる。図108-3は石錘に類似し、扁平礫の一端に抉り加工をいれている。

108-5は棒状の大形礫を素材とし、素材の幅広面に凹みをもち、下面に剥離と研磨で面取りがなされている。

【漆製品】

VJ-35の第11層から漆製品が出土している(写真68、口絵7)。袋状の形態を呈している。

(高橋)

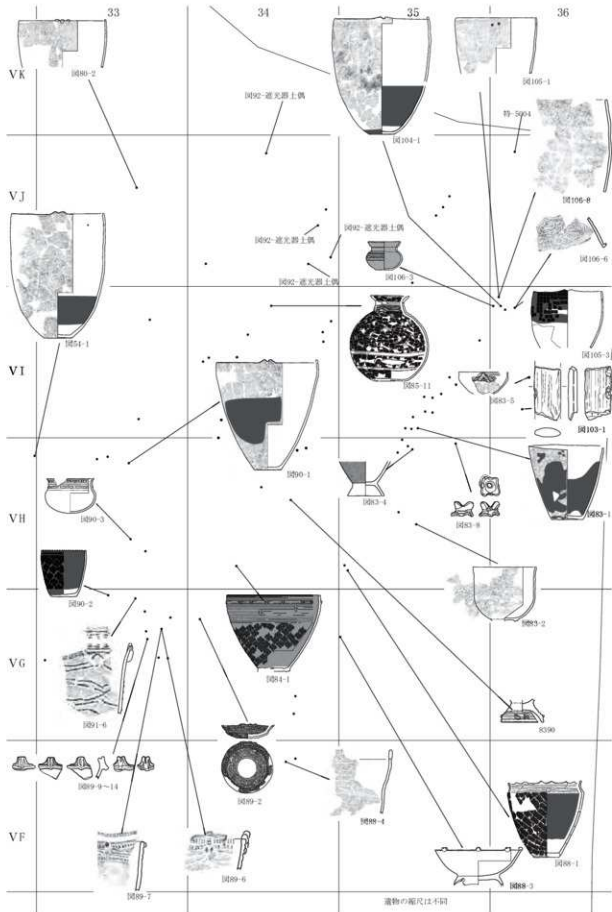
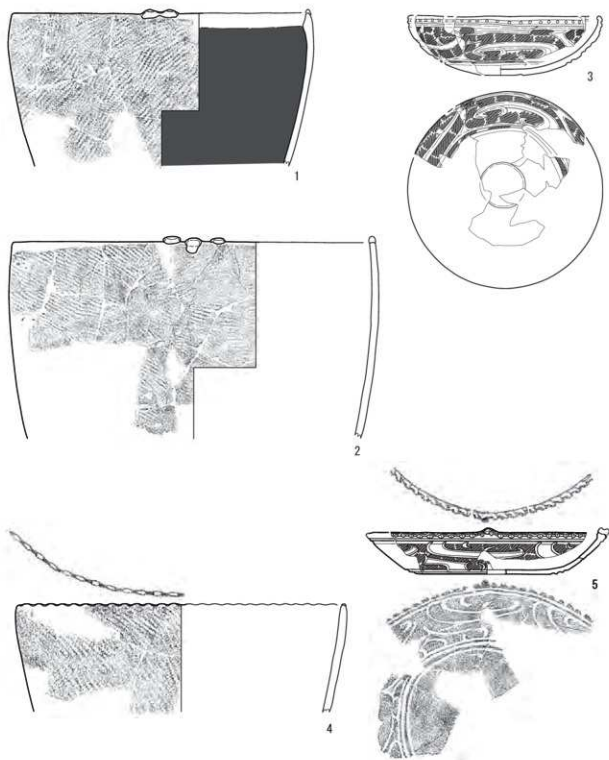


図79 第1号盛土遺構 II a段階出土遺物の分布



第23層

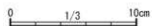


図80 第1号盛土遺構 IIa段階出土土器(1)

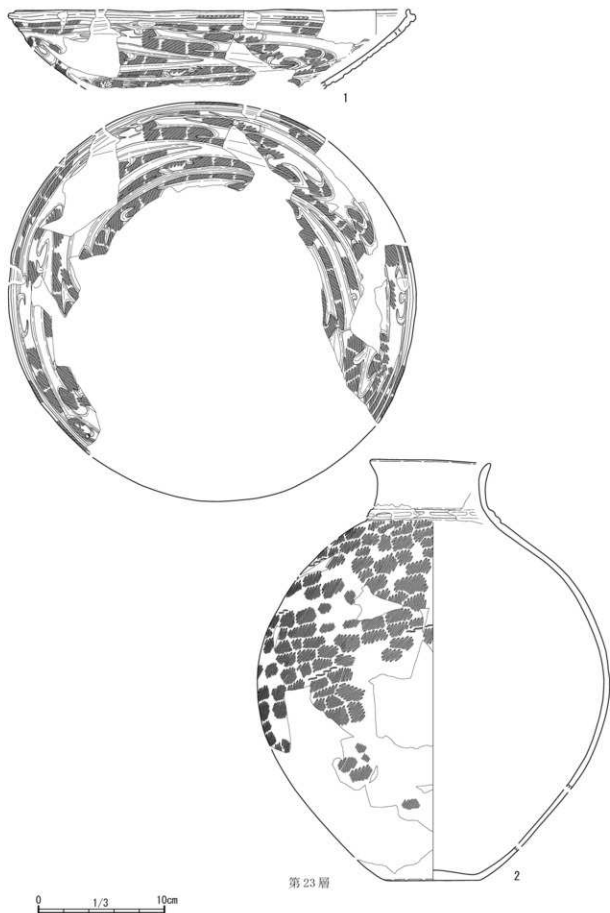
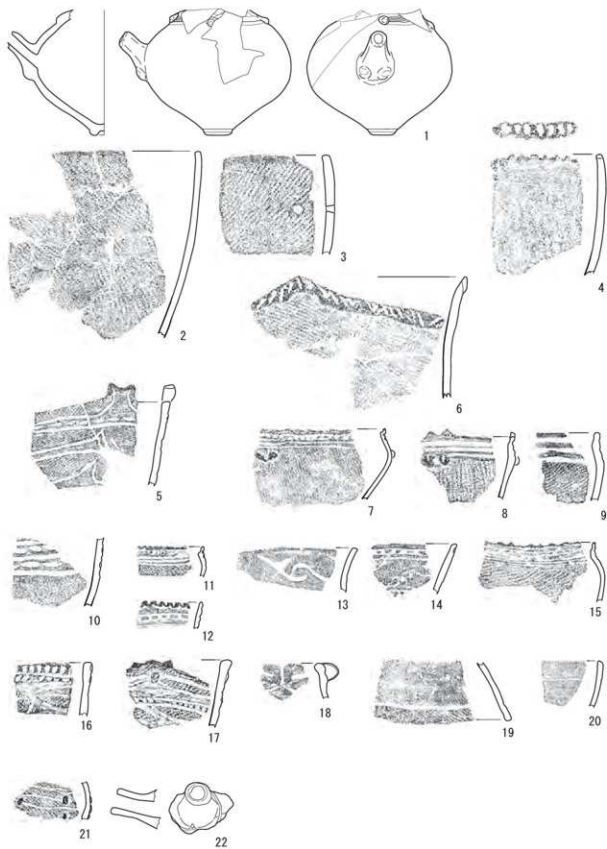


図81 第1号盛土遺構 IIa段階出土土器(2)



第23層

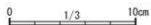


圖82 第1号盛土遺構 II a段階出土土器(3)



图83 第1号盛土遺構 IIa段階出土土器(4)

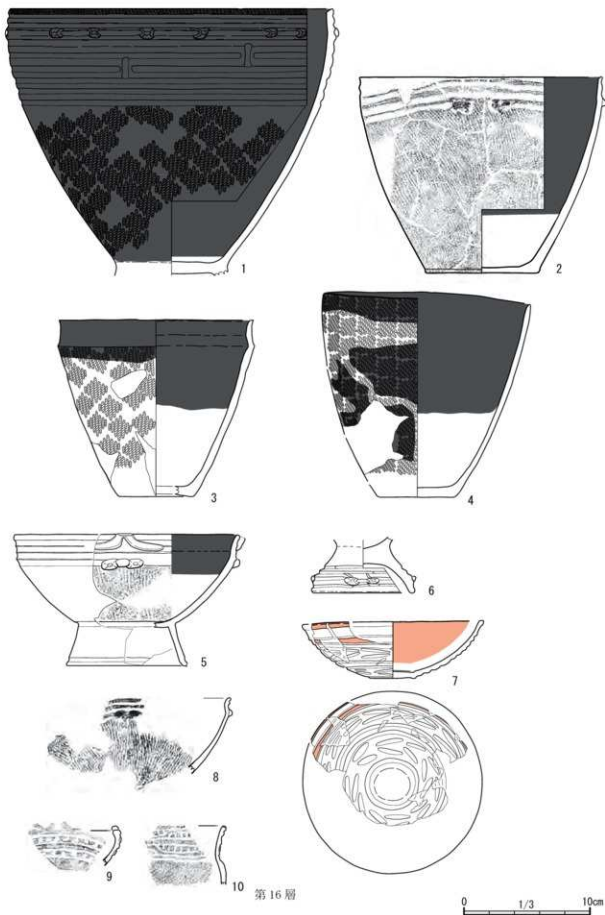
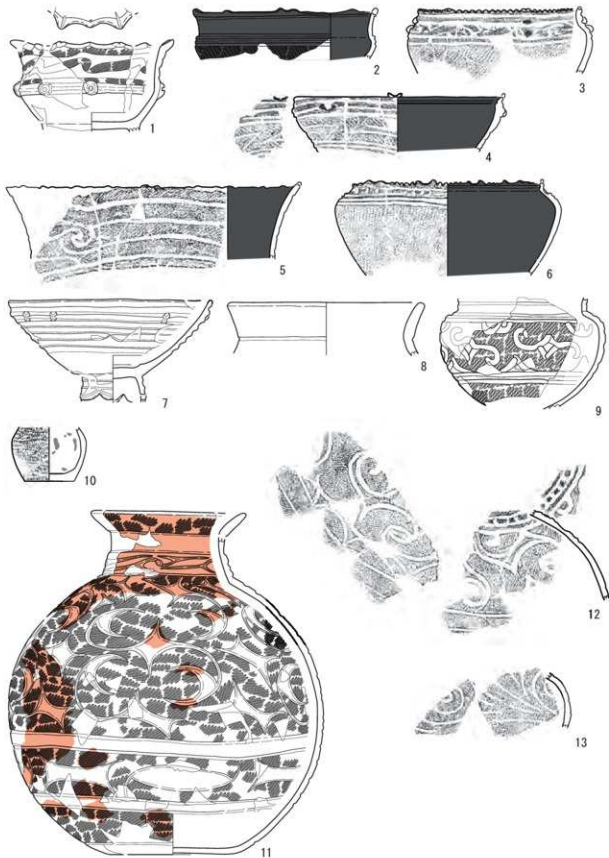


图84 第1号盛土遺構 IIa段階出土土器(5)



第19層

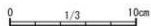
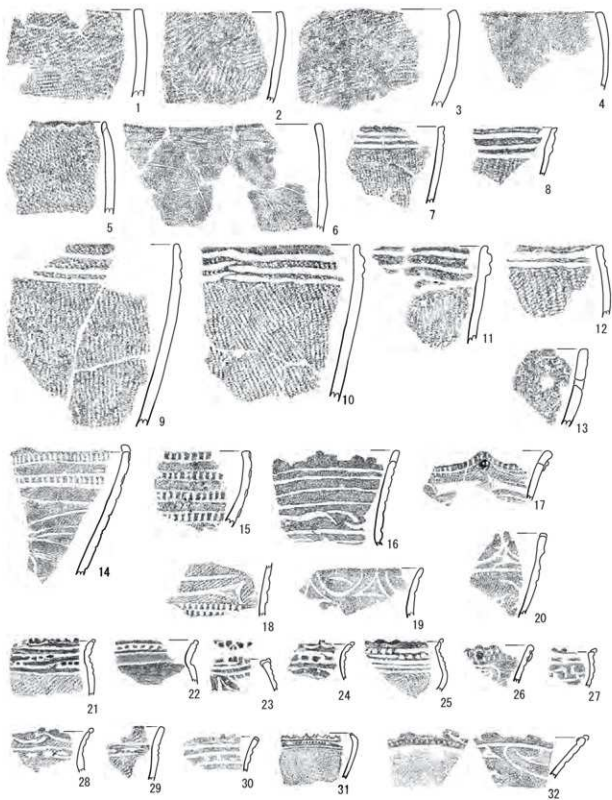


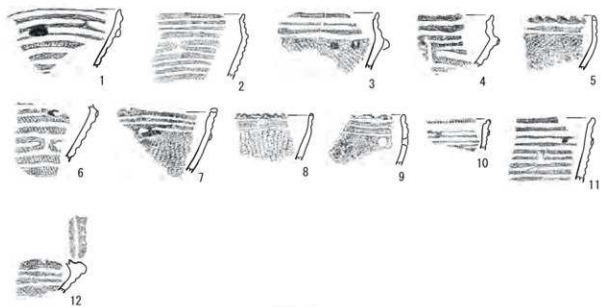
图85 第1号盛土遺構 II a段階出土土器(6)



第19層



圖86 第1号盛土遺構 II a段階出土土器(7)



第19層



第30層

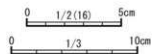
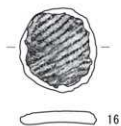
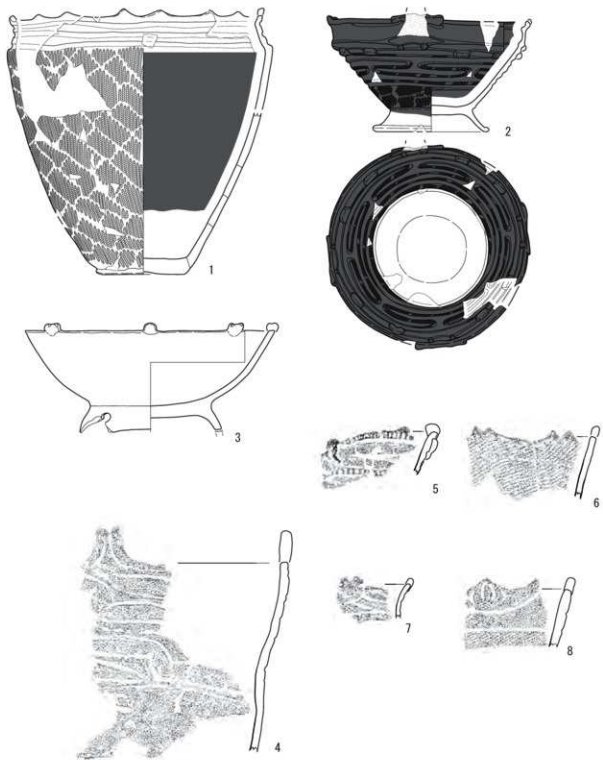


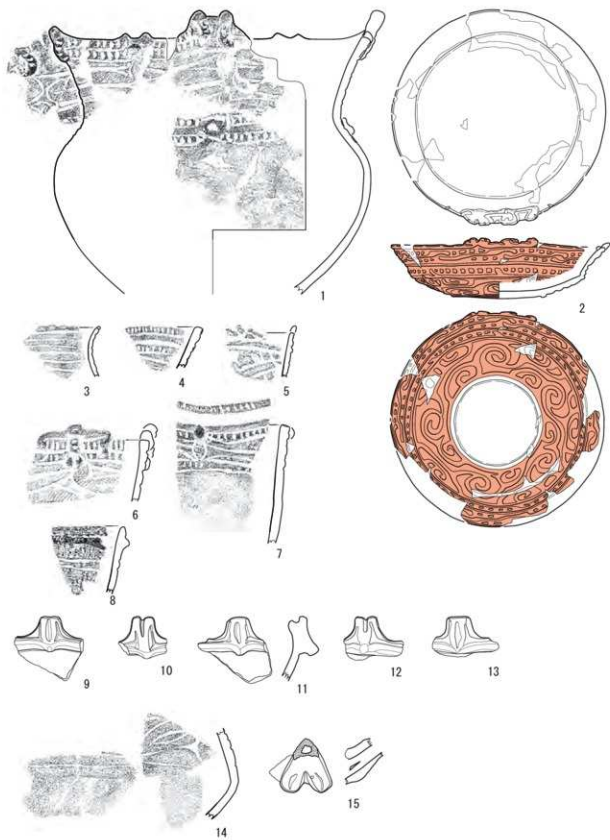
図87 第1号盛土遺構 II a段階出土土器(8)



第2層

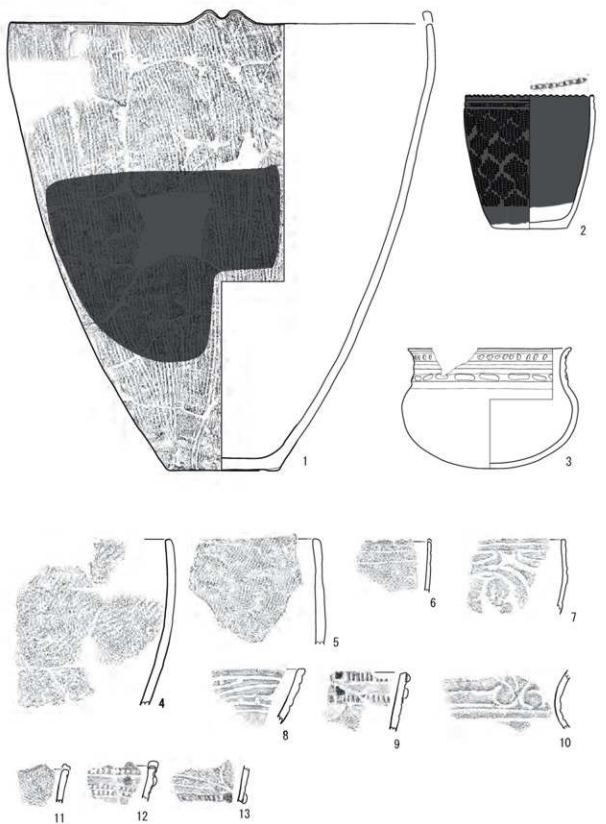
0 1/3 10cm

图88 第1号盛土遺構 IIa段階出土土器(9)



第20層

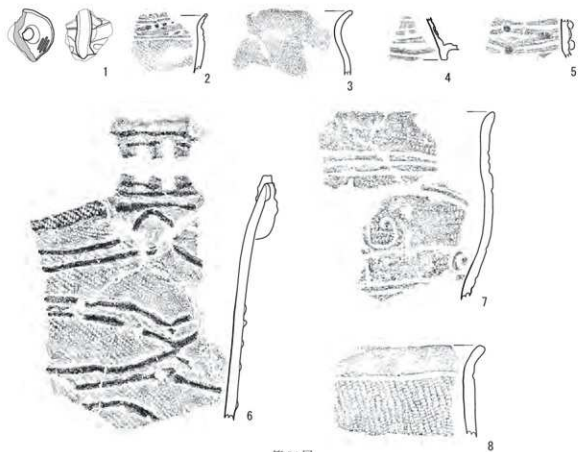
圖89 第1号盛土遺構 II a段階出土土器(10)



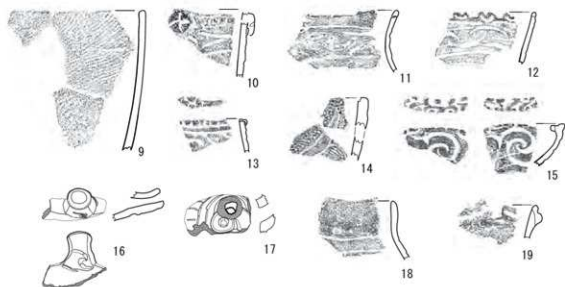
第 24 層

0 1/3 10cm

図90 第1号盛土遺構 IIa段階出土土器 (11)



第24層



第25・26層



図91 第1号盛土遺構 II a段階出土土器 (12)

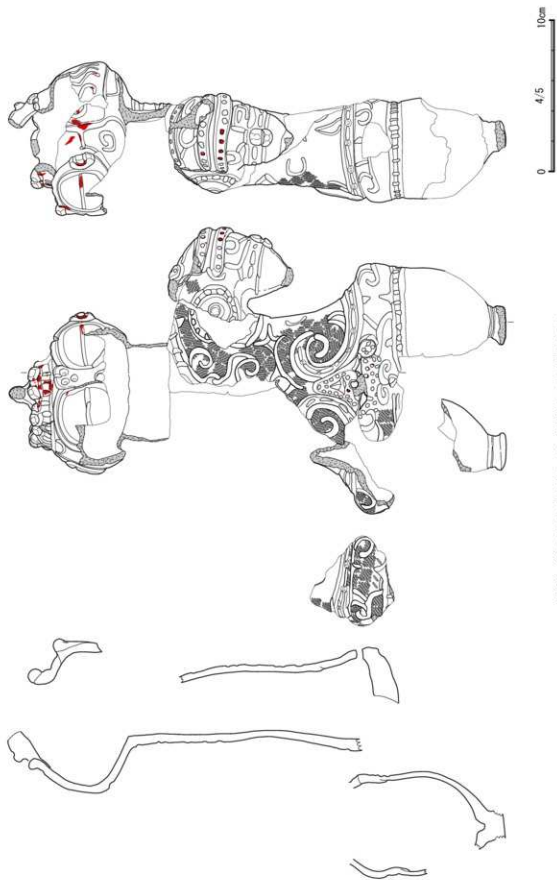
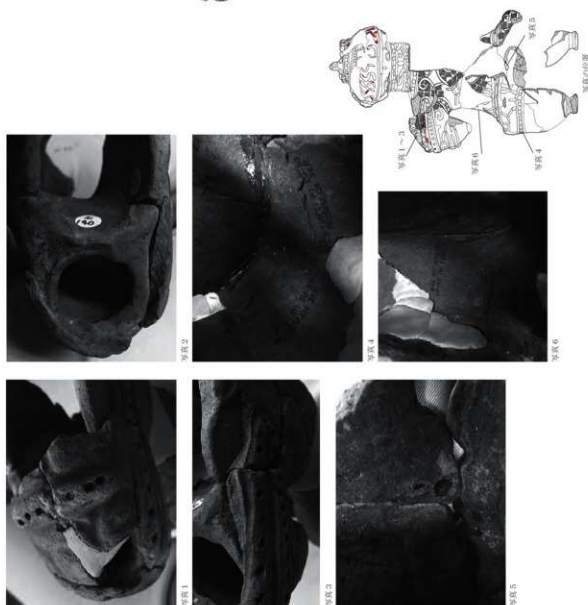
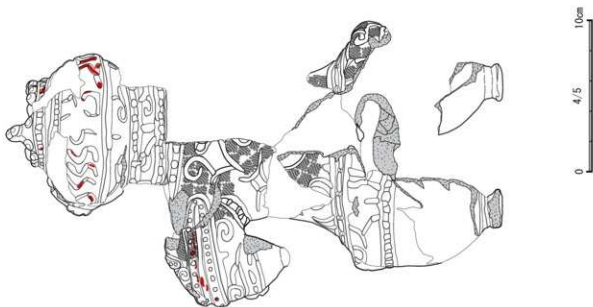


图92 第1号盛土遺構 II a段階出土土製品(1)



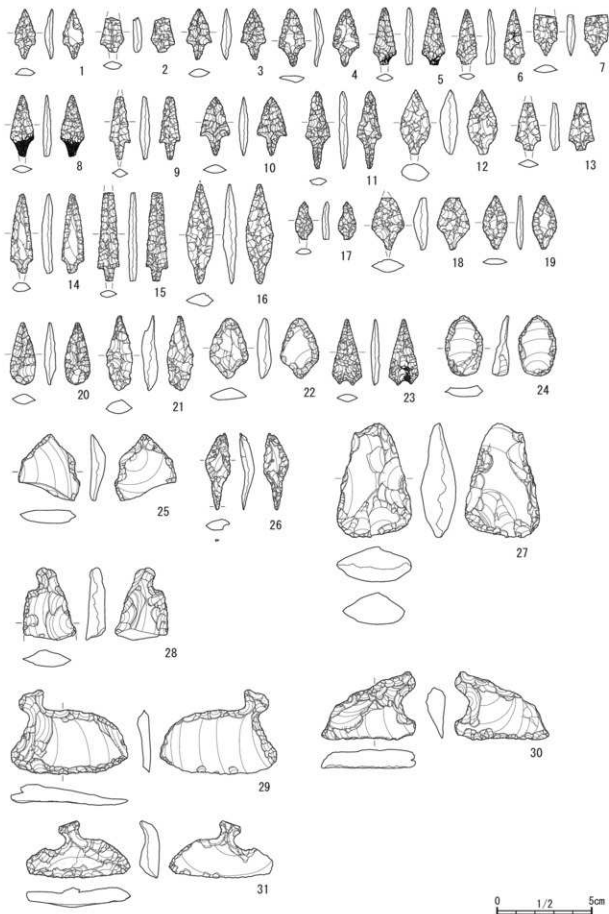


图94 第1号盛土遺構 IIa段階出土剥片石器(1)

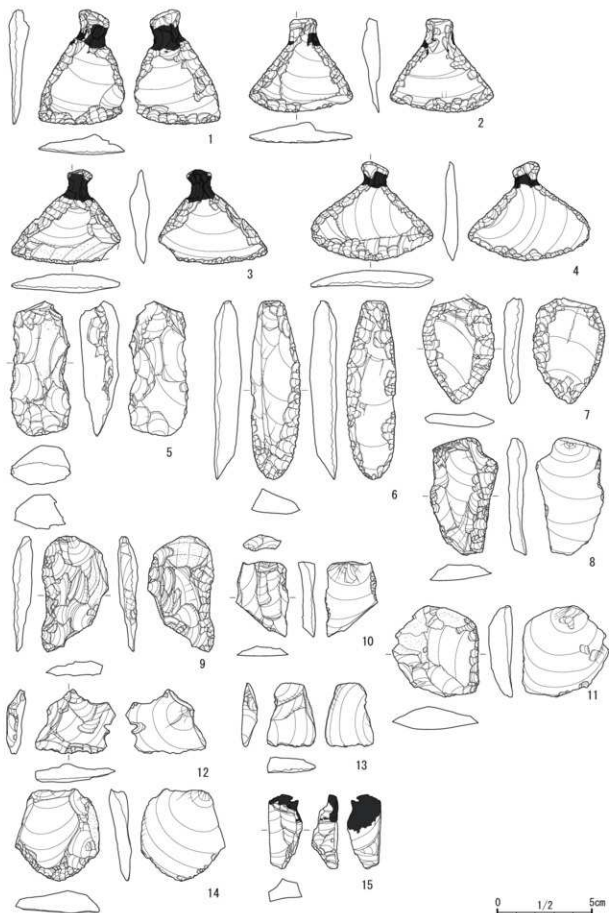


図95 第1号盛土遺構 II a段階出土剥片石器(2)

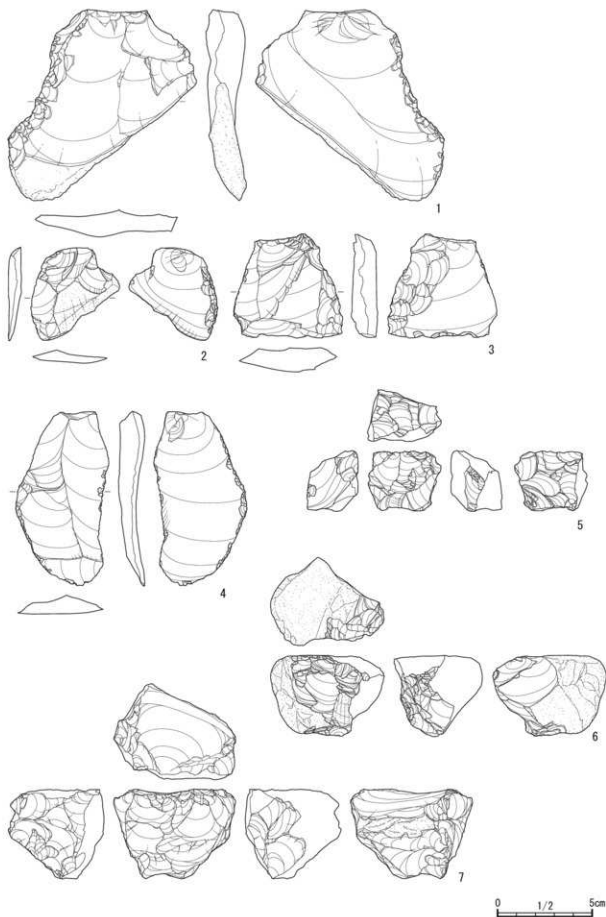


図96 第1号盛土遺構 IIa段階出土剥片石器(3)

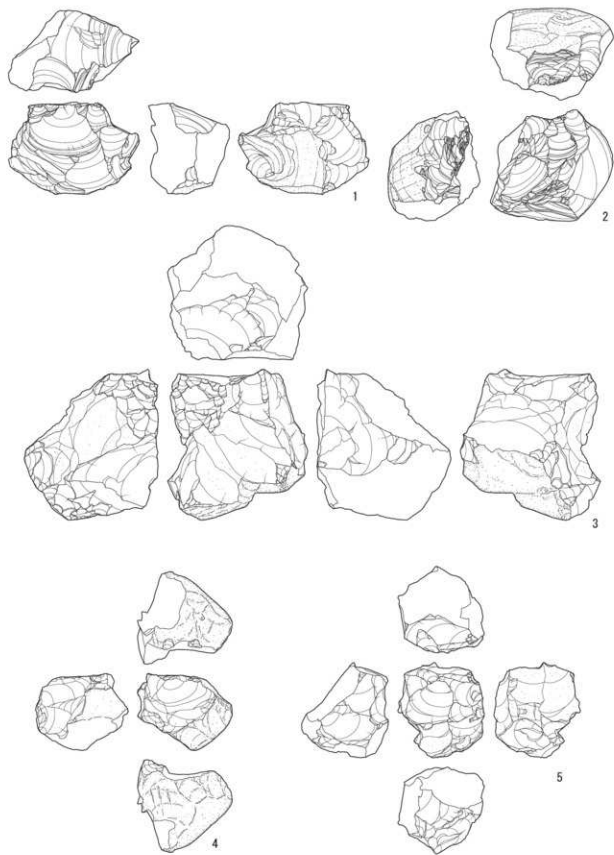


図97 第1号盛土遺構 IIa段階出土剥片石器(4)

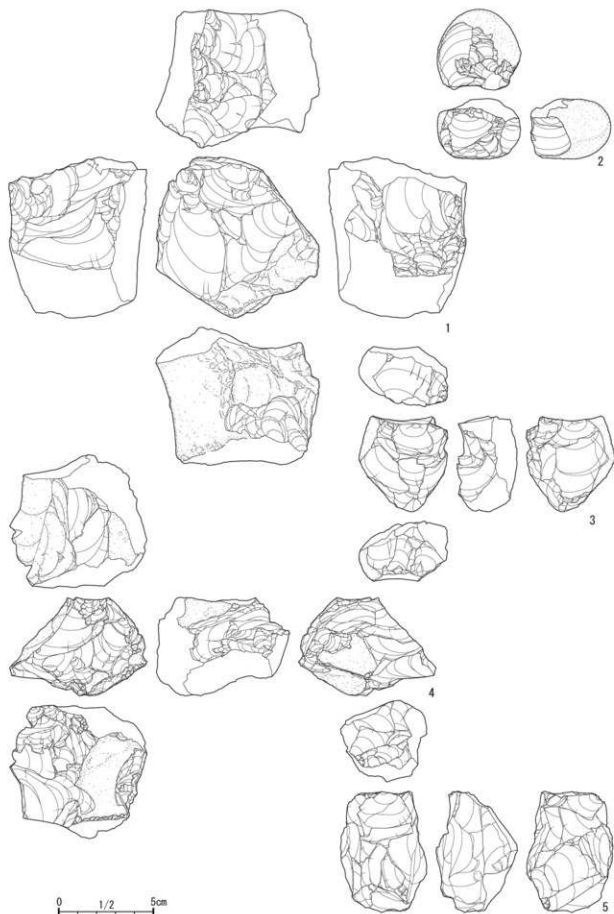


図98 第1号盛土遺構 II a段階出土剥片石器(5)

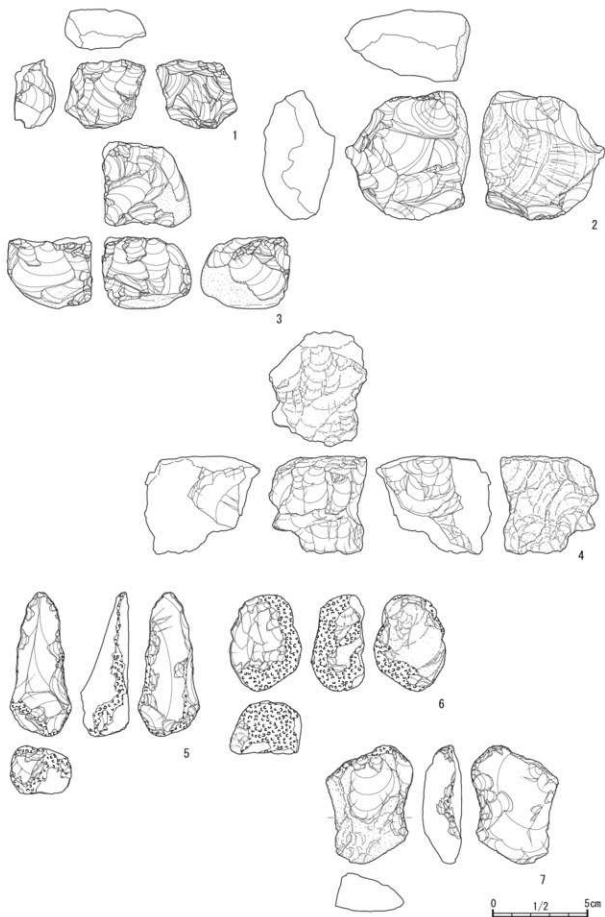


図99 第1号盛土遺構 IIa段階出土剥片石器(6)

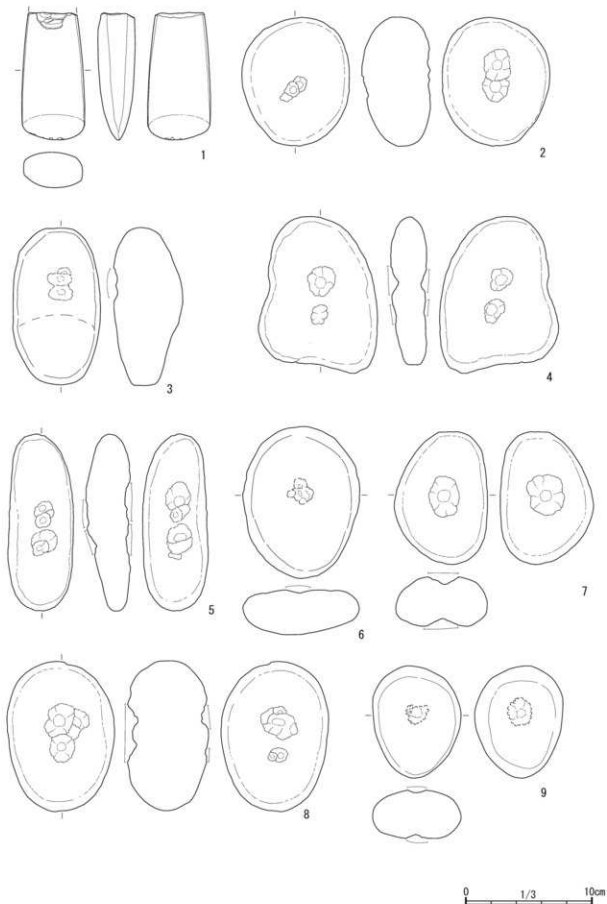


图100 第1号盛土遺構 II a段階出土礫石器(1)

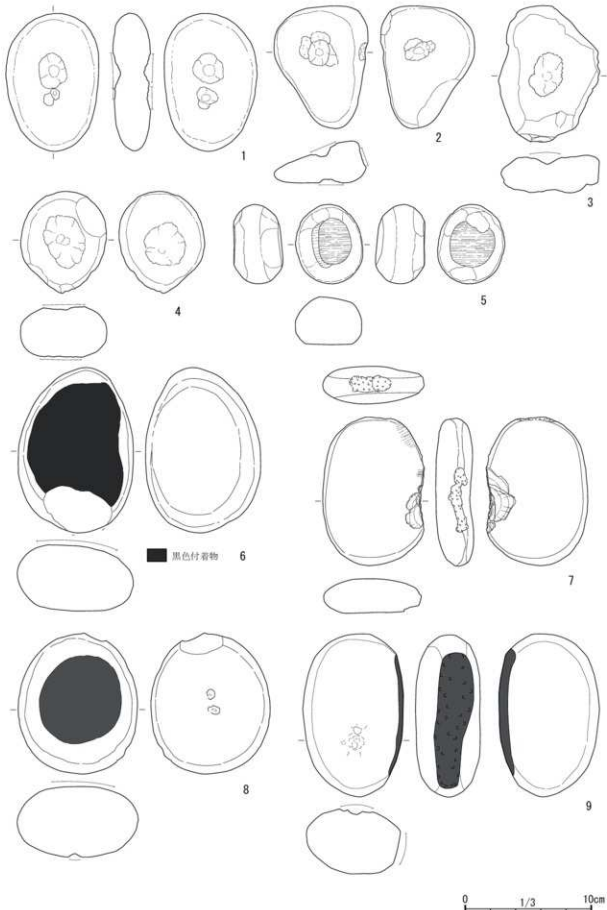


図101 第1号盛土遺構 IIa段階出土礫石器(2)



圖102 第1号盛土遺構 IIa段階出土礫石器(3)

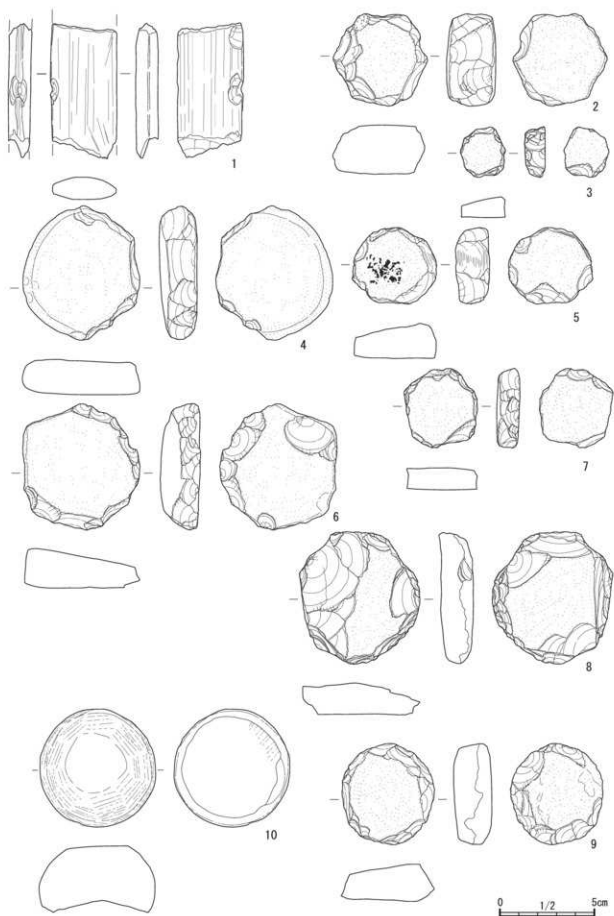


図103 第1号盛土遺構 IIa段階出土石製品

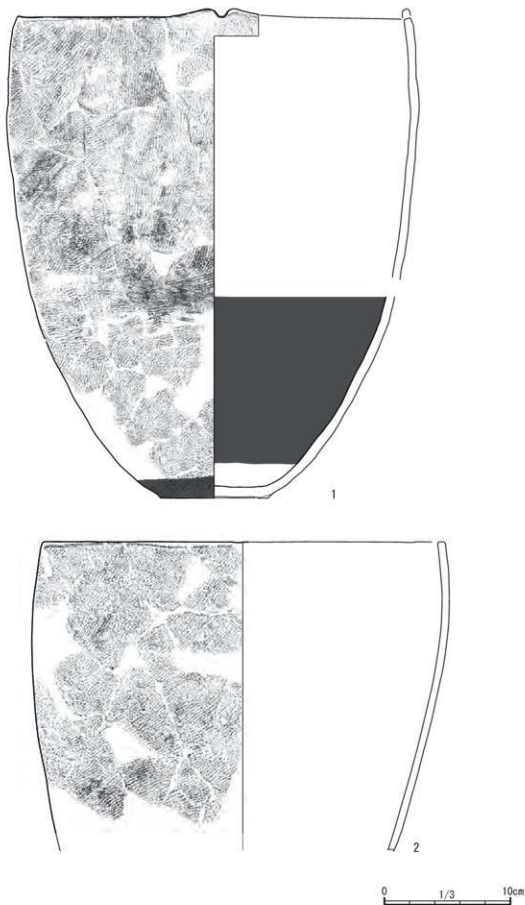


図104 第1号盛土遺構 II b 段階出土土器(1)

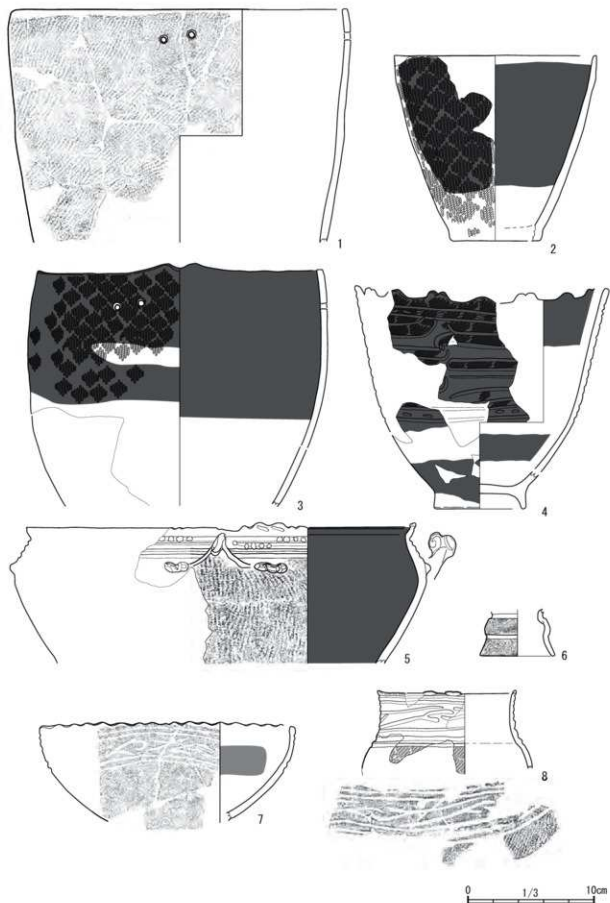


図105 第1号盛土遺構 II b 段階出土土器(2)

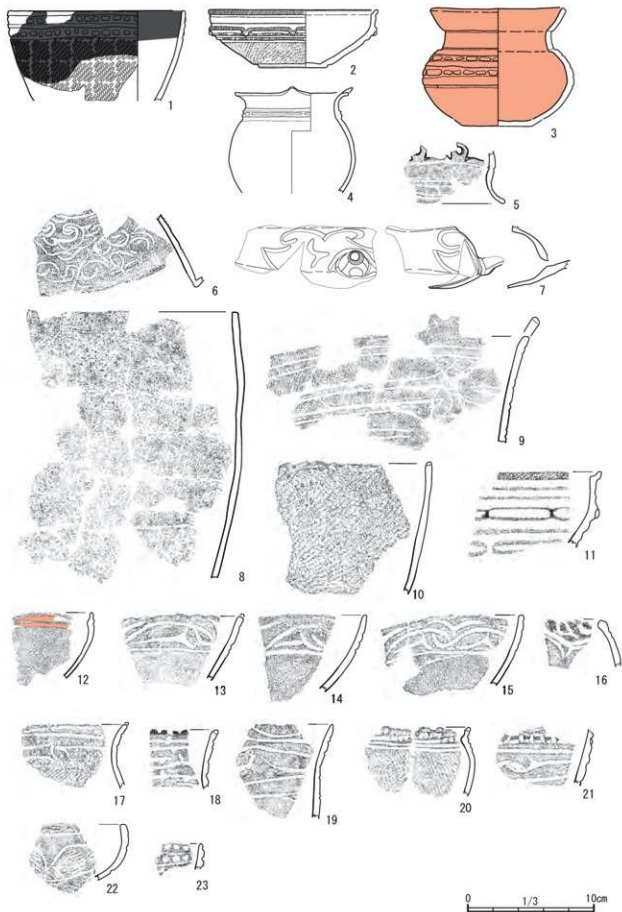


図106 第1号盛土遺構 IIb段階出土土器(3)



圖107 第1号盛土遺構 II b段階出土剥片石器

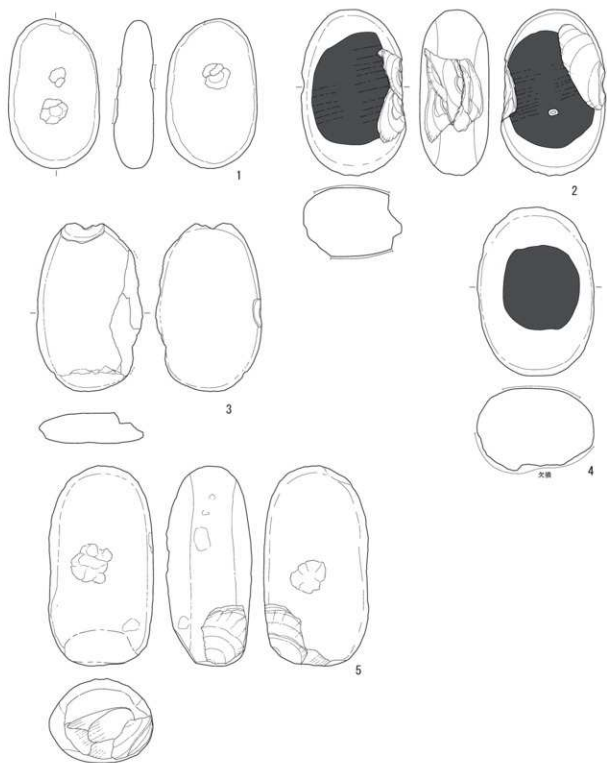


图108 第1号盛土遺構 IIb段陪出土礫石器

(3) III段階 第1号盛土遺構下部

1) IIIa段階

第15層に相当する。炭化物の顕著な堆積層であり、層の認識は比較的容易であった。調査時に完形の壺形土器が多く確認できた。また、復元された土器の大半は個体ごとに潰れたようなまとまりで出土している(口絵7、図109)。土器は102,900.9g、剥片石器は19,586.5g出土している。

完形の土器・個体復元が可能な土器が多く検出できたので、単なる廃棄ではなく、意識的に土器を置いた可能性が高い。

【土器】

この堆積層からは、深鉢形土器、鉢形土器、台付浅鉢形土器、浅鉢形土器、皿形土器、壺形土器などが出土している。聖山式と思われる連繫入組文を持つ土器や晩期4期の壺形土器など、晩期中葉から後葉に属する資料が主体を占める。土器片の中には、縄文時代後期後葉から晩期前半の土器も出土しているので、この時期の土器片は、意図的に抜き出し資料化に努めた。

図110-1は補修孔を持ち、口縁に3条沈線が巡る大形の深鉢形土器である。3条沈線が巡る深鉢形土器は他に図111-4・5などがある。図110-2は2条沈線が口縁を巡る大形の深鉢形土器である。図111-1は中形の粗製深鉢形土器である。外面に炭化物が付着している。幾分上げ底状の底部を持つ。RL縦走縄文が施文されている。

鉢形土器は大形・小形など形状に変異が見られる。図111-2は口縁部が推定で無文であり、体部に平行沈線と突起が見られる。図111-3は同一地点で重なって出土したので同一個体として取り上げた資料であるが、縄文施文の方向が微妙に異なる。口縁にB突起を持ち、口縁部は無文であり、口縁と体部の境に2条沈線と突起を持ち、RL斜行縄文を持つ。底部側はRL縦走縄文を持つ。上半は内面に炭化物が、底部は内外面に炭化物が付着している。図112-1から3は口縁に平行沈線が巡る資料である。RL斜行縄文が施文されている。図112-4は4単位の山形突起とその間に小突起が巡る口縁を持ち、口唇部に沈線が見られる。口縁部に4条沈線が巡り、前々段多条RL斜行縄文が施文されている。内面に炭化物が付着している。図112-5は口縁部無文の深鉢形土器である。他に深鉢形土器もしくは鉢形土器の底部が出土している(図112-6~8)。図113-1から3のような小形鉢形土器があり、口縁に平行沈線が巡る。

台付鉢形土器は、図113-4、5のような口縁に平行沈線が巡るもの、無文のものがある。台部のみの資料がある(図113-6)。図113-7は把手を持ち、胴部に工字文をモチーフとした文様が展開する。内外面に炭化物が付着している。RL縦走縄文が施文されている。図113-8は口縁に平行沈線が巡り、突起が見られる。台部を含め内外面に炭化物が付着している資料が多い。

鉢形土器・台付鉢形土器の口縁部資料がある(図113-10~13)。工字文や3条沈線などが施文されている。図113-9・14は浅鉢形土器であり、底部は欠損している。

また、晩期5期に属する全面赤彩で工字文を持つ台付浅鉢形土器が出土している(図113-15)。工字文の上には隆帯と突起を持ち、底には円形の窪みがある。台部にも工字文が施文されている。他に、台部を欠いているが、工字文の反転部を斜め線で結んだ資料がある(図114-7)。岩手県一関市の中神遺跡晩期5a・b期などに類似したモチーフが認められる。

浅鉢形土器・皿形土器は、眼鏡状隆帯を持つもの、連繫入組文を持つものがある。図114-2・3・

4は眼鏡状隆帯を持ち、口縁部がミガキ整形、体部にLR縄文が施文され、底部付近に沈線が1条巡る。図114-6は同器種の底部欠損資料である。晩期4期であろう。図114-5は聖山I式に相当する精製の皿形土器である。連繫入組文が施文された皿形土器であり、口縁部にB突起を持つ。入組文を単位文様として、その空隙に工の字など基調とした充填文が入り込み複雑な文様を形成している。口縁部と胴部の境に隆帯を持つ。内外面赤彩であり、丁寧に器面が磨かれている。図114-1も類似した文様モチーフを持ち、補修孔がある。

壺形土器は胴部上半部に連繫入組文を持つ精製赤彩の図115-2・3や、大形の壺形土器(図115-1)がある。この資料は文様の三分の一程度の残存状態なので、詳細な文様展開は不明である。図116-1は第1号盛土遺構出土の聖山式類似土器の中で文様部に縄文施文が残された資料である。この土器も連繫入組文を持つ壺形土器である。頸部は欠損している。底部はケズリで整形されている。図116-2は四脚を持つ壺形土器であり、胴部上半に工字文を持つ。縄文施文はなく、無文である。図116-4は晩期4期で頸部が欠損しLR縄文が、文様部は磨消縄文を持ち、胴部下半は全面に施文されている。

図117は頸部が無文で、胴部に縦走する丸縄文が施文された粗製壺形土器である。比較的まとまった状態で出土している(口絵7)。上げ底の資料が多い。

土器片は、上記完形に近い土器同様に晩期中葉ごろに属する資料が多い。図118-1から7は粗製深鉢・鉢形土器の口縁部である。内傾口縁などがあり、斜行・縦走縄文が施文されている。図118-8から10は口縁に沈線が3条巡る深鉢形土器などである。図118-11は口縁部が無文で、口縁と胴部の境に突起を持つ深鉢形土器である。図118-12から18は後期後葉から晩期前半期に属する資料の土器片である。他に鉢形・壺形土器の口縁部断片が出土している(図118-19~22)。

図119-1は口縁に突起を持ち、口縁と胴部の境に平行沈線と突起が見られる。図119-2は内傾口縁の口唇部に刻みを持ち、口縁部に3条の平行沈線が巡る。図119-3~10は鉢形土器であり、口縁に沈線が巡り、沈線の下部に突起を持つ。図119-11から14は、把手を持ち、横位連続工字文が胴部に展開する(台付)鉢形土器などがある。図119-15は眼鏡状隆帯を持つ浅鉢形土器である。

この段階は基本的に晩期4期相当の時期が主体であり、それに晩期5期が含まれている。後期後葉から晩期前葉の土器片も出土しているが、大半は破片資料であるので、客体的なものと思われる。

【土製品】

無孔の土製円盤(図119-16)が1点出土している。

【石器】

第15層では、石鏃、石錐、石筥、石匙、削器、石核、剥片、礫石器などが出土している。

石鏃(図120-1~15)の多くは尖基・平基有茎鏃である。図120-16は尖基鏃に分類したが、形態が整わず未成品の可能性もある。

図120-17は欠損しているが、大形の両面調整石器である。

石匙は縦形に摘み部以外に加工のない石匙(図120-18)が出土している。それ以外は横形で、刃部は片面・両面加工(図120-19~21)である。

削器(図120-22から25・図121-1・2)は、素材剥片の側面に、片面もしくは両面加工をし、形態を整えている。

石核(図121-3～図122-1・3)は、打面転位が頻繁に行われた資料で、素材礫面を多く残し、1枚の作業面を持つもの、円盤状に剥離された資料などがある。

図122-2は珪質頁岩製の敲石である。また、珪質頁岩の原石が出土している(図122-4)。

礫石器は扁平礫の幅広面に平滑な磨り面、幅狭い側面にザラザラした磨り面を持つ磨石(図123-1)、長軸両端に叩き痕を持つ叩き石(図123-2)、凹石(図123-3)などがある。図化していないが、大形の台石(写真74、整理番号レ40)が出土している。

【石製品】

図123-4は安山岩製のランプ状の形状をした石製品である。加工痕は不明瞭であるが、おそらく敲打整形と思われる。図123-5は石製円盤である。

【漆製品】

VH-35、SN-Bで漆製品(整理番号J-2)が出土した(写真74、口絵6)。形状は不明であり、土器の上に乗って出土した。芯となる部分は残存していない。

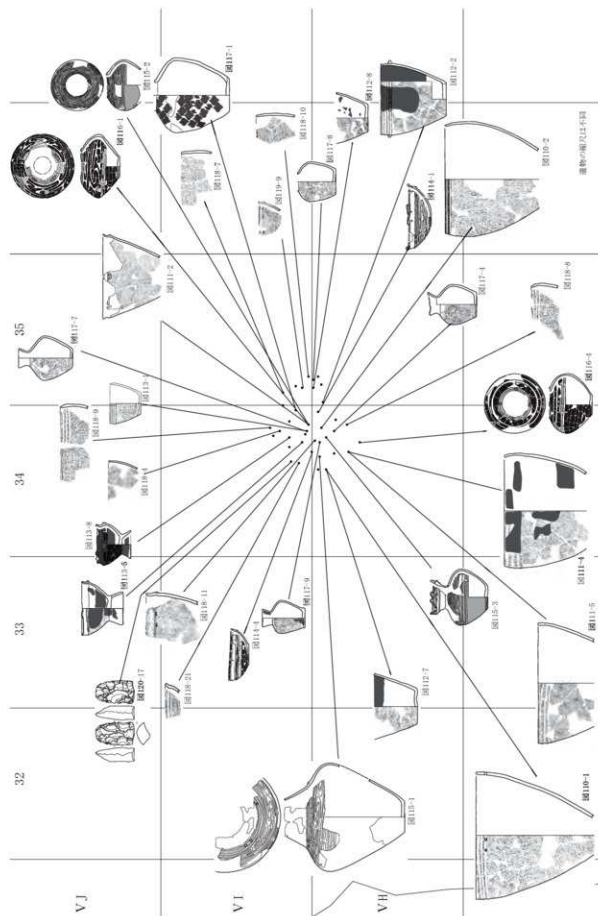


図109 第1号盛土遺構Ⅲa段階(15層)出土遺物の分布

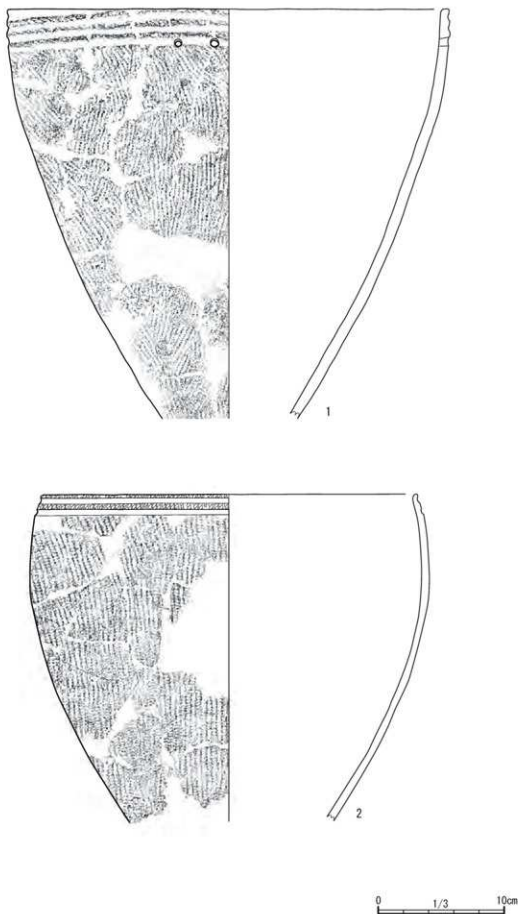


圖110 第1号盛土遺構 IIIa段階出土土器(1)

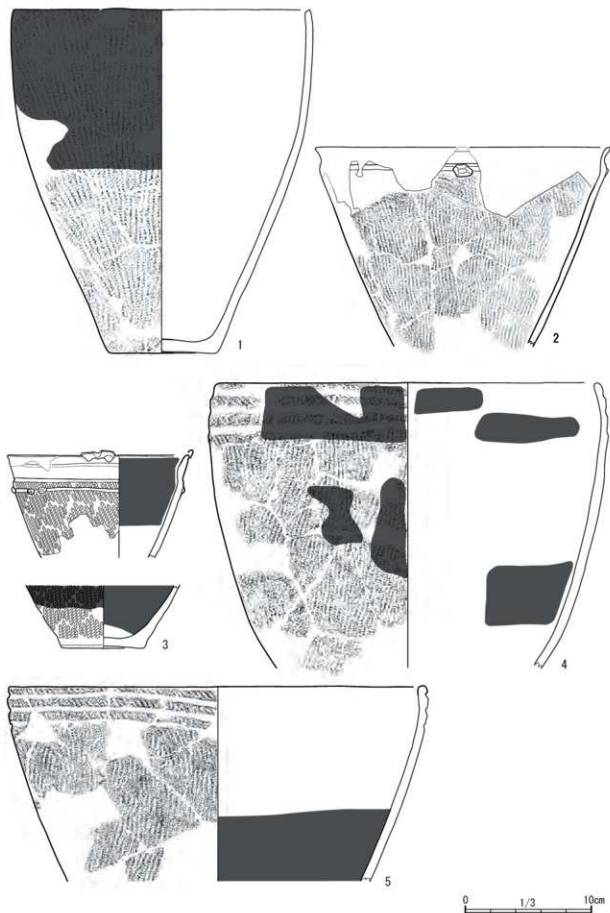


図111 第1号盛土遺構 IIIa段階出土土器(2)

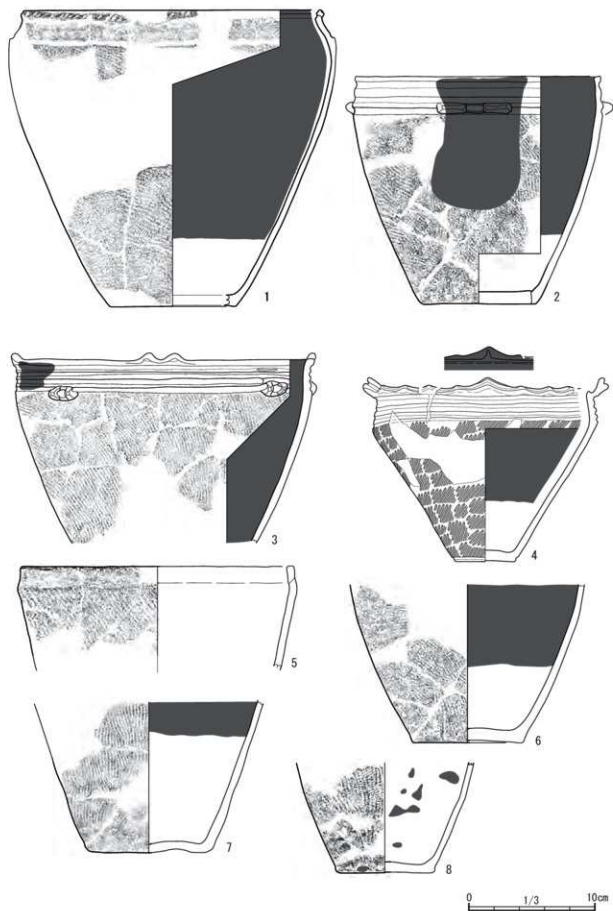


図112 第1号盛土遺構 IIIa段階出土土器(3)



図113 第1号盛土遺構 IIIa段階出土土器(4)

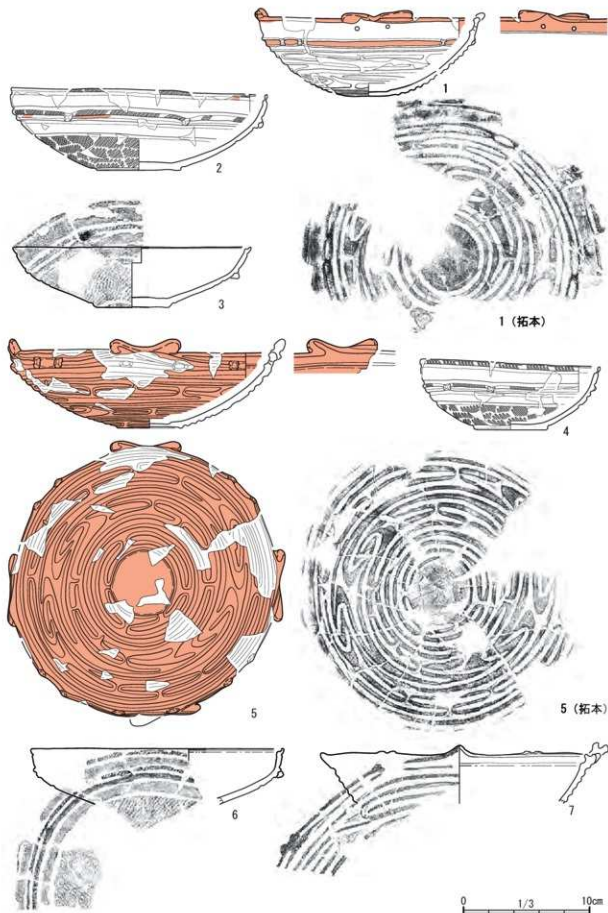


圖114 第1号盛土遺構 IIIa段階出土土器(5)

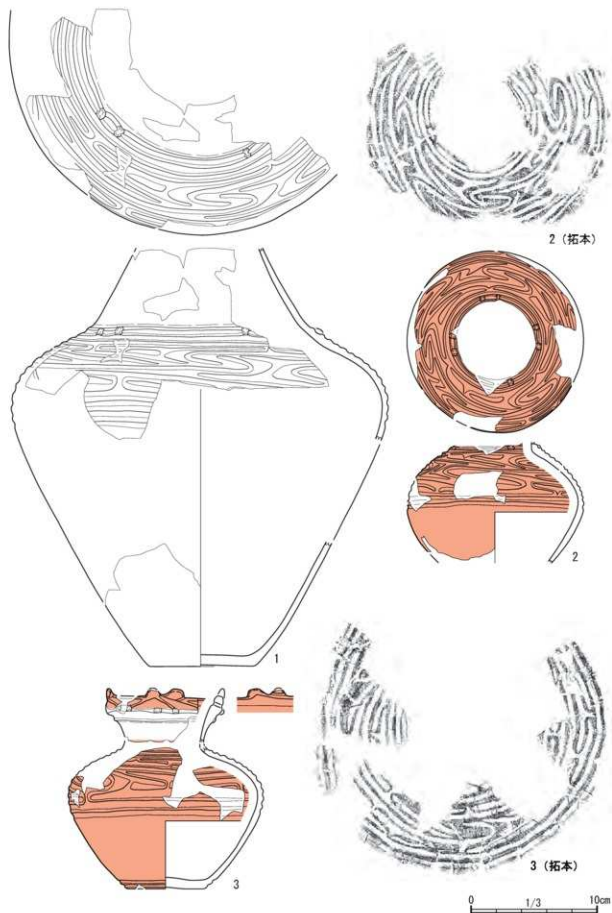


图115 第1号盛土遺構 IIIa段階出土土器(6)

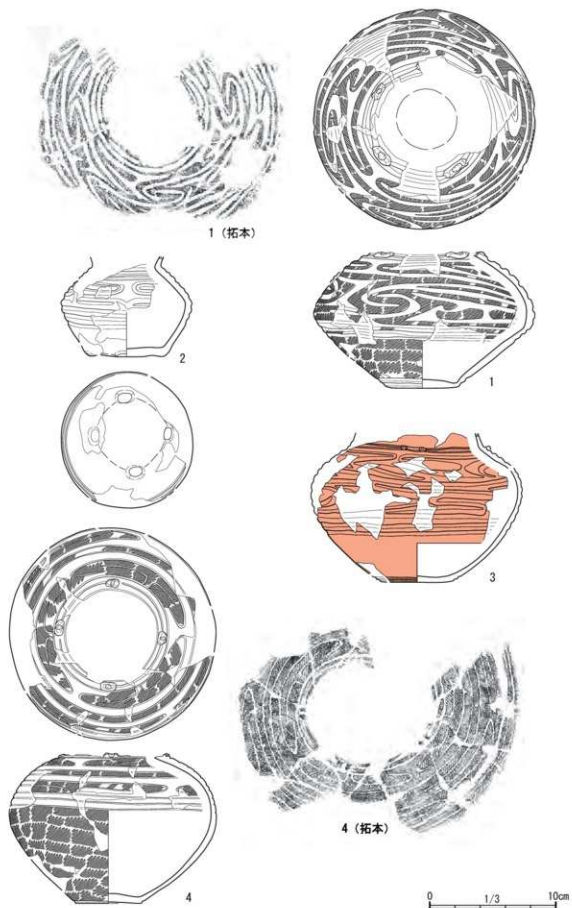


図116 第1号盛土遺構 IIIa段階出土土器(7)

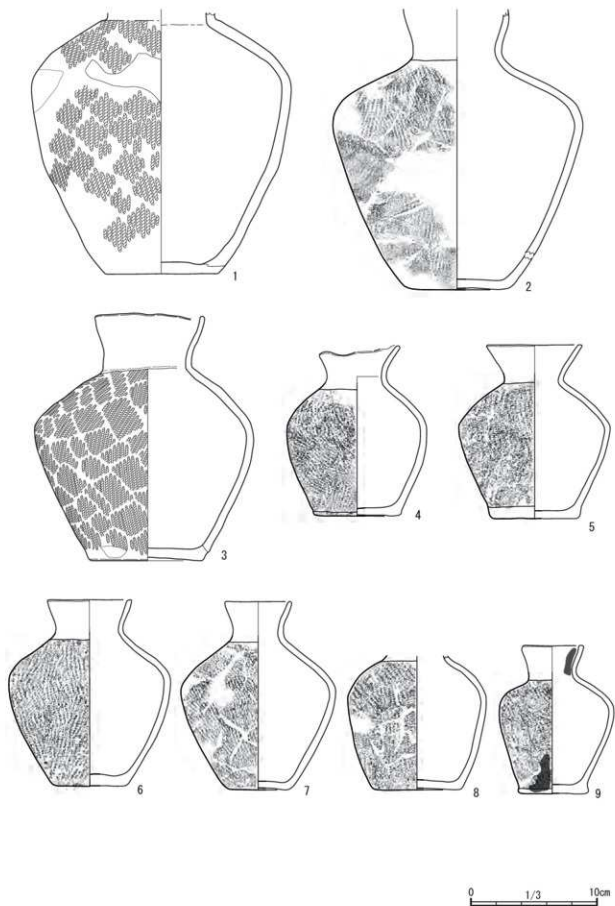


図117 第1号盛土遺構 IIIa段階出土土器(8)

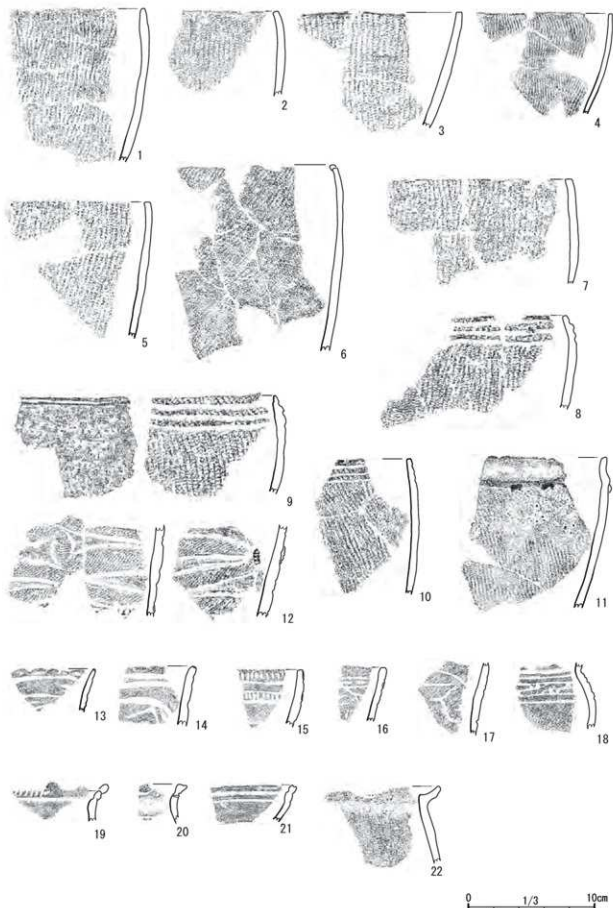


図118 第1号盛土遺構 IIIa段階出土土器(9)

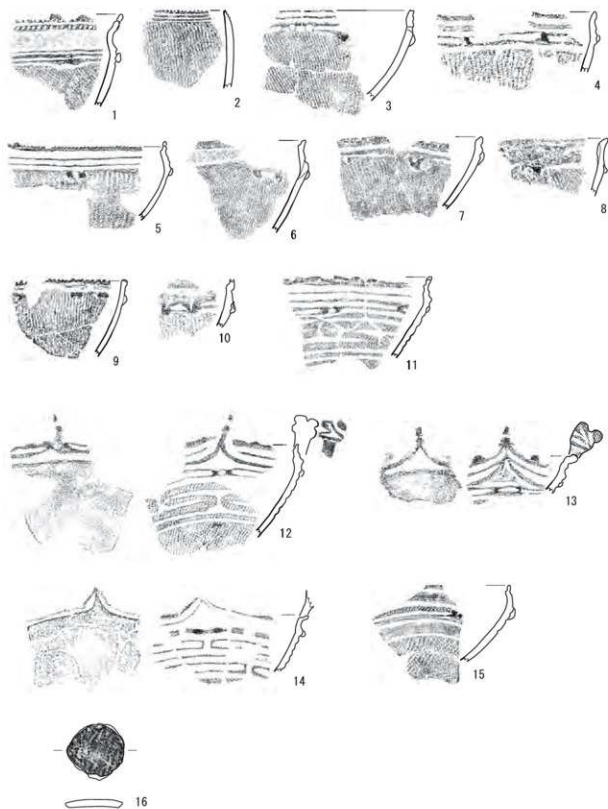


図119 第1号盛土遺構 IIIa段階出土土器 (10)

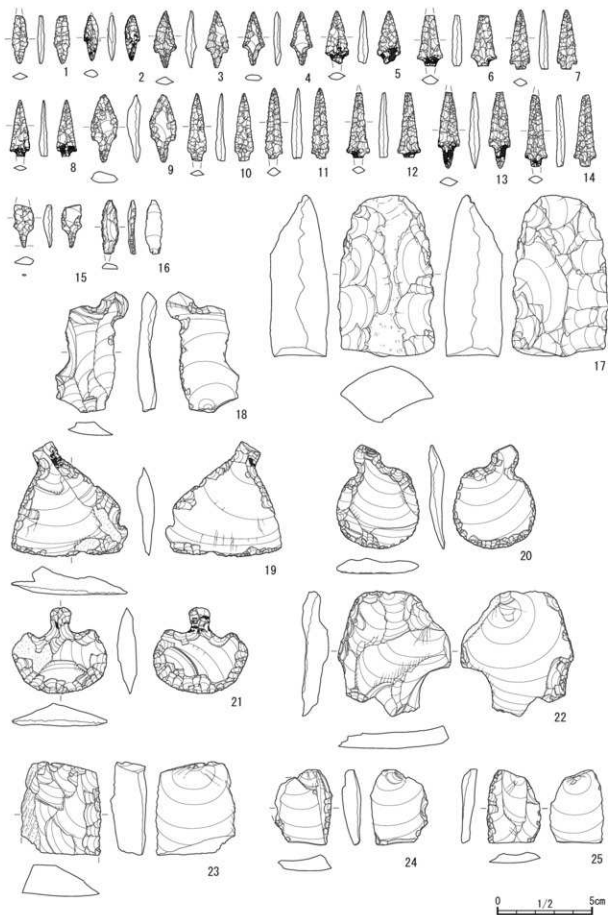


图120 第1号盛土遺構 IIIa段階出土剥片石器(1)

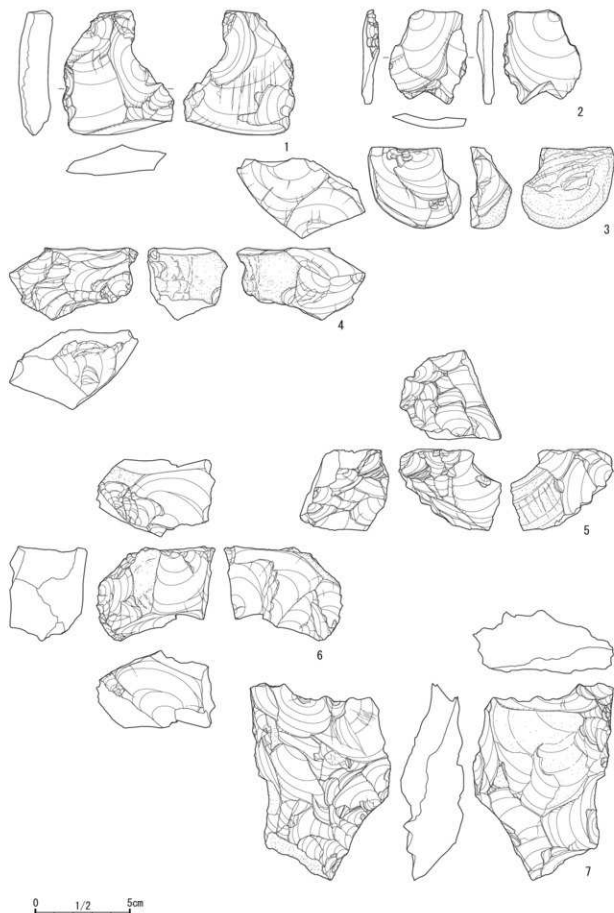


图121 第1号盛土遺構 IIIa段階出土剥片石器(2)

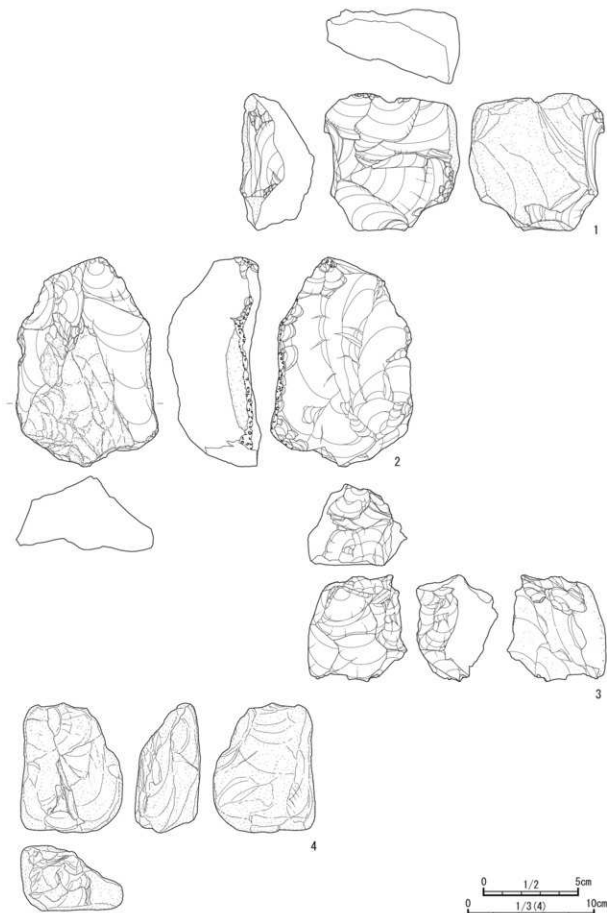


図122 第1号盛土遺構 IIIa段階出土剥片石器(3)

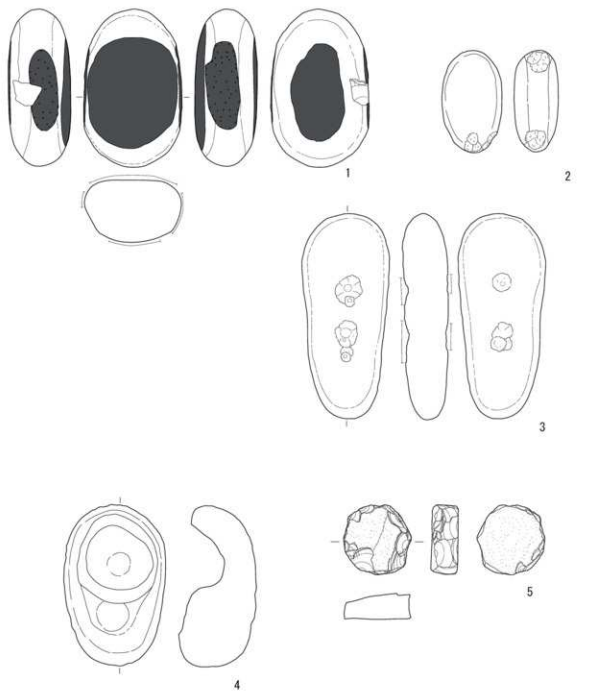


図123 第1号盛土遺構 IIIa段階出土礫石器・石製品

2) IIIb段階

第18層に相当する遺物である。トレンチ2・3の第1層を除去した後、遺物を多量に含む層が確認できた。分厚い層であったので11回にわけて掘り進めた。セクションで観察できる限り、遺物の多くは水平堆積をし、一見完形土器が押しつぶされた状態を想定できるが、平面的に掘り進めると、必ずしもそのような状況ではなかった。遺物の分布はまんべんなく広がる(図124 中央部に点取り遺物が少ないのは調査期間の問題もあり、早く盛土ベルトを除去する必要から、一気に掘り進めたからである)。第15層は完形土器が調査中も多く目に付いたのに対し、この層は破片資料が多く、完形に近い個体は調査中ほとんど目に付かなかった(口絵7)。土器は202,033.2g、剥片石器は37,342.1g出土している(表6)。

【土器】

図125-1は大形の深鉢形土器であり、口縁に3条沈線が巡る。RL縄文が施文されている。他に類似した個体として図126-2がある。図125-2は無文の深鉢形土器である。図126-1は波状口縁と口縁に5条沈線が巡る大形の深鉢形土器である。欠損が著しい。

鉢形土器は深鉢形土器に類似した口縁に3条沈線が巡る粗製の鉢形土器がある(図126-3・4)。炭化物の付着が見られる。

台付鉢形土器(図126-5・6・8)は、口縁部に沈線が巡り、炭化物が付着している。図126-7は口縁と体部の境に把手が貼り付けてある。口縁に平行沈線が巡り、口唇部に刻みがある。底部は欠損しているが、特徴から台付鉢形土器であろう。図126-9は隆帯と多重の平行沈線が巡る鉢形土器の口縁部である。図126-10から12は沈線と突起を持つ台部である。

台付浅鉢形土器(高杯)は他の層よりもまとまって出土している(図127-1~6)。口縁にB突起が貼り付けられている資料が多く、胴部に工字文が展開する。聖山Ⅱ式の特徴的なボジ面が幅広く縄文施文が残り、工字文の反転部が斜めに切られている文様ではない。ボジ面は幅狭く、反転部も垂直に切られている。工字文の上部の口縁と胴部の境には隆帯が回る。程度の差はあるが、内外面に赤彩の痕跡が残されており、本来は全面赤彩の土器であったと思われる。これらは晩期5期に属する資料である。

浅鉢形・皿形土器は、図127-7・8は眼鏡状隆帯を持ち、底部は上げ底風である。晩期4期である。図127-9は口縁部が垂直に立ち上がり、2条の平行沈線が巡る。底部は欠損しているが、おそらく平底である。図127-10・11は無文で全面ミガキ整形である。部分的に赤彩が残されている。

図128-1・4は胴部に連繫入組文が展開する壺形土器である。1の方は口縁部に把手は貼り付けてあり、肩部と頸部の境に隆帯がある。体部にはLR斜行縄文が施文され、底部に2条の平行沈線が巡り、平底である。4の方は頸部と体部の境に隆帯の上に刻みが施されている。体部にはLR斜行縄文が施文されている。図128-2は工字文が展開する壺形土器である。図128-5は晩期4期の壺形土器の上半部である。図128-7から9は精製壺形土器の頸部であり、赤彩が施されている。図128-3・6と図129-1は口縁部が無文の粗製壺形土器である。図129-2は無文の壺形土器である。

他に土器片が多数出土している。図129-4・6・7は粗製深鉢形土器である。図129-5は口縁部が無文である。図129-8から10は口縁部に平行沈線が巡る資料である。図129-11は波状口縁を持つ鉢形土器であり、無文である。図129-12・13は条痕文が施文された深鉢形土器である。

図130-1・2は後期後葉の貼瘤を持つ土器である。図130-3から7・29は羊歯状文や入組文を持つ土器片である。図130-9から28は晩期後半の土器である。図130-16は体部に三叉文をその周囲を囲むC字文が見られる。体部文様は晩期4期の雲形文と意匠が異なり、5期の工字文への過渡的な様相が窺える(須藤2007, 19頁)。図130-19は口縁部無文の鉢形土器であり、条痕文が施されている。図130-25は無文で赤彩のある浅鉢あるいは皿形土器である。図130-30は同一個体と思われる口縁部片がⅡ段階(第19層)から出土している(図85-8)。

【土製品】

図129-3は小形の土製品である。粘土粒や粘土隆が貼り付けられている。

【石器】

第18層では、石鏃、石錐、石筥、石匙、削器、石核、剥片、礫石器などが出土している。

石鏃(図131-1～27)の多くは尖基・平基有茎鏃である。図131-28は尖基鏃と分類したが、形態が整わず未成品の可能性もある。

図131-29は摘みを持つ石錐である。図131-30は石筥である。

図131-31は摘み部以外に加工のない縦形石匙である。図131-33は両面加工の縦形石匙、図131-34はミニチュアに近い。それ以外は横形石匙である(図131-32・35・36・図132-1～8)。刃部は片刃と両刃がある。

削器(図132-9～11・図133・図134-1～5)は縦長・横長剥片の長い辺に片面・両面加工を施している。

図134-6は、分銅形打製石斧である。挟り部は細かな剥離がみられ、縁辺をこするように剥離したと思われる。刃部は裏面側に剥離がみられる。

石核(図135・図136-1・2)は、打面転位が行われながら、剥離作業が行われている。

図136-3は大形の礫面剥片である。

図137-1は細粒緑色凝灰岩製の磨製石斧である。基部が狭まる形態であり、基部を中心に敲打整形痕がみられ、全面を研磨している。図137-2から5は凹石、磨石である。

【石製品】

図137-6は敲打整形の石製品である。類似した形態は、図103-10などで出土している。

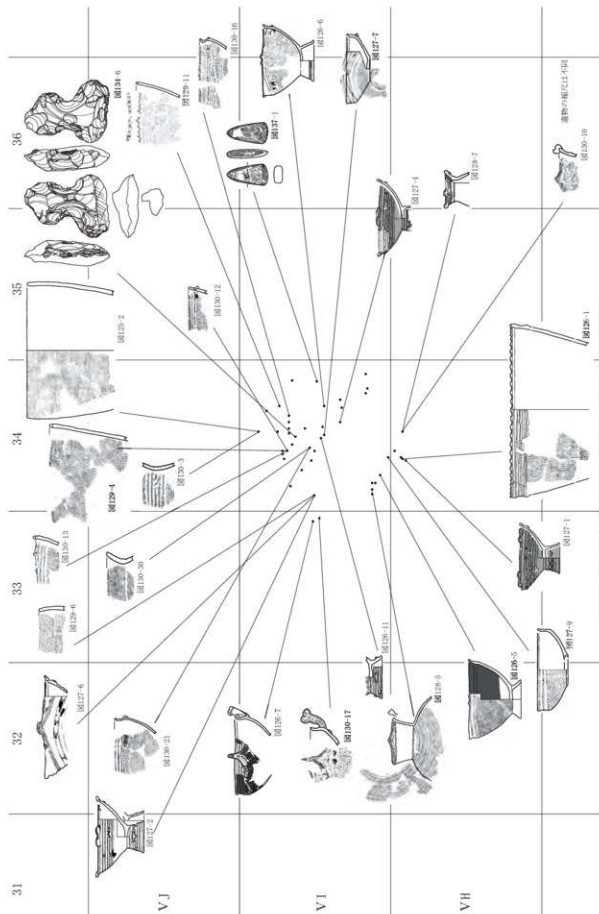


図124 第1号盛土遺構 IIIb段階(18層)出土遺物の分布

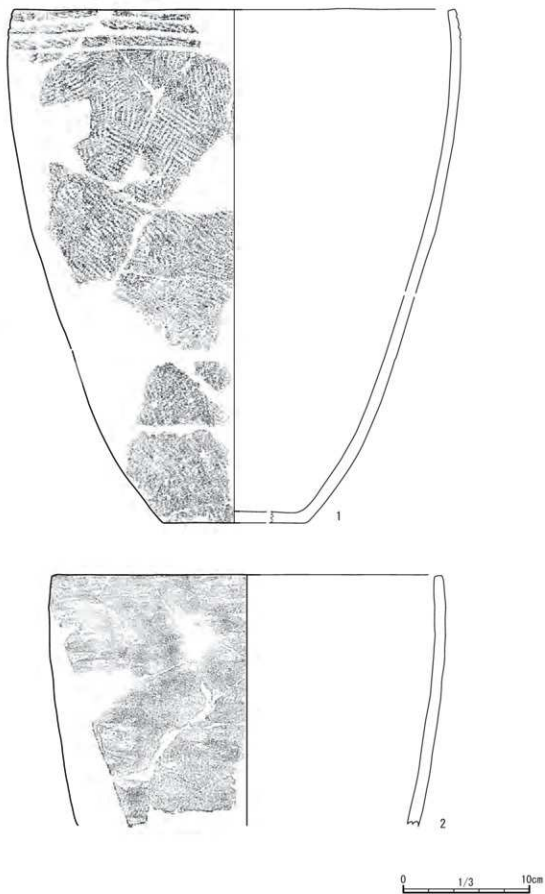


图125 第1号盛土遺構 IIIb段階出土土器(1)

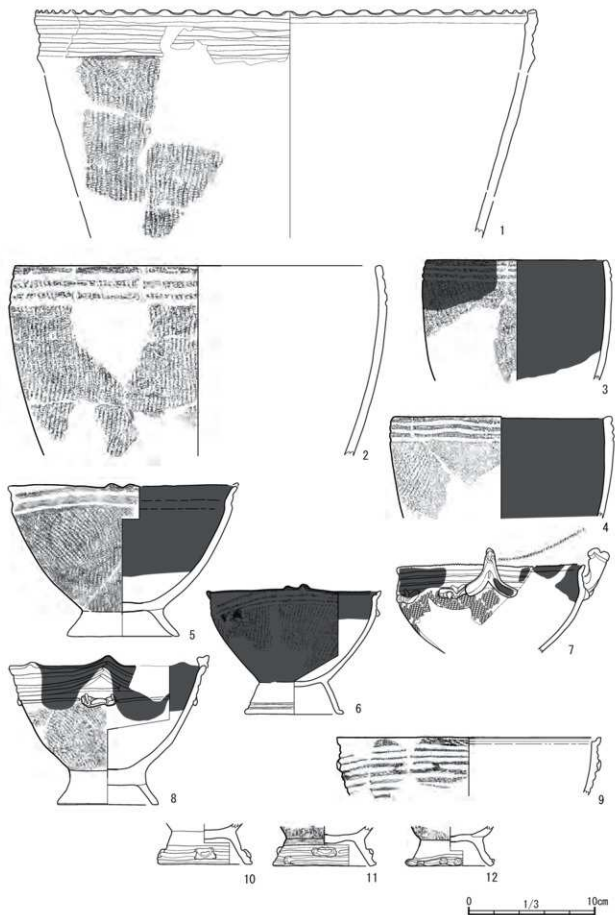


圖126 第1号盛土遺構 IIIb段階出土土器(2)

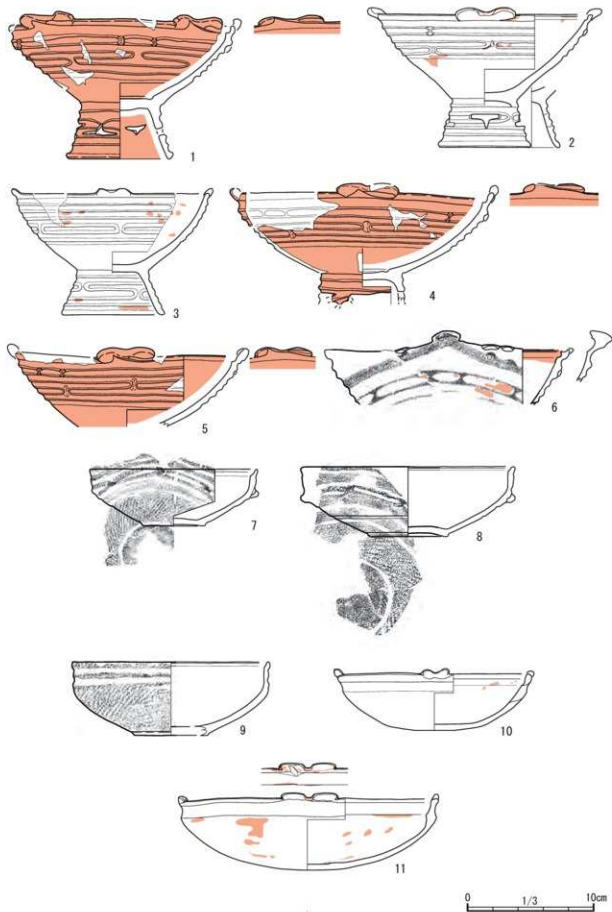


图127 第1号盛土遺構 IIIb段階出土土器(3)

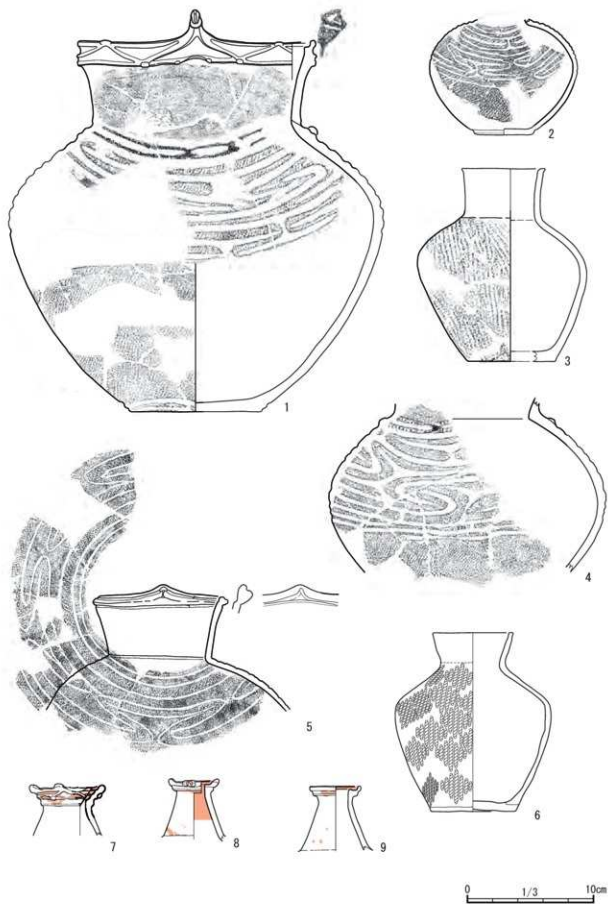


圖128 第1号盛土遺構 IIIb段階出土土器(4)

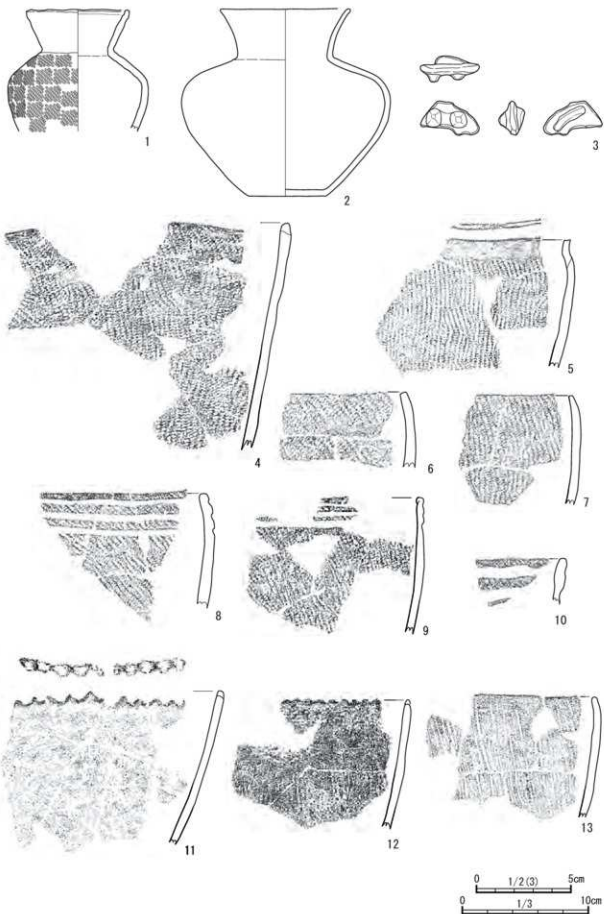


圖129 第1号盛土遺構 III b段階出土土器 (5)

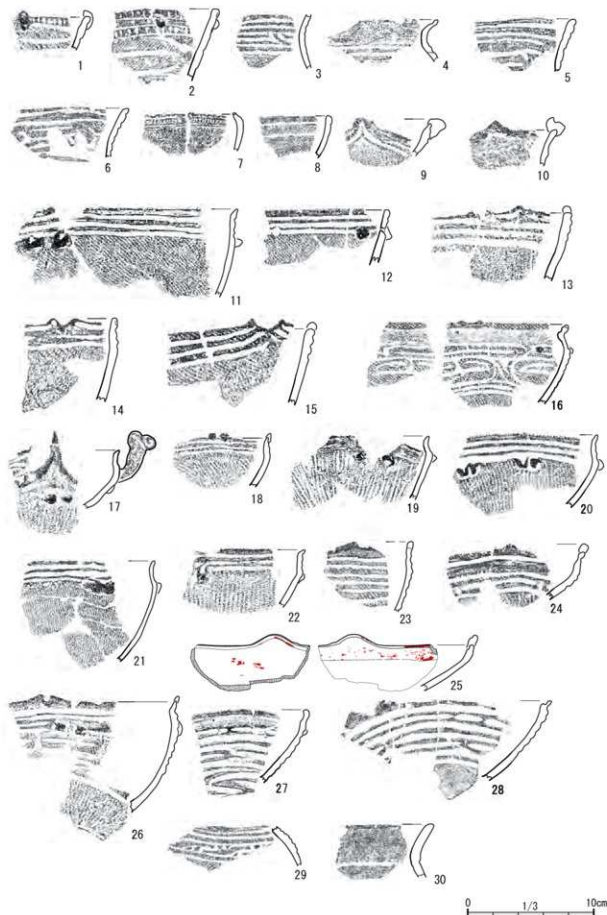


図130 第1号盛土遺構 IIIb段階出土土器(6)

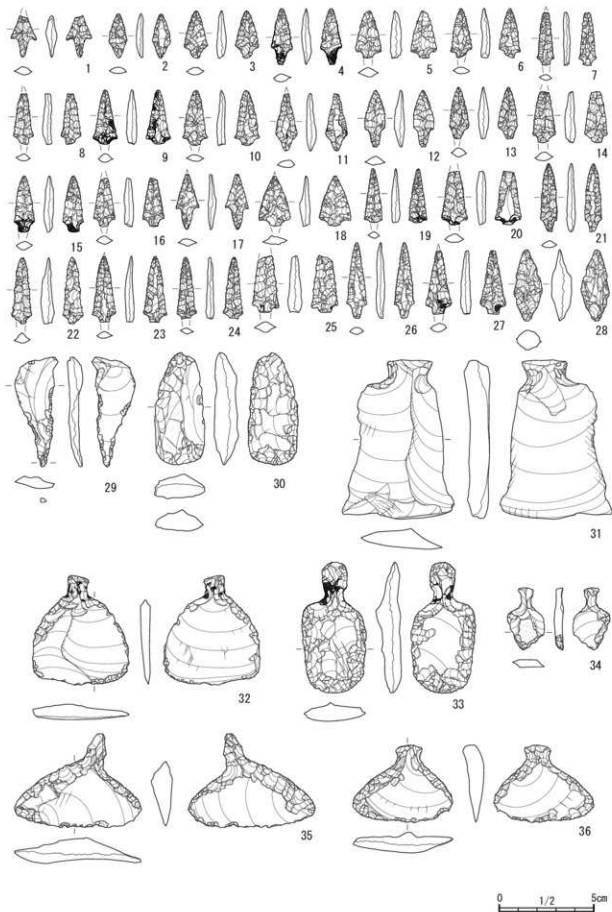


图131 第1号盛土遺構 IIIb段階出土土片石器(1)

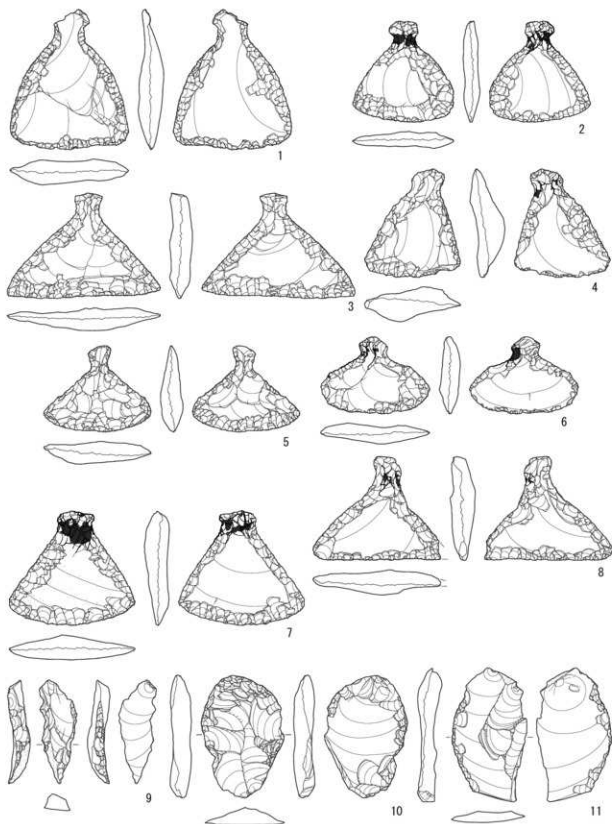


图132 第1号盛土遺構 IIIb段階出土土片石器(2)

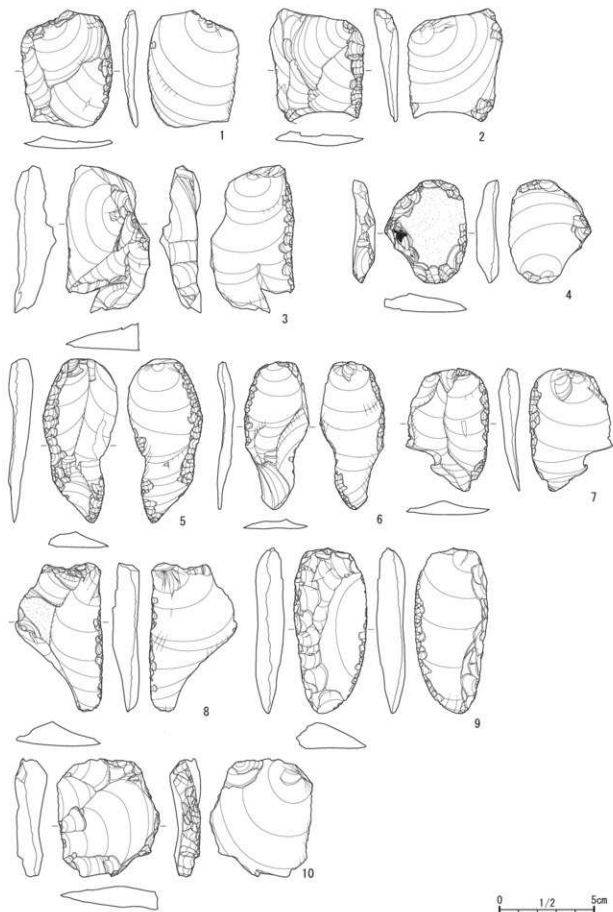


圖133 第1号盛土遺構 Ⅲb段階出土剥片石器(3)

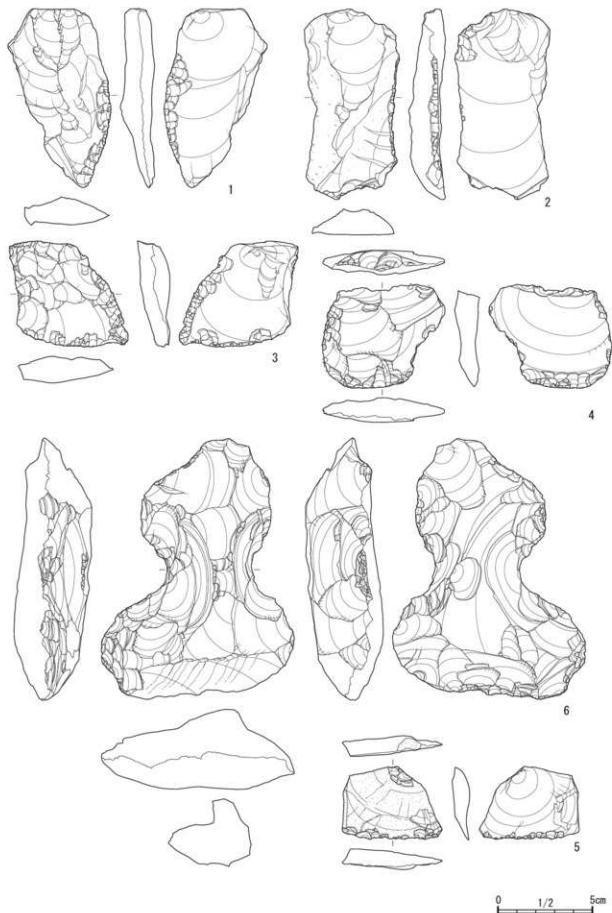


图134 第1号盛土遺構 IIIb段階出土土片石器(4)

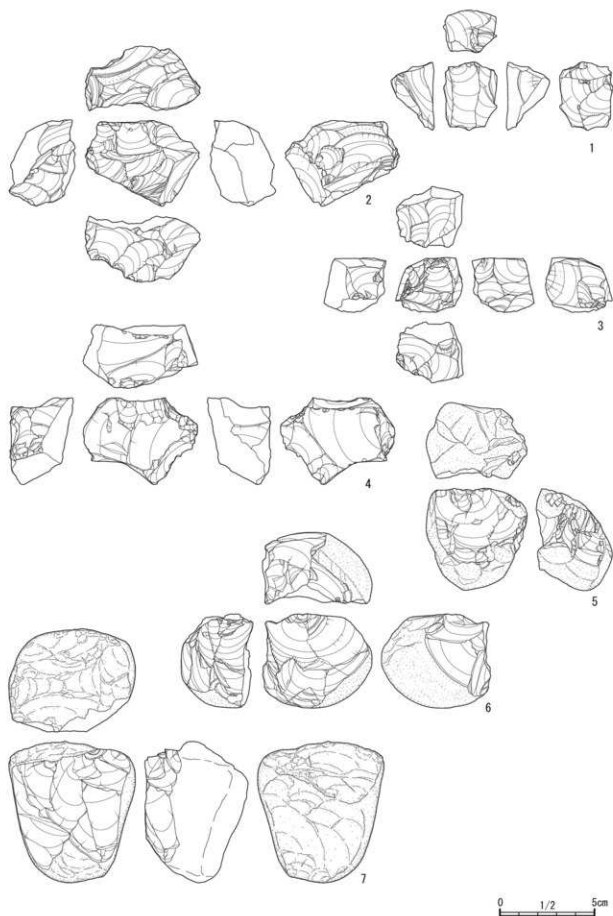


图135 第1号盛土遺構 IIIb段階出土剥片石器(5)

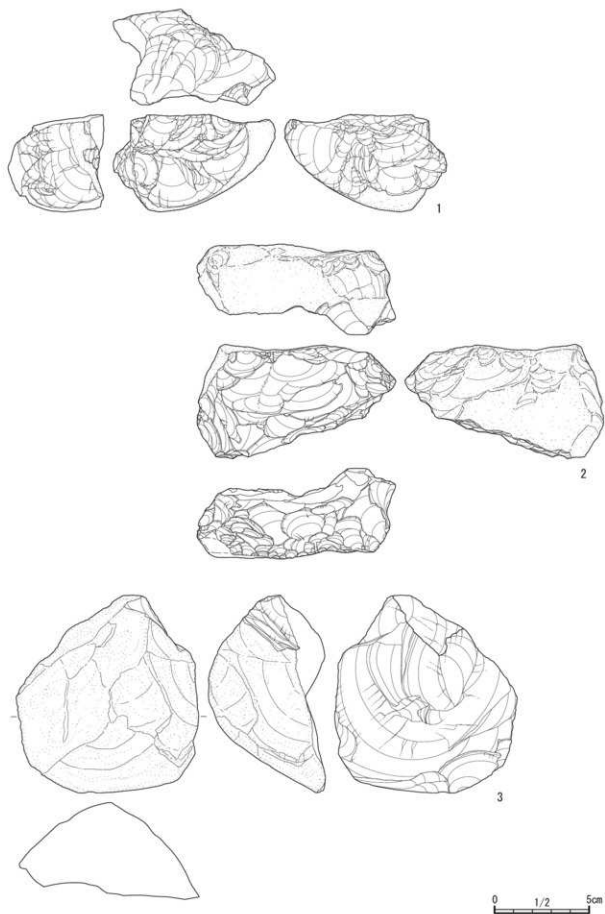


图136 第1号盛土遺構 IIIb段附出土剥片石器(6)

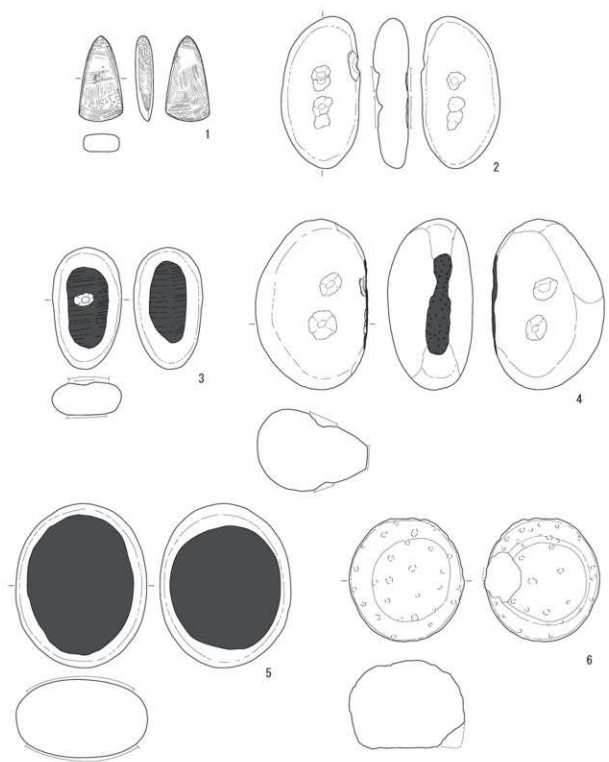


図137 第1号盛土遺構 IIIb段階出土礫石器・石製品

3) III c 段階

第7-1層を中心に出土した資料であり、IIIa段階以前に形成されている。礫層であり、当初IV段階に相当する層との認識であったが、堆積層が第15層の下層へと潜りこんでいくことが確認できたので、III段階扱いとした。33,921.8gの土器が確認され、部分的に潰れたような状態で土器がまとまって出土している。剥片石器は24,095.4g出土している(表6)。

【土器】

この層からは、深鉢形土器、鉢形土器、台付浅鉢形土器、浅鉢形土器、皿形土器、壺形土器などが出土している。

図138-1は口縁に4条の平行沈線が巡る深鉢形土器である。低い高台が付されている。図138-3は補修孔を持つ。図138-2・4は口縁に平行沈線が巡り、突起や波状口縁を持つ深鉢形土器である。

鉢形土器は口縁部に3条沈線が巡る形態や、口縁に刻みを持つ、平縁、B突起などがある。RL縦走縄文が多い(図138-5・6・7・図139-1・3・4)。図138-8は深鉢形土器もしくは鉢形土器の底部である。

図139-2は入組三叉文を持つ浅鉢形土器であり、底部は欠損している。内面に炭化物が付着している。

台付鉢は、台部に透かし窓を持ち、体部に横位連続工字文(図139-5)、図139-6は口唇に刻みを持ち、口縁に平行沈線が巡る。図193-7工字文が展開し、突起が見られる無文の土器である。

壺形土器は口縁部に突起装飾を持つ赤彩資料(図139-10)の他に、頸部が無文の粗製壺形土器(図139-8・9)がある。

土器片資料は、図140-1の深鉢形土器は口縁部に平行沈線が巡る。図140-7は工字文と突起を持つ。図140-2・3は入組文を持つ縄文時代後期後葉から晩期前葉の土器片である。図140-4・5は粗製深鉢形土器である。図140-6は入組三叉文を持つ胴部片である。図140-10は工字文を持つ鉢形土器、他は口縁に平行沈線や突起を持つ鉢形土器(図140-11~14)である。図140-15は無文の浅鉢形土器であり、表面はミガキで整形されている。口縁部の内面に沿って沈線が1条巡る。

【石器】

この層から石鏃、石錐、石筥、石匙、削器、石核、剥片、礫石器などが出土している。

石鏃は有茎鏃である(図141-1~3)。

石錐は柄みを持つ形態である(図141-4)。図141-5は石筥の未製品と思われる。

図141-6・7・9は横形石匙である。図141-8・10・11は削器である。削器はアスファルト付着資料(図141-8)などがある。

図141-12は縦長剥片の素材末端部の主要剥離面側にアスファルトが付着している。

石核(図141-13・14・図142)はともに自然面を残す。

礫石器は凹石(図143-1)、磨石(図143-2)がある。図143-3は扁平な礫の一端に剥離が見られる。石錐であろうか。図143-4は大形石皿である。棒状の礫を素材とし、素材の幅広面の一部に平滑な磨面が形成されている。

4) III d 段階

第1-1層を中心に出土した資料であり、IIIa以後に形成された包含層である。礫層であり、当初IV段階に相当する層であり、III c 段階と同一層との認識であったが、層が下層へと潜りこんでいくこと、III c 段階の層と分離することが確認できたので、別段階と判断した。また、当初第7-1層と同一層と捉えていたが、SN-B東壁で両者が別の堆積層であることが確認できた。19,715.9gの土器が確認され、部分的に潰れたような状態で土器がまとまって出土している。剥片石器は5,901.6g出土している(表6)。

【土器】

深鉢形土器、鉢形土器などが出土している。

図144-1は粗製深鉢形土器であり、波状口縁を持ち、縦走る縄文が施文されている。幾分上げ底である。図144-2は口縁部が無文の資料で、縦走る縄文が施文されている。図144-3は工字文を持つ鉢形土器であり、内外面に炭化物が付着している。図144-4は深鉢形土器の底部であり、平底である。図144-5は山形突起を持ち、入組文が展開する鉢形土器である。図144-6は断片資料である。図144-7から9は口縁に沈線が巡る鉢形土器である。図144-10は工字文を持つ鉢形土器である。図144-11は細い平行沈線が重走する台部分である。段違いで突起が見られる。

【石器】

この層から石鏃、石錐、石筥、石匙、削器、石核、剥片、礫石器などが出土している。

石鏃は有茎鏃(図145-1・3)・尖基鏃(図145-2)が出土している。石錐は摘みを持つ形態である(図145-4・5)。

石匙は縦形(図145-6)と横形(図145-7)がある。図145-8は削器である。図145-9は石核である。礫石器は、凹石、磨石・蔽石が出土している(図146)。図146-6は裏面に鋭い擦痕が見られる。図146-2の凹石は下端に蔽き痕が見られる。

5) III e 段階

第7-2層を中心に出土した資料である。当初7層と認識していたが、SN-Bのセクションで礫層である第7-1層と第I層の間にある礫を含まない層が確認され、区分した。土器は18,418g、剥片石器は7,152.9g出土している(表6)。

【土器】

鉢形土器、台付鉢形土器、浅鉢形土器、壺形土器などが出土している。

図147-1は台付鉢形土器であり、B突起と山形突起が交互に配置され、口縁に多条沈線が巡り、突起が見られる。内面に炭化物が付着している。器体の半分は第I層から出土している。図147-2は口縁が無文である。内面に炭化物が付着している。図147-3の鉢形土器は、工字文風の楕円形文様が2段に配置されている(写真46)。RL縦走縄文が施文され、口縁にはB突起がある。内面には炭化物が付着している。幾分上げ底である。図147-4は底部が欠損している鉢形土器であり、口縁部に平行沈線と突起が見られる。

台付浅鉢形土器の台部断片(図147-8)が出土している。細い沈線による平行沈線が巡る。内面の底には沈線による円形文が配置されている。図147-5の浅鉢形土器は内外面に漆が付着している無文

土器である。

図147-6・7は粗製壺形土器であり、口縁部は無文である。

深鉢形土器の口縁部（図147-9・10）、入組文を持つ鉢形土器（図147-11）、平行沈線が口縁を巡る土器（図147-12～14）、工字文と思われる文様を持つ鉢形土器（図147-20）などがある。図147-18は晩期5期の浅鉢断片であり、眼鏡状隆帯と矢羽状沈線文が見られる。

他に、土塊が出土している（写真84、整理番号 土-214）。

【石器】

この層から石鏃、石錐、石筥、石匙、削器、石核、剥片、礫石器などが出土している。

石鏃は平基・尖基有茎鏃である（図148-1～8）。摘みを持つ石錐が出土している（図148-9）。

石匙は横形の両刃である（図148-10）。削器は片面・両面加工の刃部を持つ（図148-11～14）。図148-12は大形の素材を用い、鋸歯状に加工されている。

図148-15は石核である。

図148-16は凹石であり、右側面に鋭い擦痕が見られる。

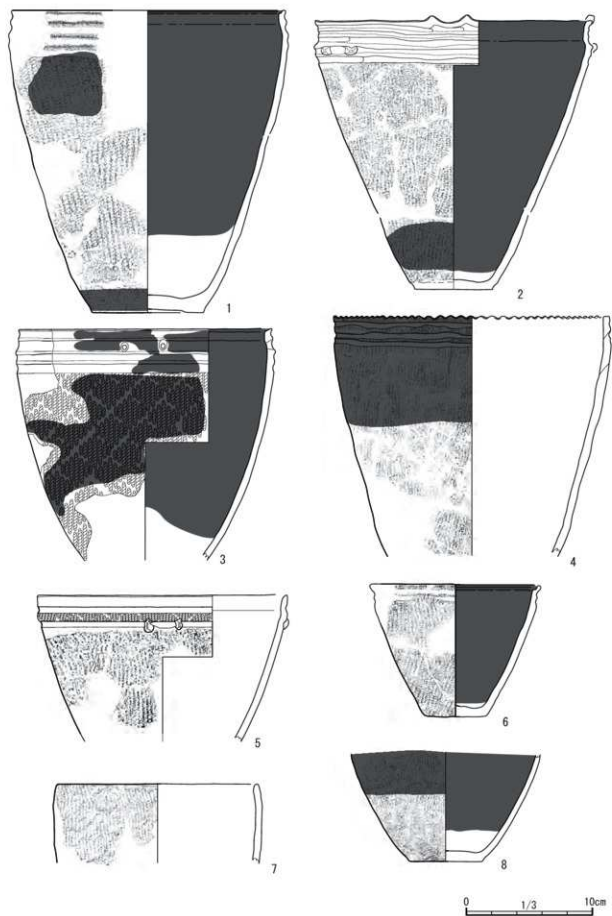


图138 第1号盛土遺構 IIIc段階出土土器(1)

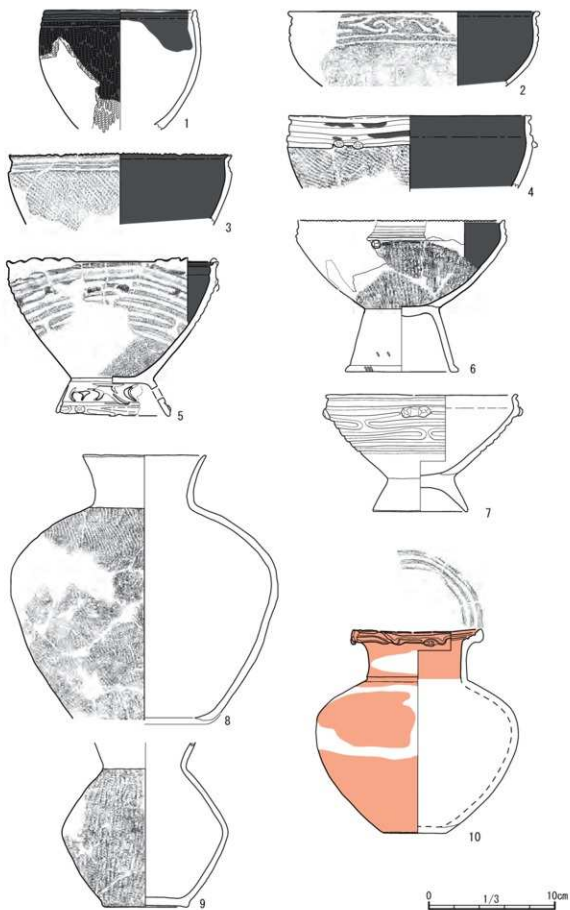


图139 第1号盛土遺構 IIIc段階出土土器(2)

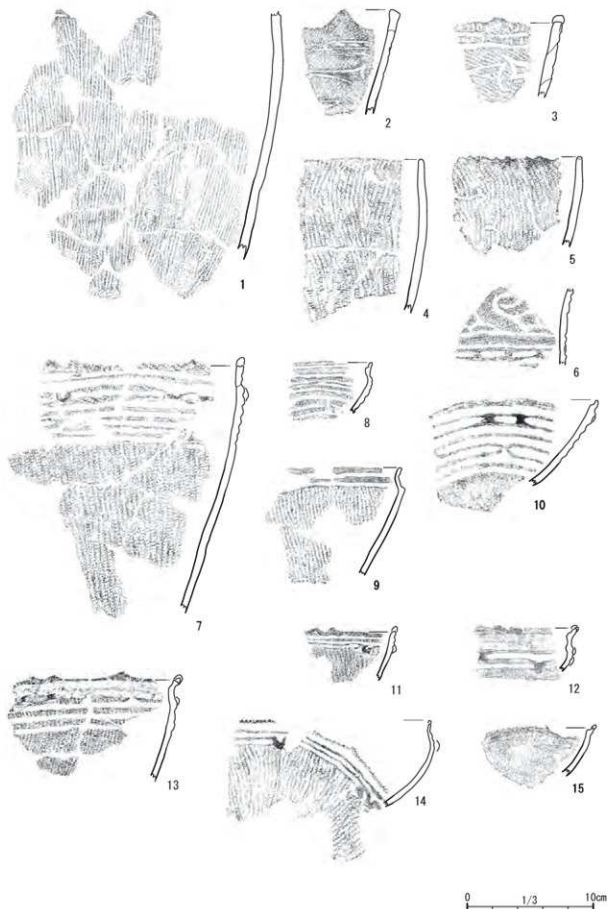


圖140 第1号盛土遺構 IIIc段階出土土器(3)

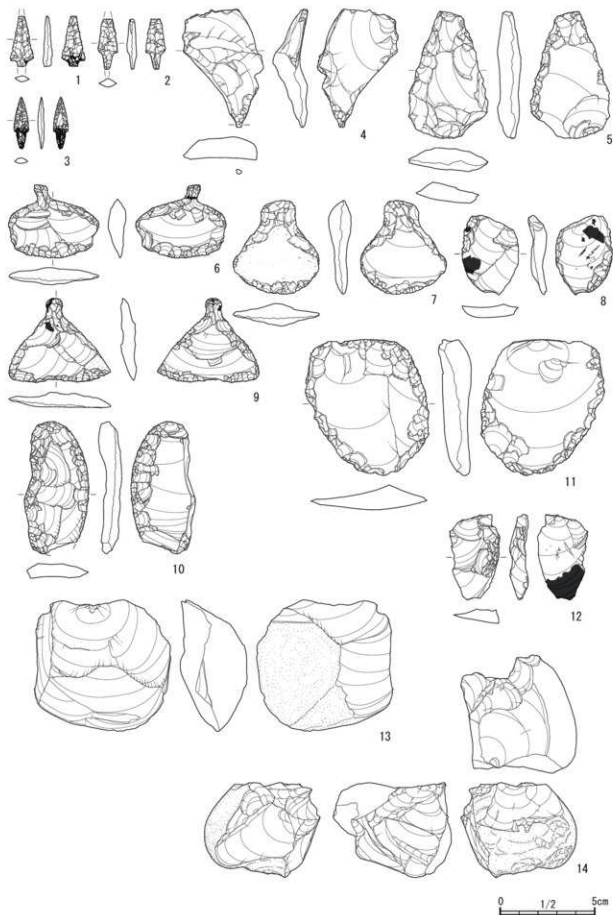


図141 第1号盛土遺構 IIIc段階出土剥片石器(1)

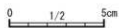
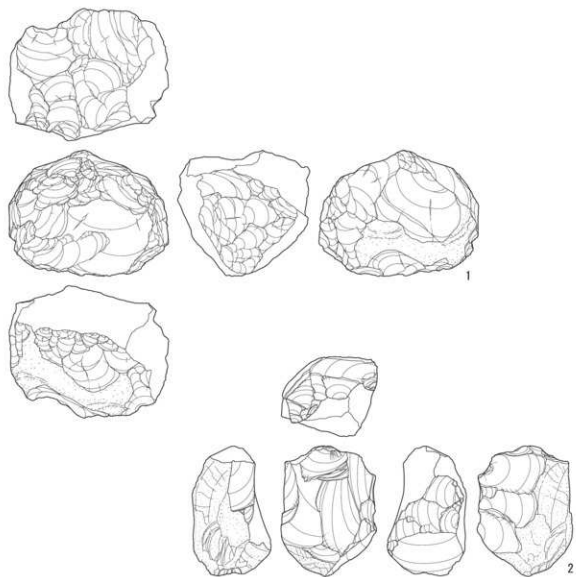


图142 第1号盛土遺構 IIIc段階出土剥片石器(2)

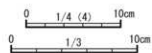
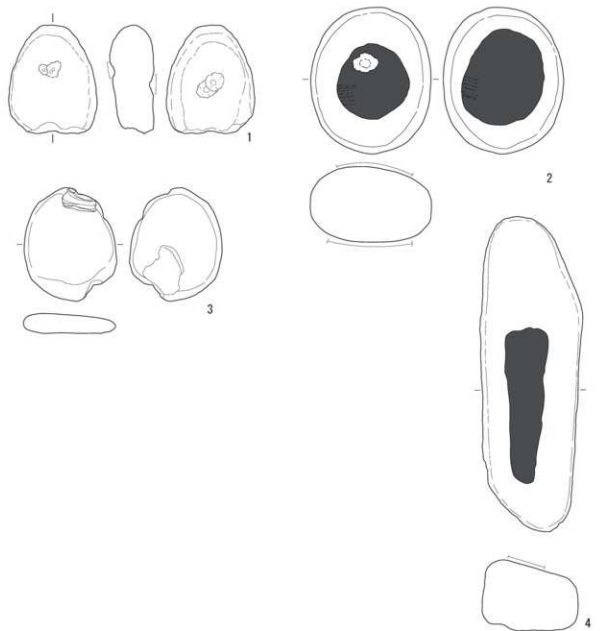


图143 第1号盛土遺構 IIIc段階出土礫石器

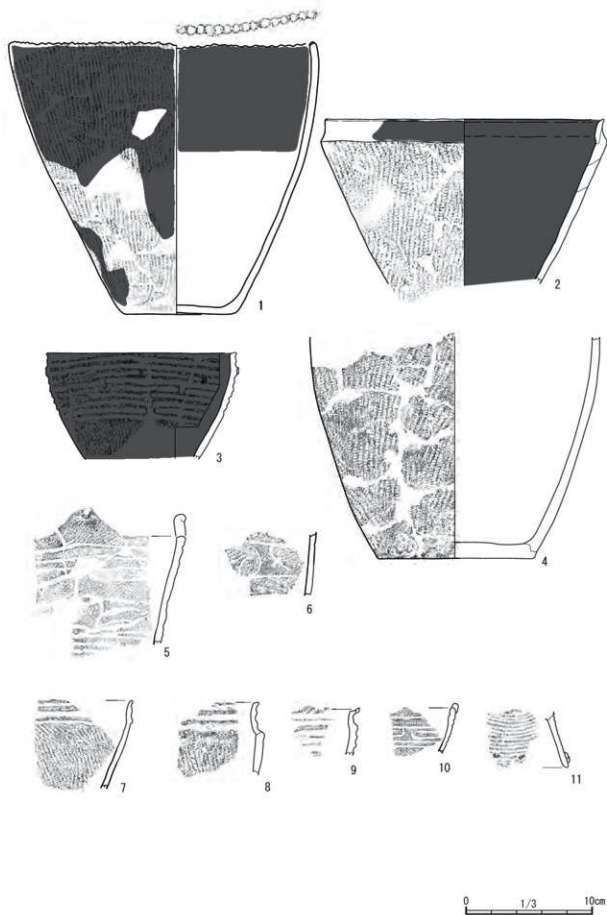


图144 第1号盛土遺構 III d段階出土土器

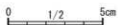
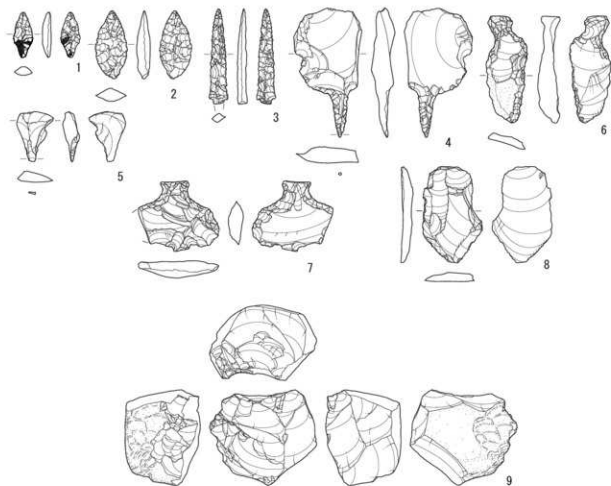


圖145 第1号盛土遺構 III d段階出土剥片石器

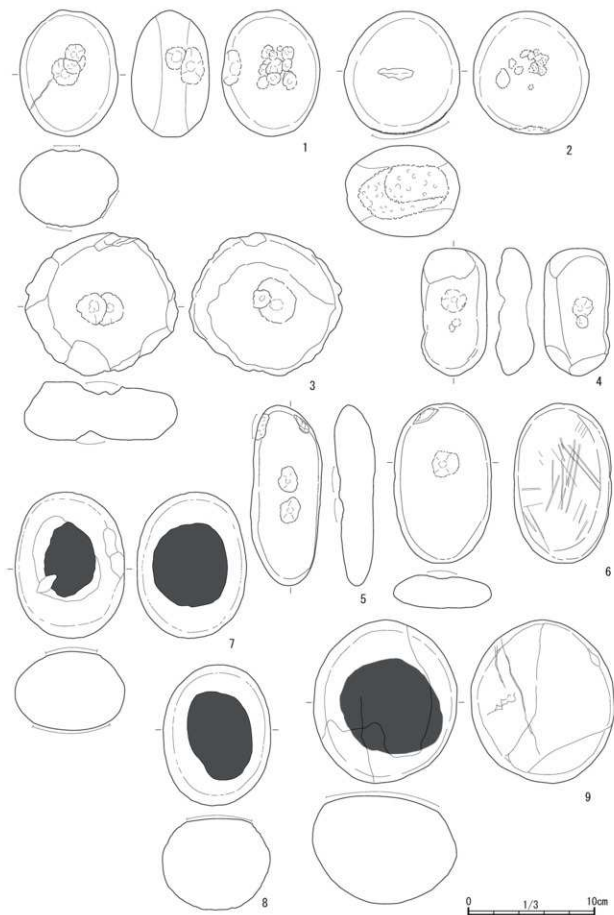


図146 第1号盛土遺構 III d段階出土礫石器

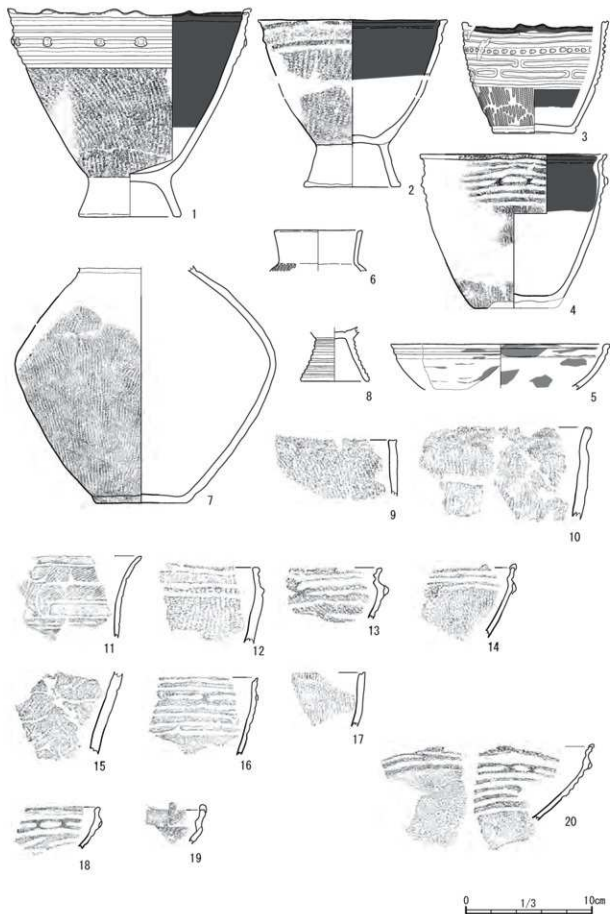


圖147 第1号盛土遺構 IIIe段階出土土器

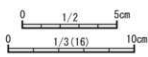
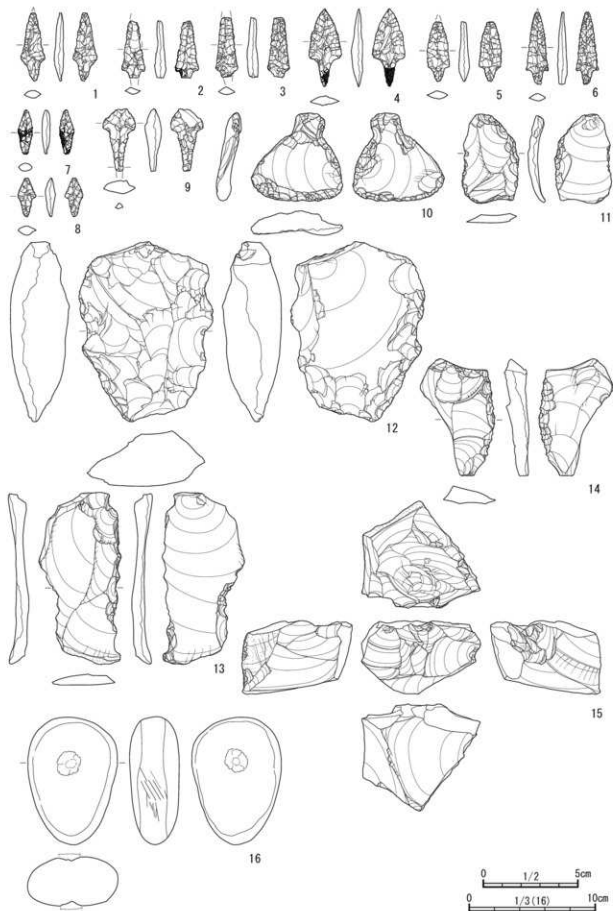


圖148 第1号盛土遺構 IIIe段階出土刺片石器・礫石器

6) III f 段階

III段階の範疇から出土した遺物であるが、細分できなかつたので、III段階の一括扱いである。土器は91,718.4g、剥片石器は33,559.6g出土している(表6)。

【土器】

深鉢形土器、鉢形土器、皿形土器、壺形土器などが出土している。

図149-1は深鉢形土器であり、口縁に3条沈線が巡り、口縁部は波状口縁である。RL縦走縄文が施文されている。図149-3は、内外面に赤色顔料が付着している深鉢形土器である。トレンチ7の第I層を剥いてすぐに検出でき、周辺に礫を含んでいたため、第7-1相当層(III c段階)から出土したと思われる。3条沈線が口縁を巡り、RL縦走縄文が施文されている。図149-6は口縁に3突起が貼り付けられ、工字文とRL縦走縄文が施文されている。図149-2は平行沈線に、LR斜行縄文が施文されている。図149-4・5は口縁部が無文であり、RL縦走縄文が施文されている。

鉢形土器は口縁部が無文や胴部に工字文が展開する。図150-1は3条沈線にRL縦走縄文が施文されている。図150-2は平底の下半部である。図150-3の台付鉢形土器は凸字工字文が展開し、口縁部に2つの山形突起・B突起がつく。内外面に炭化物が付着している。図150-4は無文の台付鉢形土器である。

晩期5期に相当する台付浅鉢形土器(図150-5・6)がある。内外面に赤彩が施され、体部には工字文が展開する。地文は無文であり、工字文の展開部は垂直な沈線で形成されている。5は鉢部と台部の繋ぎ目の痕跡が台部に残されている(写真図版46)。図150-7は横位連続工字文と思われる文様を持ち、胎土、口縁形状など第51号焼土遺構で出土した台付鉢形土器(図68-1・2)と類似している。

口縁に平行沈線と突起を持つもの(図150-8)、把手を持つ鉢形土器(図150-9)、透かし窓を持つ台(図150-10)、四脚付土器の底部(図150-11)が出土している。

図151-1の皿形土器は、無文であり、口縁部に山形突起を持つ。内面底面に円形のくぼみがある。赤黒漆が付着し、補修孔が2つある。トレンチ7の第I層を剥いてすぐに検出でき、周辺に礫を含んでいたため、第7-1相当層(III c段階)から出土したと思われる。その脇に図149-3の内面赤彩の深鉢形土器が出土している。図151-2と3は、赤黒漆の付着部位が逆転している、大小の皿形土器である(口絵8)。口唇に4単位のB突起が付き、口縁部は無文であり、胴部に矢羽状沈線が2段展開している。この2点の出土状況は、3の一部の破片が2と同一個体として取り上げられているので、この2点は隣接して出土したものと思われる。

図152-1は大形の壺形土器であり、EW-B3の第I層を除去した後、すぐに検出できた。周囲に礫が比較的少ない層であったので、7-2層並行(III e段階)から出土した可能性が高い。口縁部にB突起と隆帯が付き、胴部に連繫入組文が展開している。器体には赤彩が施されている。これ以外に口縁部が欠損した粗製壺形土器が出土している(図153-1~4)。

図153-5は内面が赤彩の壺形土器もしくは注口形土器である。図の点線で囲まれた部分は幾分膨らんでおり、注口形土器の場合、この部分に注口部が貼り付けられると思われる。

注口形土器は、入組文が展開する断片資料(図153-7)や、後期後葉から晩期前葉の断片資料(図153-6・8)がある。また、無文の注口形土器(図153-9)が出土している。

土器片資料は、口縁に平行沈線が巡る深鉢形土器(図154-1・2)、精製深鉢形土器(図154-3・

4)、口縁部に沈線を持つ鉢形・浅鉢形土器(図154-5・6・7)、工字文を持つ鉢形土器(図154-8)、注口形土器(図154-10・11)や壺形土器(図154-12)が出土している。図154-9は底部資料で、底部に圧痕が見られる。

【石器】

この層から石鏃、石錐、石筥、石匙、削器、異形石器、石核、剥片、礫石器などが出土している。石鏃は尖基・平基有茎鏃がある(図155-1～16)。図155-17は石錐である。図154-18は石筥である。図155-19・20は摘み部のみに加工が見られる縦形石匙である。図155-22から25は横形石匙であり、刃部は両面加工である。図155-21は、形状は縦形石匙であるが、刃部は末端に鋸歯状の加工で整形されている。図155-26、図156-1から8・10は削器・微細剥片である。

図156-9は異形石器である。摘み部があり、弓形の形態を呈している。

図157-1から4は石核である。図157-5は礫面剥片である。

図158-1から4は凹石である。鋭い刻みを有する凹石がある(図158-2)。図158-5は縁を持たない石皿である。

【石製品】

石棒断片資料(図158-6)や、有孔石製品(図158-7)が出土している。

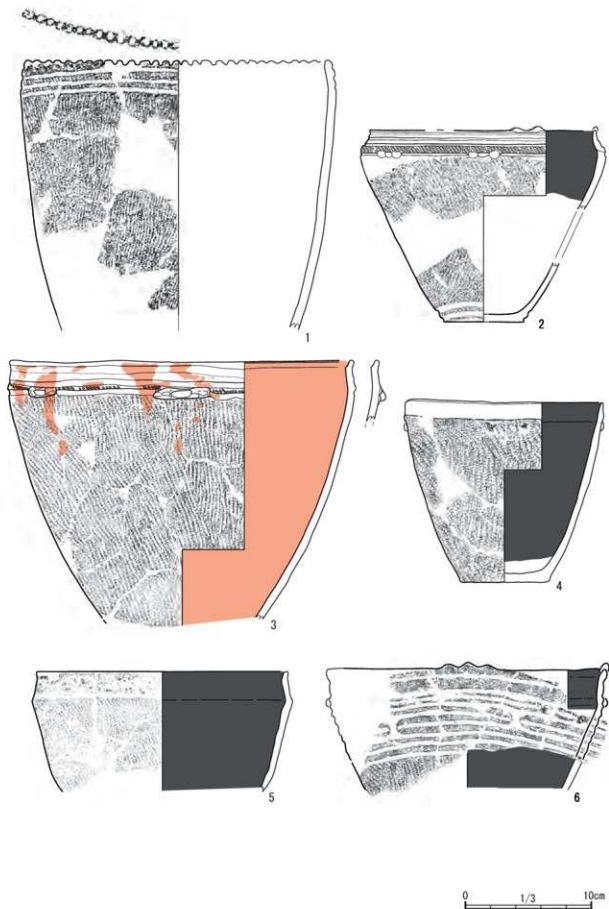


图149 第1号盛土遺構 III f段階出土土器(1)

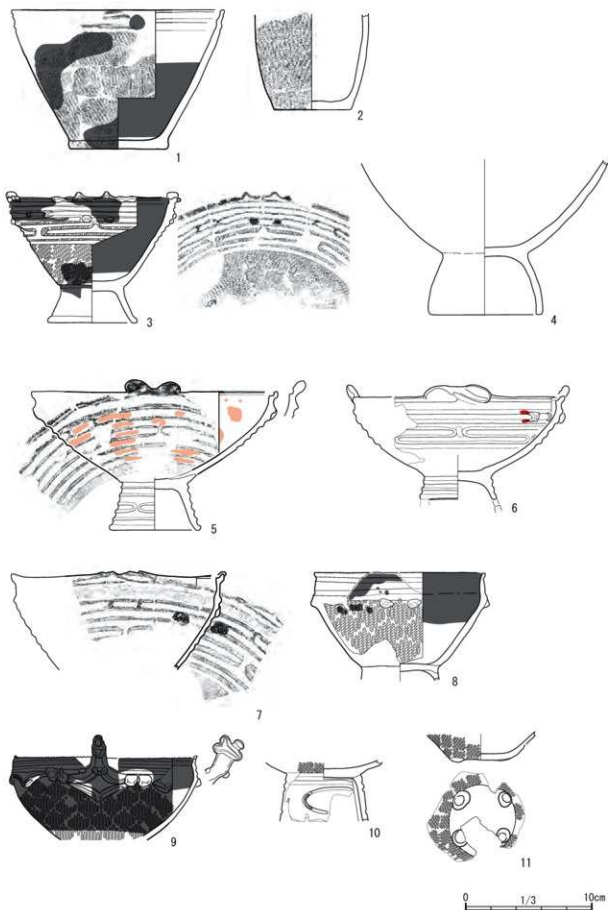


图150 第1号盛土遺構 III段階出土土器(2)



図151 第1号盛土遺構 III C段階出土土器(3)

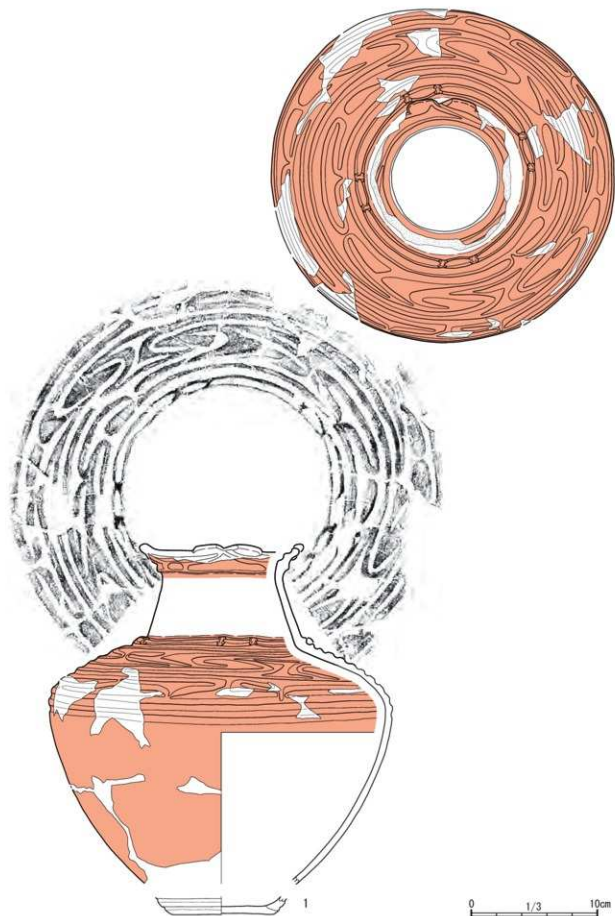
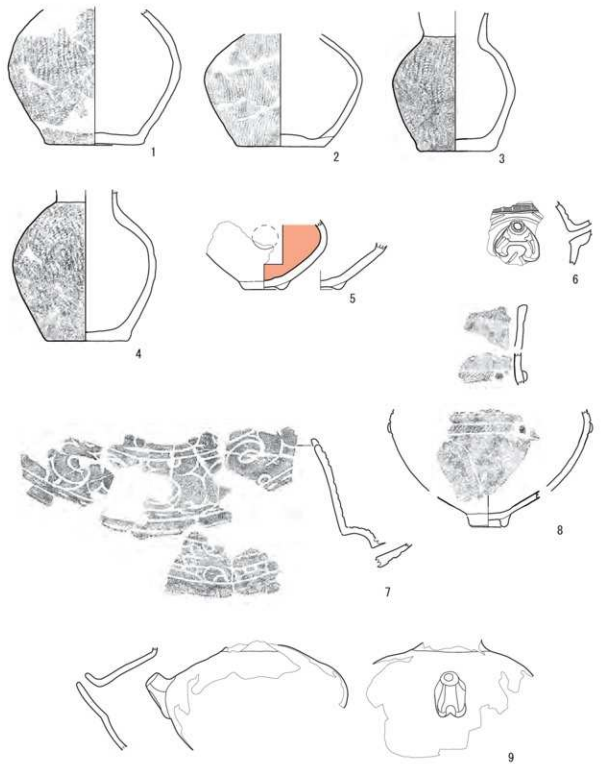


図152 第1号盛土遺構 Ⅲr段階出土土器(4)



0 1/3 10cm

图153 第1号盛土遺構 III f段階出土土器 (5)

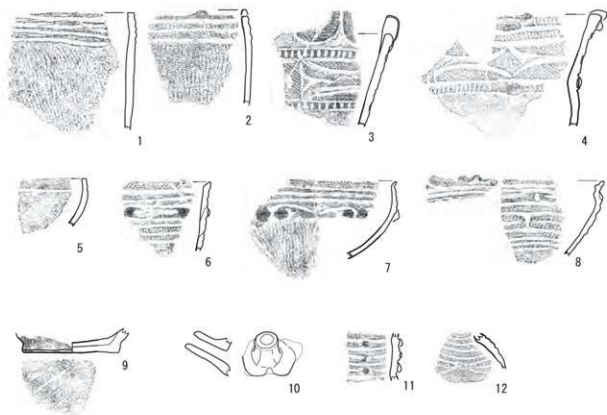


図154 第1号盛土遺構 III F段階出土土器(6)

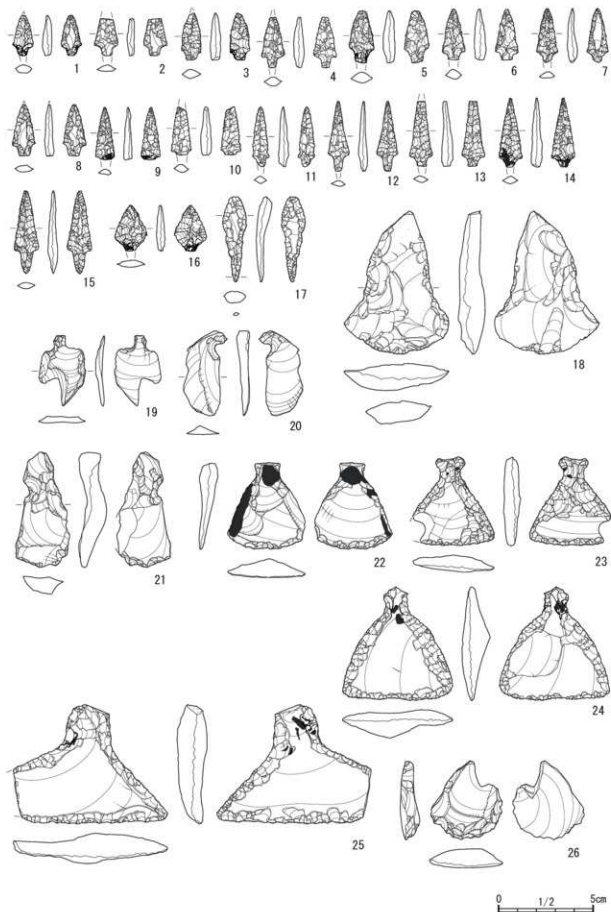


图155 第1号盛土遺構 III F段階出土土剝片石器(1)

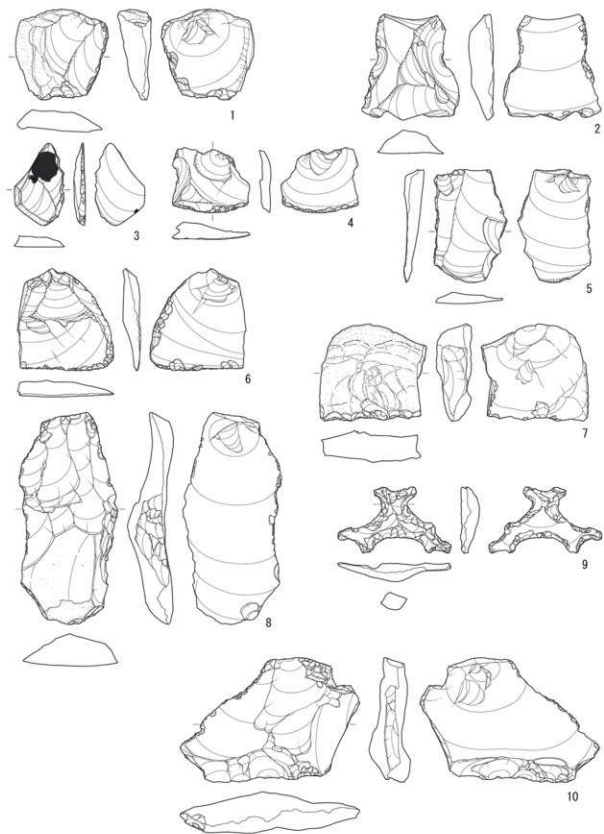


图156 第1号盛土遺構 Ⅲr段階出土剥片石器(2)

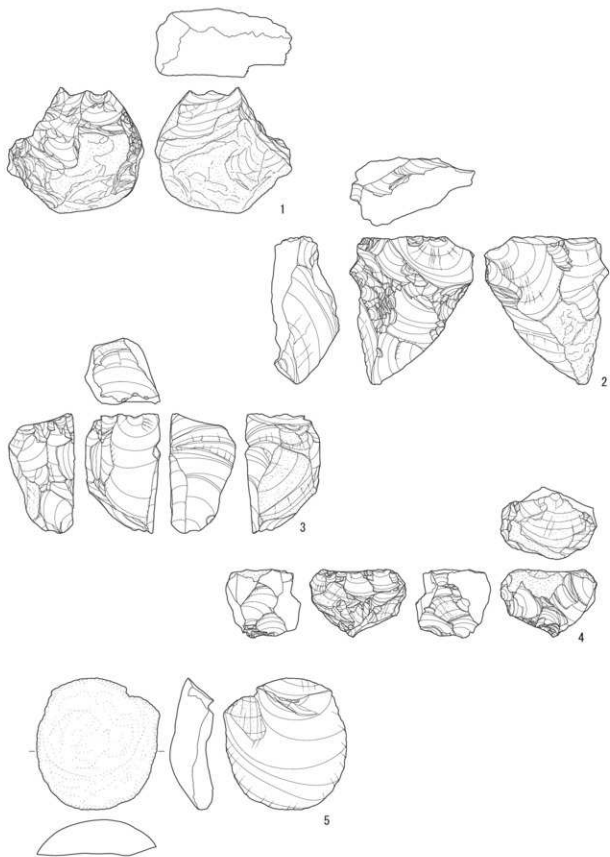


図157 第1号盛土遺構 IIIc段階出土剥片石器(3)

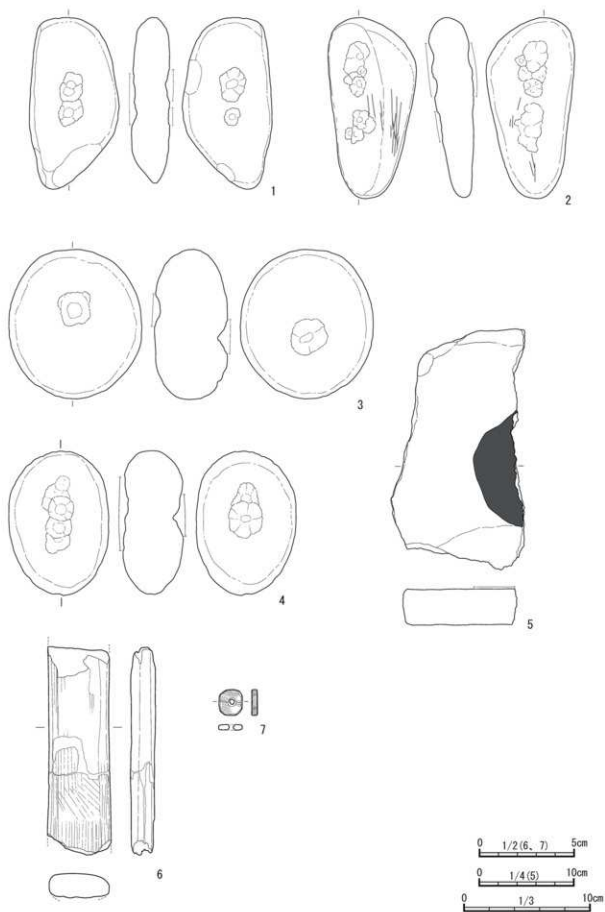


図158 第1号盛土遺構 III F段階出土礫石器・石製品

(4) IV段階 盛土遺構上層出土遺物

1) IVa段階

主に盛土遺構中央部から南側に堆積している礫層である(図78)。堆積層は、北東から南西方向にむけて形成され、Ⅲ段階が東側から西側へと形成されていたとは異なる。第17層は堆積層の形成が東側から西側であるが、第4層上面にあるので、便宜的にIV段階に含めた。

調査当初から、後期後葉から晩期前半の遺物が一定量出土しており、第15層の下層にもぐりこむことも想定して調査を進めていたが、第15層の上側に堆積する包含層であることがわかり、土器型式の前後関係が逆転することとなった。土器は74,669.2g、剥片石器は35,215.3g出土している(表6)。

【土器】

図159-1は二山状突起を持つ大形深鉢形土器である。口縁部は内傾し、LR斜行縄文が施文されている。また、鉢形土器は粗製(図159-2)、無文(図159-3)、口縁部に多条沈線が巡るもの(図159-4~6)がある。図159-8は入組文が展開する深鉢形土器である。図159-3は第12層と第1層同士が接合している。図160-2は深鉢形土器であり、3条沈線が口縁を巡る。第17層出土である。

図159-7は小形の鉢形土器であり、口縁に沈線が4状巡り、胴部に縦方向に条痕文がみられる。図159-9は鉢形土器であり、口縁部に平行沈線が巡り、LR縄文が施文されている。

図159-10・11は台付鉢形土器であり、内外面に炭化物が付着している。

図160-1は高台を持ち、口縁部が無文の粗製大形壺形土器である。図160-4の注口土器は注口部を挟んで三叉文が展開している。文様の一端が渦を巻いている。口縁部には刻目列が展開する。図160-3は注口部であり、入組三叉文が施文されている。

図161は断片資料である。図161-1から4は粗製であり、3は口縁に刻目がある。図161-5は口縁部に3条沈線が巡る。後期後葉から晩期前半の入組文や貼瘤などの文様を持つ土器片が出土している(図161-6~12)。

図161-13は3条沈線を持つ、地文が無文の深鉢形土器である。14・19は中期の土器片である。15は鉢形土器、16は深鉢形土器、17は浅鉢形土器である。18は刺突文を持つ。

晩期4期から5期の土器片は工字文や多条沈線を持つ(図161-20~30)。図161-25は隆帯を持ち、口縁部は無文である。浅鉢形土器と思われる。

他に雲形文(図161-31)、壺形・注口形土器(図161-32・34)、底部に圧痕を持つもの(図161-33)などが出土している。

【土製品】

図160-5は中実土偶であり、頭部・腕・脚が欠損している。粘土を貼り付けることで、両腕・両足・胸を表現している。背中に沈線文がみられる。胴部上半から下半に貫通孔がある。図160-6は土偶の頭髪部である。図160-7は刺突文土偶の右肩である。隆帯で胸、背中の肩甲骨部分に、竹管状工具による刺突の文様を持つ。図167-7は大形遮光器土偶の胸部断片資料である。隆帯上に刻みを持つ。図160-8は中空動物形土製品である。第12層から出土している。平面は楕円形であり、断面形状は扁平である。側面は幾分突出し、鳍状を呈している。2重沈線とその間を充填するように刻みで文様が形成され、裏面は入組文風の文様が展開している。長軸方向に貫通孔がある。図正面の上側は剥

落しており、突起のようなものが付いていたと思われる。図167-8は無孔の土製円盤であり、底部を素材としているため、文様などはみられない。

他に、粘土塊が出土している（写真92、整理番号 土213）。

【石器】

この層から石鏃（図162-1～3）、石錐（図162-5・6）、石匙（図162-7・8）、削器（図162-9～12）、石核、礫石器などが出土している。

図162-13は、裏面に筋理面が見られ、右辺に深い剥離が鋸歯状に見られる。

石核は大小が出土している（図162-14、図163、図164-1～4）。特に図163-1は本報告範囲でも大形の石核である。

珪質頁岩製の敲石（図164-5・6）が出土している。

図165-1は磨製石斧であり、基部と刃部が欠損している。側面は比較的明瞭な面を形成している。

礫石器は凹石が出土している（図165・166）。図166-2は、全体の形状は石鏃に類似している。礫短軸の中心に沿って敲打整形し、帯状に挟られた凹部を持つ。その部分に凹石のような機能面が形成されている。岩手県盛岡市手代森遺跡では、独鈷石に分類されている。磨石は2点確認されている（図166-3・4）。また、磨面はみられないが、赤色顔料が付着した礫が出土している（図166-6）。他に凹石と磨石の複合した資料（図166-5）、凹石と敲石の複合した資料（図166-7）や、加工礫（図166-8）が出土している。図167-2は石皿であり、石器表面に黒色の付着物が見られる。

鉄石英の塊（整理番号133）や大形礫（レ45）が出土している（写真92）。

【石製品】

図167-1は棒状の大形礫の一端を加工している。図167-3・4は石棒断片である。図167-5は石製円盤である。図167-6は平面形態が円形で、図正面側が膨らみ、裏面側がくぼみ、正面を敲打整形、側面を研磨整形された石製品である。

2) IVb段階

主に盛土遺構中央部から北側に堆積している礫層であり、北捨て場と連続している。土器は総重量で48,413.9g、剥片石器は10,433.0g出土している（表6）。

【土器】

深鉢形土器、台付鉢形土器などが出土している。

図168-1は深鉢形土器であり、波状口縁で、底部が欠損している。RL縄文が施文され、内外面に部分的に炭化物が付着している。図168-2は鉢形土器であり、2条沈線と突起を持つ。入組文を持つ精製深鉢形土器がある（図168-3）。体部から底部が欠損している。図168-4は台付鉢形土器である。内外面に炭化物が付着し、文様に工字文と突起を持つ隆帯が展開している。B突起が貼り付けてある。図168-5は台付浅鉢形土器であり、口縁部に2条沈線が巡る以外は無文である。図168-6・7は底部欠損の鉢形土器である。口縁無文や、口唇部に刻みと口縁部に沈線が巡る。図168-8は底部資料で、底部付近に1条の沈線が巡る。図168-9は鉢形土器であり、無文である。内面に漆が付着している。

図169-1は雲形文を持つ皿形土器である。他に粗製壺形土器がある（図169-3・4）。図169-5は

無文の壺形土器の胴部片であり、内面に炭化物が付着している。

土器片が多数出土している。晩期後半期の深鉢形土器(図170-1)、晩期前半の鉢形土器(図170-2・3)が出土している。工字文を持つ鉢形土器や晩期後半期の土器(図170-4から9)がある。図170-8は把手と工字文を持つ聖山Ⅱ式の(台付)鉢形土器であり、類例は第2層や第51号焼土遺構で出土している。図170-10は無文であり、口縁に2条沈線が巡る。台付浅鉢形土器と思われる。

後期後葉から晩期前半の鉢形土器、注口形土器なども出土している(図170-11～25)。

【石器】

この層から石鏃、石錐、石筥、石匙、削器、石核、剥片、礫石器などが出土している。

石鏃は有茎鏃である(図171-1～5)。石匙は縦形であり、左辺が両面加工、右辺が反方向の片面加工で整形している(図171-6)。他に削器や微細剥片が出土している(図171-7～12)。

図172-1から7、図173は石核である。図173-2は表皮を持つ玉髓の分厚い剥片である。また、自然面をかなり残す大形石核が出土している(図173-3)。

図174-1から3は凹石である。擦痕が顕著な砥石(図174-4)、縁のない大形石皿の断片(図174-5)が出土している。

【石製品】

岩版は断片資料である(図174-6)。図174-7の石棒は、破片上側はSN-Bの第22-1層から、下側が北捨て場で出土した破片同士が接合した。

(高橋)

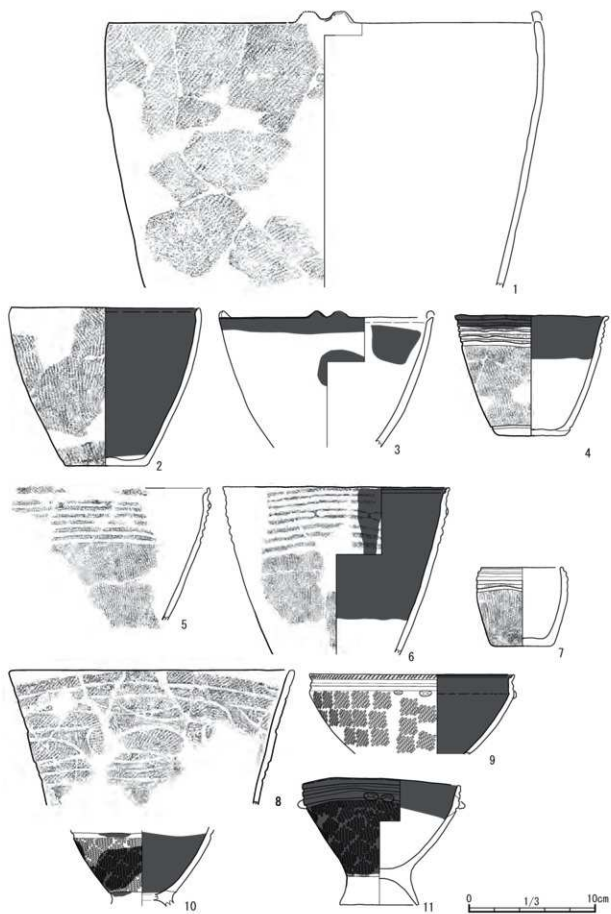


圖159 第1号盛土遺構 IVa段階出土土器(1)

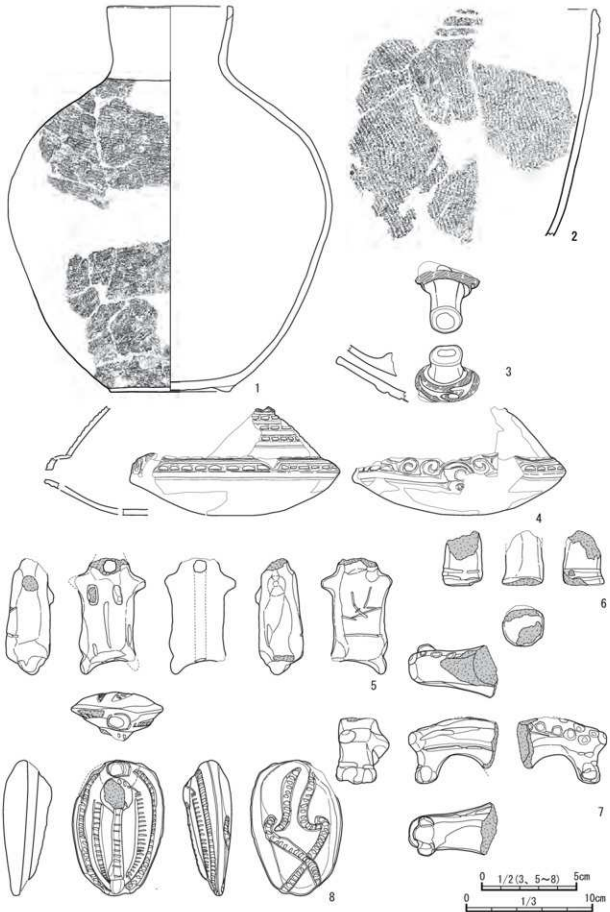


圖160 第1号盛土遺構 IVa段階出土土器(2)・土製品

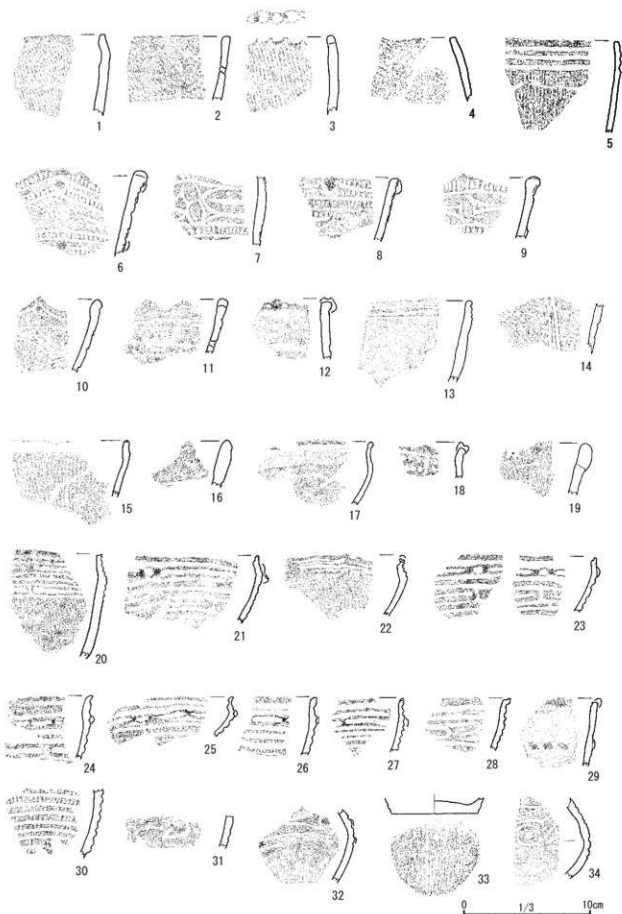


図161 第1号盛土遺構 IVa段階出土土器(3)

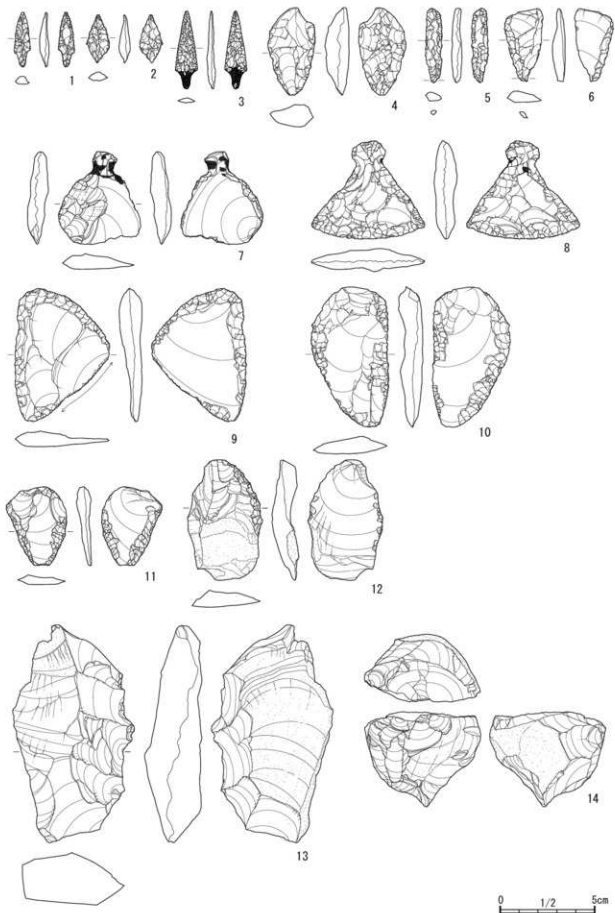


图162 第1号盛土遺構 IVa段階出土土利片石器(1)

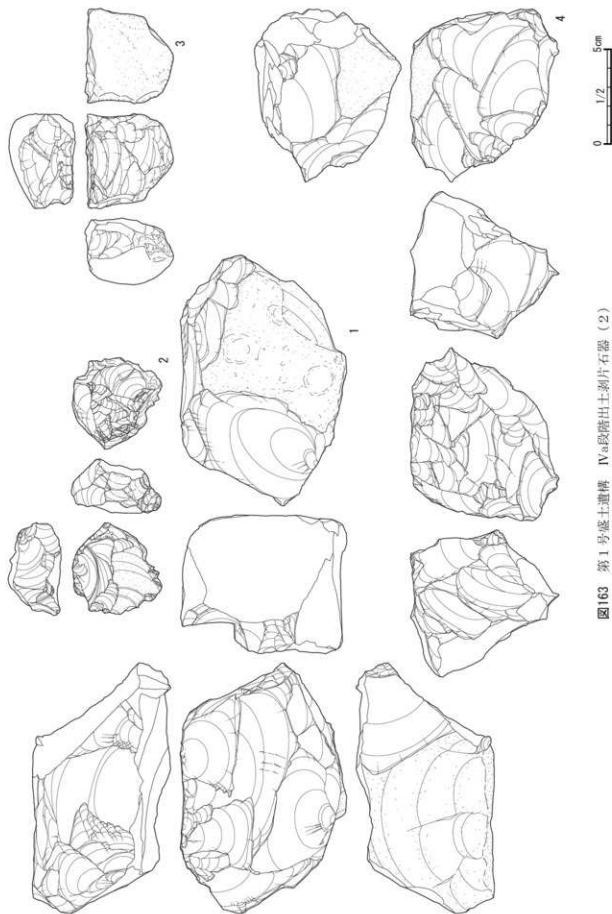


图163 第1号盛土遺構 IVa段階出土剥片石器(2)